THE CENTRAL REVIEW

中央公論

十二月號

第三十三年第十三號 第三百六十四號


染めたと見えぬ
自然の黒髪と全じ色に染る
志らが
赤毛染
ナイス
ナイスの五大特長
□タツタ二十分で染る。
□自然の髪の色艶に染る。
□襟枕に汚染の惧なく。
□洗で剝ず永く保ち。
□用法至極手輕便利也。
價 大瓶七十錢 小瓶四十錢 男子用三十錢
發賣 東京 大阪 丹平商會
全國化粧品賣藥店にあり

最新刊

印度マドラス大學教授 ナラス著
曹洞宗大學教授 立花俊道譯

佛教の要諦

是れ佛教々理の眞諦を説破せる明快未曾有の名著にして、現に印度マドラス大學、カルカツタ大學等に指定參考書として推薦せられ、歐米の學者間にも嘖々の好評ある「エツセンス、オブ、ブツヂズム」の全譯である。譯文亦明快を極む。偏く想界人士の一讀を望む。

四六判總洋布美本
全一冊
正價貳圓六拾錢
郵税十二錢

再版

獨逸、イエナ大學名譽教授 ヘツケル博士著
文學士 栗原古城譯

生命の不可思議

四六判總洋布美本
全一冊
正價貳圓參拾錢
送料―内地十二錢 其他十四錢

東京本郷 西片町 玄黄社
電話小石川一三九番
振替東京七九九五番

島村抱月作（新刊發賣中）

運命の丘

―代表的名作選集 第三十二編

▼羽二重表紙美本▲定價參拾八錢▼郵送料六錢―

文藝批評家の第一人者たり、新劇壇の指導者たりし島村抱月氏は突如として逝けり。遺稿として殘存せる評論創作幾十百篇のうち、玆に脚本の精、小品散文の粹を集めて此の一巻を編む。學殖の深邃と、鑑賞の精到とを以て文壇を獨歩せる氏は、詩人として作家として、亦實に一世の才たりき。その優麗にして渾厚なる文品は、裏づくるに清高の人格を以てし、こゝに燦爛、寶玉の如き作品を成す。此の一巻を繙く人は、氏が此の種の作の甚だ少きを悲しみて、頁の盡くること、餘りに早きを歎かん。

■トルストイ叢書 第十二編 新たに出來

セヴァストポォリ

新刊

島田青峰氏譯

■中版二百六十頁 ▼定價七拾五錢▲
■總洋布上製美本 ▼送料金八錢▲

一八五五年のセヴストポオリ籠城戰にトルストイは二等大尉として戰ひ共間、囑目の光景を描破せるもの也。全篇三部に分れ、第一部は愛國的熱情の高調によつて成れる美くしき戰陣の詩とも云ふ可く、露國皇后これを讀んで潸然泣けりと傳へらるゝもの。第二部第三部は戰場に於ける人々の自愛心と虛榮心との相摩し相激する狀を描きて、心理描寫の精到を極めたる一大傑作也。

後編新刊
全部完了

罪と罰

ドストエフスキイ
中村白葉氏譯
―總紙數一千百餘頁―
全二冊 一冊各壹圓參拾錢
郵送料一冊各八錢

東京牛込矢來中の丸
振替（東京）一七四二
新潮社
電話番町 長八〇九番 八九九番

■ツルゲエネフ全集 第三編

初戀

生田春月氏譯

『初戀』外二篇を收む。『初戀』の可憐哀切の戀物語たるは云ふ迄もなし。『ファウスト』は九年目に會せる昔の戀人の、既に人妻なると舊情を語つて相戀ふるの思ひ更に深くなりゆくを叙し、『クラヽミリッチ』は妖艶の女優と純清の青年との戀を主題とし、華かなる舞臺の前に毒を飲んで死せる青年の魂に誘はれ、女優も亦た戀は死よりも強しと叫んで死する凄婉の物語也。三篇三樣の戀物語を集めたる此書は、全集中、最も色濃かに匂ひ深きものとして、若き人々を醉はすものあらん。

新刊

▼總洋布箱入特製
▼中版三百八十頁
▼定價金壹圓
▼郵送料金八錢

生田長江氏譯 (1)獵人日記 三版 價壹圓五拾錢 郵送料八錢

田中純氏譯 (2)ルーヂン 再版 定價金壹圓 郵料八錢

田中純氏譯 (3)その前夜 (十二月上旬發刊豫定) 定價金壹圓郵送料八錢

ギヨオテ作『ヱルテル叢書』第七編(新刊) 初版忽ち盡き再版出來せり

ヘルマンとドロテア

久保正夫氏譯

=華麗なる極美本=
=定價金六拾五錢=
=郵送料一册八錢=

『若きヱルテルの悲み』に涙を濺げる人は、同じ作者の此一篇に亦た遺瀬なき青春の惱みを寄するを得む。ゲエテが數多き作中、最も完璧と稱せらるゝものにして、ライン河畔の一貴公子ヘルマンと革命の難を遁れ來れる美しき佛蘭西娘ドロテアとの戀を描く。華麗にして優雅、熱切にして而も哀婉のおもひほのかなる叙事詩也。今飜譯界の新人久保氏によりて、玲瓏珠の如き散文譯となれり。

東京牛込矢來中の丸 振替東京一七四二番 新潮社 電話番町 長八〇九番 八九九番

文學博士 大類伸氏著

現代世界の史的觀察

本書は史學界の新權威大類博士が世界の發展を歷史的に回顧して深刻に叉周匝に現代の形勢を觀察したる名論卓說を輯めたるものにして所見多種多樣、帝國主義あり、國家主義あり、更に日米の關係を語り西伯利亞の歷史を說き現代偉人傑士を論評する等興趣盡きず、卷末には最も興味深き世界現勢の繪入統計を添へあり、一見して現代世界の大勢を知るを得。

○四六判クロース○箱入美本○定價金壹圓八拾錢
郵送料八錢○臺灣樺太朝鮮二十錢○滿洲支那三十錢○切手代用一割增

再版出來

田中王堂氏著

徹底個人主義

（四六判定價一圓七拾錢送料前同）

哲學者として思想家として評論壇第一の聲名ある王堂氏が思想生活の記錄にして斯界の一大炬火たるべきもの歡迎激甚初版忽ち賣切再版出來す

谷崎潤一郎氏序文
佐藤春夫氏著

病める薔薇（さうび）

著者裝幀

四六美本箱入上質用紙
定價金壹圓六十錢
送料內地八錢其他前同

近時文壇の新人として一躍第一流の地位を占めたるものは佐藤春夫氏也。氏の作品は文壇の驚異也。巨匠谷崎潤一郎氏は氏を目して得易からざる天才なりと極賞し、生田長江氏は明治大正年間に涉り自然を取扱ひたる文學中余の知れる限に於て佐藤春夫氏の作品は最も正道を踏み最も高所に達したるものなりと激賞し、田山花袋氏は今年の作品中感心したるものは唯一つ曰く佐藤氏の『田園の憂鬱』なりと嘆稱せり。才藻花の如く、熱情炎の如く、眞摯の氣全編を貫く。悉く是無韻の詩と謂ふべし。本書は氏の新舊傑作の全部を網羅して一も剩す所なし。

東京麴町區飯田町一の二
株式會社 天佑社
振替東京一〇一二八番
電話番町一一七九番

優良なる萬年筆が
其特長を發揮する機會

戰ひは最後の五分間、一年中のビジネス戰を決する此の最終の一箇月間に何人が勝つべきかは優良なる萬年筆を使用する乎否乎に由つて決定される。優良なる萬年筆とは何ぞ

即ち我が——

オノト萬年筆
無飾金七圓以上
飾付金八圓以上

アルビオン萬年筆
飾付金五圓五拾錢

オリオン萬年筆
無飾金貳圓八拾錢

萬年筆用
アテナインキ
金參拾五錢
送料各金拾貳錢



東京日本橋通


丸善株式會社

大阪心齋橋筋　京都三條通　福岡上西町　仙臺國分町



中央公論第卅三年十二月號目次




營業品概目
○懷中時計 各種
○掛置時計 各種
○ダイヤモンド並ニ各寶石
○指環手釦並ニ各種携帶品
○貴金屬美術工藝品製作
東京市京橋區八官町
小林時計商店
電話(長)新橋 一一〇〇三 一一〇〇四
振替口座 七八〇〇七
商品目錄御入用の方は
郵券六錢御送附を乞ふ

★大戰の終結を祝す

五年に亙る曠古の大戰も、終に聯合與國の大勝となりて結末を告げた。我等は東西の親交國民と共に、洵に同慶に堪えない。

聯合與國の戰勝は、力爭の成功に由りて獲たものではない。此點に於て、人或は、其效果を輕視するものあらんも、之は大なる謬である。寧ろ力爭の成功に非る事が、人文史上重大の意義を有する所と謂はねばならぬ。何となれば、吾人正義の主張に最後の勝利を得しめたのは敵國の想はざる崩壞であり、又敵國の崩壞は實に彼國人民の正義の覺醒に誘致されしものであるからである。

獨逸には未だ〳〵餘力があつた筈と云ふのは、今更死兒の齢を數ふるに等しい。彼國人民が、漸く戰爭の意義に疑を生じ、遂に我が聯合與國の主張に共鳴せざるを得ざるに至つたのは、單に長期の戰爭に疲れ切つた爲めばかりではない。

何れにしても、「國家存立の必要」を楯として、法の蹂躪を意としなかつた獨逸は倒れた。組織的一大軍國主義の施設に有らゆる專門的技能を利用した獨逸は、平和と正義とを熱求する外他意なかつた聯合與國のために負けた。戰爭にかけての玄人は、遂に正直一圖の素人に押へ付けられた。是豈必要は正義に敵し得ず、專門の科學は平凡なる常識に勝ち難く、畢竟平明なる眞理が、有らゆる陰密なる智謀に優りて、最後の勝利者たるの事實を明示するものではないか。

斯くして、獨逸の横恣によりて一時大に其實際的價値を疑はれて居つた道の平凡なる眞理は、再び其光輝を放つ事となつた。久しく其實現の妨げられて居つた世界平和の問題も、今や机上の空論たらざらんとして居る。吾人は我黨多年の豫想と主張とが、着々眼前の事實として展開し來ることを太だ得意とするものである。

今や歐米諸國に於ては、戰後世界の大勢につき、又戰後に於ける各自國家指導の方針につき、少くとも其大本に於ては、殆んど一點の疑をも有して居ない。世界歷史始つて以來、此點に關する考の鮮明になつた事、恐らく今日の如きは殆んど他に無からうと思ふ。

然るに何事ぞ、獨り我が日本帝國が、一方世界と共に戰勝の祝酒に醉ひ乍ら、他方切りに戰後經營の根本國是の決定に停迷して居る事や。同胞の國民、願はくば、活眼を開いて世界の大潮流に透徹の觀察を發たん事を。

中央公論



第卅三年第拾三號
十二月號
第三百六拾四號

社會問題解決の鍵

―大阪の方面委員なる新施設に就て―

法學博士　小河滋次郎

一

今次大阪に於て府知事林市藏氏の立案の下に初めて實施を見るに至つた方面委員なるものは、我が社會政策の上に最も重大の關係を有する所の新施設であつて、若し果して之れが活用の道其の宜しきを得る所あるに於ては、必ずや立案者の豫期の如くに、意義あり生命ある所の徹底的社會政策の實現を我國に見るに至るべきは明らかである。私はこの施設を指して、社會問題解決の鍵たるべき使命を齎して生まれ出でたるものなりと許するを至當とすべしと信ずる程に

ソレ程多大の期待を有するもの〻一人であつて、今や我國に於ても時代の必要に伴ふて謂ゆる社會政策的各種の施設の將さに勃興せんとするの趨勢を呈しつ〻あるの場合なるが故に、職に治國濟民の局に當る者は言ふを俟たず、苟も世の識者先覺を以て自ら任ずる人々に於ても、時節柄特にこの至緊至要なる新施設に對して注意を拂ひ研究を馨すに至らんことを切望してやまざる次第である。論述の順序として最初に先づ方面委員なるもの〻如何なる組立てのものであり、また如何なる任務を有するものであるかと云ふことを紹介するの必要ありと信ずるが故に姑らくこ〻に其の大體のことを略述して見ようと思ふ。さてこの方面委員とは、各市町村に於ける凡そ一小學校の通學區域を限界としたる程の範圍を一方面として、こ〻に居住し若しくは常住せざるまでも、職務上營業上其他各種の事情の爲めに、當該地域と極めて密接なる利害關係を有する善良なる公民の中より、其方面內に於ける或る一定のソシャルサービス即ち社會的奉仕とも云ふべき公務に任ぜしむるが爲めに、勿論本人の承諾あるの條件の下に、地方長官之を選拔し囑託する所の一種の名譽職に屬するものである。方面委員の職務要項として大阪府で定めた規程に依れば、其の第五條に

方面委員ハ關係區域內ノ狀況ヲ詳ニシ大凡左ノ調査及ビ實行ニ從事スルモノトス

一、關係區域內ノ一般的生活狀態ヲ調査シ之ガ改善向上ノ方法ヲ考究スルコト

二、要救護者各個ノ狀況ヲ調査シテ之ニ對スル救濟方法ノ適否ヲ考究シ其ノ徹底ニ努ムルコト

三、現存救濟機關ノ適否ヲ調査シ其ノ區域ニ新設ヲ要スベキ救濟機關ヲ考究スルコ〻

四、日用品ノ需給狀態ヲ調査シ生活安定ノ方法ヲ考究スルコト

五、其他特ニ調査實行ヲ委囑セル事項

云々とあるが故に、其の職務の本質は寸體に於て、前に謂ゆるソシャルサービスなる吾人の總てが社會生活の上に負

中央公論



第卅三年第拾三號
十二月號
第三百六拾四號

社會問題解決の鍵

—大阪の方面委員なる新施設に就て—

法學博士　小河滋次郎

一

今次大阪に於て府知事林市藏氏の立案の下に初めて實施を見るに至つた方面委員なるものは、我が社會政策の上に最も重大の關係を有する所の新施設であつて、若し果して之れが活用の道其の宜しきを得る所あるに於ては、必ずや立案者の豫期の如くに、意義あり生命ある所の徹底的社會政策の實現を我國に見るに至るべきは明らかである。私はこの施設を指して、社會問題解決の關鍵たるべき使命を齎して生まれ出でたるものなりと許するを至當とすべしと信ずる程に

ソレ程多大の期待を有するものゝ一人であつて、今や我國に於ても時代の必要に伴ふて謂ゆる社會政策的各種の施設の將さに勃興せんとするの趨勢を呈しつゝあるの場合なるが故に、職に治國濟民の局に當る者は言ふを俟たず、苟も世の識者先覺を以て自ら任ずる人々に於ても、時節柄特にこの至緊至要なる新施設に對して注意を拂ひ研究を磬すに至らんことを切望してやまざる次第である。論述の順序として最初に先づ方面委員なるものゝ如何なる組立てのものであり、また如何なる任務を有するものであるかと云ふことを紹介するの必要ありと信ずるが故に姑らくこゝに其の大體のことを略述して見ようと思ふ。さてこの方面委員とは、各市町村に於ける凡そ一小學校の通學區域を限界としたる程の範圍を一方面として、こゝに居住し若しくは常住せざるまでも、職務上營業上其他各種の事情の爲めに、當該地域と極めて密接なる利害關係を有する善良なる公民の中より、其方面內に於ける或る一定のソシヤルサービス即ち社會的奉仕とも云ふべき公務に任ぜしむるが爲めに、勿論本人の承諾あるの條件の下に、地方長官之を選拔し囑託する所の一種の名譽職に屬するものである。方面委員の職務要項として大阪府で定めた規程に依れば、其の第五條に

方面委員ハ關係區域內ノ狀況ヲ詳ニシ大凡左ノ調査及ビ實行ニ從事スルモノトス

一、關係區域內ノ一般的生活狀態ヲ調査シ之ガ改善向上ノ方法ヲ考究スルコト

二、要救護者各個ノ狀況ヲ調査シテ之ニ對スル救濟方法ノ適否ヲ考究シ其ノ徹底ニ努ムルコト

三、現存救濟機關ノ適否ヲ調査シ其ノ區域ニ新設ヲ要スベキ救濟機關ヲ考究スルコト

四、日用品ノ需給狀態ヲ調査シ生活安定ノ方法ヲ考究スルコト

五、其他特ニ調査實行ヲ委囑セル事項

云々とあるが故に、其の職務の本質は大體に於て、前に謂ゆるソシヤルサービスなる吾人の總てが社會生活の上に負

ふ所の自然的及び道徳的最も重要にして且つ崇高なる奉仕義務の一部に外ならずと認むることが能きる。或は之を指して廣義の救濟事務と稱し、從てまたこの職務に當る者に對して救濟委員なる名を用ふるの獨り名實相適ふのみならず、これに類する他の名譽職としての學務委員とか衛生委員とか乃至はまた稅務委員とか云ふやうなものと相對して廣く世人の諒解に便せしむる爲めにも便利なるかに一應は考へられざるに非ざるも、然も救濟の名は設令ひ最廣の意義に之を解すとするも、こゝに方面委員の職務として列記する所の項目の中には、例へば日用品の需給狀態を調査して一般住民の爲めに生活安定の方法を考究することゝ謂ふが如き、また關係區域内の一般的生活狀態を調査して之が改善向上の方法を考究することゝあるが如き、少くも其の働きの重要なる一部分には、何人の眼にも殆んど全く救濟と認むべき性質を持つて居らぬ所のものがある。然るに若し强て之れに救濟と云ふが如き名稱を冠せしむることありとなれば、或は之が爲めに、方面委員の中心ともなりまた本領ともなるべき一般生活狀態の向上改善若しくは安定に必要なる各種の積極的方法の考究又は實行を閑却して顧みざるの結果を見る虞れなきを得ぬ。方面委員の名は、餘りに漠然に失して一見其の何者たるやを端睨するに苦むとの非難あるを免かれざるべしと雖も、翻つてまた他の一面より之を見れば、其の漠然たるが如き所に反つて深き意義と大なる妙味の罩れるものありと謂ふべく、少くも露骨なる而も其の本質を言ひ現はすに不適當なる救濟委員と云ふが如き名稱を付するに比して、方面委員なる名を用ふるの頗る穩健且つ甘快なるに如かずと堅く信ずる所である。

二

方面委員の施設が必ずしも林大阪府尹の新しき創意に成り新しき發見に係るものに非ざること固より言ふを俟たざる所である。若し夫れ他に之れが類例を求めんとなれば、泰西にあつて、彼れの救貧制度の上に一新紀元を劃するの偉蹟

を奏せりと稱せられたるエルベルフエルドシステムのアルメンプレーゲル（救貧委員）の如き、或は北米に於て刑事制度及び少年保護事業の上に實行しつゝある所のプローベーションオフヰサー（試査委員）の如き、若しくは近く英國に起つて今や文明各國到る所に普及せられんとしつゝある所のソシヤルセツツルマンウヲルク（社會的同化事業）の如き、或はまた最近に北米シカゴ市の青年保護協會 the juvenile protective association に依つて試みられつゝある所のブロツクシステム（方面制度）の如きが即ち是れであるが、これは敢て遠く其の例を外國に求むるまでもなく、我が維新前まで廣く各地に行はれ來りたる所の五人組制度、殊に五家相保一人爲レ長の古制度に基いてこの五人組の中に設けられたる組頭又は判頭（土地によりて其の名稱ヲ異にす、この他にも組親、保頭、軒頭、長人、組代、與頭、頭取、組合頭等の稱がある）の如きは、こゝに謂ふ方面委員なるものと最も相酷似して居る所の制度である。支那に於ては遉がに我が五人組制度の祖國だけありて、夙に其の發達したる保伍又は保甲の制をばすべての社會事業就中謂ゆる荒政即ち天災地變に因る窮民救濟事業の上に利用すること後世に至るも衰へず、依然として常に庶政の權輿即ち荒政の根柢となつて居る。或は除レ奸剔レ弊、莫レ善二於保甲一、故留二心賑救一者、首當レ重也、蓋保甲不レ行、則審戶不レ實、無レ論二恩施之大小一、悉爲レ奸人、胥破侵欺、鰥寡孤獨、以致二嗷嗷待レ食者、仍絕レ粒而塡二於溝壑一也、保甲顧不レ重哉と謂ひ或は臨レ期抄劄、其弊無レ窮、古今一轍、惟保甲行而貧富瞭然矣、然得二之於平日一者、始爲二至當一、故豫爲二抄劄一、濟世之良模也と稱する所を以て之を見るも如何にこの施設に重きを措て居るかと云ふことが分かる。又宋代に於て凡縣令、宜每鄉委レ請下一上戶、平時信義、爲二鄉里一推服、官員一人上、爲提督賑濟官、令レ其逐都、擇下一二有二聲譽一、行止公幹之人上、爲二監視一、每月送二米麥點心錢一、分團抄劄、不レ許二邀阻乞覓一、有則申レ縣斷治、其發レ米賑糶亦如レ之云々と云ふが如き、又降つて明代に及び、合レ令二被レ災之府州縣一、豫乘二秋月一、以二主賑官一、督二在城保長一、以二在城保長一、催二在鄉保長一以二保長一催二甲長一、以二甲長一報二花戶一、每

レ甲分爲二不貧次貧極貧三等一、除二不貧一外、將二次貧極貧各口數大小若干一、貼二其門首壁上一、再令下毎保開二一土紙手本一、送至中賑濟官上、不レ許三指稱造冊、科斂二貧民一、待二郷黨日久論定一、委レ官乘レ便覆査と云ひ、又は賑饑之法、往々吏緣爲レ姦、皆由二戸之不レ能レ審也、貧者未二必報一、報者未二必給一、其報而給者、又未二必貧一、請就二里中一、推二一二大姓一、任以二賑事一、有司不時單車臨視、稍立二賞罰科條一、以勸二戒之一云々と云ふが如き、其の謂ゆる提督賑濟官又は主賑官若しくは里中の大姓なるもの、何れも濟貧行政に關する一種の方面委員なること明らかにして、其の施設の旨趣及び本質に於ても殆んど互ひに符節を合せたるが如きものありと斷言することが能きる。併しかくの如くに古今東西を通じて幾多の先例となり規範となるべきありとは言へ、之が爲めに這般林知事の立案に成つた所の方面委員なるものが、其の我が社會政策の上に徹底的活動の一大基礎を据へる最も大切なる新施設であると云ふ價値と聲譽とに何等の影響をも及ぼすべきに非ざることは、恰も彼の近代的救貧制度の上に一新紀元を劃成せる新施設なりと中外各國より激稱せられ歡迎せられたる所のエルベルフエルドシステムに對して、彼れと殆んど同一なる主義及び方法の、遠くはすでに耶蘇紀元の初期に於ける基督教的博愛事業の施行の上に、近くはまた第十六世紀の上半期に於けるニユルンベルヒ、ハンブルヒ等の救貧法の上に、徴すべきものありとの事實に顧み、「彼れは最も古くして然も最も新しき近代式施設である、救貧制度の根本的革正を計るが爲めに之を復活するに至らしめたるダニエル・ハイド（「エ」式の立案者）の效績は、新たなる創見者又は發明家としてのそれに敢て遜る所がない」と、斯道の大家故ミユンステルベルヒの賞評したと同じやうに、方面委員と其の目的及び形式を同ふする先例の多くあると云ふことは、寧ろ之に由つてこのシステムの一層根强きものであり、また有效のものであるといふことが裏書せられたる譯であつて、今の時代の必要に顧みて之を立案し、之を實行するに至らしめたる當事者の明と斷とは人をして益々深く推賞を禁ずるを得ざらしむる次第である。

現に角かゝる有益なる新施設が、地方牧民の重責を負ふ所の有司によつて而もすでに様々なる社會的施設の叢生しつゝある所の大阪に於て、如何にもして合理的且つ徹底的に之を濟世救民の實用に活躍する所あらしめんとの努力の下に立案せられ施行せしめらるゝに至つたものであると云ふことは、この一事既に以て之に多大の敬意を表し感謝を拂ふに値ひすべきことゝ言ふて宜い。

三

話は本に還へり、最う少し方面委員の內容談を續けることにする。方面委員の數は一方面に就き約十人から十四五人までを置くことになつて居る。一方面たる小學校通學區域の廣さは平均約二千五百位の戸數を包容するの概算なるが故に、假りに方面委員の數を十二人とすれば、其一人に對して約二百戸內外を擔當せしむることになる。二百戸と言へば少しく過重の負擔なるかに思はれざるに非ざるも、其の實、委員として特に職務上の關係を要すべき戸數は、多くとも大概一割位に過ぎざるべきが故に、之が爲めに敢て甚しき支障を感ぜしむるやうなことの無い筈である。委員の中より一人の常務委員を互選し、常務委員は方面委員の事務整理に必要なる有給の專屬書記を選任し得ることになつてをる。この常務委員なるものは詰り方面委員の統括者たり代表者たるの職責を有する者で、毎月少くも一回以上、府廳內に開かるべき聯合委員會に出席して、方面委員に關する重要事務の報告を爲し協議に與かり諸問に應じ、なほこの機會に事務の統一聯絡を計るに必要なる種々の打合せをも遂ぐる筈である。方面委員の統一機關としては、この聯合會の外に、府廳內に幹事會なるものゝ設けがある。幹事會は知事の選任したる府市郡區の關係吏員を以て之を組織してをる。方面委員は各其の分擔區域を定めて執務の責任を明かにし周到なる調査を遂げ圓滿なる接觸を保つに便せしむるやうに努める。事務所は方面地域內に於ける學校、寺院、社務所等の一隅を以て之れに充てしむる筈であるが、或は資産家の厚

意によつて其の手廣なる邸宅内の一部分を無料使用が能きると云ふやうになつたらば更に妙であらう。事務所を設くる以上は勿論相當の備品も要る、薪炭筆墨紙等の消耗品も用意せねばならぬ。これ等の費用も總て府當局に於て之れが支辨の責に任ずるの豫定であるが、この自治的社會事業の本領の上より之を言へば、せめて事務所に要する諸雜費の如きはなるべく各方面に於ける任意の負擔に歸せしめたいものである。方面委員の内少くも一人は毎日又は隔日に一定の時間……日沒後凡そ一時間位輪番交代して事務所に出勤することにする。この外に尙ほ方面委員は、毎月少くも二回以上開かるゝ所の方面委員會に出席して職務上の報告、打合及び決議をなすの義務がある。方面委員に女性を交ふる必要を認むる機會の必ずさまで遠からざる將來に到達すべきを疑はざる所なるが、今日の場合、未だこの點までには何等の考慮をも運らす所なきもの丶如くである。尤も書記には、寧ろなるべく女子の中より之を選任せんことを求めてをるやうにも見へる。前に方面委員の規程に揭けられたる職務要項の條文を紹介して置いたが、最う少しく具體的に之を解說すれば、(一)一般生活狀態の調査の爲め時々自ら部内の巡視又は家庭訪問を爲すこと、(二)常に警察、學校、神社、寺院、敎會、衞生組合、在鄕軍人團、靑年會其他各種の公共機關と密接なる聯絡を保ち一般生活狀態(精神的及び物質的)の眞相を詳明するに努むること、(三)調査の結果はカード式臺帳に記入し異動ある每に成るべく迅速に之れが加除訂正を爲すこと、(四)家政、育兒其他各般の人事關係に付き相談を請ふ者あるの場合に緩急難易を計つて或は自ら之れに應じ、或は他の相當機關に委囑又は紹介の勞を取るは勿論、設令ひ請求なきも進んで相當の指導又は助力を與ふること、(五)諸届の勵行に注意し法規上の手續を履行せざるが爲めの變態的家庭關係(內緣、私生等と云ふが如き)を矯正することに努むること、(六)姙產婦及び嬰兒の健康保全の上に周到なる注意を加ふること、(七)生計困難の者あるを認むるの場合には先づ其の困難の原因を調査して之を取除くの方法を考究すること、(八)救濟の必要を認むるの場合には成るべく敏

速に之れが手續を爲し、且つ受救後は一日も早く其の境遇を改善せしむることに指導を怠らざること、（九）公私各種の救濟機關と親密なる聯絡を保ち事に臨んで敏活、機を誤らざるの措置を取ること、（一〇）生活安定の方法としては市場、購買組合等の利用を計り尚ほ勞働階級者の主婦等に對しては常に家政に關する知識普及の道を講ずること、（一一）少年少女の職業及び勞働の上に格段の注意を加へ其の健康風紀及び經濟的能力の保全を努むること、（一二）濟生會發行の施療券の配給、窮民救助、行旅病死人の取扱、感化法の施行關係（例へば身上調査、院外敎育等の如き）等に就ての郡區役所又は警察署主管の事項は追て其の全部又は一部分を方面委員に委囑せらるべきに付き之れが圓滿なる處理を努むること等の十數目に涉つてをるのである。但し大阪府當局の意向としては、事業開始匆々の今日の場合、徒らに複雜多岐に涉つて一時に全功の擧がるを求むるの反て蛇蜂取らずの失敗に陷り易きに鑑み、當分先づ調査及び處理の事項を限定するが爲めに凡そ左記のやうな内規を設けて居る。

第一期の事業として先づ諸般計劃の基本たる方面内住民の生活狀態の調査に着手し、この傍ら調査中に發見したる變態的家庭關係の矯正、病者の救療及び幼兒の保育に助力すべし。

第一　生活狀態の調査

一、第一種第二種に區別し各別に臺帳カードに記入すべし

一、第一種は獨身にして自活の途を得ざる者、獨身に非ざるも扶助者なく自活の途なき者及び疾病其他の事故に依り自活困難なる者とす

一、第二種は凡家賃七圓收入貳拾五圓位迄を標準とし家族の員數、職業の安否、生活の狀態等を斟酌し家計餘裕なき者とす

一、一方面の調査は之を取纏め統計表カードに記入すべし

第二　戸籍整理の助力

一、内縁妻を戸籍上の正妻とすること
一、私生子を父母の戸籍の整理に依り嫡子と爲し又は父の認知に依り庶子と爲すこと
一、無籍者を就籍せしむること
一、右戸籍の整理に依り從來受くるを得ざりし軍事救護其他の利益を妻子に及ぼさしむること
一、戸籍を整理したるものは臺帳カード備考欄中に其旨を記載すべし

第三　救療の徹底

一、恩賜財團濟生會、市醫師會、齒科醫師會等の發行に係る診療券又は實費診療券の配給を委囑すべきに依り實際の必要ありと認むる向に之れが交付を爲すべし
一、救療を必要とする者の衣食住其他周圍の實況を詳査し、醫療以外に尚ほ救療の目的を徹底するに必要なる他の手當を施さゞるべからざるや否やを考究すべし

第四　幼兒の保護

一、幼兒の爲め父母の勞作を妨げ家計困難なる者の爲めに最寄晝間保育所に幼兒委托の途を指示すべし
一、漫に幼兒保育の煩を避くるが爲め輕卒なる委託をなすが如きは反て種々の弊害を伴ふことを免がれざるが故に此邊周到なる注意を要す
一、貰兒里子等の教養方に就て常に特別の注意を拂ふべし

以上方面委員の内容に就て略述する所に依り、其の本質、組織、任務及び實際的活動振の如何なるものであるかと云ふ大體のことは略ぼ之を明らかならしむることが能きたであらうと思ふ、

四

この方面委員の旨趣又は組織の梗概を聞く者をして、必ず必づ聯想の起るを禁じ得ざらしむる所のものは、彼の今を距る約六十年の昔に、泰西救貧制度の上に一大革命をあたふべき使命を齎して新たに普國ライン地方の一角に生れ出でたる「エルベルフエルドシステム」のことであらう。彼我相比較して、其の管掌せんとする事柄の上に、互ひに本末緩急を異にするもの少からざるを認むる所であるが、方面委員の研究の爲めにはどうしてもこの「エ」式救貧法の大體を知るの必要ありと信ずるが故に、こゝに聊かその組織に關する要點を述べることにする。さて最初にこの施設を試みたるの所は、普國ライン州に屬する今では工業都市として有名になつてをるエルベルフエルド市であつて、「エ」式なる名稱の由來する所以である。市を別つて若干のペチルク卽ち方面と爲し、更に一方面を若干の小區に細分し、各方面に一人の方面監督を置き、其の部内に於ける小區擔任者たる若干の救貧委員をして之れに從屬せしむ。卽ちこの組織に依れば、こゝに一人の貧民ありて、自活の途を得る能はざる窮境に在るの場合には、其の者の居住地を支配する所の小區擔任者たる救貧委員に對して救恤を請ふの手續を爲すを要する。（尤もこの仕組は實際に不便少からざるを經驗したるが爲めに、「エ」市を始め其他「エ」式救貧法を採用したる四五の都市に於ても後ちに至りこの小區制を廢して單純なる方面制に改め、救恤を受けんとする者をして、先づ直接に方面監督に申出でしめ、方面監督は便宜其の部下に屬する所の或る救貧委員を指定して之れに請願處理の擔任を委托するやうになつた）、各救貧委員は其の擔任を托せられた貧民に就て個別的關係にかゝる精密なる調査を遂げ、之れが結果を每週定日に開會せらるゝ所の方面會議に提案して、適實なる救

恤の方法及び程度等を取り極めることにする。各救貧委員に分擔せしむる所の貧民の數は通例三人若くは三戸を以て限度となしてをる。尤も同じ「エ」式救貧法を採用する他の都市にあつては、一人の救貧委員に六件八件十二件多きは二三十件を擔任せしめてをる向もある。委員は名譽職とし市民の選擧に依り市長之を任命す。委員の中には行政又は司法の高級官吏にして自ら進んで就任を希望する者も少くない。宗教家もある敎育家もある、醫師もある軍人もある、地主もある家主もある、工場の持主とか銀行會社の役員とか云ふやうなものもあれば、第一流の富豪又は名望家と稱せらるゝやうな人の其の間に交はることもまた稀有でない。併しこの「エ」式を採用しつゝある所の各地の實況を調べて見ると何處へ行つても、救貧委員の中で、最も多き割合を占むるものは小賣商、手工業及び製造業に從事する人達である。蓋しこれらの階級に屬するものは其の境遇の上より、細民社會の生活狀態を詳かにし且つ之れに徹底的の救恤を行ふ上に就て、比較的多くの便宜を有するの地位に居るが爲めであらう。例へば「エ」式救貧法を採用しつゝある所のハンブルヒに於ては、全市の人口約七十萬に對して救貧委員の數一五六一人、この職業別は、僧侶及び學校敎師一二八人、醫師及び藥劑師二〇人、旅店營業者三人、官公吏一一四人、商人二一三人、手工業及び製造業者六三二人、土地又は家作所有者六〇人と云ふやうなことになつてをる。近年に及んでは「エ」市を始め他の都市に於ても到る所に、各階級に屬する篤志婦人の救貧委員として活動する者甚だ多く、而し其の成績の頗る優秀なるものあるを認むると云ふことである。尙ほ聞く所に依ると、「エ」式救貧法の全盛期に於ては、智識階級又は權力階級に屬する第一流者にして、自ら進んで救貧委員に就職し且つ熱心に奔走の勞を取つたものが一層多かつた趣である。近年になつては上流社會の好んで委員となるものゝ多きこと曩昔の如くには非ざるも、然もこの救貧委員の職務は、名譽ある位置として世間より重きを置かるゝこと今猶ほ昔の如く、普國のライン地方などに於ては、他の各種の高級名譽職に選ばるべき者は、一旦先づ救貧委員に就職して、

其の成績を擧ぐるを要するの例なるが故に、救貧委員の位置は恰も一種の登龍門の如く、一般の良市民は何れもこの選に當ることを歡迎し、中には二三十年の勤續を見るに至つてをる者も少くないと云ふことである。なほこの「エ」式救貧法の特に意を用ひたるの點は、貧民をして公濟に依頼するの徒らに長きに彌るの弊を防ぐに努めたることである。即ち貧民の初めて恤救を受くる者は、其の期間を十四日以内とし、豫め制限以外の長き期間に渉ることを許さゞるは勿論、期限の到達と共に一旦は必ず先づ打切となすを本則とし、已むを得ざる事情の存する場合に限つて、更に恤救を加ふるの手續に出でしむることゝなしてをる。なほ又救貧委員をして、救貧事務に關する本務の外に、かねてまた被救者に對し、監督者たり、保護者たり、或はすべての家事關係の相談役たる資格に於て、常に親密なる接觸を保つの責任を持たしめてをるが故に、苟くも勞働能力を有する所の者であれば、其の身に相當する所の職業なり勞働なりを與へらるゝことによつて、受救後數日ならずして、能く獨立自營の途に就くことが能きる。また勞働能力なき者とも雖も、ソレからソレと種々の關係を辿つて調査を遂ぐるが爲めには、幾何もなく其所に何等かの責任ある緣故者を發見し得てこゝに其の身を寄托するに至ると云ふ場合も少なくない。かゝる事情の下に、新たに恤救を受けたる者の内少くも其の半數は四週間以内に恤救を解除せられ、殊に勞働能力者の恤救を受くる平均期間に至つては極めて短日數に過ぎざるの事實である。「エ」式研究者の一人米國ハーバート大學の教授ピーボデーは、「この救貧法の特長は獨り惠恤の濫遺に渉るの弊を防ぐのみならず、更に進んで惠恤を受くる所の貧民をば自立 Self-support 自尊 Self-respect 及び自信 Self-confidence に指導し教化し訓練するの力あることに存す、而して其の能くかゝる效果あるを得る所以のものは、一に救貧委員なるものの活躍其の宜しきを得るが爲めに外ならず云々」と謂ふてをる。尙ほ「エ」式救貧法の計數上に現はれたる事實的效果に就て之を見るに、本法實施以前の「エ」市に於ては、常に人口に對する七%乃至八%の貧民を有したりしも、實施以後に

は、未だ嘗て四%を超過するに至つた例を見ぬ。本法に依り恤救を受くる貧民數は四千人臺より急降して一千四百人となり、經費に於ては約五〇%の節約を見ることを得た。本法施行前の一八四六年乃至一八五二年に於ては市の負擔にかゝる恤救費補助額市民一人當平均約二マルク八〇ペンニヒなりしもの、實施後の一八五三年乃至一八七八年には平均僅に一マルク五〇ペンニヒとなることを得た。「エ」式救貧法を採用せる他の都市に於ても殆んど總て之れと同一の好成績を實驗せざるはなく、殊にライプチッヒ市(一八八一年以來)の如きは、本法施行の爲めに直ちに經費の節約を得たること十萬マルクの巨額に達し、受救貧民の數は施行以後四年間に約三九・五%の減少を見るに至つた。經費の節約は受救貧民數の減少に基き、受救貧民數の減少を見る所以のものは、貧民の生活狀態に關する個別調査の詳密及び貧民を指導保護するの周到懇切なるに因り、從前のやうに必要なき者に對していつまでも恤救を濫りにするが如きの弊を革正し得たるが爲めに外ならざるは明らかである。方面委員なるものも、てうど「エ」式救貧法に於ける救貧委員と何れも同じ樣に、平生にあつて受持區內の住民に接觸して之れと社交的親密なる關係を保ち、一旦事あるの場合に、謂ゆる人を扱ふに人を以てする對人的折衝に重きを置くの形式を採つてをる所の施設である。エルベルフエルドシステムがこの形式によつて貧民救濟の上にかくの如き立派の效果を收め得たと云ふ所より之を見れば、方面委員もまた其の使命に向つて前途必ず成效の赫灼たるものあるべきを疑はざる所である。

五

由來貧民の救恤とか弱者の保護とか云ふやうなことは、何れの國何れの時代にも之れが必要を見ざるはなく、必要のある所、必らず之れに關する事業の經營あるを見る所なるが、然も其の之れある所、動もすれば則ち百弊の之れに伴ふて叢生するものゝあるを免かれざるの常である。曰く强梁者得レ之、善弱者不レ得也とか、曰く有下一姓而得二數姓之糧一者上

有下幾人而不レ得二一口之食一者上とか云ふやうな風に、啻に總ての憐れむべき貧弱者をして實惠に均霑さすることの能きぬばかりでなく、往々にしてまた、眞に賑濟の必要ある者賑濟せられずして、其の必要なきもの反て二重三重に賑濟の惠に浴するの例に乏しくない。救濟の規模及び範圍の大きければ大きいだけ、また廣ければ廣きだけ、其れだけ益々弊害の多大なるものあるを見るの事實である。殊に水火風震等の災變あるに際しては、唯だ盲動的に公私内外の各方面より罹災民救助のことに遺算なきを競ふやうな態度に出づるが爲めに、動もすれば則ち反て力食を廢して袖手賑惠に俟たんとする惰民を生じ、甚しきは災害成金なる横着漢を簇出し、延いて終に多數無智の細民をして、寧ろ災害の頻至を希望するの心を起さしむるやうなことにもなる。最近米騷動事件の齎したる白米廉賣又は施米の場合に於ける實況を詳かにする所の者、謂ゆる救濟なるものゝ如何に無意義不徹底……寧ろ弊害百出の甚しきものなるかを痛切に心識味到し得たことであらう。而して其の此くの如くに弊端滋生の甚しきを見る所以のもの、詮ずる所は即ち平生にあつて豫めこゝに應ずるの準備即ち貧民の生活狀態の眞相を明かにする基礎的調査が出來てをらぬが爲めである。古來支那の恤救制度の上には、勘災とか審戶とか査賑とか云ふことが、重要な働きとして研究を凝されてをるやうであるが、これは詰り賑を行ふの前に豫め其の罹災なり生活難なりの各個的實況を査察詳明すると云ふことである。盡括二戶口之數一、第爲二三等一、孤獨不能自存者專賑濟、下戶乏レ食者賑糶、有レ田無レ力レ耕者賑貸と云ひ、或は、如下產微力薄、家無二檐石一、或房傾業廢、孤寡老弱、鵠面鳩形、朝不レ謀レ夕者上、是爲二極貧一、如三田雖レ被レ災、蓋藏未レ盡、或有二微業可一レ營、倘非二急不レ及レ待者一、是爲二次貧一、極貧則無レ論二大小口數多寡一、俱須二全給一、次貧則老幼婦女全給、其少壯丁男、力能營趁者酌給と云ふが如き、極めておほまかのことには過ぎぬのではあるが、兎も角賑恤の濫遺に陷るの弊を防がんとするに意を用ゐるの切なりしものあるを知ることが能きる。名は等しく生活難の窮境に沉淪する所の貧民であつても、其の生活上の個別的狀態に至

つては、恰も面貌の相異るが如くに、十人が十人ながら互に千差萬別も啻ならざるものなきを得ぬ。之れが眞相を判明詳悉すること到底報告書又は第三者の探検談の能くし得る所に非ざるは勿論であつて、怎うしても責任ある者の履勘検踏即ち親しく躬ら其の境地に臨み、而も明敏なる觀察力、深厚なる同情心並びに精透なる研究眼とを以て窮民個人に接觸し、彼れの生活狀態、彼れの家庭關係、彼れの周圍の總ての情形等を詳かにすることによつて始めて稍々眞相に近き事況を描出すべく、なほ進んで調査、監督、相談、慰問、弔慶其他の社交的用務の名の下に、救ふ者と救はるゝ者との間に常に所謂對人關係なるものゝ親密を加ふべく努力することによつて玆に終に絲毫悉く燭し纎塵見ざるなきの本面目を審明し、從つてまた之れに適應したる所の最も意義ある且つ最も徹底せる個別的救濟の活躍あるを期待することが能きる。この期待を充たすべき目的を以て組み立てられたる所のものが即ち「エ」式救貧法なり、又は我が方面委員制度なるものである。

六

今の救濟なるものゝ實況に就て之を見るに、其の多くは尙ほ依然として表面的一時的若しくは總括的なる舊式の範疇を出づることが能きぬ。例へばこゝに病んで醫藥給せざる無告の窮民ありとせんに、之れに對する所謂救濟なるものは、千遍一律に唯だ病人であるから之れに醫藥を施し、或は慈惠病院に收容して救療を加へると云ふ位のことであつて、それもいよ〳〵重症で捨て置き難いといふやうな場合でないと容易に之れに手を着けることはない。之れが病氣の原因なり又は病氣の增進を助くる色々な周圍の情況なりを研究して、之を取除くに必要なる衣食住其他の物質的及び精神的救濟の手當を施すと云ふことに就ては殆んど全く閑却して顧みる所なしと云ふて宜い。若し夫れかゝる場合に處して徹底的且つ合理的救濟の活動を全ふせんとならば、成るべく病を其の初期に救ふの方針を取るは勿論、更に遡つて其の病源

なり病氣に關係ある四圍の情況を探究して之を根絶するの道を講ずるの一面には、疾病回復の以後に於ける保健的措置に就ても必要の手當を加へねばならぬ。然らばこれでこの貧病者に對する救濟の能事了するかと云ふに然うでない。彼れには、或は妻子もあらう、或は永き病氣の爲めに失業するに至つてをると云ふやうな事情もあらう、失業せざるまでも、病後の身を以て、當分は他の相當の業務を選ばねばならぬ事情もあらう。この職業の關係を如何にすべき、又妻子其他の家族の生活、保育、就學、監督等の關係を如何にすべきやと云ふやうなことに就ても夫れ〴〵相當なる保護の道を立てゝやると云ふことにせねばならぬ。かくの如くに等しく病める貧困者と云ふ身柄のものであつても、之を救ふの道は千差萬別であり又複雜多岐であらねばならぬと云ふことによつて、玆に始めて合理的且つ徹底的救濟の働きありと言ふを得べく、而してこの働きの基礎となり原動力となるべきものは個別的生活狀態の詳明といふことである。然るに我が今日の救濟施設の上には、殆んど全くこの調査機關を闕如してをるの事實である。意義ある斯業の活躍を見る能はざるの病源は即ちこゝに存する。

七

救濟の活動には精神的と物質的との二方面がある。勿論昔に於ても所謂る心身兩面の救濟なるものありしの明らかなるも、然も多くは唯だ飢へる者に食を給し、病める者に藥を與へ、旅せる者に宿舍を供すると云ふやうな風に、專ら重きを物質的救濟の上に置いたものである。然るに今日に於ては、物質的と精神的との兩方面に偏重偏輕なき機宜の活動を爲すと稱する中にも、彼のエリサベス・フライが、「精神の救濟は救濟の精神であらねばならぬ」と言へるが如くに、昔しの物質に重きを置きたるに反して、今は寧ろ精神方面にヨリ以上の努力をなすの必要を認むるやうになつて來た。即ち今日の救濟事業は廣き意味に於ける教育事業であると云ふことが能きる。育兒事業や感化教育は言ふまでもなく、

施療にも養老にも、職業紹介にも勞働寄宿にも、貸長屋にも簡易食堂にも、人事相談にも白米廉價にも、職工の保護を計り又は一般的窮民の救濟を行ふ上に就ても、一刻も斯業當事者の心頭を離してならぬものは、如何にして其の惠に浴する所の者を善導教化しまた向上發展せしめ得るかと云ふことである。又今の社會問題は收入の問題に非ずして支出の問題であると謂ふ者あるが如く、下層社會の生活難に苦む者の中には、支出の道の宜しきを得ざるが爲めにこゝに至ると認むべき者が少くない。尙ほ近來に於ける現象として殊に我が下層階級者の間に年々嬰兒死亡率の驚くべき增加を致すの事實あることまた世人の熟知する所である。此れと云ひ彼れと云ひ等しく是れ家庭の內事に關することであつて見れば、其の責任の衝に當るべき者は即ち一家の主婦である。彼れに家政又は育兒に關する知識の缺乏して居ると云ふことが少くもかゝる出來事あるを見るに就ての大なる原因をなすものなりと斷言せざるを得ぬ。社會改良の基礎は家庭にあり、家庭改良の中心となるべきものは主婦である。英國には搖籃を動かすの手は即ち世界を支配するの手なりと云ふ諺があり、ポストは、社會問題を解決する鍵の一つは、家庭に於ける主婦の手にする所の煮物鍋の中に在り云々と謂ふが如く、下層社會の主婦又は未來の主婦たるべき妙齡の女子の社會政策の上に關係を有する所や洵に至重至大である。差向先づ之れに家政上及び育兒上の知識を普及せしむるの施設を經營するが如きは、救濟の方面より見るもまた刻下一日を緩ふすべからざるの急務である。是等の敎化薫育に關する働きの如きも、躬親しく其の境地に入つて個々の家庭生活の實況を詳かにする者の力に俟つ所なかるべからざるは勿論であつて、今の我が斯業の上に、この方面に關し殆んど一の見るに足るべきものなき所以のものは、蓋し今日まで方面委員制度の如きものゝ我れに起るを見るに至らざりしが爲めである。

八

現代に於ける社會生活の上に、常に吾人をして甚だ不安に堪へざらしむる所のものは、物質的文明の進歩と共に次第に道德的、宗敎的及び社交的各種の制裁力殊に最も强き鄕黨的相扶互響の力の衰滅せんとするの傾きあるが爲めに、各地到る所に不規律無節制の行爲の多きを見るのみならず、更に進んで反社會的諸般の現象の著るしく增加しつゝあるの事實を認むること卽ち是れである。犯罪者殊に少年犯罪者の增加する所以のものも、不良少年の增加する所以のものも、米騷動の起つた所以のものも、自殺者や離婚件數の多きを見る所以のものも、浮華淫佚其他の惡風汚俗の益々甚しきを致す所以のものも、この社會的各種の制裁力の衰へたと云ふことが、最も大なる原因の一つを爲して居ること明らかである。殊にこの現象の最も甚しきものあるは都會である。就中其の中心を離れたる邊端又は新開の地域若しくは一時に急激の發達を見た工業地區等であつては、こゝに居住する民衆に對しこの社交的中心となるべき殆んど何物をも持つて居らぬ。民衆の眼中、畏るゝ所のものは唯だ劍のみである、然るに今はこの劍の力も甚だ賴み少くなつて來た。四方新來の徒唯だ雜然として一圈內に群居すると云ふに過ぎぬのであつて、棟を同ふし家を共にして棲んで居つても、壁一つ襖一つを隔つれば、最ち互に其の何人と相隣りして居るかを知らず、朝夕相見てなほ路傍の人の如しといふやうな始末である。大阪の勞働地區とか新開地域とか云へる方面の情況を評して、林知事は「秩序もなければ節制もなく殆んど市街の體裁、市民生活の體裁を成して居らぬ、恰も出稼地と言はうか、植民地の場末とも言はうか、如何にも遺憾極まる狀態である云々」と言ふて居るが、誠にこの通りの混亂なる光景であつて、この間には色々な警戒を要する所の危險分子も少からず混交てをる。彼等は何んの憚る所もなく良民と伍して其の暗らい生活を營んで平然たるものがある。一朝、燒打とか米騷動とか何等かの出來事あるの場合に、少數なる不良者不健全者の爲めに、良き多數の分子が忽ち之れ

に附和雷同し、其の聲を借り其の勢ひに乘じて亂暴狼藉を働くといふやうなことになる。現に最近各地に於ける騷擾事件に際して、燒打や掠奪の狼藉を爲したる者の中に、同町内に住んで平生被害の家人にも顏を見知られてをつたといふやうなものもある。これも或る緣故によつてかねて怨を結び怒りを壞いてをつた譯でなくして、唯だ米屋であり薪屋を營んで居つたからといふだけのことである。かゝる不安の狀態の下に生活する所の都會民は恰も火藥を懷にして炬燵に眠つてをるやうなものである。昔は色々な社會的制裁力、殊に保甲とか五人組とか云ふやうな自治的制裁機關の活動するものあつて、奸を除き弱を扶け、謂ゆる鄉田井を同ふし出入相友として百姓親睦することを得たのであるが、今日に於てはかゝる施設のまた繹ぬべきものなく、また行はんと欲して再び行ひ得らるべきものでもない。然らば近[illegible]に於ける法治の發達、警察制度の進步は、能く以て之れに代つて治世安民の用を全ふし得べきかと云ふに、實際は卽ち多くの場合に之れが期待を裏切りつゝあるを見る所であつて、大なる缺陷は依然として尙ほ吾人生活上の安定を攪亂し脅威するの震源となつて其所に存してをる。今や我國に於ても殊に都會地などにあつては、何等か曩昔に於ける保甲又は五人組制度のやうな社會的施設を以てこの缺陷を充たさしめんとする切實なる要求の聲あるを聞くの偶然ならざる所以である。現に歐米にあつては、或は救貧の名の下にエルベルフエルドシステムの實行を促し、或は幼者保護其他一般の社會政策又は刑事政策徹底の目的を以てするプロベーシヨンシステム、プロツクシステム若しくはソシヤルセツツルマンシステムといやうな新しき施設の各地に歡迎せらるゝの傾向を呈して居る。また以て各國を通じて如何に時代の要求の切なるものあるかと云ふことが分かる。ソシヤルセツツルマンウヲルクのことは、すでに今春我國に再來せられた斯道の大家ベレー氏によつて、其の實行の必要を高調せられたる所であるが、この他のプロツクシステムやプロベーシヨンオフキサーの如きことも、近き將來に我國に起るべき……或はすでに起つてをる所の少年裁判制度、幼者保護問題等の進

展に伴ふて必らず其の實現を要求せらるゝに至るべきは明らかである。然るに今大阪の地に實現を見るに至つた所の方面委員なるものはこゝに列擧したる各種の施設の爲さんと欲する所を爲すの使命を有しまた爲し得るの資格をもつて居る。若し夫れこの機關を感化制度、行刑猶豫法、假出獄、免囚保護制、刑事事件の審理手續等の上に利用することになれば、この方面に於てもまた必らず立派な成績を擧ぐるに至ることを得べきは明らかである。なほ私は早晩必らず我國にも陪審制度の實施を見るに至るべきを信じ且つ切望する者の一人であるが、この方面委員の活躍其の宜しきを得ると云ふことになれば、之が爲めに陪審制度の實現を促進するの動機となり、民衆をして民本的活きたる常識裁判の惠に均霑するを得せしむることになると信ずる。この他になほ方面委員の施行に伴ふて齎し來るべき副産的利益ともいふべきことは、先づ第一には、各階級に屬する所の善良なる市民公民が交る〳〵選ばれてこの任務に就くが爲めに、事に當つて實驗を重ね訓練を積むの結果、終に廣く社會に斯業に關する深厚なる同情と堅實なる理解とを有する者の普及を見るに至らしむるの點を擧ぐべく、次には中流以上殊に上流資産階級に屬する者の、方面委員の選に當つて親しく下層民の間に出入折衝するが爲めには、自然に貧富相互の疏通となり了解となり、其の結果獨り階級的反目の弊端を杜絶するのみならず、終にはまた貴賤貧富の互ひに相調和し相輯睦して謂ゆる藹然たる道徳生活の美風を成すに至るべしといふことである。更にまた、方面委員の手を通うしての救濟事業は、慈善家ならざる慈善家、專門家ならざる專門家をして斯業の中心たらしむるものであつて、從前有給の吏員や或は專ら斯業に衣食する專門家のみに一任して置いた時代に比して、同じ程度に救はるゝ者であつても、之れをして一層實惠の厚きに悦服感謝するに至らしむることの能きるが如きも、副産的利益の一に數ふべきものであらう。之を要するに、獎賞の事、明らかなるときは彈壓の用切なりと謂ふが如く、若し夫れ方面委員にして、能く社會的奉仕義務の何物たるかを了解することにより、誠心誠意、公共の利益の爲

めに其の職責を盡す所あるに於ては、求めずしてまた犯すべからざる大なる權威の其の身に備はり來るべきは明らかである。權威の加はる所は即ち社會的中心としての制裁力の發動を見る所である。我が方面委員の施設は、時代の要求を充たすが爲めに、近代的新しき形式を備へて復活し來りたる五人組制度であると約言するもまた不可でない。この施設實行の前途、我が是れより將さに發展せんとする社會政策の上に必らず刮目して見るべきものあるを信じて疑はざる所である。

ウイルソン勝ちカイゼル敗る

文學博士　三宅雪嶺

大統領ウイルソン氏がカイゼル・ウイルヘルム二世に勝つのは、米國が獨逸に勝つのであり、米が獨に克つのは、アングロ・サクソンが獨逸民族に勝つのである。二個のWilは各々關係國家を代表するの資格及び能力がある。十分に代表すると云へぬとしても、代表するに耐ふるは確かである。米人も一概に云へず、獨逸人も一概に云へず、大統領にもいろ／＼あり、カイゼルにもいろ／＼あり、ウイルソンは前大統領ルーズベエルト氏と違ひ、ウイルヘルム二世は前カイゼル・ウイルヘルム一世と違ふ。或る點に正反對の所がある。けれども米人多數の間にウイルソン的性格及び思想を認める事が出來、獨逸人の多數にカイゼルの性格及び思想を認める事が出來る。個人としてウイルソン及びカイゼルは尋常に優つて居るが、何れも自身の力でのみ現代の活劇を演じて居るのでないは言ふまでもない。活劇の立物たり得ると言ふに止まる。活劇其物は幾多の事情の湊合して成る所に懸る。馬の脚でも幕引きでも、それ／＼適當の役目を勤めて居る。昔の英雄豪傑とてもさうであるが、現代の英雄豪傑は周圍の事情が餘りに見え透き、若干大人物が活動するものと見る譯に行かぬ。寧ろ周圍の事情に作り上げられて居る形がある。唯他人であれば幾分の差違を免かれまい。ルーズヴェルトが大統領であると、ウイルヘルム一世がカイゼルであると、現代の舞臺が何程か違ふ。けれども畢竟するに周圍の事情が最も多く與つて居る。ウイルソンが世界に號令する勢あると、カイゼルが自分の處置にさへ窮しつゝあるのと、周圍の事情に由來する所最も多い。

アングロ・サクソンはいよ／＼特徴を露はし、獨逸民族は從來の運命を繰返さうとする。聯合國で最も力を揮つた佛・英・米は比較的國家の基礎が固い。出來星の身代と違ふ。米は出來星と見えても、英の分家に外ならぬ。獨逸は古來歷史上に現はれ、隨分大きな活動を演じて居るが、國家としての纏りが好くない。大きくなつたり小さくなつたりする。獨逸の國家最も鞏[illegible]

と見えたのは、帝國の勃興した外觀上よりの事で、何時まで斯くて續くかは疑問に屬するものであつた。帝國成立して以來辛じて半世紀に達しやうとするのである。其基礎の固いか固くないか、如何にして發展する事が出來るか、獨逸民族にさまぐの歷史あるも帝國として日が淺く、其分裂する際、前に逆戻りすべきである。國家として極めて鞏固であるかに見え、實は頗る危ぶむべきものである。佛・英・米は何にしても昔から築き上げた土臺を占めて居る。老舖である。徒らに舊例を守る老舖でなく、よく土臺を守りつゝ絶えず新趣向を凝さうとする老舖である。出來星の店が盛んに賣出したやうな事を爲し得ぬにしても、いよく競走と云ふ場合、なかく敗けはせぬ。じりく地步を占め、遂に捷利を得る。人は兎角眼前の事で判斷し易く、獨逸帝國の勃興した結果、何でも獨逸に則とらねば立ち行かぬやうに考へたが、實は根柢の疑はしいものである。獨逸民族とアングロ・サクソンと羅典民族に比べて近いが、區別するに難くない。佛國人は羅典種と云はれても、眞にさうであるかは請け合へぬ。ゴール人は羅馬人と違つて居る。その後裔たる現佛國人も羅典と極めるのは六つかしい。曾て外相を勤めたアノトーは、羅典民族復興運動を起したが、佛人の眞に羅典人であるかについて疑を免かれぬ。同じく羅典と見られるものさへさうであり、チユートンと見られても獨逸民族とアングロ・サクソンと種々の點で分れる。民族の性質のみでなく、歷史上幾多の關係からも來て居るが、兩民族の爲し方が大に違ふ。其違ふ所はカイゼルとウイルソンとの上でも知り得られる。現カイゼルは祖父なるウイルヘルム一世と性格及び能力が違ひ、何れがより多く獨逸的であるか、一應考へた所では、一世の方が獨逸的らしいが、獨逸人に二世のやうな所もある。朴念仁で器用でなく、何處までも耐へて行く所は一世流であるが、學問藝術に堪能である處は二世流である。性質が違ひながら、何でも型を捺したやうに爲す所で共通して居る。君主を最上として國家本位にし、一切を之から割出し、延いて幹部と支部と首尾相應ずる所、一時世界に雄飛した所以である。實に統一運動は斯くするに如くはない。何事にも綿密なる計畫がある。一度び開戰となれば、全國の軍隊の動く事自由自在である。然し物は自分の計畫した通りに行はるゝとは限らぬ。さうは問屋で卸さぬ事がある。綿密に計畫しただけ、當れば功を奏するが當らぬ時がらつと目算がはづれる。獨逸は何事も範疇を設けて事を爲すに傾く。範疇で極まりが付くが、範疇其物が間違ふ事もある。折角計畫した所が目算外れとなつて大騷ぎになる。時として根本から變改するをを餘儀なくされる。現カイゼルは祖父と違ひ、祖父ならば今一

層沈着いて事を爲したと思はれるにせよ、計畫の破れて大困りするは獨逸として免かれぬ所とする。前に佛國に勝つて帝國を建設したのは、計畫が偶まよく當つたのである。一つ計畫が崩れればどうなるか解らぬ。現カイゼルは祖父と違ひいろ〳〵手をつけて見て思はしく行かぬ所を、直ぐ已めて了ふ。深入りせぬ所で、利益を得ぬ代り、損からも免かれる。所が現戰亂で深入りし、退引きならぬ始末となり、計畫の外れたと共に始末に困る事になつた。之れまで獨逸帝國の力を世界に伸すに全力を注ぎ、何でも其目的を達しやうとした。佛國を征服し、英國の海上權を奪はねばならぬとした。其準備最中の頃各國で怖れを抱いた。開戰以來連戰連勝するや、敵ながら天晴れと云はずに居られぬ。遙かにベルンハーヂ、トライチユケ等の書を讀み、獨逸の强兵の由つて來る所を考へたりする。日本の陸軍は獨逸崇拜の名あるに越して、何でも獨逸でなければ夜が明けぬとした。政府全體として此傾向があつた。が獨逸の計畫はいろ〳〵外れた。英の陸軍は云ふに足らず、米が參戰するなど思ひも據らぬとしたのに、英米の陸軍は前に輕んじたやうなものではない。佛の陸軍が相應に力あるは豫想通りであつても、英米の陸軍が佛に劣らず鬪ふとは寔に意外である。米から百幾十萬の兵が到來し、尙ほ陸續到來しやうとするは意外の意外である。鬪つて見ればなか〳〵强い。前に佛を叩きつける計畫が全く破れ、さりとて新に計畫を仕直すも容易でない。計畫通りに行くと見ゆる間、國民が忍耐しても、計畫が外れ希望が無くなつては其儘にして居れぬ。如何にすれば可いかと云ふに惑ふ事になつた。或は計畫を根本的に改める必要を感じて來る。

之に反し英米は獨逸の如く何事も國家の爲めと云ふを意識せず、國難のある時急に銃を乘つて立つが、平素他に考ふる所がある。世界何處にでも靑山ありとする調子がある。亞弗利加でも南洋でも何處でも、何等か自己の運命を拓かうとする。國家が何うであるか、冷淡に聞える。眼中國家無いものもある。國家以外に何等かの希望がある。漠然自由といふが如きを考へたりする。獨逸人から觀れば、全く理窟にならない事であつて、英米人自ら之を求め、或は求めて得たとする。國家に對して餘りに他愛ないものである。米に至りては初めから國家と目すべきものでないとなつて居つた。所が獨逸人の此觀察は大に謬つて居る。自分勝手で事を極め、其實に遠ざかる事は此邊にも顯はれて居る。彼は獨逸の眼鏡で他國を視、遂に英米人を理解し得なかつた。英米人は範疇を設けて事を考へる方でない。動きの取れなくなる範疇を設けたりせぬ。而して漠然何事かを理想とする。自由と云ひ、正義と云ひ、人道と云ひ、科學的に

難い事を信じ、且つ之を標榜する。哲學の無い民族と思はれる。所がアングロ・サクソンは幾代かの經驗、幾代かの自然陶汰で實際に臨んで事を運ぶ事頗る手馴れて居る。獨逸が莽りに軍隊を練り、何時開戰するか知れぬとあつても、まだ目が醒めさうにない。下らぬ事を議會で議論したりして居る。所で一旦獨逸が白耳義を突破して佛國に入るや、英は獨に抵抗し、續いて米が之に抵抗し、遽かに兵を鍊つて繰出す有樣、初めの程滑稽に見えたが、滑稽でも何でも兵を繰出し、次第に獨逸勢を喰ひ止め、之を逆押しに押して行く。英は國家の爲めに立つと云ふが、米はさうとも云はぬ。獨逸の軍閥が世界に有害であり、之を覆さねばならぬと唱道する。而して民心の昂奮する事頗る目覺ましい。一千萬の獨逸人が閉息し、新に米國化した形がある。かかる事は英米人自ら豫期したかどうか云ひ難いにしても、獨逸人の全く豫期しなかつた所である。獨逸の何事をも計畫を立て、豫定通りに運ばうとするのと、英米の實際に應じ、初め立遲れしながら、後漸次盛り返し、敵の計畫を破る所と、現戰亂に著るしく露はれて居る。獨逸帝國が勃興して以來、世界各國皆多少其影響を蒙つた。陸軍は勿論、産業にも影響がある。研究的態度が盛んになつた。英米も之に負ふ所がある。然し獨逸の長所の現れると共に短所が露はれ、遂に短所で仆れる樣になり、玆に獨逸が英米に習はねばならぬやうになつて來た。一に勝を制するには獨逸の如くするがよい、目的に向つて全力を注ぐに越した事はない。然し國家は一時的の勝利を愉快とするのでなく、永遠の生命を念とすべきである。爲めに焦らず、急がず、緩つくりと懸らねばならぬ事がある。英米の如くして國家の實を失ふと思つたのは獨逸流の觀察の仕方である。悠々閑閑何處に風が吹くかとの調子で、いざと云ふ場合に鐵拳を振つて立つ所で、大なる力が露はれる。

日本の陸軍は獨逸に則り、英米の陸軍を問題にしなかつたが、近頃英の陸軍を見て前の斷定を變じたものがある。實に變ぜずに居れぬのである。騎兵隊を見て何時編成したのかと問へば、答へに二ケ月來の事とある。二年でも六つかしい程の事を二ケ月でして居る。といふのも平素運動に從事して居る結果である。運動は遊びであるけれども、遊びで面白可笑しく身體を鍛えて居る。「右向け右」でなくても戰線に出る事が出來る。米國兵が佛國へ行つた時佛人は之を戰線に出さず、森で木を伐らせたりした。米人は不平で堪らず、戰線に出して貰ひたいと云ひ、英佛兵と混つて出れば頗る勇敢、何の劣る所がない。而して米將は佛人に對して曰ふ、獨立戰役に佛の援助を蒙つたが、此處に其御禮をする場合になつたと。挨拶にも餘裕がある。

然し足掛け五年の大戰亂で本年の春まで獨逸が優勢を占めた所獨逸士氣の鋭氣を示す。隨分聯合軍を惱ましたものである。唯、永い競走で此の流義は好くない。更に寛りのあるやうにせねばならぬ。其違ひはカイゼルとウィルソンとの間に露はれて居る。カイゼルは殆ど何事も出來るが焦る割に效果が無い。之れ獨逸帝國が盛衰常ならぬに肖て居る。ウィルヘルム一世の築いた新獨逸帝國も、間もなくウィルヘルム二世の手で何うなるであらうか。一時獨逸に抑へられた佛國は能く忍耐し、再び國力を伸す事になつた。然し英國は國内に損害を蒙らず、よく獨逸を押へつけ、世界政策を維持する事を得、米國は名よりも得を取りながら、歐洲の列強を手玉に取るの勢となるに至つた。然し勢を代表するは英にあつてロイド・ジョーヂ、米にありてウィルソンである。カイゼルの如く自ら軍隊を統卒するのでなく、軍事に掛けて到底之れほどの働きを爲し得まいが、餘計な骨折して草臥れ儲けするやうな愚に陷らぬ。自由とか、平和とか、人道とか、超國家の事を口にしつゝ自國の利權を張大して行く。斯くて、ウィルソンとカイゼルとは運命を異にする。一人の運命は國家に伴ひ、民族に伴ふ。

危險思想對策

法學博士　神戸正雄

一

危險思想といふ詞が何を意味するかは少しく不明確である。彼の男は危隨思想を懷いて居るといふときに、唯だ進步したる世界的思潮に觸れて居るといふ位に解さるることもある。併し其は餘りに範圍が廣過ぎて適切でない。又斯かる者を凡べて排斥して居ては世の中の進步は期せられない。國民は矢張り常に速かに世界の思潮を取入れて、之と步調を整へて行くことが肝要である。國家の地位を安全にするにも其が必要ある。或は危險思想といふ詞にて社會主義者の思想を解することもあるが、此は全くの誤解である。嘗て我邦にて社會主義者より大逆者を

出した所から、社會主義は卽ち危險思想也と速斷されたのであらうが、實は社會主義が決して我國體に容るべからざるものでなく、之と能く調和し得るものであり、其は單に財產制度の改造を計るに止まつて、其事は叉既に現在の我邦にも着々と步の進められて居る所であり、其が爲めに結局多量生產といふことは得られぬにせよ、分配の公平といふことが得られ、少數者の過大利得の代りに多數者の公平收得が得らるる所である。斯かるものを恐れ排斥するのは、其愚や及ぶべからずである。或は危險思想といふ詞にて民本主義を指すこともある。併し此も解釋のしやうによつては危險思想ではない。元來我邦の政治の大原則が昔から民本主義に依られてあるので、其が世界の民本主義と一致すとも見らるる。たゞ外國の其には民主民本主義といふ方に行く傾があるのに、日本のは君主民本主義といふ所に止まるといふ差はあらうが、兎も角、由來我邦は皇室が政治を統べられても、常に民を愛撫し、民の爲めにといふ精神にて之を行はれたと解するのが正當である。君が君の爲めに政治を行はれたのでなく、民の爲めに之を行はれたものと解するを得る。斯く解するこそ、我が君民の間を圓滿にし、皇室の地位を安全にし、我國民の幸福をも企圖するに足る。其を强いて自らの忠君振りを示さんが爲めに、日本は君主君本主義でなくてはならぬなどといふて、直ちに民本論者を壓迫するならば、其こそ却つて累を皇室に及ぼすべき危險なる擧動である。今日の進步せる人々の心を能く皇室と離れざらしむるには、是非とも此れだけの理解が當局者になければ駄目である。若夫れ我國をして外國流の民主々義國とならしめんと考ふる者あるに至ては、是は眞に危險思想として嚴重に取締るべきものであり、其には一步も假借するを要せぬ。併し其とても人が唯だ之を考ふるのを處罰するといふことは固より出來ない。たゞ之を言論により文章により他人に傳へ、之を以て煽動し、更らに之を以て社會の秩序を紊るが如き行動を爲すに及んで初めて制裁さるべきである。

二

由來我邦にては眞に危險ならざる思想をも危險思想に入れ來つたが、將來は此を明確に區別して、單純なる新思想に止まるもの、其の我國體を破壞することなきものは寛恕することとならなければならぬ。餘りに危險ならざるものまでも、危險也として防制しやうとすれば、却つて彼等を驅つて、眞の危險なるものに屬せしむることとなる。爲政者は這般の關係を能く理解して、過なきを期せなければならぬ。特に單純なる新思想を懷くに止まる者に不快なる感を懷かしむるが如き監視を爲すが如きことは止めた方が良い。此れ亦た却つて彼等を反抗せしめ

て、眞に危險なる人の仲間に入らしむるととなる。實に危險なることである。而して今熱々世人の思想の趨向を考ふるに、所謂新思想者は非常に多く、之を危險思想者なりとして之が撲滅を計るなどといふことは到底出來ないことである。恰も暴利取締令位では到底、無數の人々の行ふ賣惜買占を抑制することの出來ざると同である。尤も今日眞に危險なる國體改造を考ふる者も若干はあるかも知れぬ。併し其が言論文章に其ことを表はさざる以上は、爲政者にて如何ともするを得るものでない。此等を根絶することが望ましきことにせよ、此れ亦た一の社會病で到底其を根絶することが出來るものではない。特に今日の如く廣く智識を世界より取入るる時代には之は望めない。其は恰も各種の流行病が萬國交通に伴つて我邦に侵入すると同である。爲政者が餘りに此が撲滅に腐心するのは愚人の事である。むしろ唯だ人々の精神狀態を健全にして、斯かる病氣に感染せざるやう、又感染する者の少きやうに努むべきである。而して其精神狀態を健全にするのには、出來るだけ社會政策的施設を施して、人々の生活狀態を改良し、彼等をして現在の國民生活に對して多大なる滿足を得せしめなければならぬ。若も世の中に眞に危險なる思想を懷く者が多少にても出來たとすれば、其罪は一は爲政者自らの施設の怠慢にあることを思はなければならぬ。戒めなければならぬ。其他、予が考によれば此危險思想者をして社會の秩序を紊るが如き行動に出でざらしむるが爲めには、是非とも彼等をして議會に出でて、其意見を發表するを得せしむることが肝要である。此等の人々は多くは無產者であるが、彼等は目下議會に於て其意見を發表するの機會をもたぬ。其故に已むなく其理想を實現しやうとして、不穩當なる行動に出て、爲めに社會に大なる損害を加ふることになる。で之を將來に出來るだけ少くしやうとすれば、普通選擧制を採つて、彼等に意見發表の機會を與へ、隨つて夫の暴動に出づる必要なからしめなければならぬ。尤も之につき有產者と無產者とを對等に扱ふことが不穩當といふならば、前者の二票づつに對する後者の一票宛としても良い。何れにせよ無產者にも政治參與權を與ふることが望ましい。彼等が社會の秩序を紊る行動を屢々するといへば、其罪の一半は現在の選擧制度にもある。暴動者に對して同情すべき所以のものもある。改めなくてはならぬ。

三

事、皇室に關し國體に關することは國民としても考違のなきやうに心掛けたいものであるが、其の動もすれば心得違の生ずるのは、實は政府の當局者や、宮內省の吏員の態度に依ることも多い。皇室に於かれては元來太だ仁慈に渉らせられて、思

遣りが深いのであり、其を人民として怨むなどいふことは毛頭あるべからざるのであるが、皇室と人民との中間に介在する役人共が障壁を作つて、折角の有難き思召の通じないやうにすることが多い。例之、陛下の御通りのときなどに、永い間通行止めをして、爲めに、親の重病を救はんとして歸路を急ぐものの道止めをしたり、商業上一刻を爭ふ者をして利益の機會を逸せしめたりすることは頗る多い。此等の事が重なると頗る深刻なる感知を關係者に與ふるものである。當局者たるものは此邊につき十分顧省しなくてはならぬ。或は從來、政府當局者が失政の爲めに自ら其責を負はなければならぬときにも、聖旨に言寄せて之を明にしなかつたことが屢々ある。此等も當局者の不心得の爲めに、知らず識らず累を皇室に及ぼして居る。今後の當局者は十分に之を注意しなくてはならぬ。或は又當局者が間々政敵を陷るる爲めに、皇室に對する不敬といふが如きことを持出して攻撃することがある。此等も累を皇室に及ぼす所以である。我三千年の歴史を有する世界無比の皇室を安泰にすることは我れ人共に望む所であるが、之を達するのには凡べて互に戒めて政治上の爭には一切、皇室を持出さゞること、形式上にも實質上にも、公然にも隱然にも皇室の御名を假りて敵手に對せざることが望ましい。即ち政治家は假令萬一敵黨が皇室に不敬の嫌あることをいふことがあつたとしても、一切其を假つて敵黨を陷るることを避くること、政治家は又其政治につきては聖旨を振廻はさず、一切其責を自らに於て負ふの男らしき態度に出ることを望まなければならぬ。又官吏當路者は陛下の御通りなどの場合にも不敬に亙らざる限り、人民の便宜を十分に計ることを心掛けなければならぬ。更に其上にも皇室が常に人民特に下層の人民に同情さるることが益々深ければ最結構と考ふる。將來我國の社會にても階級戰爭が盛になつて、無産者の有産者に對する爭は繁くなるであらうが、此場合にも皇室が最公平なる態度に出でらるることが望ましい。併し多數の人民たる無産者にはむしろ同情を持たるるやうにありたい。我國には由來頑迷なる忠君主義者と、虚僞なる忠君主義者とが少くない。此人達は動もすると他人を危險扱するが、其等の人々こそ却つて危險人物である。予は此等の人々の今一層の反省熟慮を求むる。彼等に時勢の推移、人心の歸向を十分に顧念せんことを勸むる。予は皇室の眞の安泰を希望するものである。其が我日本民族の爲めに最幸福なりと考ふる。然るに從來の當局者の爲す所は眞に此希望を充たさず、却つて動もすれば之を反對に向けんとするが如きを見るに於て、敢て沈默を守るに忍ひず、玆に聊か苦言を呈するものである。

勝者は誰か

―世界文明の危機と日本の使命―

法學博士　福田德三

（一）

今朝の新聞紙は獨逸のカイゼルが愈々退位したことを確報した。（追記、夕刊の新聞紙はカイゼル之を担んだとあるが、其は唯だ暫くの時間の問題に過ぎぬと信ずる）我輩は去七月末日『自主的出兵より自主的平和』『中外』九月號掲載）てふ一文を草したとき、獨逸國内の形勢が俄然急變した事實を根基として次の如き意見を立てた。

此度の戰爭は最早敵味方とも何れの國の生存をも脅かす危險の無いとが明瞭となつた以上全く無意味の戰爭となつて仕舞つた。故に我日本は此際西比利亞出兵と云ふ如き時代後れの小策に腐心することを斷然思ひ切り、世界の表面に立つて日本の重大なる使命を盡す可く、日本先づ自主的に進んで斷乎として講和を主張して世界の人類を戰爭の慘禍より救ひ出し、世界文明の前に來らんとする大危機を免かれることを圖れと云ふ是れである。此論文は我輩が時々現戰爭に關して新聞や雜誌に公にした意見が或は誤解せられ或は曲解せられたに對し、一々辯明す益であると思つたから一括的に我輩の意見の總勘定を提示するるのは無稜で起草したものである。殊に吉野博士は我輩を以て『プロ・ジアーマン』なりと詰責せられ、長友宗伏高信君は我輩は軍國主義を奉ずるものであると難ぜられ、ジヤパン・アドヴアータイザーの記者は我輩が Macht doctrine に心醉するものであると斷定せられた。我輩が從來世に公にした論文等を一通りでも讀まれた方々は、決して右樣の批評を下さるゝことはないと信ずるから、我輩は一々辯明することを必要と認めなかつた。殊に我輩が『デモクラシー』（我輩は英米の形式的舊式『デモクラシー』を極力排斥するものである。此事に就ては極東時報に『新らしい意味のデモクラシー』なる一文を公にして置いた）を徹頭徹尾毛嫌するものであると云はるゝ批評の如きは餘りに曲解も甚しいのであるが其に對しても敢て答へなかつた。而して

『自主的出兵より自主的平和』なる拙文を一覽せられた方々は我輩があらゆる口實の下に於ける戰爭を絕對的に人道の曲事と認めるものなることを十分に看取して下さつたことゝ思ふ。然るに、一犬虛に吠へて萬犬實を傳ふ、ジヤパン•アドヴアータイザー紙は甚だ親切にも右自主的平和論を始め我輩の意見を時々其誌上に譯載して下さつたが僞善と洞喝とに目の眩んだ西洋人の中には我輩の說を曲解して極端に誣妄の批評否罵詈讒謗を敢てして居るものがある。例へば十一月號の『サーチライト』なる英文雜誌の如ときは福田は German pay に在り（獨逸に買收せられたり）とさへ書いてあつた（此雜誌發行者は其後間もなく國交に害ある者として我政府から退去を命ぜられた由新聞紙は報じて居る）。併し誤解を一々辯明するは無用である、況んや故意の中傷讒誣をや、我輩は此等を悉く一笑に附するものであるが、近頃聞く所にては英國のマンチエスター•ガーヂアンや米國の某々新聞紙の如きさへ明かに我輩の名を記して誣妄の評を加へて居るさうである。我輩一個の迷惑位は何んでもないが、此れが爲め我國の誠心誠意を聯合國民が誤解するようのことがあるとしたらば其は甚だ殘念な事である。

（二）

我國民が英米政治家の言動を批評したとて其は決して聯合國に不忠なるが爲めでない。否英國に在つては例へば『ステーチスト』誌の如きは極めて忌憚なく國民の欠點や議會の遲憲や政治家の無能や不信を每號々々攻擊非難して居り、又正義人道の空言斗りで世界の平和の確保せらる可きものでないを繰り返し主張して居る。試みに近頃の數號のみに就て見るも左の如き文字を散見するのである。

先づ英國の財政經濟政策の根本的に誤れるを論じては曰く、『倫敦は加奈陀濠洲の開發に必要なる資金を供し得可きやと言ふに戰前一二年前ならば我々は慥かに然りと答へ得可し然るに

but seeing now how utterly unprepared the whole military and naval organisation of the Empire was; how absolutely ignorant the two Govergments have been that have mismanaged our affairs since the mid-summer of 1914; and how difficult it is to forsee the mannar in which wealth can be created that will supply our own home wants, and all the wants of the Dominions of India, and of the rest of the Empirc, he would be an exceedingly bold man who would ven-

ture upon a definite opinion as to what will happen. If a genius of the very first order were to arise; if we were all clear-sighted enough to recognize his greatness as a genius; and if we were humbleminded enough to submit ourselves to his guidance, we do not doubt that the problem would be successfully solved. But suppose the geniu doe not arise and suppose a number of Mr. Arthur Balfours and Mr. Asquiths go on contending which is to be allowed to muddle our affairs, what will happen? In all reasonable probability we shall fail to reduce our debt rapidly. We shall quarrel amongst ourselves as to what we are to do, and we shall gradually sink. In that case the United States and Japan would rise, and in a generation or two people would moralise upon the repidity with which great nations like England and Germany had decayed. The real question then is, Have our public men who are visiting us from the outer world really considered all the great questions that we ought to solve, and are they capable of overcoming our stupidity and inducing us to take a reasonable course? As for our public men—well, the past four years warn us not to put overmuch trust in their management, in their foresight or in their conceptions.

Statist Vol.XCI.—No.2103.
June 15, 1918. pp. 1025—6,

我帝國の陸海軍組織の全部が如何に全く無準備なりしか、千九百十四年中夏以來、我國事を誤導したる兩內閣が如何に絕對的に無知なりしか、而して我國內の需要と凡ての領地の需要とを充たす可き富を作ることが如何に困難なるかを考ふるときは、今の時に方つて我邦の將來に關して一定の說を下すを敢てする人は極めて大膽なる人なりと云はざる可からず。若し英國に第一流の天才者が起るならば、而して我等が皆彼の天才としての偉大を認む可く先見の明を有し、又此の天才者の指導に我々を托す可く謙遜なるならば吾人は此問題は解決し得可きものなるものなるを疑はず。然れども如此天才者にして起ることなく依然としてアーサー、バルフオーア輩何人、アスキス輩何人かゞ寄り集つて國事を玩弄することを我々が許すならば果して何事が起る可きか。凡ての合理的

確らしさに於て吾人は我國債を速かに減少することに失敗す可し。而して我々は相集つて紛々として何を爲す可きかを互に相爭ふ間に我國運は衰頽に陷る可し。然る場合には米國と日本とは勃興す可く而して一二代にして人々は英國や獨逸の如き大國民の衰頽が如何に迅速なるかにつき、種々說法を始むるに到らん。眞實の問題は實に是なり。外來の我政治家（ヒューズ等を云ふ）は眞に吾人が解決するを要する凡ての大問題を熟慮したりや。又た彼等は吾人の痴愚に打克ち、吾人をして合理的針路を取らしむ可く導くの能力ありや。さるにても過去四ケ年は吾人に教ゆるに英本國の政治家の指導、先見思考に餘り大なる信賴を置く可からざることを以てす。』（二一〇三號（本年六月十五日）『帝國戰時內閣論』の一節）

英國民の欠點を指摘して、

『我國民の弱點は第一は一週中二三日をスポートや週末旅行に費し殘り三四日間のみ働く怠惰にあり、第二は我國民の無智にあり、第三は我國民の倨傲自恃の甚しきにあり』（仝號『戰後論』の一節）

特に日本に就ては曰く

『大平洋の彼岸には日本列島と稱する長き島嶼の列あり、此列島は元と日本の出生地なりしも今や眞の日本は此出生地を outgrow して大陸に日本を擴張したり』（二一〇四號『太平洋論』）

又たヒューズ氏とウヰルソン氏とを許しては

濠洲首相ヒューズ氏はウヰルソン大統領と共に外交手段によりて將來戰爭を根絕す可き國際協約を成立せしめ得可しと信ずるが如し。吾人は之を信ぜず。今の世界は社會をして安全に生活せしめ得可き社會組織を探索しつゝあるなり。否此の探索は希臘の都市國家の倒壞以來繼續して存せり。而して吾人今日未だ之を發見せざること希臘時代と寸毫の距りなきなり。

ヒューズ氏にして外交手段は戰爭發起人の齒を拔去り吾人に永久の平和を與へ得可しと信ずるものならば、吾人は恐る彼が今倫敦に在るは彼の代表する濠洲人の幸福を寸毫も顧らすことなくして終る可きを』（仝號『戰後論』）

怠惰なる富豪（アイドル・リッチ）の跋扈を難じて曰く、

『不幸にして當時內閣の首班に一人のバルフオーアなる人ありて議會をして何事をも爲さゞることに決心せしめたり。而して吾人は又一人のカーズン卿なる人を有してアルスターをして內亂を起す可き準備を爲さしめたりき。否吾人の不幸は此に止まらず。英母國の政府は其一生中一事をも爲すことな

くして終る底のアイドル・リッチ（惰富階級）の手に在るなり』。（二一〇五號『戰後論』）

グレー卿を難じて

『不幸にしてグレー卿の無能なること彼の後任者の凡ての無能なるが如く然り』（二一〇八號『若しも吾人にして賢かりしならば』の一節）

獨逸の長を擧げ英國の短を慨いて曰く、

『吾人の敵（獨逸）は實に頑强に而して如何に能く戰ふ可きかを諒解す。否吾人は正直なる率直を以て告白せざるべからず。我敵は實に勇敢に戰ふことを熟知するものなり。而して此敵たる數代の間十分に準備したる强敵なるに我聯合軍は佛國軍を除くの外には一人の有能なる將帥をすらも有せざるなり』（二一一三號『形勢一斑』）

政黨の罪過を指彈して

『以上より吾人の學ぶ可き敎訓は準備の義務を全然怠りたるアイドル・リッチ（惰富階級）を永久に英國の政界より驅逐せざる限りは、彼等の罪惡は又た吾人の共に負擔するを免れざる所なることと是れなり。最も責む可きは保守黨のバルフォーアなり、自由黨も同罪也。然れどもバルフォーアの愚策を反駁せざりし國民も亦責を分たざる可からず』。（二一一三號『軍事的準備論』）

政治家の無能無爲を難じて、

『獨逸の行動は意外なりしと公言する我政治家等は取りも直さず其義務を怠りたるものなるを告白するに外ならず彼等は新聞記者丈けの調査をすら成し居らざりしなり。此くの如き政治家には當時も今日も共に斷じて國事を托す可きに非ず』（二一一四號『露國と聯合國』）

現議會の違憲なるを論じて、

『我現議會は何等眞正の選擧民を代表するものに非ずして唯自己を代表するもののみ』

it has no real mandate from the people, and what is more, it represents absolutely nobody but its members

（同號『來る可き選擧』）

讀者は以上の數節を我々日本人が英國批評論として公言する所と比較して何れがより多く露骨にして何れがより痛激なるかを直ちに悟られるであらう。『ステーチスト』は英國言論界の一巨人である。決して矯激無責任の言論を弄する黄紙ではない。而して言論取締の峻烈を極むる英國の檢察官が以上の言を載せた雜誌に一回も禁止も停止も申渡さず、否每號安全に普通郵便によりて遠く日本に在る我々の机上にまで來ることを許してあ

るのである。

（三）

然るに以上より遙かに微溫的なる批評を下す我日本人の言論に對して獨探呼りをすると云ふは如何にも其人々の不見識を表明するものであるが、其は政略の爲めとして論外に置くとするが、公平なる可き學者迄が妄りに人に對して、プロ・ジアーマン呼りをなして、暗に道德的壓迫、心理的威壓を加へようとするのは怪しからぬ事である。否日本の學校に獨逸敎師を置くを不可なりと公言する姉崎博士の如きあるは實に我々に於ては諒解し兼ぬる所である、又博士は東京に在る『獨逸學協會學校』を以て獨逸の野心機關であるが如くに公言せらるゝは甚だ以て不都合であると信ずる。博士曰く

"Yes, there are a number that teach——to-day——and I am very glad that you have called the attention of the Government to this in your magazine. .....the middle schools of the nation, however,—and some of the private educational Institutions——are employing Germans at the present time and I agree entirely with you that this should be stopped. Further more there is here in Tokio a middle school that is known as the Doitsu Kyokai Gakko .....is, of course, very pro-German.

但し右は退去を命ぜられた怪米人モットなるものゝ說に全然同說同感なりとして、同人に對し博士が語られた所なりと云へば、或は同人が故意に曲筆したものかも知れぬ。我輩は寧ろ其然らんことを切望するものである。何となれば博士が眞に此くの如き愚言を吐かれたとしたならば、其は日本の學界の耻辱たる外はないからである。（博士の言なるものには、此以外にも甚だ驚く可き事があるが左迄はと打捨て置く）。

（四）

正義人道を標榜する英米人の中にも心事の甚だ陋劣なるものあることと獨逸人の中に之れあると少しも異ならぬ證據は右の外にもイクラもあるが、殊に近頃言論の壓迫をリンチ的に極行することは驚く可きである。（民本主義の言論を壓迫するを難ずる吉野博士が、プロ・ジアーマン等と他人の言論を威壓せらるゝも一種のリンチではないか。此事は三井甲之氏が論じて下さつたことを玆に改めて御禮致す）而して人權を尊重すると稱して其實極端なる軍國主義を實行しつゝある米國に最近次の如き驚く可き事が行はれたは、吉野、姉崎兩博士其他數多き米國謳歌

論者と雖も否定することの出來ぬ儼然たる事實である。

千九百十八年九月四日紐育に於て

四萬五千人の大捕縛

紐育及近郊に於て兵役關係登錄證票を携帶せざりし廉を以て一日中に捕縛せられたる人數四萬五千、共内譯はマンハタンに於ては約一萬人、ブルークリン及クインスに於て一萬、ブロンクスに於て二千二百人、ホボケン及北ハドソンに於て二千人、ジアーシー、シチーに於て八千人、パセイクに於て千三百人、ニューアークに於て一萬人等なり。

一時に四萬五千人の捕縛ありし爲め之を收容す可き所なく不得止學校公衙を一時之に充てたれども、夜に入りて食事を供するに大困難を感じ殊に寢臺に至りては到底足らず大混雜を極めたり。

司法省の當該監督官チャーレス・ド・ムーデー氏は右檢擧の結果を滿足す可きものなりと公言せり。然れども眞に違法の者は極めて少數なる可しとは當局者すら公言する所にして唯身邊に登錄證票を携帶せずとの廉を以て何れも收監せられたるなり。或る非番巡査の如きは長官共無罪なるを證明したれども生憎細君不在にして自宅に在る證票の所在不明の爲め一夜を收監所に費し翌朝證票到着して漸く釋放せられたり。

其の他之に類する挿話は無數なり。云々。

實に亂暴千萬な話であつて、我邦でも米騷動の時隨分珍談があつたさうであるが右に比ぶれば迚も話にならぬ。試みに思へ、某月某日の朝東京の辻々に陸海軍人隊を爲して出現して通行する丁年以上の男子を悉く誰何して身邊に兵役關係證票を携へざるものは直ちに皆之を捕縛して牢獄に投ずること其數四萬五千人に及ぶとせよ。國民は果して何と言ふであらう、否外國人は之を何と評するであらう。而も是れ實に正義人道を高唱しつゝあるウヰルソン氏の下に於て紐育市に於て白晝公然と現に起つた出來事である。(在米本邦人の歸朝を極端に妨ぐるのも同一筆法であらう)我輩は此記事を米國新聞で一讀して啞然たるもの多時、言辭の出づ可きを知らなかつた。此くの如き狀態に對して批評を下すことは果してプロ・ジアーマンであるか。英米に對して故意に惡評を逞ふする所以なるか。此れが『デモクラシー』であるならば、我輩は最も熱心なる『デモクラシー』反對論者となることを明言する。是が人類獨立の宣言の實行の一法たるならば、其樣なる人類獨立には斷然反對する。是れ我々の良心が我々に命令する所である。而して斯くの如き虛僞なる『デモクラシー』の敗滅を切望するに於て我輩は斷じて人後に落ちざらんことを誓ふものである。我々は英國にも米國にも

實に數へ切れぬ程の美點長所のあることを十分に認めるものである。其と同時に又た數へ切れぬ程の惡事弊害のあることを十分に認めざるを得ぬものである。獨逸に就ても全く同じである。獨逸には實に想像だも及ばざる長所美點があると同時に、醜事怪事も亦無數にある。殊に國としての弱點の著明なることは到底英米の比ではない。(此事は『中外』に於て稍詳しく指摘して置いた)。國民の性格にも缺陷あり社會にも缺陷があるが、獨逸第一の缺陷弱點弊所は其國家組織の上に在る。而して其れが今やカイゼルの退位によつて的確に證明せられたのである。我々は戰爭に勝ち驕る軍國主義の獨逸よりも屈辱的とまで考へられる講和を受諾せんとする獨逸に對して甚大の注意を傾くることを禁じ能はぬものである。Japanese Germano-Maniac だとか"Macht Doctrine"の崇拜者だとかと我輩を評して呉れられたジアパン・アドヴアータイザー記者は予の此一文を終まで讀まるれば必ず其言を撤回する必要を認められることゝ信ずる。

(五)

憲政會總裁加藤子爵は近頃大演說を試みられた中に『當時獨逸の武力を過信したる輩の內には正面反對を口にせざるも或は諷示的に或は蔭口にケチをつけて暗に參戰を難ずるが如き風ありし人々も少からざりき。原氏の如きは現內閣の外交方針疑慮に堪へずと屢々口外せられた爲め、幾度か其憂慮に堪へぬ理由の說明を求めたるも、終に夫以上に聞くを得ざりしが、或は獨逸の實力を過信せられたる結果斯く口外せられしにあらざるか。是れ或は我輩の思違ひにあるやも知らねど、其末輩と云へば失禮ながら、兎に角原氏の下に當時も今も尙立派なる位置にある一人が明瞭に此事を言明せられしは我黨諸君の今に記憶に新なる所ならん、我輩は當時より結局獨逸の敗北を確信せるが故に聊も斯の如き憂慮なかりしも獨り我國のみならず世界各國又斯く過信しつゝありし人の相當に多かりしは事實なりしが如し(中略)我輩一個人としても先づ切腹申譯を免れたることは喜しきとなり』云々と言はれたやうである(本日の東京朝日新聞記事による)加藤氏は日獨開戰の責任者であるから今日獨逸の屈辱的求和を以て切腹免除の特典を得たるものとして喜ばるゝ權利はあるであらうが、其他之に類する言を爲す人は澤山にある。萬朝或はタイムスの口眞似をして獨逸は battle には勝つ可きも War には敗けるに相違ない抔と言つて居た人も少からずある。の雜報かによれば、政友會出身の某省秘書官は原敬氏が獨逸は必ずしも聯合軍に敗けるとは限らぬと云ひしに對し、否獨逸は必ず聯合軍に敗けると豫言したが如何だ。我輩先見の明はエラ

イだらうと云ふ意味の事を公言せられたさうである。此等の人々は今の獨逸の屈辱的求和を見て皆威たけ高になつて先見の明をイクラでも誇り得る權利あるものと自信して居るであらう。之に反し我参謀部其他に於て獨逸は必ずしも敗けざる可しと豫言した人々は、何れも豫言が大外れとなつたものと信じて、坊主にでもなるか、穴あらば潛り込み度くとも思つて居るかも知れぬ。然し乍ら此等の人々は其の結論に進入する以前先づ篤と胸に手を當て丶『勝者は誰か』との問を十分考へたであらうか如何か、獨逸の屈辱的求和は獨逸が聯合軍に敗け聯合軍が獨逸に勝つた爲めであるか否かは吟味することなくして直ちに受取ることは出來ないのである。勝者は果して誰であるか。

（六）

公平な立場から見れば勝つた者は決して聯合軍ではない。成程最近二三ケ月聯合軍は西部戰場に於て若干の成績を收めた。而して獨逸軍は退却した。併し乍ら獨逸が聯合軍に敗けたから退却したものと思ふのは早計速斷である。聯合軍は勝つたから進出したものと計り考へては事實に相違して居る。言を詰めて云へば寧ろ反對が事實である。即ち獨逸が退却したから敗けたのである。獨逸は戰爭を欲せなくなつたから退却したのである。敗けんと欲したから退却したのである。敗けて退却したのではない、聯合軍は獨逸軍が退却した跡へ進出したのである。獨軍が敗けたのが原因、退却は其結果たるよりも退却が原因で敗北は結果である。聯合軍が勝つたのが原因で進出が結果たるよりも聯合軍の進出が原因で勝利は其結果であるのである。否獨逸は敗戰したから講和を求むるのではない、講和を欲するから敗戰したのである。

（七）

獨逸軍が西部戰場より退却す可きことは本年の六七月頃から公平な觀察者には疑ないことであつた。果して獨逸は退却し始めた。而して聯合軍の大勝利なるものは其後に起つたのである。獨軍の退却愈々急なればなるほど聯合軍の勝利は愈々大勝利となつたのである。其勝利は落し物を拾つたやうなものである。然り聯合軍の大勝利とは拾つた勝利である。自分の努力も無論加はつて居るが自分の努力斗りで此勝利を得たものとはフオツシュ元帥始め當事者は決して夢想だもして居らぬこと丶信ずる。若し左樣思ふならば其は甚しき『自己誣妄』Self-illusionである。

即ち此度の大勝利の最大原因は聯合軍の能力には存せぬ。獨逸

軍の退却の決心に存する。

（八）

退却の方針は本年夏に於て看過す可からざるほど顯著となつた。我輩は七月の末に接手した歐米新聞によつて之を知り得た。是れ七月末に於て前述の『自主的平和論』を起草した所以である。即ち我輩は獨逸はモハヤ戰爭を中止す可く衷心より覺悟したものなるを知つた。故に大抵の條件なれば獨逸（幷に墺太利も）は必ず講和の相談に應ずるものなりと思つた。故に此際に於て我日本が自主的に斷乎として講和を主張する『ハイ、タイム』なりと確信した。此論は不幸にして當局者によつて顧みられなかつたのは今に於て我輩の甚だ殘念とする所である。而して當時は外交問題に就て政府が甚神經過敏になつて居るからとの『中外』編輯者の老婆心から我輩の意見の重要なる部分を削除したが、我輩は次の如く考へたのである。我日本は聯合國及獨墺に對して左の如く提議す可きである。

『此度の戰爭は我々聯合國の側に於ては獨逸の軍國主義を滅すことを目的として標榜して居る。然に今や戰爭四年に渉りて決せず敵味方共に人民の慘苦は極度に達して居る。實に人類文明の大悲慘事である。若し獨逸にして其軍國主義を一掃するの誠意さへ明となればもはや此戰爭を繼續するのは無益と思ふ。仍て我々は決して權利として又は要求として之を強請するのではないが、獨逸に於ては先づ軍國主義の代表者と看做さるゝ現カイゼルに忠告して退位を求めることゝし、又た佛白の領土に一の野心なきことを明瞭ならしめる爲めに自發的に佛白より獨逸軍を悉く撤回し、而して此戰爭の爲めに最も大なる犧牲を拂ひたる佛國、而して聯合軍側にありて最も健實勇敢に奮鬪したる佛國に對し獨逸は甚深の敬意を表す可く、佛獨間多年の紛亂の基たるアルサス・ローレンの領土權をあげて之を聯合國に引渡し、其處置に一任することゝして而して以上三項實行の曉に於て隔意なく誠意を披いて講和談判を始めることゝしては如何。

是れ極めて公平なる提案であると思つた。カイゼルの自發的退位はカイゼルをして却て其終を全からしめる所以で彼と雖も暫時カイゼルとして殘るよりも永久に國民感謝の記憶裡に生くる國民的英雄たる方の遙かに勝れるは十分悟るであらうし、佛白よりの撤兵は領土的野心を捨てた獨逸に取りて當然の事であると思つた。アルサス・ローレーンの拋棄は佛獨間永久の平和の大保障である。而して我輩は獨逸の國民は右の提議が威脅的でなく好意的忠告的懇談的態度でなされるなら而して特に其が今

や獨逸が甚大の恐怖と而して尊敬とを表す可く始めたる我日本、從來外交上に於てペテン權謀を弄したることなき日本、物質的利害關係を全く持たず割合に公平なる立場に在る日本の提議に出づる場合には甚大な注意を之に拂ふ可く、若しも獨逸政府が之れに耳を藉さゞるに於ては或はクー・データーを起してまでも日本の提議、日本の好意に應ず可しとの民論が勃興するであらう。少くとも南獨逸に於ては必ず然るであらう。然ればタトヘ右提案が具體的事實とならざる迄も平和の到來を早めるに與つて非常の力ありと確信したのである。從來從屬的地位にのみ立つて居た日本としては其れ丈けの結果を擧げる丈けでも大成效と云はねばならぬ。而して其は軈て世界の正義人道の上に於ける我日本の使命を盡くす可き第一着手であつて、我日本の世界に一國たる所以の決して偶然ならざることの、永久に世界の人民によつて認識せらるゝ所以であり、殊に向後最も親密の關係を保たざる可からざる露國と支那との民心の上に非常に善き影響を與ふることであると確信したのである。

(九)

若しも獨逸にして開戰當時の獨逸であり、獨逸の國民にして依然として舊態を改めざるものならば、右我輩の考へた提案の如きは、無論愚人の晝夢に屬す可きは當然であつて、如何に我輩が書齋裡の一讀書生、講堂の一空論者であるとしても、左樣なる無益な提議を爲すことを日本の當局者に求めるものではない。我輩が確信を以て右の如き提議が相當の效果ある可しと思つたのは、其前提として獨逸の國情が根本的に一變し、殊に獨逸國民の國民心理が徹底的に改造せられたものなるを認めたからである。此認識が一切を解く可き鍵である。

(十)

獨逸帝國なるものは日本帝國とは根本に其成立を異にして居る。普魯西の某學者は主權は分割し得べきもの teilbar なりと主張して聯邦は其主權の一部を分割して之を帝國に委ねたものであると主張して居る。之に對してストラスブルグ大學に永く教授たりし某氏は主權は分配し得可きもの verteilbar にして分割し得可きものにあらずと主張したそうである。(我輩は國法學の事は何も知らぬから或は誤つて居るかも知れぬ先覺學者の是正を待つ)。これは我輩がミュンヘン大學に於てザイデル教授の講義で聞いた處である。而してザイデル先生はバイエルンの學者として聯邦の立場から之に斷案を下して講義して曰く、主權は unteilbar (不分割的)にして unverteilbar (不分配的) である

と。此れだけは我輩僅かに二回迄も親しくザイデル教授の口から聞いた處であるから間違はなからうと思ふ。我輩は國法學上の主權論を紹介する爲めに此事を引用するのではない。獨逸の國情の如何なるものなるかを示さうとするに過ぎぬ。即ち普魯西の學者は普國を本位として立論し、ライヒスランドの學者は統一帝國の立場から立論し、而して聯邦中の國と常に拮抗して居るバイエルンの最大の憲法學者は聯邦を本位として立論して居る。學者の純理論と云ふと雖も斯く其居る所、屬する所に從つて甚だ違つて居るのである。是れが實に獨逸帝國の國情を語るものである。

（十一）

經濟學の上から例を取れば伯林のワグナー、シユモラー兩氏とミユンヘンのブレンタノ先生とは又た行の如く政策上の見解を異にして居る。ワグナーは極端なる保護政策論者である。シユモラーは温和なる保護論者である。ブレンタノ先生は純英國的自由貿易主義の急先鋒である。ワグナーはビスマルクの國家社會主義の學祖であり、シユモラーは官僚的社會政策の大使徒であり、ブレンタノ先生は英國流の民主的社會政策の代表者である。故に英國が獨逸に宣戰するや、伯林の新聞中には『ミユンヘン大學のブレンタノ今何の顏がある』等と惡罵を加へたものがある。ブレンタノ先生は獨逸學界に於て普く極端なる拜英主義學者と看做されて居つたからである。『中歐論』の著者フリードリヒ・ナウマンはブ先生の門弟の一人であつて、開戰迄は熱心にブ先生の説を祖述して居たが、『中歐論』に至つて其立場を捨てたことはナウマン自ら公言する如くであつて、露國のトロツキーも亦たブレンタノ氏の立場に大に重きを置いて論じて居る。即ち同じ獨逸に在つても英國を敵視する著しきは普魯亞であつて、バイエルンの如きはブレンタノ先生の感化なくとも、英國に對して敵意は持つて居らぬ、否寧ろ之を敬慕して居たのである。唯南阿戰爭以來著しく對英の民心に變化を來したことは當時ミユンヘンに居つた我輩の自ら觀た所である。是は獨逸人の正當なる義憤の發露である。

（十二）

一事は萬事である。獨逸帝國は一ケ國の如くにして實は決して一ケ國ではない。殊に南獨逸のバイエルン、ウルテムベルヒ、バーデンは北普國に對して常に隱然敵國の觀を成して居たのである。帝國郵便はバイエルンには及んで居ない。帝國金庫證劵はバイエルンには流通しない。我輩留學の第一年偶カイゼルの

誕生日に會した。我輩は日本人の考からして、タトヘ異邦のカイゼルなりとも、其國の大學に遊び其國に厄介になつて居る以上聊か祝意を表す可しとして、當時同じくミユンヘンにあつた齋田理學博士、上野藥學博士其他の國人と共に、一同久し振りにて日本食を手製して日本酒の盃をあげてカイゼルの健康を祝して樂しき一日を過した。さて翌日大學へ行つて講義を聞くと一同分飛んで居るに面喰ひ、隣席の獨逸學生に質したら、『何カイゼルの誕生日は休日とや、其樣な事は伯林にあることなり。茲ミユンヘン大學に左樣なる馬鹿らしき事はなし。バイエルンにはバイエルンの國王あり。我等は其誕生日は祝するも、カイゼルの誕生日等を祝す可き理由は更になし』との答に、生へ拔きの日本人たる我々は膽をつぶしたのである。宿に歸つて齋田、上野兩博士に其事を話したら、兩博士とも喫驚して居られて、三人でつくづく獨逸の爲めに悲んだのは今より二十餘年の昔の事である。其後二三年彼の有名なレートゲン博士がカイゼルの誕生日に帝國旗を門戶に揭出したとて民衆の怒を買ひ、其結果博士は終にウルツブルヒ大學を去つて我等の母校たるミユンヘン大學へ轉任して來られた事があつたが、其時はモハヤ左程驚き怪しみはしなかつたが、更らに獨逸人の不幸を染々と感ぜずには居られなかつたのである。凡そ此くの如くである。我輩は四年有餘此のミユンヘンに居つたものとして聊か伯林在住の諸同人とは異つた感想を得て歸つて來たものである。是が今日の場合カイゼルに退位の可能を深く感ぜしめた遠因の一である。

(十三)

獨逸は一箇の國ではない澤山の國の合併世帶である。合せ物は離れ物、其解體は我が日本の如く眞正に統一した國の場合の樣に重大事ではない。(記して茲に到り机邊に來れる新聞紙を見ればバイエルンは共和國の宣言を爲したとの電報が載せてあつた)。

然れば獨國の帝國たる其國情の根本的變化は決して我々日本人の考ふる程可能性の同しいものではない。唯だ普佛戰爭以來帝國の結合力は日々增大して來た。其頂點が卽ち千九百十四年の開戰時である。然るに戰爭の四箇年は此の強き結合力を破壞した。而して其は一般政治上の原因もあり軍事上の原因もあるが、根柢に橫る最大の原因は實に獨逸國民心理の徹底的變革である、これは實に意外の事である。我々は獨逸の事は少しく知つて居る積りであつたが、今にして思へば何事をも知らざりしと同樣で、豫言の當否の如き些事ではない。參謀部の人々の戰續判斷の當否の如き小問題ではない。モツトモツト深い重大な

實に驚く可き意外な出來事である。

（十四）

大正三年の暮に東京日々新聞記者某氏拙宅を訪はれて『戰後の文明』と云ふ題にて新年號に一文を寄せよと求められた時、我輩は之に應じて『戰後の文明は著しく社會主義の影響を受くる事となる可し』との意味の一文を草した。（大正四年一月一日東京日日新聞掲載）又た茅原氏の『第三帝國』の求めに應じて戰後は社會主義と基督教との勢力驚く可き程顯著となる可きかと思ふとの意味の講演をしたことがある。併し右の我輩の言は單に漠然たる想像說であつて其内容は空虛なるものであつた。我輩は其後に起つた露國の革命や此度の獨逸革命の如き事の起る可しとは夢にも想つて居つたのではない。言葉の上からのみ見れば我輩の豫言は的中したように見えるけれども、其言を爲した我輩自分の迂濶自分の不明の甚しかつたに實に慚愧に堪へないものである。

（十五）

我輩は加藤子爵が近日攻擊せられた原敬氏の說なるものと全く同樣の考を抱いて居たものである。否、我輩は日獨開戰の數日前高松市の講演に於て日本は參戰す可きに非ずと公言したし、其後も屢々其意味の言をなした。今日に於ても左樣に信じて居る。少くとも我輩は我邦の爲め實に憂慮に堪へなかつたもので、原氏の言其意味は違ふかも知れぬが、言葉だけは全く同感であつたし今も同感である。但し我輩は一回も獨逸勝つ可しと言つたこともなし、又た思つたこともない。此戰爭は結局双方疲れ分けになるの外はないと思つて居た。故に今日の獨逸の屈辱的求和の事實ある以上、坊主になつて足らず、穴に入つて足らざる譯である。併し其れは加藤子爵等に敗けたのではない。先見の明なかりし事に就ては加藤子爵も我々も全く分つ所はないのである。何となれば、獨逸が戰爭に於て聯合軍に敗けたのではないからである。此意味に於ては加藤子爵が聯合軍必ず勝つ可しと信ぜられたは大なる誤で、此點に於ては切腹の責任はまだ解除せられて居らぬ。

（十六）

獨逸は敗けた。慥かに非常な大敗北を爲した。之は疑を容れぬ。乍併それは戰爭の上の敗北では斷じて無い。而して獨逸に勝つたものは斷じて聯合軍ではない。勝者は歴然として外に在るのである。若しも獨逸が戰爭に於て而して聯合軍の爲めに敗られたものならば、加藤子爵始め我邦無數の聯合軍必勝論者は

實に如何に御威張りになつても宜しく、原敬氏（寺内氏、後藤氏、犬養氏等も恐らく）は全く面目なかる可き譯である。然し事實は左樣でない、從て原敬氏の憂慮、我々の憂慮は更らに更らに痛切ならざるを得ぬ事となつたのである。我々は讒言の當否等と云ふ小なる誇りや譏りの傷けられた事等を今問ふて居る暇を持たぬ程形勢は重大となつて來て居るのである。

（十七）

獨逸はbattle に勝つた、慥かに勝つた。これは拜英米論者も否定し得ぬ所である。併し乍ら獨逸は war に大敗した。これは如何なる拜獨論者、恐獨論者も否定し得ぬ所である。然ればタイムス受賣りの我邦の battle war 分別論者は其先見の明を誇り得るか。答へて曰く否、斷じて否。

獨逸の battle は聯合軍との間に戰はれた。獨逸はこれには勝つた。然らば獨逸に對して war を挑んで今や大勝利を占めた相手は聯合軍であるか、否、大に否、勝者は全く外に在る。意外の邊にある。我々の夢想だもせなかつた邊に在る。勝者とは誰の事か。

（十八）

獨逸に對して此の强敵の存することを遼東の書齋に在つて我々が十分に知り得る樣になつたは漸く本年の六七月頃の事であつた。併し英佛米の識者の中には疾くに之を知つて居たものがあるであらう。ランスダウン卿やグレー卿は或は其人ではあるまいか。否々最も早く此消息を看破したはトロツキーであつたかと思ふ。下司の智慧は後から附く。我輩は本年の夏に至つてやつと左樣ではなからうかと思ふに至つたので、其迂愚は實に慚愧に堪へざる所である。トロツキーが瑞西に在る頃著した一小著述は畏友室伏高信氏之を邦譯せられた。我輩は思つた、恐らく翻譯にして文章は經國の大事と云ひ得るは室伏君の此譯の如きを言ふ可きであらうと。然るに室伏君は推敲不十分の故を以て其後其譯書を絕版に附したのみで改訂版を出されないのは實に遺憾此上なき事である。若し改訂版が廣く我邦に行はれ、種々なる戰爭觀を公けにする識者が一度此書を通讀し置かれたならば、我國民の戰爭觀、世界觀は今少しく合理のものとなつて居たであらう。絕版は呉々も殘念な事である。（誤譯は慥かにあつた、併し其れは向軍治君にでも相談せられたなら容易に訂正し得ることであつたらうと思ふ、高畠氏の批評が絕版と云ふ結果を來したことは同氏も亦殘念に思はるゝことゝ信ずる。）

(十九)

兎に角豫言は雙方の側に於て共に全く大外れに外れた。外れた譯である。實に實に意外なる變化が獨逸國民心理の上に起つたのである。然るに此頃に至るまで、獨逸は眞に和を求むるものに非ず、聯合國は獨逸の軍國主義を根絶する迄は戈を收むるものに非ず、故に講和は斷じて成立せず抔との時代錯誤論が、而も最も世界の形勢に通曉せりと言はるゝ先覺者によつて唱へらるゝには實に驚く可き事である。外務省の武者小路氏は獨逸の求和は蒟蒻問答で平和等は容易に求むるものではないと國民新聞に公けにせられた。其翌日の同紙で我輩は其迂なるを指摘した。武者小路氏は今は何と言はるるであらうか、伺いたいものである。殊に吉野博士の如き甚だ卓越せる專門學者すら最近の本誌に於て『和機熟せず』てふ一文を公にせられた。而も其時は獨逸軍はドン〳〵退却を繼續して居る時で、又米國に於ける國民獨逸協會全部の徹底的解散の行はれた後であるに至つては、我輩は Wish is Father of Thought なる西諺の如何にも當れるを覺へざるを得ざりしものである。

(二十)

此度の戰爭は政治家、外交家、軍人等が之を始めた。而も間もなく敵味方共國民は一人の如く蹶起して政治家輩を back した。然るに今や戰爭の發頭人たる政治家や外交家や軍人はドシドシ落伍して仕舞つた。(『ステーチスト』曰く聯合側には將帥としてフオツシユ一人あるのみ、其他には一人の天才的將帥なし、一人の天才的政治家なし、一人の天才的財政家なしと)ステーチストの所謂 Balfours, Asquiths etc は恐く世界の表に於て落第して仕舞つた。ロイド・ヂョーヂも半以上落第した。恐らく最後の落第者はウヰルソンとなるであらう。我大隈侯も我加藤子も未だ試驗の始まらぬ内に落第して仕舞ふと云ふ珍事が起つた。然るに不相替ウヰルソンがエライのロイド・ヂョーヂがエライのと過去の夢を見て居るのは愚の至極である。中央公論の高野氏先頃予を訪れて曰く『ウヰルソン勝ちカイゼル仆る』と言ふ意味の論文を書けと、予答へて曰く、問題の所在今や全く外に在り、中央公論に左樣なる時代後れの文を載す可からずと。ウヰルソン、カイゼル輩の勝負の如きは今は我々の最早や心を用ゆるを要せざる所である。百のウヰルソンあるも平和は來らず、千のカイゼルあるも戰爭は繼續せさるのである。

(二十一)

獨逸國民の心理的變化の今最も顯然たるは彼等は Kaisers, Ludendorffs, Hindenburgs, Maximilians を凡て一束にからげて之を別所に置き、彼等自分赤裸々に心と心、身體と身體とを聯合國の國民と接觸せんことを切望すること其れである。此頃屢々外國の其名に見ゆる Münchner neueste nachrichten（バイエルンで發刊の最多數發行の日刊新聞）の如きは最も卒直に此痛切なる心事を訴へつゝあるものである。獨逸の國民はカイゼル、ヒンデルブルヒの輩に國の大事を托して今日に及べるも、今日は既に然らず、彼等は彼等の僞らず欺かざるの赤心を披いて之を直ちに聯合國の國民の腹中に置かんことを求むること痛切なるのである。彼等の求むる所實に此なり、此を妨ぐるものはカイゼルたるとヒンデンブルグたると誰人たることを問はず恐く之を滅ぼさずんば已まさらんとしつゝあるのである。

而して先づ最も訴へんとする相手は米國の國民である、而して次には恐らく日本國民であらう。何となれば今獨逸國民の最も恐るゝ所は實に米國と日本との二ケ國あるのみである。

（二十二）

彼等は謂らく此戰爭を已むるも續くるも今や其決定の鍵を握れるものは實に米國と日本とである。故に我等は先づ僞らず飾らざる我が心を開いて米國民と日本國民とに訴へて戰爭の停止を願はんと。我輩は堅く爾か信じて居るものである。マックスがウヰルソン大統領に先づ縋りたるは實に此國民の輿望を實現したものと思ふ。決して術策でも權變でもないと信ずる。余は思ふ、ウヰルソンの態度にして煮へ切らざるときは、獨逸は次には我邦に泣訴し來ることとなしとも限らぬ、我邦は果して其準備ありや否や。（斯く云ふと事大的排外論者は我輩を目して誇大日本人思想に囚はれたりと云ふであらうが）

（二十三）

獨逸國民は今や Peace at any price（如何なる高價を拂つても平和）と望んで居ることは斷じて疑を容れぬ。故に聯合國にして要求する所過大なりとも、彼等は、（政治家や軍人の謂に非ず、國民の謂也）必ず之に應ず可きと思ふ。其態度は革命露國と全く異ならぬ。從つて第二のブレスト・リトフスク條約否其以上のものと雖も彼等は應ずる覺悟なりと信ずる。唯だ獨逸の政治家や軍人が之を妨ぐるかも知れぬ。其時こそ眞に具體的革命の爆發する時である。

（二十四）

獨逸國民は何れも小學校に於て三十年戰爭の後の獨逸の慘狀の如何なるものとなりしやを熟知して居る。此智識は彼等をして今に方つて Peace at any price を要求せしむる所以である。我々日本人は左樣なる經驗は一も持たぬ幸福なる國民である。(足利時代は別であるが、其れは餘りに遠いことである。我々の内に其經驗は活きて居らぬ)故に我等は三十年役に懲りて居る獨逸人が peace at any price を求むる心情を十分に理解し能はぬのである。獨逸は誠心和を求むるものに非ず杯と稱する我邦論者は、先づ節を屈して萬國史を繙いて三十年役の部分を熟讀熟考す可きである。然ればカイゼル退位の如きは今日の獨逸に取りて殆んど些事たる事が十分に會得出來るであらう。

(二十五)

さればとて聯合國が圖に乘りて勝利は自己の努力にて得たるものゝ如く自ら欺いて過酷の條件を強ゆるときは或は不測の大事變が突發せぬとも限らぬし、(其何たるかは分らぬ)此點に於ては本月六日の『國民新聞』に揭げある原首相の意見なるものには我輩は滿腔の同感を表するを禁じ能はぬものである。少くとも原首相の見地は加藤子の其れより數段の高處大處に在ることは疑を容れぬ。而して露國出兵反對の爲めに大使の職を抛ちたりと傳へらる内田氏が今我日本の外相たることは、我輩は我日本のために慶祝せざるを得ぬ處である。願くは原首相の意見なるものに誤傳あらざれ、願くは内田氏の露國ボルシエヴヰキに對する意見なりと稱するものに誤傳あらざれ。而して兩氏は其意見を獨り我々同胞に教ゆるに止まらず、之を有力有效に聯合諸國に提示せよ。是れペテンと策略とを不得手とする我日本の外交をして其特色を發揮せしむる最善の方法である。

(二十六)

勝つ者は誰ぞ、否、既に勝ちたるものは誰ぞ、フオシユ元帥か、答へて曰否、ロイド・ヂヨーヂか、斷じて否、ウヰルソンか、大いに否。然らば誰か。答へて曰く獨逸革命 Deutsche Revolution 是なり。獨逸革命、我輩は嘗て之を名けて月賦濟し崩しの革命と云へり。蓋し濟し崩し的なること之れ獨逸の革命たる所以なればなり。英國人は光輝ある革命 Glorious Revolution を有し、佛人は大革命 la grande Revolution (又は佛蘭西革命 la revolution Française とも云ふ)を有す。獨り獨逸人は今日迄何等の革命を有せざりき。獨逸人は Revolt (一揆)は屢々之を有せり。而も革命は一も之を有せざりしなり。今次の大戰を經て、始めて獨逸の革命在り。千八百四十八年のも予は之を革命とは

思はず、マルクスは當時『今や獨逸は革命の前宵に立てり』と云ひたれども、其の豫言は外れた。併し乍ら更らに深き意味に於て彼の豫言は七十年後の今日に實現せられんてとしつゝあるのである。是れ我輩が原敬首相の言葉を模して憂慮に堪へずと云ふ所以である。加藤子爵は斯くても猶ほ憂慮無用論を繰返さんとするや。

(二十七)

獨逸革命は二回に起つた。第一回はレオン・トロツキー之を露國に於て行つた。第二回は今正さに獨逸の領土の上に於て現に行はれつゝあるのである。斯く云へば汝は地理を知らずと難ずる人あらん。非ず、ボルシエヴヰキの革命は露西亞の革命たると同時に實は獨逸の革命(eine Deutsche Revolution)であつたのである。唯行はれた國が露國で、行つた人が露國人であつたのみである。乍去革命の根源は全く獨逸にある。獨逸の思想が露國に輸入せられて革命とまで加工せられたのである。其原料は否其加工要具までも悉く露國固有のものは一も無い、皆獨逸からの舶來品である。(露國固有のものはバクーニン、クロパトキンである。其れは革命に直接に何の關係もない。而して彼等すら實は獨逸品の燒増しである。)而して此革命は一の小產物的革命を生んだ。其れはチエツホ、スロヴアクの獨立運動である。レエンもトロツキーも否プレヒアノフもチエツヒの首領たるマサリク教授と均しく何れも獨逸革命の實行者である。彼等は何れも同一の源流から其思想を汲み來つたものである。而して今現に行はれつゝある第二の大革命も粗ぼ其源流を同じくして居るのである。我輩が憂慮に堪へぬとし、我邦識者の空想的世界觀の排擊に苦心する所以は實に此一點に存するのである。チエツヒ援助の日本出兵に斷然反對する所以も茲に在るのである。

(二十八)

獨逸に現に起つて居る革命は露國の其れの如く現然目の前に突發したものでなく濟し崩し的のものであるから我々は實に本年の夏迄殆んど之を知らなかつたのである。實に意外千萬であつたのである。恐らくリープクネヒトと雖も少くとも開戰當時に於ては斯くまでとは豫想して居らなかつた事と思ふ。戰爭の四年間月賦的にボツ〳〵と變化し來りつゝあつた獨逸國民心理の大變化は徐々に進行して來た。併し四年間の月賦を總勘定して見ると其金額は實に莫大なものとなつて居たことを我輩如き愚人は少しも知らなかつたのである。無論變化は豫期して居

た、故に憂慮した。然し事實は憂慮に十倍百倍して居たのである。此點に於ては嘗て我輩の論を評して、今近く突然として社會主義國家が出來たら福田の論は悉く無用に歸すると言はれた堺利彦氏に對して、坊主になつて不明を謝しても猶且つ足らぬ次第である。

（二十九）

獨逸の國民性は『中外』の拙文に於て指摘して置いた通り容易に移らないものであつた。其れが何時迄も變らないものと思つて居たは我々の迂濶であつた。今や獨逸の國民性は實に驚く可き大變化を遂げた。否此變化を獨り獨逸のみに止めざらんとするのである。（米國は第三の舞臺たるかも知れぬと信ずる）軍國主義の侵略はもはや問題とならぬ。今や之に代るに革命の侵略が始まらんとしつゝあるのである。其責任者は無論獨逸の政治家や軍人が第一に之を負ふ可きであるが、獨逸國民を驅つて斯くならしめた聯合國にも責はある。故に『中外』の論文に於て我輩は次の如く云つて置いた。『他方から考へて見ると、今度の戰爭は、此の獨逸の非大國的性格を著しく强めたかも知れない。世界の國と云ふ國は寄つてたかつて獨逸を叩き潰さうとして居る。斯る境遇に置かれゝば、餘程寬仁大度の性格を持つ國民でも、自棄に陷るを免れない。四面皆敵である。人を見たら敵と思へ。カイゼルと其の政府が斯う考へるのは仕方が無いとして、若し獨逸六千萬の國民に此の念を强からしめたならば、是れ眞に獨逸國民の墮落である。若し斯くの如くなれば、今度の戰爭は誠に人類の爲めに不幸な戰爭と言はなければならぬ。世界の文明人中から六千萬人丈けを畜生道へ追込んだことになるのは人類全體の大損失である。（略）カイゼルを廢し、或は獨逸帝國を滅ぼして、其の國民的性格が著しく改良するならば結構であるが、反對に、獨逸六千萬の國民が、斯くの如く墮落するならは、心の底から文明の進歩を冀ふものに取つては、此度の戰爭は人類の大々的損失と斷じなければならぬと思ふ』と。

（三十）

若し我輩の見解にして大過なしとせば、獨逸六千萬の國民を此危險より救ひ世界文明の前途に横はる此の大難關を免れる爲めには、唯一つの道しか存せぬ。其は外でない。聯合國が獨逸國民の忍辱的求和に對して圖に乘つて過酷慘忍なる條件を課することなく、敵を待つに fairness を以てすること此れである。カイゼルを退け、兵を國境の內に收め、或はアルサス・ローレーン或は海外殖民地を拋棄させても、猶ほ飽くことを知らず、更

らに過大の條件を強ひ、而して殊に所謂經濟戰なるものを戰後に開始して更らに更らに獨逸國民をイジメ拔くが如きは、獨逸六千萬の國民を驅つて世界に危險思想を傳播す可き毒菌となす所以である。是れ實に憂慮と云ふも到底及ばざる所である。之に反し敵に課するに相當公明なる條件を以てし、軍國主義と其代表者とは飽迄之を斥くるも赤裸々に其誠衷を披き來る獨逸國民に對しては、文明的武士道のfairnessと、justice と humanity とを以てして、彼等をして謝恩の念を起さしめば、希くは獨逸國民の墮落を防ぎ而して世界文明を脅さんとする大危險を免ることを得るであらう。

(三十一)

然り而して此點に關しては、我日本は實に有力、有效なる發言を爲す可き義務あり又た權利ありと確信する。『國民新聞』傳ふる所原首相の言なるものにして大過なくんば、氏も亦粗ぼ卑見と同感なるが如くである。是れ實に日本の爲め世界の爲め慶祝に堪へざる所である。原内閣にして百の失政あり千の過誤ありとするも此一事に就て過去の政府の無爲の罪を贖ひ、我日本をして自主的に指導的に、世界平和の爲めに有效なる努力を爲すことを得せしめば、我等は最も熱心なる原内閣の謳歌者たる

を憚らざることを斷言するものである。何となれば、是れ實に我日本をして最も高き、聖き意味に於ける最後の勝者たらしむる所以であると我輩は確信するからである。

（七、十一、十一、夜認む）

史小說

▼第一集 ━ 第十九版

繪本三國妖婦傳

松浦佐用媛石魂錄

▼第二集 ━ 第十七版

道成寺鐘魔記、お六櫛木曾仇討

久米平内剛力物語、着替浴衣團七縞

高尾丸劍稻妻、女船頭矢口渡場

復讐奇談ふた子山、驛路鈴與作春駒

誂染劇模樣、

▼第三集 ━ 第十二版

松風村雨物語、繪本在原草紙

淨瑠璃姬物語

▼第四集 ━ 第八版

復讐奇談小夜中山、入船倭取揖

關東小六昔舞臺、聞道女自來也

蚺蛇お長鵬双紙、皿屋敷物語

重扇五十三驛、柳糸花組交

鷺娘の來由、

▼第五集 ━ 五版

總猨僣語

優曇華物語

この次に出るのは

8 僞紫田舍源氏（後）

飛驒匠物語

9 閑情末摘花

月氷奇談

10 笠松峠鬼神敵討

小幡怪異雨古沼

明烏後正夢



國民座第六回公演

（十二月廿五、廿六兩日）

谷崎潤一郎氏作（中央公論所載）
十五夜物語 二幕

大村嘉代子氏作
神崎乃宿 一幕

長田秀雄氏作
喜劇 **姙婦授産所** 一幕

舞臺監督 久米正雄
補助 額田六福
理事 重技逸夫
經營顧問、後藤香峽
幹事 西崎富三

主催 花田偉子

出演俳優

田村芝川
三好今太郎
藤田新
花柳信夫
田澤五郎
大川昇之助
栗島すみ子
前田筆子
前田鈴子
白川照子
花田鶴子
花田偉子
外男女俳數十名

於丸ノ内
有樂座
電本（五二二壹／五貳貳貳）

島崎藤村氏著

新生　第一卷

「新生」第一卷まさに讀書界に上らんとす

藤村氏止み難き人生の悩みを抱き、生活革新の意圖を以て、長き棲遲たる新片町の寓居を捨て、遠く巴里流寓の旅途に上られた。而かも、偶々歐洲戰亂の勃發に會し、身親しく戰禍の間にあつて、思想の變轉、生活の混亂を見且つ味つた。實に「新生」一卷は世界的の動亂を背景にして偉大なる魂の悩みを血を以て描いたところにある。江湖の熟讀を待つ以所である。

十二月二十日出來　近刊

櫻の實の熟する時

たとへばみづ〳〵しく萌え出づる新芽の如き少年期より、やがて、青年期に至る迄を描いたのが、この作品である。天眞と清純、華麗と憂欝を併せ有し、而かも雨を凌ぎ、風を避けつゝ、歩一歩複雜なる人生の渦卷に進み入る若き生の波瀾に富める姿は正に藝術の好題目である。藤村氏この稿の完成を見るに至る迄殆んど數年の歲月を費す。或は砲聲響く巴里の客舍に、或はまた佛國中部の片田舍なるリモオジユの旅に。その藝術的香氣の芳烈なる、描かれる人物の潑溂として生けるが如き、眞にこれ「櫻の實の熟する時」の輝かなる日光と、すべての生命の伸び行く生々の氣の中より生れ出でたる如き光輝ある藝術たるを失はない。若き人々にとつて共鳴深かるべきは勿論、既に青年期を過ぎたる人々と雖も興趣措く能はざるものがあらう。而かも、其の主人公を「新生」の主人公が若き時代にとれるを以て、この二著は併讀されべきものである。

十二月二十日出來　近刊

東京日本橋通一丁目　振替一六一七　春陽堂　電話本局五壹　全國書店販賣



お伽噺の春信

野口米次郎

明和年間を西暦に直すと千七百六十四年から千七百七十一年に至るまでゞ、英國ではジョンソン博士やゴールドスミスが酒臭い呼吸を吹きちらしてストランドの道徳を亂して居た眞最中そして日本の江戸ではいつも若々しい官能の血で動いて居た都人士が、殊勝な參詣にこと寄せて谷中笠森稲荷前の水茶屋鍵屋の美人お仙をかいま見にせつせと出掛けて居た。思つて見るとこの十八世紀の後半期の空氣は如何にも自由豁達、如何にも艶麗多情である。僕もこの時代に產れて當時名代の色若衆になりたかつた。僕はこの時代に產れて鍵屋お仙をいろ〳〵な態度から描い、てその美を今日の廣い世界に傳へた畫家鈴木春信になりたかつた。今僕がこの文を書かうとして居ると、短い晩秋の日は早やかぎり掛つて、淸澄した空氣は遠方から晩鐘の寂しい響を運び、沒した太陽は低い空に太く眞赤な夕照の線を曳いて居る。この夕照の反射を受けて黄色の小な顔が光つて見へた近所の娘三四人が僕の家のまわりで鞠を突いて居る。『向ふ横町の御稲荷さんへ一錢あげて、ざつと拜むでお仙の茶屋へ、腰を掛けたら……』百幾十年以上も過ぎた今日まで鞠歌に殘つて居る美人お仙！そのお仙を描いた春信！それに無邪氣な今日大正の娘子供！この三つが巴のやうに僕の思想のうちで不思議に絡み合ひ又絡み合つて、僕を目出度い御伽噺の王國へ引込んで仕舞つた。

諸君は鍵屋お仙を描いた一筆齋文調（藝術家として春信より後輩である）のものと春信の描いたものとを比較して眺めたこ

とがあるか。又諸君は風俗繪卷圖畫刊行會から出した江戸風俗浮世繪大鑑の中の部に翻刻してある前記兩畫家の『お仙』でも見たことがあるか。この浮世繪大鑑の編輯者は此等兩畫家の異つた特技を『一は專ら雅馴秀麗の情調をつくり一は簡素古撲の風趣を存す』と評語して、春信のお仙を『海棠の雨に妖艶なる姿』と見て文調のそれを『梨花の月に瀟洒たるもの』として居る。文調の緊結した藝術家遊味は見るものに多少息苦しい感じを與へる。現にお仙の繪にしても人間の重荷を知らぬ夢の國の住者の姿で無く、此處には人類の複雜性が纏綿して居る。不自然な彼の藝術的態度は描寫する人物に屡々人間味を與へずに藝術の抽象的雅びやかさを表白させやうとする。一言で以て蔽ふと、文調の藝術の優雅は幾何學的である。それに引替へて鈴木春信のお仙(前記浮世繪大鑑中の)を見ると、第一この繪に一層濃艶な情調を漂はさせて居る點はお仙に配するに一人の色若衆を以てして居る。この若衆の名前は書いてないがお仙が手に持つて居る團扇の紋章から推して瀬川菊之丞であることが知れる。殊に菊之丞は王子稻荷の靈夢を蒙りて產れた美男子だと傳へられて居るから、笠森稻荷のお仙と相對せしめた春信の意匠決して凡なるもので無いと云はねばならぬ。背景に稻荷の赤い鳥居の足が一寸ばかり見へてそれに茶釜やお茶の道具、緣臺に身體を斜に構へて座つたお仙は顏を、花車な手に煙管を持つて立つて居る菊之丞に向けて居る。書いたものを讀むと寬保年代までは江戸に水茶屋といふものは僅かに淺草觀音地內、神田明神、芝神明、愛宕山又兩國邊にあつたゞけで、それすらも一二脚の床几を据えて古茶釜から澁茶をくんで出したゞけであつたそうな。然るにその後間も無く人目を驚かす程磨きたてた唐銅の茶釜を据へた茶屋が芝切通に出來てから、延享年代に成ると處々に風流な茶屋が設けられて一般に流行し始めたといふことである。寬政寶曆と經て明和時代に非常な評判を取つたのは前記笠森稻荷前の鍵屋であるのはいふまでも無い。ある獨逸の浮世繪研究家はお仙と春信との個人的關係を面白く織出そうとしたが、勿論それに對する確實なる資料があるので無い。然し彼等兩人間に愛戀が成立して居たにしても決して春信を傷つけるもので無い。僕は前記お仙の繪の外、二三枚の『お仙』を見て居る。いづれも彼の晩年(西暦千七百七十年で卽ち明和七年六月十五日に享年四十六で死んで居る)の製作にかかつた技工上に於ける彼の圓熟期に屬して居て、あるものは繪の主要部と背景との間に明瞭な區劃を置くため『キメコミ』の摺方が施されて居る。數の少くない彼の諸傑作に比較すると、此等の『お仙』は決して卓越したもので無いが、また繪に描かれた主人公自身よりは畫家たる春

信が抱いて居た青春の夢を具體化した理想畫たる點に於ては一つであつて春信の名を恥づかしめるものでも無い。幾何學的に優美な文調のお仙に對して、春信のお仙は何處までも柔軟豐麗な曲線美である。

『單音の線、さうしてあらゆる幻を閉ぢこめた
限りない調和の線、綜合の線、夢の線、
女は心のまゝの情思と淫蕩を
何のこだわりもない世界に投げ出して
その白い肉體を戀びとによせかける、
夢の線、美しい形態(かたち)を創り出す線、
さうして、そとでは五月の宵の靜かな雨が
あらゆる人情の甘さを知らすやうに
薄青い戀の世界にふりかゝる。』

(川路柳虹)

今日の僕等は春信の藝術(西洋では彼を"The great virtuoso of colour."と嘆美して居る)のうち、原始時代の無垢と最高文明が匂はせる精緻とを打つて一丸とした女性の稀れな情調の聲を耳に聽くのを喜ぶ。彼の藝術の世界は夢路を辿つて初めて踏入ることが出來、彼の描いた美人はボチセリの美人のやうに優美な空間にのみ浮動して居る。個性を決して主張しやうとせぬ彼の美人は『日本の女』といふ一般的なゴストと融合合體して、『何處にも無い(ノーフエーア)ところから來た可麗な胡蝶』と現じて居る。彼の藝術は幻想の輕るやかな羽翼で飛んで居る、――忽ちにして過去つて仕舞ふ瞬間の美はしい情調の記錄、人生や個性の制限を遙かに超絶した the gesticulation of Eternity itself――生命の悲哀に近い歡喜の聲に外ならぬ。更に云ひ替へると彼の藝術はあゝそうだ!永久に老いて永久に若いお伽噺である。嗚呼『お伽噺の鈴木春信!』僕にこの八字を日々三度呼ぶ權利を與へよ。僕は君にあやかつて以前に見捨てゝその歸路さへ忘れたお伽噺の王國に再び入りたい。

お伽噺の王國を蔽ふ空には東西南北が無い。黃金色の大な圓い太陽と月は同時に輝いて、期節はとこしなへに春。何處からとも無く吹いて來る微風は澤山の草花を微笑せしめるに足り、この王國の住民は自らの年齡を知らずその語る所の言葉は鳥もまた了解するのである。嗚呼この若々しく、又幾萬年と老いたお伽噺の國よ!この王國の女の着る着物は世にも珍らしい葡萄酒一滴落した曙の泉水で染められて居る。そして此等の女は僕の友人ツキケの句を借りていふと、

『平和は彼女を妙へな深さで包み、
彼女の內氣な眼は地上を放れない、
靜かなこの庭の隱れ路を
彼女は銀の足で蓮步を進める——
その恍惚たる姿は、何處を彼女が彷徨ふとても
有ゆる日を聖淨な日と變ぜしめる。』

如何なる春信の繪にもこのお伽噺の情調——天國と地上を詩の柔かな紐で結んだ情調——が流れて居るが、特に『丑の時參り』の中判繪（縱九寸四分橫七寸のこの種の判畫を彼は澤山描いて居る）を見給へ。題材からいふと見ぬ人或は嫉妬の焰に燃えた深刻沈痛な作品と想像するかも知れないが、實際では圓い輪廓の顏のうい〳〵しい少女がお伽噺の丑の時參り以上で無い。作者春信は陰鬱凄慘な人生の半面を全然嫌つて、何んな場合でも靜肅平和な詩的情調の境地を開拓した藝術家である。彼は無邪氣なお伽噺の作家である。又此處に同じ中判物の降積む雪中を步むでも無ければ又步まないでも無い若い男女の『雪中相合傘』の一枚がある。着衣の色の白と黑の對照で根本的藝術效果を完全に表現し盡した名品である。この種の春信物は色々な形式で顯はれて居るところを見ると、彼の雪中で黑と白とを大膽に對照させる手法の試みは一方ならぬ世間の好評を博したものに相違あるまい。今日でも僅かな金で此種の作品の複製は自由に貰ふことが出來る。僕が殊に諸君の注意を曳きたいのは橋口五葉氏編纂の『やまと錦繪』春信の部に納めてある『雪中相合傘』である。見給へ、この男女の胸に燃える青春の血汐は霏々たる大雪さへ溫く見へさせるではないか。密々語る彼等の談話は果して何？恐らく地上の愛戀であるまい。聞け彼等の聲を。それは庭の薔薇が今は失つて仕舞つて居る所の言語の外で無い。僕はずつとの以前にこの繪に於ける情調をこうゆう言葉で歌つたことがある。

『女は薔薇が失つた聲でさゝやく、
「私の愛人よ。」
男は海も發することが出來ぬ聲で、
「さなり、懷しきものよ」といふ。
女は天鵞絨（ヴェルヴェト）の足した月光の聲でさゝやく、
「私の愛人よ。」
男は山がその胸に潛める聲で、
「さなり、懷しきものよ」といふ。』

僕をして再び『お伽噺の鈴木春信よ』と呼ばしめよ。彼の描く男女の愛戀は殘忍な有爲轉變を知らぬお伽噺中の愛戀である。更に又『風流六歌仙』の一枚、上部に業平の『月やあらぬ春やむかしのはるならね』の言葉が入つて居て、少女が窓の棧に頰杖つき乍ら月下の梅花を眺めて居る繪を見給へ。これまたお伽噺中のお姫樣の輕るやかな憂愁を見るものにやんはりと迫るに止つて居る。人生の悲痛を感せずに詩が高潮して悲哀の境地に入り現實を離れた情調に誘はれるのみである。更に又吹きすさむ風に逆つて、雨傘片手に、してまた他方の手で亂れる着物の前を抑へ乍ら路を急ぐ少女の中判物を見給へ。繪の左の端にさんざん風に惱んで居る柳の樹一本がある。春信の少女お前は獨りで何處へ行くのか？灰色の心と冷やゝかな眼でお前を嘲弄し又無益に動搖せしめる我々四十代の男はお前の後を追ふ權利はあるまい。僕はそのことを能く承知して居る。重ねて質問するがお前は何所へ急ぐのか、僕に聞かして與れ！お前は無言で返答をせぬ。僕は勿論お前の態度を恨むもので無い。お前はきつと語れば其邊に秘密の破壞があつて、お前の樂園は亡びると思つて居るだらう——それは實際かも知れぬ、僕はお前の急ぐ所を推量することが出來ると思ふ。お前の目差す方角をあてゝ見やうか。お伽噺中の戀人さして急ぐのではあるまいか。お前の口は憎い程無言だが、お前の心はお前の口ほど無慈悲でないのを僕は感謝するものである。

更に〳〵寂蓮法師の『淋しさはそのいろとしもなかりけり』云々の歌が摺込まれた一枚——一人の女は頰杖つき乍ら草双紙に讀みふけり、他の一人は長い煙管片手に外の海の波を見入つて居る繪を見給へ。ある西洋人は光琳の奇怪な屛風の波に驚嘆して居るが、この春信の繪の海はまた何んたる靜けさ又柔かさ！諸君にして愛戀の人であるならば、その上を歩いても必と諸君の袖は濡れぬであらう。また何處にお伽噺中の海で人を溺らす危險な海があるであらうか。そんな殘忍な海は無い。この繪の二人の女はある蓬萊宮の住者でなくて何んであらうぞ。所謂時間や空間といふ現實は彼等に接近することは出來まい。此處にお伽噺の永遠無終が漂つて居る。此處にお伽噺の輕るやかな悲哀と歡喜の情が入りみだれて居る。而して又春信が伊勢物語の一エピソードを挿繪的に描いた一枚で、萠みだした春の柳の下に四角に組んだ井戸框、それに凭かゝつて地中に輝く水鏡に愛戀い若々しい顏を映す男女二人の繪を見ると、誰れでも『お伽噺の春信』の感は益々深いであらう。こうゆう永劫に純白な初心な情調を畫筆に傳へた作家の心理狀態は天下に比類無いもの

と云はねばならぬ。英詩界にその比較を求めたならば、それはヘリックより外にない。ヘリックでも春信の情調程の單純性と藝術的のNaïvetéを持つて居無かつた。何うして英國人が其點で日本人に卓越することが出來るものか。

どの浮世繪師の作品でも、今日の賞讃を集め得たものは概してその初期時代に屬して居る。假令其處に技工上の不備と躊躇が目立つて見へても、また其處に是等を充分に補つて餘りある位な藝術的衝動と熱烈な正直さがある。あゝこの衝動と正直――如何なる老熟の技工でもそれに取つて替はるだけの價値を持つまい。鈴木春信の製作時代(嚴格な意味に於て)が明和二年即ち千七百六十五年に初まつたものとすると、彼は明和七年に已に死んで居るからその製作年限は僅々五年に過ぎぬ。それにしも彼の名作はその五年間の最初の間に製作されて居るやうであてる。そういつたからとて僕は彼の高潮時代を明和五年に置く説に對して異議を挾むもので無い。要は、藝術上に於ける技工の圓熟は知らず〳〵の間に情調を煩雜ならしめ又構圖上の諧調を破壞するに至る危險があると思ふのである。又實際晩年の作品を初期時代のそれに比較すると詩的情調の點で同日の談でないことが容易に知れる。前記『丑の時参り』は明和二年頃の製作で、一見西川祐信の影響を受けて居ることを知るけれども(彼の研鑽時代であるから祐信の影響を受けたからとて何の差支があらうぞ)僕はこの繪の鼠、紅、綠及紫等の愉快な配置、殊に背景として太く流れる河一筋とその前に起てる松の樹と代赭色に塗つた鳥居の柱を大膽に描いた彼の構圖法を喜ぶのである。流れる河水を取扱つた名品に『調布玉川』の一枚がある。これも矢張り彼の初期時代の作に懸つて居る。玉川の清流に布を晒して居る年若い女――女が兩手に持つた波の形に大くうねつた布と波との統一的調和の上に一分も藝術的破綻が無い、缺點が無い。又紅、紫、藍等の巧妙な配列は優美な詩趣を誘ふに充分である。重ねていふがこうゆう單純な清く澄んだ情調は、彼がまだ錦繪師としてその技工を完璧ならしめるに至らない初期時代の製作に見ることが出來るのである。彼はその纖細微妙の手法の秘密を支那明時代の畫家仇英等の畫風のなかゝら發見したと云はれて居る。橋口五葉氏は氏の春信研究のなかに『寶曆より明和に至る時代には宋紫石等が支那に於ける明清の畫風を鼓吹し、仇英等の畫系に屬する畫が、其の頃には既に江戸にもあつた事と思はれる。又芥子園畫傳の如き康熙十八年(我が延寶七年)に刊行されたる支那の木版色摺畫が、其の最初日本に輸入された時代は明かで無いけれども、此の時代では江戸にも既に多く輸入されて居る樣である(初版ばかりではない)春信は支那

の木版色摺畫を研究し、又支那の風俗畫をも研究せりと思はる。而して彼れの如き天才ある畫家の頭腦には、かゝる外國の參考品が直ちに其研究の補助となり支那にては發達し得なかつた木版色摺畫を彼れは藝術價値の大なる獨立したる藝術品として日本で發達せしめたのである。』前記『風雨に吹かれて歩く女』の繪の如きは、確に支那の美人畫の影響を受けたものと見ることが出來る。

春信は『繪本金襴』三冊（寶暦十二年版）『諸藝錦』三冊（寶暦十三年版）、『繪本花かつら』三冊（明和元年版）、『繪本ことわざ草』三冊（明和二年版）、『繪本さゞれ石』三冊（明和三年版）、『繪本千代の松』三冊（明和四年版）、『童のまと』三冊（明和四年版）、『繪本八千代草』三冊（明和五年版）、『春の友』三冊（明和五年版）、『飴賣土平傳』（紬雑山人著春信挿畫）（明和六年版）、『繪本青樓美人合』五冊（明和七年版）、其他閨中の秘事を描いたものなどで所謂繪本の畫家として動かない名聲を持つて居るけれども、勿論彼が公にした數多い錦繪（或は三百點以上になるかも知れない——儂自身が見た春信の繪の數は極めて少數ではあるが）に畫家として彼の最大名譽は懸つて居ることはいふまでも無い。彼は日本に於ける彩色摺版畫の創造者である。否な嚴格なる意味に於て、創造者であるか無いかを研究する資料が無いが、彼が錦繪創始に干與してその完成上に最も大な貢獻をなした大畫家であるといふことに於ては誰も否定することが出來ぬ。明和二年に彼は愈々紅繪の製作を廢して錦繪畫家の生活に入つたのであるから、今日その年を以て錦繪創始の年と一般に定められて居る。それは少くも春信を尊重する所以と見ることが出來る。

彼以前には一般に三色の紅繪が行はれて居たけれども、今彼はポリクローム（多色版）の不思議な妖術で精細な情調を自由になみ〳〵と豊富に人へ傳へることが出來たのである。彼の諸作を見ると中には僅か四五色の繪もあるが、明和二年代の柱暦の繪には少くも彼は八色を用ゐて居る。同じ繪でも或るものは八色しか使つて居らないに又他のものには十色も十三色も使つて居る。此點などは彼の研究慾を滿たそうとした努力の證據とも見ることが出來るのである。春信の彩色摺木版畫を以前の版畫とに比較するとゲターとバイヲリンの相違のみで無い。如何に彼の『東錦繪』が他の版畫師の製作品を一般の市場から驅逐して、彼獨り浮世繪の大家と持囃されたかは決して想像するに難からない。前いつたやうに彼の實際に於ての製作年限は僅々五六年間に過ぎないのに、その製作品の量を見ると如何に彼の製作慾が高く又それに適應するに充分なる勢力の所有者であつたかを驚かざるを得無い。彼の聲價は自然に彼にその品格と威

を保たしめて、彼自ら『大和繪師』を以て任ずるに至つた。彼は筆を芝居繪に使はず、『何ぞ河原もの〻形を畫くにたへんや』（增補浮世繪類考に依る）と噺いたとあるが、それは彼の晩年のことで寶曆時代には細繪判の紅繪に時の名優連を描いて、皆な鈴木春信と落款して居る。彼が明和年代の繪の題材は上下貴賤の婦人風俗で、或は雪見花見の屋外の光景或は化粧讀書遊戲の室內の模様、或は『仁義禮智信』とか『風流江戸八景』とかいふ名目のもとで婚禮の圖や家庭訓話の一組を製作して居る。彼は青春の愛戀を取扱つても決してそれに賤劣濃厚の現實味を加へず、何處までも艶麗な詩情を失はなかつた。彼は多少讀書の人であつたに相違ないと思はれる所以は、彼は屢々繪の上に書きいれた歌が如何にもその繪とぴつたり合體して情調を高めて居るのを見ても知れる。

北齋を除くと近代に屬する浮世繪師いづれの傳記でも明瞭に知ることが出來ないのであるから、如何に春信がその生存時代に有名であつたにせよ、その詳細な傳記が傳はつて居らぬのは別に不思議で無い。浮世繪類考や名人忌辰錄や浮世畫人傳や繪本江戸土產や或は司馬江漢の春波樓日記などのなかに極めて斷片的に彼のことが書いてはあるが、彼の『肖像』を構造するに當つて左程有力な資料にはならない。明和七年に四十六歳で死んだものとすると彼は享保十年に產れたことになる。彼の本姓……穗積、通稱を次兵衛或は又兵衛、號を長榮軒又は思古人といつたとも傳へられて居る。二十年前『日本の浮世繪（ジャパニーズ、カラー、プリンツ）』を書いた當時のストレーンジ氏は春信と湖龍齋とを同一の畫家と斷定して、春信は晩年に湖龍齋と署名したと發表したが、今日では彼等が別人であるといふ確證さへあがつて居り、又その畫風を詳細に檢査すると其處に非常な相違があるのを知ることが出來る。それや兩人共西村重長の弟子であつたらしいから類似點は澤山あることはある。前に書いて居るやうに千七百六十四年（明和二年）に春信は一大進歩を劃して俄然大家の權威を持つに至つたが、この以前の春信の美人畫に似た作を湖龍齋の作品中に發見することは困難でない。けれども春信の作で所謂湖龍齋式の奇癖を特別に顯はして居る美人畫はまづ無いのである。湖龍齋には春信のお伽噺が無い、幻想が無い、青春の脹らみと溫かさが無い、——藝術的水蒸氣が春信程豐饒で無い。然し事實に春信に湖龍と署名したことがあつたとすると、恐らくそれが湖龍齋が一家をなさぬずつとの以前のことであらねばならぬと僕は想像して居る。僕が今日珍藏（珍藏といふのも烏許がましいが）して居る小幅の掛物の美人畫がある。人に白晝見せても羞恥を感ぜしめぬ程度の優雅な裸體畫で、年若い遊女が片足あげて將に湯呂桶に

入らうとする所が描いてある。黄ばんだ紙へ女の身體へ塗つた胡粉が心持ちほど玉子色に成つて居て、僕の書齋に掛けて置くと太陽の光線の工合一つで如何にも愉快に感ずる場合を呈することがある。この繪は湖龍と署名はしてあるが或は春信の若描きではあるまいかと思つて、僕が倫敦で買つてはる〲持ち歸つたものである。然るにこれを橋口五葉氏に見せた所、矢張り署名通り湖龍齋　作と見る方が至當であらうと主張された。

春信の一生は寶暦明和の兩時代に分けて論ずるのを便利とする。そして前者の寶暦時代の作品で、墨摺繪本を外にしては多くは三色の紅繪だが特種な藝術的價値を保つものは少いと云はねばならぬ。前にいつたやうに彼は重長の門人ではあつたが美人畫の上では石川豐信の感化を受けて居るやうに思はれる。又後者の明和時代に入つて、最初の頃は祐信と鳥居清滿の影響を受けたが間も無く自己の立脚地を強固に占めるに至つた。

僕が先年倫敦へ着すると間もなく、浮世繪の蒐集殊に春信の逸品の所藏を以て誇つて居る一英國人から晩餐の招待を受けた。僕は直ぐこの招待の意味は僕に自分の錦繪を一つ見せびらかそうといふ魂膽だと讀んだ。僕は喜んで彼の招待に應じた。其當日の晩餐はなか〱凝つたものであつた。元來猶太人（この英國人は富豪の猶太人の一人で）はEpicureanである。このエピキユラス主義が彼の美術心を導いて諸所方々と彼をして浮世繪の名品を漁らしめたものだ。食後僕等は稀有な支那の靑玉(ジエード)が硝子箱に入れて飾つてある客間に移つて其處で珈琲を飲み又煙草を燻べた。僕は彼が僕の口から浮世繪一見の所望が出るのを確に待つて居るのだと見てとつて、そのことを切つて出ると彼は『そう！僕の書齋へ來給へ』といつて僕を別室に案内した。彼の書齋はそう廣いもので無かた。石炭は美々しく燃えて（云ひをくれたが期節は年も推しせまつた基督降誕祭近くであつた）如何にも居心地好く、僕は此處で春信の名品を眺めることが出來る幸福を喜んだ。彼がまづ第一に僕の眼前に擴げた一枚（彼は美術好愛者らしく一度に一枚づゝ側らに据えてある桃花心木(マホガニー)製の簞笥のなかから出して來るのである）は白井權八の虛無僧姿の柱繪――これぞ春信の逸品中の逸品である。又ある批評家の言葉に依ると有らゆる浮世繪中最大なるもの丶一枚である。フエネロサは嘗てこの柱繪に嘆美の辭を書いて居てその中にこういつて居る、『線に非現實的なあるものがある、黑色とまぼろしのやうな幽靈色Ghost tintsに伴奏がある、人はベトーヴエンの最も純な諧調の無窮に入るに至る。この夢のやうな尺八吹きは今にも崇高の地the regions of sublimityへ消えて仕舞つて、我

我の地上の耳は彼の薄らぎゆく諧音を再び追ふことか出來ぬであらうと思はれる。』更に僕の友人がこの白井權八の上に書いた一詩に、

『無限の隔りから來る幽靈の如き音樂！
纖細な銀の音調、變化少く聲細し、
夕の幕に縫箔された星のそれに響へん……
笛一本と夢見る樂師、——彼は過ぎゆく、
彼の歩みは遲く、眼は嚴かに下向く、
彼の青白き着物は歩くたび長く襞うつ。
無限の隔りから、幽靈の如き音樂歸へる——
纖細な銀の細い音調、
夕の幕に縫箔された星のそれに響へん。』

無背景で黒色と紫灰色をまばらに破る白と橙色のこの一枚の柱繪は實に春信の藝術がその最高潮に達して、希臘(ギリーキ)以上の單純美を暗示する音樂的アレンジメントである。全體の繪を幻想化する曲線の流れは僕をして美麗な魔法(インカンテーション)自身でなくて何んであると叫ばしめた。嗚呼この一枚は我我の心の底に靜かに入つて其處に匿くれて居る美の憧憬心を無遠慮に覺醒せめしめるものである。

僕の友人が第二に持出して來た柱繪は『灰色と剌賢垤爾(ラベンダー)色の配合』であつた。灰色の冷やかな背景のなかゝら顯はれた一少女、いふにいへぬ初心な愁思を湛へた顏を下へ俯けて足元の小猫に手にした鞠で揶揄つて居る。この繪の所有者なる猶太人(猶太人で教育あるものはいつもその眼は藝術の批評に敏捷である)は繪の少女の髮を指し乍ら語つた、『この麗はしい毛髮の模樣を見給へ、希臘人が古昔冠つた兜(ヘルメット)の線のやうな純白さが有るぢやないか。すらりと垂れた肩から落ちる着物は、微かな柔かい空氣の呼吸で波動を起しつゝあるやうにも感ぜられる。その長い着物に織りこまれて居る艶紫色とその色と解けあつた薔薇色！君これは色といふよりは寧ろ畫家の繪の具板の幽靈がこの少女の着物に乘移つたといつた方が適當ぢやなからうか。』嗚呼美麗なる哉この一枚——その袖から裾へかけて琥珀や鮭肉色や、灰色が夢の香氣を箱からぶちまけたやうに散らばつて居る。着物の襞は夏の小枝に掛つて垂れて居る葛の糸のやうに大くうねつて居る。帶はと見ると鈍い綠色の强い調子が全體の構造を工合能く破つて居る。實にこの繪は情緒である感情である夢であ

る、音樂がアブストラクションであるやうにこの繪も等しくアブストラクションである。着物の縱、少女の頭の釣合、又繪全體に澄み渡つた調子は女性の靜寂嚴肅、一度見ると何うしても忘却することが出來ぬ一種の畏懼に近いあるものを暗示して居る。一批評家はこの繪を評してこう書いて居る、『初期時代の浮世繪に顯はれて居る嚴肅が此處では更に靈化されて居る。そして古代からの僧院的純白と靈性の影が此處に依然徘徊して居る。アゼンスはアクロポリスの博物館にある女僧(プリスチス)の不思議な素樸のスタチューの如く、アツシに於けるジヲットの壁畫の如く近代の藝術家には失れて仕舞つた無垢の美の秘密が其處に保たれて居る。』

第三番目の柱繪として今僕は優婉な夏裝ひして居る美人(涼しさうな竹の涼臺に座つて居る)を羅漢と見立てゝ躍動した龍を鉢のなかゝら出した光景の一枚を見て居る。鉢を持ちあげた美人の花車な手付に配するに恐ろし氣に見へる龍、僅か縱二尺二寸一分横四寸の小畫面をよくも斯く利用し得たものである。それから僕の友人が僕の眼前に持ち出して來た一枚は、僕が春信から少しも豫期して居らなかつた中判物で、それは美人畫で無くて風景畫であつた。河畔に起つ白鷺と雪、これに對して雪に薇はれて居る茅葺屋根の小舟一艘。僕は叫ばざるを得無つた。

——『これは逸品だ!如何にも氣持がよい秀透の作だ。廣重の風景畫を文人畫に比較するならば、この春信の風景畫は差詰め狩野派の藝術だ。廣重が好んで避けやうとした婦人的の精緻なアートが、此處では充分に豐かに味はれる。又廣重が時として落ちいつた繪畫的混亂を春信は巧に逃れて居る。彼は美人畫に於ける秘密を風景畫に應用して成巧して居る。』

僕はそれ以上春信を見ることを其時謝絶した。それは後日の樂みとしたいと思つたのも一理由だが、それより以上に大な理由は僕の頭腦は最早や此上春信の藝術を受け入れる餘裕が無かつたからである。僕は僕の友人の宅を再訪問を約して辭したが、不幸にして其後僕にその約束を果たす機會が無つた。

僕の英國滯在中の大事件の一は確に其當時南ケンシントン博物館で催されて居た浮世繪展覽會、殊に四十六點の春信を一時に眺めたことである。諸君、四十六點の春信だ!實に浦山しい次第ではないか?中に一枚司馬江漢の作として展覽されたものがあつた。それは年若い女が百度を踏んで石段を上る繪であつて、その女は長恨歌の句にある『雲鬢花顔金歩搖』の態度であつた。一見してこの繪は嬌として力無しといふ支那の美人の傳彩法に依つたものであることが知れた。歸朝後僕はこの一枚のことを某浮世繪研究家に話した所がそれは江漢の作で無く、實に

春信のものであつて二枚物の一枚であるといふことまで聞かされた。然らば倫敦に於ける浮世繪展覧會を處理したストレーンジ氏は何處からこの繪は江漢の作であるといふ根據を得たのであるか。或はこの繪が持つて居る支那的情調を春信として異様であると思つて江漢の作としたのかも知れぬ。ストレーンジ氏は明和二年から四年頃に掛けて製作した春信の繪に支那畫の影響が有るのを注意して居なかつたのかも知れぬ。司馬江漢は『江漢後悔記』か何にかの中で、最も成巧せる春信の贋作者はこの春波樓主人其人であると自白して居るが、如何にその當時春信の聲價の高かつたかを側面から説明したものと見ることが出來る。江漢が如何にも春信の筆跡を眞似るに特種の技工を持つて居たが爲め、數多い今日の浮世繪研究者が煩はさる所決して少くない。實際今日春信として珍重されて居る版畫のうちには、江漢の僞畫が幾枚も混つて居るに相違無い。殊に贋作者として江漢の初期時代の作が、贋造の忠實と精細を盡くして居ると聞いて居る。如何に贋作の大家司馬江漢先生でも胸中の不案を感ぜずには居られなかつたものか、其後公然春重の名前で美人畫を出版し初めて居るが、この春重の署名を持つた繪と春信の作とを比較すると其の間可なり大な相違があるやうに思はれる。繪に顯はれた表情が春信のもの程豐かでない潤が無い。背景に於ても春信の繪に於けるより遙かに透視畫的である西洋畫風のアフエクテーションが有る。橋口氏は、『描かれた婦女の顔も、表情は春信のものと異なり、其の輪廓に於ても、頬と顎との形に差異多く、頸と肩との關係等の違つたものが多く見られる』と書いて居られる。

浮世繪備考を見ると『明和六年とかや、湯島天神に於いて、泉洲石津笑姿の開扉ありしとき、殊に美はしきを選みて舞はせしお辰、お美津といふ二人の巫女、また當時滿都の人士を腦殺せしめたる谷中笠森稲荷の茶店鍵屋の娘お仙、淺草觀音堂の邊なる楊枝店柳屋仁平太の娘お藤、此の四美人の姿を錦繪に描きて賣出せしに、大に世人の喝采を博せしとぞ』と書いてある。僕も幸ひ倫敦のハームスウオールス蒐集のなかで、二枚も楊枝屋の娘お藤の繪を見たが、まだ不幸にして僕はお辰お美津の繪を見て居らぬ、是非見たい氣がする。

攘夷派の兄弟

村松梢風

一

金之亟が江戸へ着つた時はもう日暮れに近い頃であつた。

一と冬のうちにもこんな好い日和は滅多にない、まるで時候外れの春にでも會つたやうで、もう往來にはすつかり片蔭が出來てゐるのに、矢つ張り朝と同じやうに暖かで靜かな空である。街はどこもかも賑やかで眼の醒めるやうな活氣が溢れてゐる。道中で江戸は物騒だの不景氣だのいふ噂を聞くと、火の消えたやうな都を想像したものだが、斯うして見た處では微塵もそんな様子はない、何も彼も三年前と同じ事だ。夫れにしても、品川邊まではあれ程澤山眼についた江戸入りの人間が何時の間に何處へ散つてしまつたのだらう、旅人らしい姿といつては羊羹色になつた紋服の上へ汚れた木綿の風呂敷包みを斜かひに脊負つて、編笠の内から珍らしさうにキョロキョロ見廻しながら歩いてゐる金之亟自身の外には一人も見當らない。でも、彼は自身のそんな見窶らしさも心に感じなかつた。現在の窮迫した境遇に對する不安も、何も彼も忘れてゐた。心のうちは、久し振りで見た江戸の風物から受ける感激で一杯になつてゐた。キリツとした下町風の女の姿などを見ると、以前相手にした女の事などが自然に思ひ出された。「矢つ張り江戸に越した處はない」から考へると、もう上方を喰ひ詰めた事の悔恨も何もない、彼は胸の透くやうなすがすがしい氣持になつた。

愛宕下の兄の主君の屋敷の門前迄來ると、彼は急に夢から醒めたやうに感じて、今迄とは反對の不快な重くるしい壓迫を受けた。放埓といふ放埓をし盡して散々迷惑を掛けた揚句勘當同様になつて飛び出して置きながら、今又見る影もない尾羽打ち枯らした姿で舞ひ戻つて來た自分を兄がどんな顔をして迎へるであらうかと想像しただけで、彼はもう足が地にくつ附いてしまつたやうな氣がした。處々壁が剝げ落ちた高い塀の内らからこんもり茂つた樹が往來の上へおつ被さつて、此の邊は通行も稀れなので一層日暮れらしい陰氣さが濃く立ちこめてゐる。彼

は暫らく塀に寄り添つて停立んでゐたが、軈て思ひ切つたやうな足取りで其の場を離れると勝手を知つてゐる通用門へ掛つて行つた。

「伊藤の舍弟金之亟で御坐る。兄の小屋へお通しに預かり度い」

金之亟はかう云ひながら編笠を脱いだ。見ると、兄の組下になつてゐる濱田といふ老人が未だに達者で門番をしてゐた。

「これはお珍らしい方ぢや。何時も御健勝で何よりで御坐る」

と老人は無骨な挨拶をした。然し金之亟は、自身に關する惡評がこんな物堅い老人の耳にどんな具合に這入つてゐるかと思ふと餘計な口を利く氣にならなかつた。「御免――」と云つて彼れは足早に通り過ぎた。さして廣くない屋敷だから兄の小屋は其處から直きであつた。粗末な門も、杉の垣根も、煤けきつた玄關も、總てが元の儘である。彼は今度は別段躊躇ひもなく、

「お頼み申す、お頼み申す」

と、編笠を右手に提げて玄關さきにつツ立つて呼んだ。軈て奥から誰かばたばた出て來た。それが嫂のお律であつた。二歳位の兒を抱いてゐた。

「まあ、金之亟樣では御坐いませぬか」と嫂は心から吃驚したらしく云つた。

「是は姉上、今日江戸へ戻つて參りました。して兄上は御在宅で御坐りますか」

「いえ、此の頃は御用で大抵高輪の方へ參つて居りますが、幸ひ今日はもう追ツ着け戻る筈で御坐います。あの、一寸お待ち遊ばして、今滌ぎのお水を持つて參りますから」

嫂は愛想よくかう云つて、抱いてゐた兒を其處へ卸して置いて急いで奥へ這入つて行つた。小兒は見慣れない金之亟の顏を見ながらワアワア泣き出した。男の兒であらう。兄の面ざしにそつくりである。盥へ水を汲んで、嫂が外から廻つて運んで來た。金之亟は禮を云ひながら式臺へ腰を卸して草鞋を脱いだり足を洗つたりした。

南向きの小庭を受けた疊のブクブクした座敷へ通ると金之亟はもうすつかり度胸が座つてしまつた。兄の留守へかうしてのめのめ這入り込むのは最初は氣が咎めないでもなかつたが、それも却つて好都合であつたやうに思はれて來た。根が肉親のことだ、おまけにあの好人物の兄を胡魔化すぐらゐは雜作もない咄だと何時の間にか高を括つてゐた。嫂は火鉢や茶を出したり、その後から直きに燈を運んだりした。總領の六歳になる女の兒も母の側にくつ附いて行儀よく座つてゐた。

「あれからどちらにおいでゞ御坐いました」

嫂は、月代が伸びたり日に燒けたりしてゐるせいか以前よりも險相になつた義弟の顏を凝視て云つた。

「ずつと京都に居りました。尤も、中國筋でも暮しました」

「さうして知らない土地をお歩き遊ばしたら、嘸面白い事で御坐いましようねえ」

「面白い事も有れば苦しみも有ります。身どもも以前の金之亟では御坐らぬ故、此の度びは隨分と艱難辛苦も致しました。」

「それに、今度の道中は嘸御苦勞だつたで御坐いましよう」

と、嫂は話をそらした。夫が歸つて來る迄は成るべく立ち入つた話をしまいといふやうな樣子が見えた。そして手持無沙汰らしく默り込んだ嫂の顏を金之亟は偸むやうに見た。自分と同い歳故廿六だが、じみな黑襦子の帶をしめた姿も肉の緊まつて來た顏つきも以前から見ると滅切り年増らしい落着きが出來てきた。一體縹緻ばかりでなく祿高でも家柄でも兄なぞの處へ來る筈ではなかつたのだが、此の女房の爲めには兄は一生に一度といふ戀をした。其の熱心に動かされたのと今一つは兄の愚直と云ひ度い程な堅人であることや、弟一人の外に繫累の無い點などが先方の親達の氣に適つて、此の幸運が兄の掌中に歸したのだ。それがために家中の若侍達はみんな落膽したり呆れたりして仕舞つたといふ咄であつた。金之亟は其の時分から惡所通ひに凝り始めたので、屋敷者の嫂なぞは餘り問題にしてはゐなかつたが、かうして沁々見れば「成る程」といふ氣がした。心柄とは云ひながらこんなに落魄した自分の身に較べると、同じ同胞とは思はれない兄の幸福な生活が羨ましくも感じられた。

「高輪へは、矢張りお上の御用で御坐りますか」

「ほんに貴郎は御存知のない筈、今度殿樣が東禪寺の異人守護役をお受けなされたので御坐います」

「何、異人守護役？では兄上も異人を守護しに行かれるので御坐るか」

「はい、それが貴郎、いつぞや浪人が斬り込んで大騷動がありましてからといふものは、夫れは〳〵嚴重ださうで、旦那樣も大抵向うへ詰め切りなので御坐います」

金之亟は「ふーむ」と云つたきり苦い顏をして默つてしまつた。

夫れから間もなく兄の軍兵衛が戻つて來た。嫂は先刻と同じやうに兒を抱いたまゝ玄關へ出て行つたが、金之亟は眞逆顏も出せないのでじつと座つてゐた、すると兄は茶の間へ通つて夫婦で小聲に話してゐる樣子であつた。稍暫らく經つてから兄は袴も取つて丸腰になつて弟のゐる座敷へ這入つて來た。

「是は兄上、お許しもなくお留守へ上りまして申譯は御坐りま

せぬ。然し何時も乍ら御壯健で、金之亟お喜びを申上げます」

金之亟は三四尺後へ退つて如何にも恐縮した躰で云つた。すると兄は存外穩やかな調子で、

「何處から來た」

「は、京都から參りました。實は」と云ひ掛けると、

「話は後に聞かう、飯でも食つて、ちと寛いだがよい」

かう云つて兄はぷいと起つて行つてしまつた。支度が出來てゐたと見えて嫂が直ぐに飯を持つて來た。膳の上には徳利が一本載つてゐた。

「合憎お肴が無くてお氣の毒で御坐います」

と云つて嫂が酌をしようとすると、金之亟は本能的に盃の上へ手を被せて、

「御酒は頂きませぬ。もう永いこと禁酒して居ります」

「まあ御遠慮には及びませぬ。少しならお藥で御坐いますもの」と、嫂は笑ひながら勸めた。

それでも金之亟は盃を手に取らなかつた。彼は、熱燗らしい酒の香を氣にしながら飯を食べた。

二

金之亟が江戸をあとにしたのは三年前のことであつたが、それから彼が京の土地に落ち着く迄には可成り永い月日がかゝつた。俗に云ふ身を萍の譬の通り、行き當りばつたり何處へでも足をとめ、どんな事でもして日を送つた。大道の易者ぐらゐがはじまりで、博徒の要心棒にもなつてみたし、僅かの腕前を大袈裟に吹聽して在方の若者相手に劍術の先生に成り澄ましたこともある。旅籠錢が拂へなくて發たせぬとでも云はれると、結句それを幸ひにして何時迄も動かぬといふ程の惡度胸も出來てきた。さうして最後に何の目的も無く京都へ流れ込んだのであつた。處が京都では當てが外れた。今迄の田舍と異ひ痩浪人の金之亟風情が身過しの出來るやうな事は何一つ見付からなかつた。仕方がないので彼は久し振りで筮竹を持つて大道へ出ることにしたが、矢張りそんな事では安宿の屋根代を得るさへ六か敷い位であつた。或日のこと、いつものやうに深編笠を冠つて街の辻へ出て客を待つてゐると、其處へ一人の武士が通り掛かつた。彼が何氣なく其の顏を見ると、それは水戸藩の櫻井といふ男で、江戸に居た時分遊び場所で一寸近づきになつたことのある者であつた。本來ならこちらから逃げ隱れでもする處だが、溺れゝば木の葉にさへ縋る譬で、まして廉恥心の失くなつてゐる金之亟のことだから、思案をする間もなく「櫻井氏〳〵」と大きな聲で呼び掛けた。すると櫻井は立ち止まつて怪訝さうな顏をした。

「櫻井氏、伊藤金之亟で御坐る。一別以來變つた處でお目に掛る」

　かう云ひながら金之亟は側へ寄つて行つて編笠を脫いだ。

「なんだ伊藤か、誰かと思つた。然し貴公、其の有樣は全體どうしたといふ譯だ」と櫻井は呆れた顏をして云つた。

「面目次第も御坐らん。實は江戶も不首尾になつて先きごろ京都へ來ましたが、識らぬ土地とて難澁いたし、いやはや御覽の通りの仕儀で御坐る」

　金之亟が殊更哀つぽくかう云ふと、櫻井はさも可笑しさうに大きな口をあいて笑ひ出した。

「道樂は一人前でも、まだ世間を知らぬ貴公だから無理はないが、識らぬ土地へ來たからとて乞食の眞似をする奴が有るものか、其のざまを江戶のに見せたら泣くであらう。はゝゝゝゝは」

「櫻井氏、何卒拙者をお救ひ下さい。御恩は必ず忘れは致さん」

　櫻井は恐ろしく手輕に引き受けて、金之亟の見臺の上にあつた筆を執つて紙片へ住所を記して渡した。

「往來で立咄しもなるまい、後刻此の場所へ訪ねて來たまへ」

「有難う御坐る。必ずお訪ね致すから、何分宜敷くお願ひ申す」

と、金之亟はさも嬉しさうにぺこ〳〵頭を下げながら云つた。

　彼は櫻井に別れると直ぐに道具を片着けて宿へ歸つたが、考へて見ると譯が判らなかつた。櫻井が京都へ來てゐる事も意外だが、全體、別に深い緣故が有る譯でもない他人の世話があゝ易々と引き受けられるものではない。それに櫻井だつて自分と同じく部屋住みの而も次男坊であつたから、さう俄かに出世の出來る筈もない。「彼奴は何をしてゐるのだらう?」かう思ふと彼は不思議でならなかつた。

　其の晩彼は櫻井を訪ねて行つた。其處は町はずれで、漸う探し當てた家は物持ちの別宅とでも云ひさうな立派な門構へであつた。玄關には朴齒の足駄だの雪駄などが澤山亂雜に脫ぎ捨ててあつた。彼は其處から「お賴み申す、お賴み申す」と何遍も呼んだが容易に返事がなかつた。するとしまひに丈の高い男がいきなりぬツと顏を出して、

「何御用か」と呶鳴りつけるやうに云つた。

「拙者は伊藤金之亟と申す者、櫻井氏に御面會致し度くて參つて御坐る」

「あゝ左樣か」

　と云つたなり執次ぎの男は奥へ引つ込んでしまつた。直きに櫻井が其處へ出て來た。

「丁度よい處だ。上り玉へ」

と云つた。櫻井はおづ〳〵してゐる金之亟を奥座敷へ連れて行つた。其處には七八名の侍が車座になつて酒を飮んでゐた。

「諸君、是は××藩の伊藤氏と云つて拙者の親友だ。何分御別懇に願ひ度い」

と櫻井は一同に對つて金之亟を紹介した。金之亟も其の後へついて慇懃に初對面の口上を述べたが、一同は一寸彼の方を見たばかりで直ぐに勝手な談話など始めて、改まつて夫れに答へる者などは一人も無かつた。

「兎に角新來の客に一つ献じよう」

かう云つて一人が大きな盃を金之亟にさした。金之亟は注意して一同の樣子を觀察したが薩張り譯が判らなかつた。第一どれが此の家の主人だか一向見分けがつかない。それに異しいことは、一座の中に鹿兒島辯をつかふ男もゐれば中國筋らしい人間もゐる。さうかと思ふと東北辯丸出しといふのもある。家はなか〳〵廣かつたが、婆さんらしいのが時々顏を出す外に女子供は一人も見えない。座敷は何處もかも掃き淸めのやうに散らかつてゐるが、さうかと云つて道具らしい物は一つも無い。

醉つぱらつてごろ〳〵其處らへ寢てしまふ者もあれば、威勢よく何處かへ出掛けて行く者もあつた。

「おい伊藤、貴公はまだ京女の肌は知るまい。ぶら〳〵何處かへ行つて見よう」

櫻井はかう云つて金之亟を外へ連れ出した。

「櫻井氏、あの連中は一體何者なんだ」と、金之亟は表へ出るが否や不思議で堪まらなさゝうに訊いた。

「あれか、あれはみんな攘夷黨の志士だ」

「攘夷黨の志士?」金之亟は意外な事を聞くやうな氣がした。

「して何か、貴殿も矢張り其の仲間なのか」

「勿論。水戶の浪士櫻井錬平と云へば就中錚々たる者だ」

かう云つて櫻井は「あはゝゝ」と笑つた。金之亟は何んだか馬鹿にされたやうな氣がした。あの放蕩者の櫻井が攘夷黨の志士とは如何になんでも滑稽だ、と思つたけれども口へは出さなかつた。

「拙者も彼處にゐて差し支えないだらうか」

「構ふものか。貴公も今日から同志の一人になつたんだ。大威張りでゐるがいい」

「それでも、若し見破られると困るな」

「馬鹿な、そんな心配をする奴が有るものか。人に訊かれたら出鱈目の攘夷論でも喋つて、無茶苦茶に幕府の惡口でもついてゐれば夫れで立派な志士なんだ。それに江戶から新撰組が入り

込んでるから、時偶あいつ等に喧嘩でも吹つ掛けたりしてゐれば、毎日酒を飲んで遊んで暮せるのだ」

櫻井は金之亟が呆氣にとられてゐるのも構はずぺら／＼と喋り出した。目下此の京都へ集まつてゐる攘夷黨の志士と稱する者は何百何千あるか知れないが、其大半は無頼漢だと云つた。

「一體何處から金が出るんだ」と金之亟は判斷に苦しみながら云つた。

「そんな事は今に判つて來る。えゝと、何處にしようかな」と、賑やかな辻へ出ると櫻井はニヤ／＼笑ひながら立止つた。

かうして金之亟は攘夷黨の志士の一人に加はつた。例の梁山伯の連中とも忽ち肝膽相照した。全く櫻井の云つた通り、其處にゐる者も外から出入する者も、殆んど碌な人間はないらしかつた。それだけに彼には一層適した此の上もない結構な境涯であつた。

一と月ばかり經つてからであつた。或夜金之亟が寢てゐる處へ櫻井が外出の支度でやつて來て起した。金之亟は大方遊びにでも連れて行くのだらうと思つて一緒に外へ出た。すると門前に四五人の男が立つてゐた。其の中には金之亟が識つてる顏も識らない顏もあつた。一同は櫻井を中へ入れて何か相談を始めたが、軈て揃つて歩き出した。町は何處もかも眞暗で、ひつそりと靜まつてゐた。何處をどう歩いたのか金之亟には見當が付かなかつたが、餘程來てからと或る小路を這入ると、板塀を繞らした家の前で一同は足を停めた。其のうちに一人が仲間の男の肩を踏臺にして身輕に塀を乘り越えて中から門の戸を明けると、外の連中は一度に吸ひ込まれたやうに這入つて行つた。其の時金之亟はまご／＼してゐると、いきなり後の男に腰を押されて無我夢中で中へ這つてしまつた。「何者かを暗殺するのだらう」と金之亟は初めて氣がついた。誰がしたのか雨戸などは苦もなく外された。皆土足でずん／＼上つて行くから金之亟も後へ隨いて廊下へ上ると、諜し合はせてあると見えて人數が直ぐ二組に分れた。金之亟は櫻井の組へは入つてゐたが、彼等は軈て立派な座敷の中へ闖入した。其處には朱塗の行燈を置いて、一人の老人が絹布の夜具を着て睡つてゐた。

「おい、起きろ／＼」と一人が其の肩へ手を掛けて搖り起した。

「これ／＼、靜かに致さぬと爲めに相成らぬぞ。斯く吾々が參つたのは、其方に折入つて頼み度い一儀が有るのだ。何んと承諾致して吳れるか」と櫻井が前へ出て穩やかな調子で云つた。

「はい／＼、して其の御用と仰しやりまするは」老人は布團の

上へ座つてワナ〳〵顫へながら漸う是れだけ云つた。

「餘の儀ではない。吾々は尊王攘夷を唱へる天下の浪士だが、此の度幕府を滅ぼすために勤王の軍を起すに就いて軍用金が入用なのだ。そこで其方を見掛けて賴むのぢやが、今宵是非五百兩程調達して貰ひ度い、其の代り戰に勝てば百倍にして返濟致す。朝廷のおんためぢや、よもや異存はあるまい」

金之亟は呆れ返つて櫻井の顏を眺めてゐた。

一年餘りの月日が夢のやうに過ぎた。處が、好事魔多しで、金之亟は此の樂土を捨てなければならい時節が到來した。土地を捨てる位は夫れでも運のよかつた方で、彼の同類は其の時大抵命を捨てた。それは幕府の英斷で無賴の浪士を一網打盡に獵り盡してしまつたのであつた。櫻井も捕へられて三條河原で首を斬られた。

三

金之亟は旅の疲れで思はず寢過ごした。眼を醒ました時には短い冬の陽足は眞南へ廻つて緣側を照らしてゐた。其の日は兄も非番と見えて内にゐた。座敷へ膳を運んで貰つて彼が朝飯を食べた處へ、紬の綿入れを着て、兄は煙草盆を手に提げて這入つて來た。昨夜は何か用事が有つたものと見えて兄はあれから直きに外出して、到頭今朝迄顏を合はせる折が無かつたのである。

「此の度びは何れから參つた」

兄は丸々肥つた軀を弟と對き合はせるとにこりともせずに云つた。

「京都から參りました」

「京都では何を致して居つたのぢや」

「不肖ながら、國事に奔走致して居りました」と、金之亟は兩手を疊へ突いて云つた。

「何、其方が國事に奔走した？」兄は馬鹿々々しさうに苦笑ひをした。

「以前が以前故其の御不審は御尤で御坐りますが、私も悉く前非を後悔致し、只今では昔の金之亟は御坐りませぬ。只かう申したとてお取り上げなければ夫れ迄で御坐りますが、實はあれから諸々流浪の末京都へ參りましたる處、計らず二三の知己を得まして、其の緣故で諸國の志士とも交遊を結び、折々は名家の門へも出入致して居りました。斯樣な次第で日夜正義の議論を耳に致し、愚かながらも天下の大勢に着眼致して見ますれば、此の國事多端の秋假りにも武士たる者が酒色に溺れ、碌々として日を送つて居たのは吾が一生の誤り、と初めて迷ひの夢

が醒めまして御坐ります」
金之亟は眞しやかに、京都で攘夷黨の志士として活動してゐたといふことを口から出委せに喋り續けた。兄は半信半疑の體で聞いてゐた。
「して、此度びは江戸へ何用が有つて參つたのぢや」
「夫れはかういふ譯で御坐ります。近頃京都では浪士の取締が以ての外厳重になりまして、何の科もない憂國の士を手當り次第捕縛致します。私も危く難に遇ふ處を、運好く遁れて參つたので御坐ります。」
「それで今後はどうするつもりぢや」
「風雲急と見れば直ぐにも馳せ向はねばなりませぬが、それ迄は暫く雌伏致して形勢を窺ふの外はありませぬ。就いては、差し當つて手寄る處も御坐りませぬ故、甚だ恐れ入つた仕儀ながら、暫らく兄上の御厄介を願ひ度う存じまするがお聞き濟み下さりましようか」と、金之亟はさも恐縮した體で云つた。
兄は「ふーむ」と云つて暫らく黙り込んでゐたが「兎も角居るがよい」と穏やかに承知した。健康さうな軀や、茶色をした實直さうな眼つきは何時見ても同じやうだが、髯が濃くなつたせいか兄は以前から見ると餘程老けて來た。かうして久し振りで會つて見ると、まだ兩親とも在世で兄に連れられては塾へ通つた時分の事が想ひ出されて、金之亟の胸にも温い親身の情が移るのであつた。
それから金之亟は兄の家に起き臥しゝてゐた。兄は三日に一度の非番の外は晝夜共東禪寺へ行つて詰め切つてゐた。金之亟は面白くなかつた。内にゐれば子供の相手でもするより外に所在がないので彼は毎日用もないのに表を出歩いてゐた。流石に嫂が氣をつけて小遣ひだけは呉れるので、夫れで繩暖簾でも潜るのが唯一の樂だが、醉つたところで遊び一つ出來るではなし、禁酒したと云つてある手前態と寒い風に吹かれて醉を醒まして家へ歸らなければならないのだから、全く馬鹿々々しくもあれば情無くもなつてしまつた。兄が非番の日はそれでも退屈しないだけ有難かつた。彼は兄を相手に笊碁を圍んだり京都の話などして時間を消した。京都の話をすると兄は存外氣を入れて聞いた。そこで彼もしまひには得意になつて、なんだかまつたく自身が憂國の志士でもあるやうな氣持になつて、受け賣りの尊王攘夷論を振り廻したり、朝廷の御有樣だとか、諸藩の浪士の活躍振りだとかを眞事空事打ち交ぜて話して聞かせた。すると兄は、
「有司輩を過つ、社稷竟に濟ふ可からずか」などと獨り言のやうに云つた。

異人守護役の事を話し掛けると兄は直ぐに厭な顔をした。兄の机の上には水戸の老公が著した「丙丁録」といふ寫本などが置いてあつた。

四

金之丞が轉がり込んで來た事が、種々な意味で兄の軍兵衛の心に影響を與へた。夫婦水入らずの生活へ不意に邪魔者に飛び込まれて見ると、たとひ弟とは云ひながら最初はいゝ氣持はしなかつたが、さうした水臭い感情は直きに消滅してしまつた。今迄にも何遍家を飛び出したり、困ると轉がり込んで來たりしたことか知れないが、其の都度借金の馬を引張つて來るか、醉つぱらつて來て暴れるかより外にした事のない金之丞が、今度に限つて小さくなつて居候をしてゐる樣子を見ると多少可哀さうな氣が起つて來た。「弟も一つ宛歳を取るのだ」と思ふと賴母しいやうな氣もした。とにかく廿六にもなつて見れば、何とか身の處置をつけて遣らなければ地下の兩親に對して自身の義務が果せないやうにも思はれるのであつた。然し、そんな事以上にもつと強く軍兵衛の心を動かした問題が有つた。それは金之丞が京都に於て攘夷派の仲間に加盟したといふ一事である。彼は最初其の咄を信用しなかつたが、折に觸れては問ひ糺して見るにそれに全く事實に違ひなかつた。

「たとひ末輩でも、彼は堂々と攘夷を唱へて闊歩したのだ」から思ふと軍兵衛は弟に對して一種の尊敬に似た念が起こつて來る。それに引きかへ、主君が台命を蒙つたゝめとは云へ條、異人の守護をしなければならぬ自分は何たる淺ましい事であらうかと思はれて來る。

攘夷は天下の輿論である、群衆心理である。其の輿論を眞向に受け入れてゐる人間の一人が軍兵衛である。異人は禽獸に等しい、我が神國を窺ふ夷狄である、と是が軍兵衛の頭にこびり附いてゐる信條である。彼は全く今度の役目は死ぬ程厭で堪まらなかつた。武士の誇りをもぎ取られて地に叩き付けられてしまつたやうに感じた。いつぞやも彼は同僚と共にエゲレス國の公使オールコックスの護衛をして箱根の湯本へ行つた。旅先きの事とて殊に警戒が嚴重を極めた。或る晩彼は公使の寢所から一と間隔つた座敷で寢ずの番をしてゐた。すると公使の處へは江戸から怪し氣な女が呼び寄せてあつた。女の無遠慮な笑ひ聲だの片言で何か戲談を云ふ公使の太い聲音などが手に取るやうに軍兵衛の耳に這入つた。彼は、生れてから此の時程屈辱を感じたことはなかつた。いきなり其の場へ飛び込んで穢らはしい男と女を斬り捨てゝしまつたらどんなに愉快だらうかと彼は幾度び心に描いたことかしれなかつた。日常異人が外出する毎に

一緒に隨いて歩くのも隨分苦痛な役目であつた。市民はいつでも物珍らしさうに往來へ飛び出して見物した。「武士が異人の供をしてゐる」などと聞えよがしの惡口などを浴びせられても、彼は憤ることが出來なかつた。

或日軍兵衛が控所に居ると、前の庭へ小狗が這入つて來て彼の顏を見ながらクン〳〵鼻を鳴らした。それはしよつちう此の邊をうろついてゐる宿無し犬だが、犬好きの軍兵衛が時々菓子など投げて遣るので何時となく顏を覺えたらしい。

「よしよし、今遣るぞ」

かう云つて彼は茶うけの餘り物の煎餅を二三枚摑んで椽側へ出て、少しづつ割つて投げて遣つた。犬は激しく尾を振りながらガツガツして拾つて食つた。それが軍兵衛には何とも云へず可愛かつた。煎餅が無くなると彼は「もう無い〳〵」と云つて聞かせたり兩方の掌を擴げて見せたりした。それでも犬は未練らしい顏をして容易に動かなかつたが、到頭仕舞ひに諦らめて何處かへ行つてしまつた。軍兵衛はなんとなく暢々した氣持になつて元の座へ戻つて煙草を喫してゐた。それから幾何の時間も經たないうちであつた。突然何處かでズドンと鐵砲の音がした。彼は思はず煙管を取り落して立ち上つたが、なんでも裏手のやうに思はれたので、直ぐ庭傳ひにそちらへ驅けて行つた。寺の地續きに可成り廣い空地があつた。其處まで行くと、彼は空地の方から出て來る異人の姿を認めた。それはクレーンといふ恐ろしく丈の高い若い秘書官であつた。秘書官は、白い靴下の片つぽとピストルとを兩方の手にぶら提げて大跨にのしり〳〵歩いて來た。譯を訊かうにも軍兵衛は言葉が通じないのでぽんやり立止つて眺めてゐると、是れも今の音に駭かされたと見えて護衛の士達や通辭が其の場へ驅け着けて來た。通辭は直ぐ樣秘書官と會話を交へたが、さも可笑しさうに笑ひ出して、

「各々方なんでもありません、犬が靴下を啣へて遁げたからピストルで射ち殺したのださうです」と云つた。

一同は「何だ馬鹿々々しい」といふ顏をした。然し軍兵衛は思はずはツと胸を躍らせて空地の方へ驅けて行つた。矢つ張りさうであつた。赤毛の、痩せた、先刻の小狗が、腦を射ち拔かれて枯れ草の上へ長くなつて倒れてゐた。黑血が鼻柱の邊まで流れて、白い齒をむき出してゐた。軍兵衛は嚇としてしまつた。

「なぜあなたは犬を殺したのです」と、彼は血相變へて戻つて來るといきなり秘書官に喰つて掛つた。

「私の靴下を啣へて遁げたから殺しました」秘書官はにこ〳〵しながら答へた。

「それは分つてゐる。然し、高が靴下ぐらゐの事で、生命を奪

るとは餘り殘酷ではありませんか」
秘書官は一寸面喰つたやうであつたが直ぐ反問した。
「君はあの犬の飼ひ主なんですね？」
「いや、さうではありません、然し……」と軍兵衛はへどもどした。
「それなら、私の行爲に關して君の干渉は受けない」
秘書官は「護衛の兵士の身分で何んだ」と云はぬばかりの傲慢な眼つきをしてから云つて、居合はせた二三の異人と面白さうに語り合ひつゝ向うへ行つてしまつた。

夜は更けきつてゐた。大きな爐には炭火がカツカツとおこつてゐるが、それでも寒氣が脊すじから襲つて來る。軍兵衛は起き番で獨りぽつねんと控え所に坐つてゐた。晝間の出來事が今日いちんち彼の頭の中でいつぱいになつてゐた。彼は、衆人の前で秘書官に侮辱されたことを思ひ返すと、識らず／＼身うちがかつと熱くなつた。
「それでもお前は武士か」
心の中で何者かが嘲けるやうにかう云つた。
棚の上の時計を見ると丁度巡廻の時刻が來てゐた。彼は爐の側を離れると、羽目に懸けてある鎗を手に執つて部屋を出た。

外は薄月夜であつた。激しく霜が降りるのであらう、地面も大氣も氷のやうに凝り固まつてゐた。軍兵衛は寒さの外には何事も忘れて、唯義務的に廣い境内をあちこち廻つて歩いた。裏手の、本堂と庫裡のあはひへさし掛つた時であつた。突然ギーと開戸をあけて一人の異人が外廊下の方へ出て來た。軍兵衛が物蔭から何氣なく見遣ると、それは秘書官のクレーンであつた。秘書官はフハ／＼した長い着物のかくしへ兩手を突つ込んで寒さうに肩をすぼめながら廊下を通つて便所へ這入つた。一寸の間忘れてゐた憤怒が、クレーンを見たために一度に軍兵衛の心頭に爆發した。同時に、殆んど無意識に、或る光景が彼の腦裡に映つた。彼の心は、何の分別もつかず逆上しきつてしまつた。彼は本能的に周圍を見廻してから、便所の羽目へぴたりと身を寄せた。鎗の柄を拉げる程固く握りしめながら。

間もなく、秘書官は便所から出た。其の長大な軀が眼の前に現はれた時、軍兵衛は全身の力を籠めて鎗を繰り出した。秘書官は物凄い悲鳴をあげた。そしてたじたじよろめいて向うの壁へ押し付けられながら、いきなりピストルを相手にさし向けた。ピストルの音も何も軍兵衛の耳には感じなかつたが、彼は腿のあたりをピシリと鞭で打たれたやうな氣がして、思はず鎗を放して尻餅を突いた。すると秘書官も脇腹へ鎗を突き通されたま

々バツタリ其の場へ倒れた。

軍兵衛は無我夢中で、跛を引き引き表の方へ遁げ出した。

五

軍兵衛は我が家の座敷で褥を敷いて寢てゐた。昨夜の出來事が彼の頭に映つたり消えたりした。折よく通り掛かつた品川歸りの駕籠に乘つて我家へ戻つて來た時には、彼はまるで此の世の人とは思はれないやうな相形をしてゐた。

「異人を殺して來たのだ」と彼が妻に云つた時、駭きとも悲しみともお律は何とも云へない轉動した表情をして暫時默つて夫の顏を凝視てゐたが、「そんな大變な事を遊ばして、貴郎のお身はどうなるんで御坐いましよう」と云つて泣き倒れた。それを見ると、軍兵衛は張り詰めてゐた力が一時に拔けてしまつた。恐怖、悔恨、悲哀、さうした感情が次第に渦卷のやうに起こつて來て、死人のやうにグタグタになつてゐる軍兵衛を夜徹し責めさいなむだ。

「貴郎、御家中の方が大勢お揃ひでおいでになりました」

とお律が側へ來て云つた。

「臥せつてゐるからと云つてお歸し申せ」

「さう申しました處が、是非御主人にお目に掛り度い、と皆樣が仰しやるんで御坐います」

「では、こちらへお通し申すがよい」

と軍兵衛は不安らしい容子で云つて、妻に扶けられて布團の上へ起き直つた。其處へ識り合ひの若侍ばかり四五人這入つて來た。

「斯樣な失禮な樣を致して居ります」

「いや何卒お構ひ無く。時に伊藤氏、委細の事は承つたが、實に大した事をおやりなされましたなあ。實は吾々は其の話を承つて愉快に堪へないで、斯樣に打ち揃つてお祝ひを申上げに參つた次第で御坐る」と中の一人が進み出て途方もない元氣で云つた。

「態々痛み入ります。拙者の短慮より斯かる大事を引き起こし、今更面目次第も御坐らん」

「何が左樣な御心配に及ばう。禽獸に等しい異人の一人二人斬り捨てたとて何事があらう。然し、今迄は家中揃つて腰拔けのやうに云はれたが、伊藤氏のお蔭で、今後は吾々まで大手を振つて歩けると申すものぢや。世間の奴等の顏が見度う御坐る」

「それよりも、拙者は異人めらの駭いた顏が見度かつたわ」

「あはゝゝ」

「あはゝゝゝ」

此の客が歸らぬうちに、又一と組の客が遣つて來た。そして

前の連中と一緒になつて、同じやうに軍兵衛の行爲を賞讃した。家中の侍達はあとから／＼遣つて來て、軈て廣くもない軍兵衛の家は客で一杯になつてしまつた。

「異人共が下手人を引き渡せと云つて來るに相違ない」

誰かゞ斯う云ひ出した。

「玆で伊藤氏を渡しては家中一統の名折れだ。どんな事があつても渡してはならぬ」

と異口同音に息まいて云つた。ワイ／＼騒がれて、來る人毎から口を極めた讃辭を浴びせられるうちに、軍兵衛の心持は何時となく變化して行つた。先刻迄の女々しい氣分は何處かへ吹き飛ばされて跡方も無く消えてしまつた。自分一個の行爲が、斯く迄多數の人に善い刺戟を與へてゐるかと思ふと彼は涙の出る程嬉しかつた。「全く、俺が異人を殺したばかりに一家中の名譽が恢復されたのだ」かう考へると、自分の一身を犧牲にする位は何でもない事のやうに思はれて來た。然し、肉體の疲勞と、極度の昂奮のために、しまひには逆上せて眼がチラ／＼したり耳がガン／＼鳴つて來たりして、彼は落ちついて物事を考へる力を失つてしまつた。

一同の心配も氣ぐみも徒勞になつた。東禪寺からは下手人を渡せと云つては來なかつた。そして此の事件は、幕府と英國公使と折衝の結果、加害者を死罪に行ひ、秘書官の遺族に幕府から慰藉料を贈るといふことで解決した。

軍兵衛は即日切腹仰せ付けられた。彼は眼が上がつて顔の色は眞蒼であつたが、態度にはちつとも動じた様子は無かつた。切腹の場へ臨んでからであつた。彼はふと思ひ出したやうな容子で、金之丞とお律を側へ呼んだ。

「わしは國家のために一命を捨てるのだから、決して歎いてはならぬぞ。そしてわしの亡いあとはお前達が夫婦になつて小供の養育をして呉れ。是れが今はの頼みぢや」

かう云つてしまふと、彼は眞實心にかゝる雲もないやうに、三寶の上の九寸五分を押し頂いて白装束の上から腹へ突き立てた。

柔道改革私見

小田常胤

△

我大和民族の精華として、我等が世界に向つて誇りつゝある武士道なるものは、我等の祖先が上下數千歳、戰鬪を目的としたる武術勝負に向つてこれが修練に身血を濺いで得たる結果の收獲品であつて、所謂島國的人種根情と、武術の修練によつて得た或る精神作用とが融合醇化し、意識せずして出來た武術勝負と言ふ目的以外の貴重にして高價なる精神的副產物である。

故に武術の一なる柔道も亦眞の目的は勝負上に立脚せねばならぬ。然るにこの修練することによつて無意識的に得らるゝ身體の發育、精神の修養と言ふ如き、第二義的要素と……世界的に高價に販賣すべき方便の裝飾として其廣告文には必要のものなりと言へ……武術勝負術の熟達とを同一品位の價値あるものとして取扱ふことは、此際其副產物を餘りに過重に見積りたりと言ふべきで、如何程商略的販賣用語を使用するも、柔道本來の目的としては勝負が主なるものであると言はねばならぬ。而して此勝負の練習よりは體育上に無意識的に或る效果を齎らして、祖國今日の盛運を保持する主なる原因となつたのである。

△

近來柔道を目して攻擊防禦に重きを置くは非なりとして嗤笑するものがある。如斯勝負を主とする柔道が眞の柔道に非ずとするならば、柔道は既に本來の意義を沒却したもので、武術としての柔道其物の必要によりて出來たる目的は既に爛熟し切つて玆に別種のものとなり終つたと言ふべきである。

此時去つて適當に運動し、而して滋養分を攝取せよ、危險なる柔道の修行に勝る萬々なりと言ひ得べきである。精神の修養又、他にかゝる迂遠の方法によらずに良方法は多々あることを忘れてはならぬ。

元來相手を殺傷するか、然らざれば自分が殺傷さるゝかと言ふ如き眞面目に考へなければならぬ問題にして、興味も本たこ

こに伴ふ方面に向つて生れ、又發達し來つた柔道が、所謂教育的の道德觀に支配されて、木に竹を接いだ如くに其副産物であるものを本來の目的であるが如く使川された時、武術として存在すべき柔道は全く存立の價値を失ひ終つて、玆に一種の遊戯となり終つたのである。柔道が今日の平凡なる型に行詰つたのは、この裝飾的負擔が因をなしたものであつて、卽ち各個獨立の運動としての其興味も又沒却され、從つて其效果の減殺された事も勿論である。晩かれ早かれ此點に向つても我柔道は革命を必要とするものであらねばならぬ。

△

其證據には、勝負以外に柔道を論じて何程の價値と人氣を博し得たものがあるか。宗像五段の著「柔道」の如きは教育家の弊なる總てを徒らに道德的感情に支配された結果、諄々として武術として必要なき順道を云々し、之を讀了せるものをして呆然として其論旨の那邊にあるやを捕捉するに苦ましめた。鈴木初段の「柔道の眞髓」又全篇通讀して其精深透徹の卓論に驚かされつゝ何等得たるものありや、其結論に曰く、柔道は禪と一致す云々。然り禪は森羅萬象なり獨り柔道にのみ一致するものではない、又一種の滑稽なりである。形式以上に向上？ せしめて柔道の價値を云々したものは皆斯ふした結論に到達する。それは所謂無い袖は振られず、無價値の土塊から高價なる鑛物を選鑛する事は到底神に非ざる限り出來ぬと同じく、何人と雖も不可能の事である。

此時に當り横山八段、大島四段共著「柔道教範」を見よ、講道館柔道の勝負を理論の表面より說きて明々白々たるものがある。我等柔道修行者は此書によりて何程の利益を得たるかを知る時、架空的理想を捏ねあげて作りたる曖昧なる書籍に勝る事但に月鼈の差のみでない。斯くて初めて柔道を論じて大自然に合致す、此書の一頁一頁、一句一句にして初めて修行者をして眞深の意義を認識するを得べく、男子の筋肉美を發揮し得べく、度胸、膽氣、決心等の必要なる武士道的第二天性は有意に求めずして得らるゝのである。勝負なる哉、勝負なる哉、柔道の生命はたゞこれにのみ存在す、勝たんが爲の柔道ならずば、世に何の柔道存在すべきやである。柔道に向つて此以上更に何物かを說く時、市井の賣卜者が大極を說き陰陽を講ずると一般、實力なき傳道者として憐む事切なるものがある。

△

勝たんと欲するものは實力を養成しなければならぬ。實力なくして勝たん事を冀ふは、食はずして生きんとするに同じ、到底不可能の事である。武士は食はずも高楊子などゝいふは、其

意氣は壯とすべきも畢竟負惜である。實力なきに他の目的外の價値を云々する柔道家が一かどの哲學者らしき顏をするに同じだ。講道館柔道修行者にして眞に實力あるものは負惜を言はず、哲學者らしき顏もしない。貴下は實的なるべき柔道家が哲學者らしき顏をするものを見たら、此人は必ず其實力なきものと思ふて多くの場合間違はないのである。

此等の人は現今の柔道を以て完全無缺一點の改良を施すべき處なきを確信してゐる如き顏をしてゐる。如斯前提のもとに柔道を取扱ふ事甚だ不可である、柔道を信仰する時代……或時期は信仰時代であつた……は既に經過してしまつた。現今は批評の時代である、工夫發明の時代である、大に改良すべき時代である、爛熟し切つた柔道をして更に眞に出來た目的の爲めに發展せしむべき時代であると確信する。

△

一例を擧ぐれば、自然體は柔道の本體にして變化自在である。故に攻擊に此姿勢を必要とす。自護體は變體にして防禦に效果あれども身體自由ならざるを以て此姿勢をとるべからずと言ふ。是從來柔道教師の說いた處である。併し是一長一短である。此時專心工夫するものがあつて、攻擊に自在にして又防禦にも效果ある一種の姿體を發明したものありとせば如何、換言すれば自護體にして變化の自由自在なる姿勢ありとせば如何。柔道は現在以上更に完全に近きものとなるべき筈である。

元來柔道は是までの或る因襲の如く一人之れが發明に任じ、他の來りて以て容喙するを許さぬと言ふ如き事のあるべき筈はないのである。若しそうであるとすれば是天才を無視した論であると言ふべきである。人一人の爲し得る經驗は時間に空間に、容積に精密の度に於て甚だ少ないものである。併し學理的に說明し得ずば單に力を角する無理なもので柔道としての價値なしと言ふ人がある。而し世上の事其初めは學術上の研究によりて成るに非ずして、其事の事實として存在するに到り初めて學理上の根柢を見出すものである。殊に天才は自ら形式を作りて自ら其形式を破壞する事は多いから、從つて或る形式は柔道勝負に於て不可であると言ふ如きは甚だ迂遠な話であると言はねばならぬ。

△

此等の人は一面新らしき發明に對してこれを輕蔑しつゝ、一面に其存在を恐怖してゐるのは事實だ。しかもこれは比較的實力なくして高段にある人の間に見る通弊だ。今後斯ふした方面に柔道は發達するとすれば、それは何時となしに錦袋に包み資藏深く保存さるべき骨董的のものとして存在するに至るべきで

ある。日本武術の純なるものにして、即ち日本的精神の結晶なる柔道は、武骨一邊の封建的に撫育せられ養成せられたるを忘却して、今既に個人的に又骨董的に爛熟しつゝあるのである。此時其弱點を看破し而して其弱點に向つて僅かに發明する處ありとすれば、其結果は果して如何、從來の柔道は粉碎せらるべきは火を見るよりも明らかである。面白からずや。現在の柔道は形式的に惰眠に落ちたり。勝たんとするものは自由なれ、敵の弱點に向つて新式攻撃法を試みよ、貴下の手腕は實に豫想の外に出づべきや論を待たぬ。能率と言ふ新らしき言葉を此場合持ち來るならば其增進に於て殆んど此迄企圖し得ざるものがあるであらう。改良なる哉、之れ柔道の本旨に叶ひ、一面其缺陷を改めて一層光彩ある完全なるものとする事が出來るのである。

△

次に柔道の現在と將來及び其に對する自分の獨斷的意見を述べてみたい。自分は此問題に就て率直に意見を發表するといふ事は、眞に柔道を愛する自分としての義務であると確信する。

客觀的位置に立ちて現在の柔道界の內面を見渡すと、恥かしいと云ふべきか、情ないといふべきか、憐むべしといふべきか、兎に角紀風の弛緩、意氣の頹廢に對して不平不滿不足を感ぜずにはゐられぬ。修行者が二人寄ると斯ふいふてゐる。

「嘉納師範が柔道界を退いた其後の柔道界はどうなるだらふ？」

實際柔道は世界的に發展せりと言ふて、狂喜雀躍してゐる一面には、斯ふした甚だしき不安定な狀態、致命傷的な病狀の潜伏してゐるといふ事を否定する事の出來ぬに氣が付かねばならぬ。尠くとも精神的に惰眠を貪つてゐるものでない限り、一人として此點に考へ及ばないものはない。全く現在の修行者はこの不滿の聲、不安の呻を洩らし、尙ほ將來に就て甚だ憂慮してゐるのは事實である。而して比較的平穩に見ゆるのは、修行者各自は皆「どうでもなるやうになるんだ」といふ捨鉢的な一番利巧な方法を以て諦めてゐるからである、

併し此等の修行者は晏如怡々として柔道の萬々歲を口にしてゐるものよりは、柔道を愛するといふ點に於てより以上であると言はねばならぬ。それは自己の利益の爲め一時的氣休めをいふて柔道を利用しやうと思はぬから……兎に角此等の明白なる客觀的事實卽ち皮相形式であり、抑壓拘束である此大悲劇に對し、先覺者となりて努力し、所謂柔道修行者の胸中に蟠る或種の不滿と憤怒とを率直に叫び出したものを見ないのは實に遺憾であると言はねばならぬ。

柔道を祝福する聲は常に聞き得る。併しこれ等は單に柔道に媚びて其間何物かの利益を求むるものゝ行爲である。眞に柔道

に對して思考してゐるもの丶聲でない。

△

嘉納師範は稀代の天稟と勢力を以て敢然として努力した結果、國家的に覺醒しかゝつた當時の青年の歡迎を受けて玆に柔道は非常の發達をなし、運動界を席卷するの概があつた。併かし其初め歴々具足してゐた武士道的精神は、其形貌と副産物を餘りに廣告的に利用し、これによつて其鑄型を作りたる結果、其氣骨を作るべき勝負的技を抛擲し、爲めに其精神を忘失してしまつたのである。

此等の青年は次第に其姸麗の眩惑に興味の索然たるものがあるは當然の結果であつて、同時に柔道界の內面に觸れた情弊を悉知した時、修業の初期に於ての夢想と、餘まりに異なる責任やら抑壓やらを見出して多少とも不滿足を胸中に起さぬものはない。例へば生存上如何に緊急な事と雖も之に伴ふ相當の興味と報酬等を見るに非ずして、單に義務として之を强ひらるゝ時甚だ多くの苦痛を感ずるものである。斯うした眞の目的を改造し、興味を失ひ從つて、其效果も又減殺せられたる不平に對する幾萬人の修行者の覺醒に對しては遂に整齊されずにゐる、甚だしく無秩序になつてゐる、混亂してゐる。果して嘉納師範は現在の柔道界を見て、一人滿足の笑を洩らしてゐるだらうか。若し現在の儘に進行してそれでよいといふならば、それは餘まりに近視眼的であると言はねばならぬ。

現在の柔道界は極端なる閥族思想の結晶であると斷言するに憚からぬ。高段者は自己の子分の昇段を營業としてゐる。それもよからう。正當に實力を有し、相當に柔道に對して功勞あるものを昇段せしむる事敢へて何の不可であらう。然かし事實は全く是に反對の結果を現出してゐるのは遺憾である。

高段者は實力の有無に涉らず、其有段者審查員なる肩書を利用して、只自己に近いものをのみ昇段せしめ、是れによつて自己の周圍に安全なる防禦の垣を築く事のみをつとめてゐる……此等の被推薦者が後日果して推薦者の爲めに犬馬の勞を盡すべきかどふかは頗ぶる面白い問題である。兎に角其當時は推薦者の爲め其位置の安全を保有せしむる光榮ある道具となつて甘んじてゐるのは事實である。

△

此等高段者は、勝負の時の拔群の成績のものは別問題であるが、而し此拔群中にも或手段によつて勝負の組合に手加減を加へたものはある。併し此れなどは比較的巧妙な昇段方法である。甚だしいものに到つては推薦者は被推薦者の襟を一度も捉つて稽古した事のないものも多數ある。

今日の高段者は所謂十年二十年以前の實力によつて、其後或る形式的理由のもとに昇段したものであるから、釣落、隅返とかの技を後生大事に保存してゐるに對して、今の若手の修行者は、餘まりに進歩した技を知つてゐる。故に體面を維持する方法として勢ひ稽古をせずに勿體らしい顏と哲學者らしい態度が必要な事となる。從つて其地位の安全を期する爲めには又多くの子分を作成せねばならぬ。茲に於てか有段者の亂造といふ事になる。此等昇段者のうちには比較的地位の高きもの、金を持つてゐるもの、自己と共同の利害を有するものは、それでないものよりは好都合であるは勿論である。そこで實力あり氣骨のある武士道的柔道は排斥され、脅かされ、惱されて、茲に形式的柔道、地位的柔道、貴族的柔道、成金的柔道が大に幅を利かす事になるのだ。

柔道の將來に對して、總ての實力ある修行者は、高段者が自己幻覺の犠牲となつて、斯ふした不公平を憤つてゐるのは事實である。

現在でさへ此通りなら、嘉納師範が柔道界を去つた場合は如何といふは、少しく眞面目に柔道に就て考へて居るものは憂慮してゐるのは當然の事であつて、それに就て今後の豫想もほゞ同一の結論に達する迄、今の修行者は覺悟してゐる。

△

柔道は眞に武士道的に律る改善を必要としてゐる。修行者の胸には燃ゆる如き改革の情熱は既に潜在してゐる。時代の平凡に倦き、抑壓拘束に堪え堪えてゐた不滿の動亂の殺到すべき好時機を待つてゐる、自己本位の高段者の其卑怯なる人格を看破してゐる子分は反旗を翻す時を待つてゐる。此時因襲の餘燼は、柔道それ自身の築いた高價なる物品と共に、目茶々々に破壞せらるゝであらう。或る勢力と好餌とに口を箝せられてゐて、其才能と情意とを拘束せられてゐた、從順にして不平なる者は憤然として立つ時である。

斯うして實力派と形式派とが分離するであらう、而して各勝手な方面に惡口の唾を吐きかけつゝ發達し、現在以上更に猛烈なる生存競爭を開始するであらう。此時全國各地の道場は自己の勝手な階級を制定するであらう。野口某の如き無力無名の九段の如きは續々として雨後の筍の如く輩出するであらう。

此後の柔道は、英雄的大天才が出現しない限り非常に劣等なものとなつて衰亡するにちがひない。

何れにしても目下の柔道界は、其修業者の多い割合に必ずしも振興を暗示してゐるものとは思はれぬ。

嘉納師範は近眼的眼に眼鏡を掛け、講道館の高段者は自己本

位を捨て、而して眞に武士道的に柔道を改造して永遠福祉の爲めに、最も公正を以て修行者に對せざる限り、遺憾ながら其前途は甚だ寒心すべきものがあるのである。

△

序だから自分の改良意見を具體的に述べて見る。あと僅に數頁は自分が是まで喋々論じた事の結論である。即ち第一に

講道館が與ふる階級に年限を付し、或時期の間相當の實力を維持し得ざる場合は、其階級を引下げ、又或特別なる名目を與へて柔道圈外に淘汰する事

第二に

審判規定を改正して、其勝負は正々堂々と相對せしめ、勝負者各自の其得意の技を封ぜぬ事

以上の如き改正は、現在に於て緊急に最も必要なる大問題である。この改正により皮相形式であつて、武士道の本能を拋却し眞精神と沒交渉にして、こゝに頽廢し凋落しかゝつた柔道は、初めて其生命を恢復して古人の心境に到達するであらう。かくて此混亂と無秩序を極めた柔道界の弊は根本的に一掃されて、その跡に透徹せる、灼熱せる、眞に威力ある、新らしき柔道は創造さるゝであらう。

源泉一掬の水は、下流百石に勝る。武士道的精神を副産物として作り出した柔道は、美容術でもなく、又謎でもない限り、其技を尙ばねば、其末路は慘憺たるものがあるであらう。

今秋美術界收穫批判（三）

國畫創作協會

▽國畫創作協會批判

鏑木清方

國畫創作協會を通覽して最初に受けた印象は、自己の存在をいかにも力強く主張したことに依つて與へらるゝ快感であつた、そして尙快く思ふのは、そうした場合に殆んどつきもののともいふべき品の惡い覇氣といつたやうなものが會員五氏の作にはちつとも見えなかつたことである、これは五氏の作がいづれも相當のシツカリした技術の素養を有つてることがしからしめた結果であると思つた、良い素質を有つて居ても表現の技巧には

何うしてもある程度の素養がなければならぬものである、從來起つた新人の集團はいつも此の缺陷を免れぬものが多く、その運命は彼の新劇團と同じ轍を踏むことになつて居たが、創作協會は先づ此の點に於て安心な技巧を摑んで居ることは賀すべきである。

會員中世間から未知數の故を以つて多少疑惧されて居た若き野長瀨晩花氏の作も、期待より更に強い力を示されたことは愉快であつた。『初夏の流れ』は全く力の作と言ふべきもので、大きな畫面の隅から隅まで充實した生の力の活き〳〵したのを賞したい。構圖も色の組合せも極く有効に扱はれて格別の破綻を見出さない。蹉滔と漲り落つる溪流は此の畫に於ては脊景というよりは、これが此の畫の有つ大きい活力の主要分となつてゐるのだと思ふ。中央に點ぜられた女の衣の燃えるやうな熱い〳〵眞紅の色は、更に此力のを助成すべき重い役目を果してゐるのである、分布された合歡の花の紅にも、圖の左方に火花が散つたやうに圓錐形に簇立した橡葉の一團にも、初夏の光は照り映えてゐる。日本の繪の具でこれだけの強い色調を作ることはかなり不便を感じられたことであらうと思ふが、墨と金との二色が何うも良い結果を示して居ないと思ふ、女の髮と岩石の皺の墨、溪流と左方の少年の下半部に強く用ひられた金とは、他との色調上やゝ釣り合を缺くのみか、少年の場合にあつては物體を扁平化し、且つ硬く冷い感を與へる嫌がある。併しかくまで強烈な色調を作つて毫しも卑しいところがないのは思ふに作者の態度の純眞を語つてゐるものであらうと思ふ。

村上華岳氏の『聖者の死』は未完成の作とある、未完の作を公にすることの可否は今しばらく言ふことを止めやう。氏の作品と晩花氏の作とは今回の出品に於て動と靜との兩極を示してゐる。晩花氏の作を觀て轉じて此の畫に對ふ、活き〳〵した生の後に迎へる靜寂な死、何か哲學者めいたことが考へさせられる、此の畫から受ける感じはやはり未成品に對する感じであるといふより他はない、あまりに同一の形貌を有つ此丘には好意を有し難い、が、いかにも清淨な、純な氣品を育するとは此の作のといふより此の作者の識者にいたく囑望さるゝ所以のものである、此の畫を直ちに傑作だとは言ひ難いけれど傑作となり得る畫だといふことは言へる。他の四氏の構圖にも仕上げの上にも充分の時間を有して居たと見えるのに比して、いかにも時間の足りないといつたところのあるのは（それが未完成だと言へばそれまでだが）惜しいことである。

土田麥僊氏の『湯女』は協會の代表作とされて、衆評一致して推賞されて居る、私もそれに異論はあるべくもないが、制度とし

て等級を別たねばならぬ場合は格別、漫りに作品に高下を附するとは望みでない、他の四氏の作にも各自の立場に據つて全力を盡してゐる、小野氏の大きい自然を捉へたところ、榊原氏の自然を眞面目に小さく深く觀ようとしたところ、野長瀬氏の旺盛な生の力、村上氏の靜寂な理想の表現、いづれも個性の發揮に餘念がない。『湯女』は特に最も大なる魅力をもつて人に迫つて來る、『湯女』の推賞さるゝ所以は此處にある。構圖と色調の驚くべき巧妙さは從來の氏の作品中でも最も優れてゐると思ふ。『大原女』の有つ瑰麗な形式に更に傳統的趣味の饒かなる情趣を盛り、平面的な構圖を去つて立體的な、奥深く進んでゆく構圖に赴いたことゝ、それを統べるに快い色調を以つてしてある、作者も恐らく會心の作であらう。松になりたや有馬の松にと吟みながら眼も遥かに遠い群峯の青巒を望むと、觀者は自づからいでゆの湧く溫柔鄉に誘はれて、湯女が情の一節に陶醉の境に導かるゝ、女が着たる暖かき紅の色こそ忘れ難き印象である。

小野竹橋氏の『波切村』は驚くべき努力の收穫である。此の畫のいかなる一小部分を切り放して見ても、無數の風景畫を得らるゝ程惜し氣もなく作者の自然讃美を盡くされてある、此の畫に對ふと大自然の前に柔順な作者が輝く海の上を馳る雲にも、小さい灣にさし込む潮の瑠璃のやうな色にも、胸を跳らして佇む姿が見えるやうである、『湯女』と『波切村』とに於てはかなり日本繪の具の效果が示されてゐることを見出す、屛風といふ形式と裝飾的意義も有用に扱はれてゐるし、薄群青の海の色は殊に效果を擧げてゐると思ふ、たゞ主要な部分を上部へ持つて行つてあるので中部以下にかゝる大畫面として赭色の反覆が聊か倦怠を覺えしめぬでもない。

榊原紫峯氏の『青梅』は第一印象には多く同感を有ち得なかつた、去年の『梅雨霽』と思ふ心の方が强かつた爲であらう、二度、三度と觀てゆく中に作者の謙讓な心をもつて自然に對したことを思つて『梅雨霽』と比較して論ずることを誤りであると思つた、紫峯氏の此の畫の態度は速水御舟氏の『修學院村』と似て、これにも東西の差を示してゐる、『青梅』の主題によつて知らるゝ如く作者も世間も右の方を取つて居るが、私は左の色調も構圖も好きである。右の躑躅の花の淡紫を帶びた中へ朱を點じた色調を悅ばぬ、（薔薇にも同一の彩色があつた）梅の葉と楓の葉の見込みは正しいけれども硬い嫌ひを免がれなかつた、梅の樹膚と紫陽花の葉はいかにもよく觀てあつたと思ふ、棣棠と紫陽花の葉とが同じ厚みを有つてゐるものと感じさせられるのは何うにかしたい。これは材料の話だが枠張の絹地の出品は褒

を打つか、具の入つたもので潰してないものは、絹地と描かれた畫との間に、岩繪の具などが多量に用ひられてあれば何更一種の汚ならしいやうな、快くない色調を生ずる。第一室の『水密桃』も佳作であつたが地塗の上にさうした不快さがあつた、『青梅』にも地布の上にそれを感じた、ザラついた、何處となくシツクリしないとでもいはうか、いつも私は絹地に就いてそれを感ずる、絹地がせめて鱗瀨位な地質を有つて居たらよいのであらう。

會員外の作ではやはり入賞の『降魔』と『水密桃』がよい、入江波光氏は何處か芳年を思はせる、續いて發表の作が待たるゝ。

▽國畫創作協會展覽會を觀て

平福百穗

○「純眞」の聲を揚げて生れ出た、この展覽會にも隨分イヤなものがあつた、併し會員諸君の力作を心ゆくばかり觀るを得る事は愉快であつた。

晩花、竹橋、紫峯、華岳の諸君に敬意を表して、麥僊君の作について一言して見たい。

「湯女」には氏が持つてゐる鋭さは稍々神經質に傾ける觀があるが、その圓熟せる技巧の陰に包まれて、畫面の大部分を占めてゐる松や遠山も、建築や人物との調和を飾り破らないで、憎い程の悠揚さを示してゐる。全體から受ける氣分は奇麗な甘い菓子を强いられるやうな趣もないではないが、それは作者との趣味の相違の爲であらう。「大原女」や「三人の舞妓」や昨年の「春禽趁晴」に於ても年と共に目を新にして氏が才の愈々大さを示してゐる。動もすれば一種の輕薄なる技巧を誇る栖鳳氏の門から氏の如き人を得たる事は、偏に氏の天分の然らしむる事とはいへ、又畫壇の推移を察知して甚だ興味ある事と思ふ。而して氏は正にこの潮流に頭を擡げて乘り出して來るべき第一人者であると思ふ。

青春の意氣

土井晩翠

言論と思想の自由、光明の
流あまねく布くところ
魑魅魍魎の逃げ散るを見よ

その夕光燦爛とかゞやきて
デモクラシイの聲あぐる
青春の意氣空も燒くべし

その夕空に星照り、地に若き
「未來の望」幾千の
聲一齊に自由の凱歌

東方の眠久しき邦の子ら
今燦爛の新たなる
光明に覺む、嬉しからずや

曲學と阿權と黴と奸侫と
力あはして塞ぎたる
世界思潮の波ほとばしる

空涵す世界思潮に身をのせて
示威の運動今見るか
至高學府の青年の意氣

光明にさめし未來の國士なる
幾千のむれ義に勇み
自由のために博士を衛る

あら嬉し閥族毒を吸ふ處
毒の獨國倒れたる
此年見たり青年の意氣

世は移り時は過ぎ行く、いつ迄か
意氣の青年閥族の
奴隷となりて身を狭むべき

盛なり靑春の意氣、此邦の
望みなんぢの雙の肩
仰げば旭日十丈高し

閥族の垣と呼ばれし不祥の名
今こそ灑げ、赤門の
健兒の意氣を心より歌ふ

權勢の前に土下座を强ひられし
時を隔つる五十年
奴隷の夢は尚永かりきし

「民は本」千載不磨のおほいなる
眞理なにとて昨日まで
なほ訝れる者の殘りし

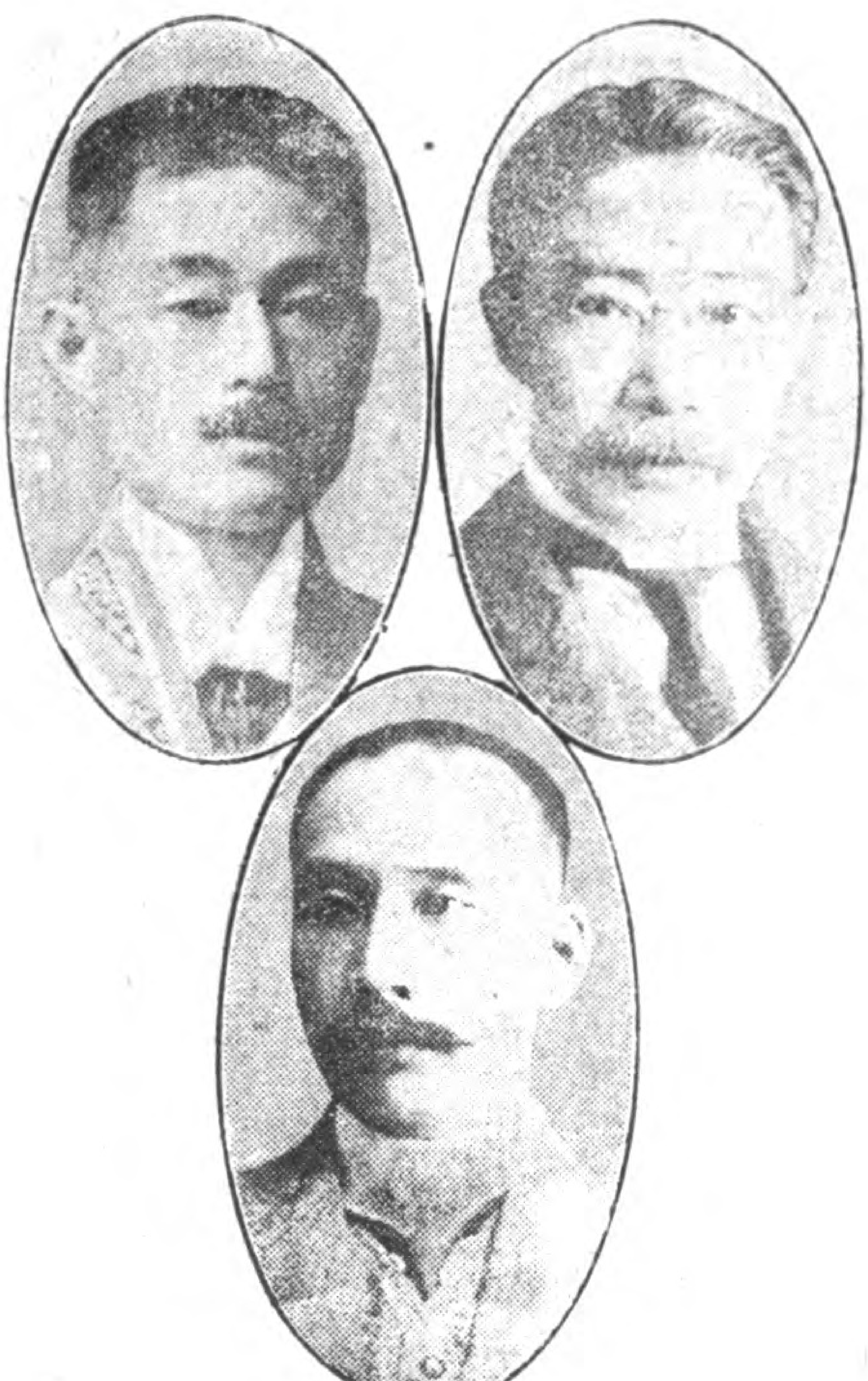
權勢の前に久しく閉ぢられし
扉ひらけて光明は
十方照す、嬉しからずや

大空にかゝる七の彩よりも
いみじ地上の青春の
新たの叫び—世は改る。

外交舞臺當面の三花形

講和準備委員の珍田松井兩大使と
新たに支那に駐割する小幡公使

人物評論（九十九）



▽珍田、松井兩大使と小幡公使

文學博士　三宅雪嶺

世間で國民的外交とか、舊人物は駄目とか云ひながら、いざといふ場合所謂舊人物

を引出し、一切を之に委ねようとする。多數は先づ其狀態で、獨り日本に限らず何國でもさうと云へる。多數は益す力を獲るにしても、見地から云へば程度が低く、唯年を逐ひその高まるを望むの外ない。ヴエルサイエ宮殿に於ける講和會議は世界晴れの場所で、其處に列席するだけで一代の面目のやうに考へられる。さう考へるも無理が無い、今度は伯林會議以上の重大なる會議である。千載の一遇でなくても百載の一遇、少くとも數十年の一遇である。外交に馴れぬ日本に於て未曾有の事とするは尤である。實際の效果如何よりも、何人を派遣するが其場合に適當かと云ふを問題とする。山本伯だの、加藤子だの、伊東子だの、各加擔人がある。中にも加藤の爲めに奔走するものが眼に立つ。三井關係者は加藤よりも山本又は其他に傾くらしいが、三菱關係者は加藤一點張りと見て差支へなからう。特別に三菱に關係なくても、何れかと云へば加藤に人氣がある。現在の外交官中加藤程の聲望あるもの無く、外交官を物足らず感ずと同時に、もつと重味のある人をと思ひ、指を加藤に屈する。加藤子を特使とし派遣するも可い。特使たるべき相應の資格を具へて居る。短處もあるけれども、何人にも完全を求むる事は出來ぬ。

けれども列國の重んずる人物を選ばねばならぬとて、加藤を推するのは少しく違つて居る。列國で重んずるといふのは、何人が何處で知り得たのか。列國とか何とか大雜把に言ふべきものでない。名の知れて居る所から云へば、今の所山縣公及び大隈侯が第一であらう。使節となれば何國でも相當の敬意を拂ふ。加藤子は名望よりも能力を認むべきである。擔ぎ上げるにも多少考へて然るべきである。

加藤子が行くも、一層大頭なる西園寺侯が行くも、駐英大使珍田子及び駐佛大使松井氏が會議に列するであらう。準備會議に列する事になつて居る。或は駐米大使石井子も列するかも知れぬ。特使が行くと否とで幾分の差違あるに相違なけれど、大體の事は此邊で定まる。本國で外相が外交調査會及び閣議で事を議し、方針をかの大使連に示すべきが、實際の事は大使連に於て運ぶ。事に依つては遣外使臣に一任するにしても、突發の事變無き限り、一々本國政府と交渉すべきである。掣肘されては困るなど言へるものでない。電信が無ければ格別、電信で大體の事を相談し得るのに、全く一人二人で勝手にされて堪るものでない。何人が使節となつても、必ず本國政府と諮らねばならぬ。ならう事なら國論が定まり、政府が之を基礎とすべきである。全權を一人に委ねる事は、委ねられた當人が政府の方針を呑み込んで居ると認めての事である。凡べて其方寸に在るなど今時云ふべき事でない。それは帆前船時代の事である。今

は過まつても過まらなくても本國政府が主であつて、大使は政府の方針に由つて實際の事を運ぶ事になつて居る。固より大使より政府に注意するやうな事がある。注意を與ふるの宜しきを得ればそれだけ愈よ好い。けれども一切萬事大使任せといふやうな事があるべきでない。

政府の方針に因つて事を運ぶとすれば、珍田子及び松井氏は任に堪へぬ者とせぬ。外交の事務に馴れた點から云へば珍田は二と下らぬ。故林伯は外交事務に練熟して居つたが、それ以來先づ珍田であらう。主なる國々に駐在し、知り合ひも尠くない。英國にも米國にも受けが好い。好いのでなく、惡いといふ程の事がないのであるとも云ふが、比較的物が滑かに運ぶ。機敏といふやうな事が無くとも、大體の骨を心得て居る。夙くから外國人と交り、外國人の思想及び趣味を解して居る。故本田庸一は青森縣の東北義塾で珍田の先輩である。外交家に成つたならば、珍田の先を行く所である。初め政界に奔走したが、後宗教生活を專らにし、メソヂストの監督となつて居つた。珍田も宗教界に居れば其邊の所であらう。

松井氏は珍田程の經歷ないが正則の教育を受け、事務を執る事に綿密、その佛語は珍田氏の英語に讓るまい。皆何程か三四ケ國の語を心得て居つても、自在に話すとなれば難かしい。彼程英語若しくは佛語に通ずれば大丈夫であらう。何分にも斷えず其道に當つて居る所からして、準備會議及び本會議のいきさつに詳しからう。意見を立て方針を定めるは事務に當らんでも出來るが、事務に斷えず携はるに踰した事はない。人と話し合ふさへ常に話して居らねば間誤着く。會議の事に何うしても其時分まで常に事務を見て居つた者が安全である。外交上に物馴れた點で彼の三人は申し分ない。外交よりも内政が先きといふやうな事になつては、彼の二人は役に立たぬ。元老を說き伏せるとか、國論を纏めるとかいふ事になつては何も出來ぬ。其點は故小村侯が遙かに優つて居る。二人は自ら之を承知して居るらしい。珍田は外相たるの交涉があつても辭退した。外相職は普通の政治から離れて居るけれども、議會の面倒を見るなど好まぬ所である。加藤子の如く一黨の首領となるが如くなるを望まず、又なる事が出來ぬ。珍田は或は宗教運動、社會運動に努力し、相應の成績あらうが、松井は之れも難かしい。然し珍田と違ひ、外相たるを辭退すまい。次官の格を以て大臣とならう。何にしても事に馴れて居るので、會議に列席して人に笑はれるやうな事がなからう。其成績が好いと否と、本國政府の力が主である。政府から示された範圍内で、相應に事をなすに堪

へる。他人をして當らしめても、それ以上に映える事はなからう。あつても僅かである。唯本國政府に何程の注意を與へ來るか疑問に屬する。日清戰役の際靑木公使のやうに出拔かれては困る。然し同盟國若くは准同盟國として眞逆出拔かれるやうな事はあるまい。其邊好く氣を着けて居らう。日本が歐洲で戰時に活動したならば、歐洲に關しても發言すべき事がいろ〳〵あるが、今は大略英、佛、米、伊等が主な發言者であつて、東洋に關し日本が相當の權利を主張し、他の反省を促すべきである。其邊の事は餘り難かしくない。與國に相談しても大抵で纏まる。

今の所講和會議が最も晴れの場所であつて、何人を派遣すべきかを云ひ合つて居るが、實際の難局から云へば駐支公使の方が重い。講和會議は東洋に關係の事ありと云ふが、東洋では何と云つても支那に關聯する事が多い。之れまで駐支公使は兎角失敗勝ちになつて居る。公使の更迭も頻繁である。關係の多い國々で日本程頻繁に更迭するのが無い。日置氏は初めから人が特別に期待しなかつた。加藤外相は電信で處置するので、誰れ彼れと云ふに及ばぬとした。林男は自ら大使より公使に轉じ、餘程抱負あつたらしいのに、何等見るべきものなく、畢り失敗に終つた。その後ちを受けて小幡氏が四十六歲で新に任に膺たる事になつた。內田外相とまゝ快からぬ事があつたに拘らず榮轉といふべき次第となつたのは、內田の雅量を褒むべきでないとはせぬ。謂はば味をやつたのである。けれども他に差當り人が無く、何でも押着けねばならぬやうになつた所もある。小幡氏が駐支公使となつたのは、榮轉は榮轉でも時が惡い。支那內地が面倒になつて居るが上、講和會議が差迫り、いろ〳〵暗討ち的の策略が行はれる。小幡氏は人物が確かりして居り、抱負も意見もあるけれど、隨に事を處置する臨機應變的人物でない。何年か任に膺れば必ず相應の成績があらう。支那により以上の適任者を覓めるのは難かしい。唯今後一年間摩つた揉んだで手を着け難い。一年は何うとでも過し、徐々漸々日支親善及び對支經營に從事すれば、數年後に成績の明かなるものを見るであらう。

併し小幡は苦勞性であつて、笑つて過す事が出來ぬ。責任を重んじて一々氣にする。併し身體が強くなく、一々氣にしては到底遣り切れない。いろ〳〵の方面から不平も出やう。支那の各黨派から勝手を云はう。大體の上で見當が着くが、多事を括り高枕で時を待つたりする事が出來ぬ。餘り心配すれば病氣になる。若し身體が强壯で、何でも來いで負擔し得らるれば結構であるが、さうは行くまい。折角適任者を得たるも、惡るい

時に赴任するので身體が氣遣はれる。其邊山本伯とか加藤子とか、身體の頑健なのが羨ましい。講和會議の特使に擬せられる人物は支那へでも行つて貰ひたいが、それは頭から斷はらう。やはり人は世間の言ひ囃す晴れの場所を好む。虛榮と云つても見榮坊と云つても、由良之助に扮りたがる。また贔負の人を由良之助にしたがる。けれども國家に於ける效果から云へば、講和會議で働くと、北京に於ける日本公使館で働くと何れが優るか、遽に謂ひ難い。一つは餘りに晴れの場所であり、一つは餘りに割りの惡い場所である。唯祭騷ぎせず、少しく落着いて考へたらばどうであらうか。

▽當面の三外交家

鵜崎鷺城

我が外交官中現に晴れの舞臺に立つてゐるのは珍田、松井兩大使と小幡公使で、少くも此の三人は當面の時局に最も直接の關係を有する外交界の花形である。特に珍田と松井は縱令ひ本國より講和大使を特派することになるにしても、必ず講和會議に出席して重要なる部分を働かんとし、近く開かるべき準備會議には差當り日本の代表者として參列することになつてゐる。

珍田は一昨年夏米國大使から英國に轉じ、松井は其の前年外務次官を罷めて直ぐ佛國大使になり、共に駐劄場所が聯合國の中心である丈けに、一入苦勞が多いと同時に又た働き甲斐のある位置に立つたのである。昨年末獨軍が伊太利に侵入したとき、十二國の代表者を一堂に會した巴里會議は、歐洲戰勢の一轉機を劃した開戰以來の重要會議であつたが、當時珍田と松井とは日本を代表して參列した。又た此の間の休戰會議にも出席して重大な評議に與つてゐる。斯ういふ關係から歐洲の現勢に通ずる點に於ては先づ此の二人を數ふべき道理である。閱歷から云へば珍田は外交界の先輩で、內田、石井、松井、伊集院等は明治二十年以後に外交官になつたのであるが、彼は明治十八年を以て外交生活に入り、而も其の前から私立學校や一高の教師として社會に立つてゐる。今の遣外使臣中一番任地の多方面に亘つてゐるのは珍田で、先づ領事若くは總領事として上海、桑港及び南米に勤務し、次に辨理公使として白耳義並に和蘭に駐劄し、公使として露國に行き、更に大使になつてからは獨逸、米國を經て英國に出使してゐる。即ち伊、墺、伊を除けば東西兩半球の主もなる國々を遍歷してゐる。其の間三十四年から四十一年まで日露戰爭を挾んで外務次官に任ぜられ、歷代の次官中一番期間が長かつた。再度の外國出使以來殆んど十年に近

く、嘗に先輩株として甲羅を經てゐるのみならず、外交界の苦勞人であるから、從來屢々外相の呼聲を立てられ、現に加藤が大隈内閣の外相を罷めたとき交渉を受けたこともあつて、順序から云へば石井や本野の前に外相になつてゐる人である。

此の人は外國の事情に通じ、外交上の典故慣例に明るく、辭令應酬に嫺れ、多年領事勤めをしたし、特に七年間次官の職にあつたから事務に長じてゐる。元と米國で學問した人であるから英語は本場仕込みで手に入つたものである。幾分か東北人通有の鈍重な所があつて、何方かと云へば溫厚肌の人だけに、直覺的敏感と覇氣とを缺くが、其の代り人格に於ては立派な紳士である。單に人柄から云へば、或は英國などに向くかも知れぬ。然し外交家としては卓拔な抱負や手腕があると云ふ方でなく、政治的才能にも乏しいようである。何さま飜譯官、領事、總領事、辨理公使、全權公使、次官、大使と、丸で判で押したような階段を履んで來た人で單に普通の意味の外交官たる所から云へば、經驗家には相違ないけれども、世界の大舞臺に押出して第一流の外交家や政治家と折衝を鬪はすと云ふ手腕は無い。何處までも忠實に細心に當面の事を捌いて行く方で、謂はゞ一つの鑄型に嵌つた外交家である。それ故に外交上著しい功業を期待されぬにせよ、少くも爲すべく定められた事柄については、遺つて退け、然し生兵法でない丈けに却て或る程度の安心が置けるかも知れぬ。

松井も外交官としては相當古顔の方で、石井、伊集院などよりは先輩である。公使館書記官時代は佛蘭西や英國に勤め、支那の首席書記官であつたこともあり、在米大使館參事官から本省の參事官に轉じ、それから牧野伸顯の外相時代に次官になつて次の加藤に及び、加藤の覺えは大分目出度たかつたらしい。そこで石井が外相に任ぜられると同時に、加藤の推薦で駐佛大使に任ぜられたのである。才走つた調法な男で、次官とか參事官どころの地位に置けば相當役に立つが矢張り因習的に定められた紋切形の法規と辭令の範圍で、器械的骨折りに沒頭する外交家で、スケールは極めて小さい。一時世間でハイカラ外交、靑二才外交、通辯外交と云ふ語が流行したが、松井などが此の流行語の標的となつた一人である。相當の年輩でありながら、見掛けは年よりも若く、貧弱と云ふ程で無いにせよ、ノツペリして形貌上の威嚴に乏しいから、外交官としては談判などの場合に押出しの點に於て損な所がある。松井に較べると珍田は風采に重味があつて押出しが利く。

講和會議の使節については珍田や松井のような出先きの外交官で間に合さずに、相當な人物を特派せよと云ふのが國民全般

の全輿論である。今度の講和會議は殆んど世界を包括する大問題を決定する大會議で、其の問題の主要複雜にして規模の大なる點は、歷史上有名なものになつてゐる維納會議や伯林會議の比では無い。少くも二十何箇國の代表が一堂に額を合せる丈けでも天下無比の偉觀である。況んや各國代表の折衝に上るべき問題は啻に戰爭終結に關する條約のみならず、進んで世界の政治、人類の生活及び思想問題に渉り、世界改造の新紀元を劃するのであるから、尋常一樣の外交官會議と違ひ、世界的大國策を定むるのである。講和會議に發言權を有する日本としては、東洋の盟主として事の東洋の利害に關するものについて發言を重からしめるの位置を占め、大事を誤らない丈けの用意と努力を要する。日本としては講和會議に多くを期待することが出來ぬと云つて、頭から卑下して掛り、それ故に駐外使臣の代表で澤山などと云ふのは以ての外の愚論である。會議の性質から判斷して各國競ふて第一流の代表的人物を參列せしめんとし、特に聯合國は首相や外相が出馬することになつてゐる。米國大統領ウィルソン氏も、歐羅巴に出懸けるかも知れぬと傳へられてゐる位である。我輩は必ずしも珍田や松井を安手な代表とは云はぬが、輿國の地位に立つ日本としては、東洋の盟主たる面目より云ふも、代表者を重からしむる所より云ふも、將た列國に對する感情から云ふも、大使を特派するが當然で間に合せ主義、便宜主義は講和會議を輕んじ、又た自ら輕んずる所以である。出來得ることとなれば準備會議にも特使を出席せしめるに越したことは無いが、遠隔の地とて時日の餘裕が無いとすれば、珍田、松井を間に合せに代表せしめるの外ないとして、更に二人を正式會議の大使に流用するのは考へ物である。特使と云つても元々大人物が品切れの今日ゆへ、理想的の人物を得ることは困難だから、大概の所で我慢するの外ないが、少くも日本で第一流と評價されてゐるものを擇ばねばならぬ。此の際霞ケ關型の外交技師に大事を託するのは少しく不安である。珍田と松井は現に英佛に駐箚する人であり、既に巴里會議にも休戰會議にも出席して一通り呼吸を知つてゐるから、副使として助手の務に當らしむれば相當役に立つだらう。

新駐支公使の小幡酉吉は外交界の後進であるが、霞ケ關通の鑄型に入らない新人物で、今度支那公使に任ぜられたについては一般に好評を以て迎へられてゐる。唯だ彼が加藤外相時代の例の日支交渉事件の主要人物であつたので、一部の支那人は感情の上から新聞などで、妙なことを書立て、又た爲めにする所があつて之れに附和雷同する外國人もあつたが、北京の外交部を始め南北の思慮ある支那人は、支那を解するの公使として歡

迎し、初め忌味を書いた外字新聞や漢字新聞も今ではお世辭を言つてゐる。小幡は明治三十年法律科の筧克彥、赤司鷹一郎、江木翼、政治科の美濃部達吉、立作太郎等と同時代の帝大出身で、中軸の成績で出てゐる。元と石川出身の外交官には前駐獨大使杉村虎一、前外務次官倉知鐵吉がゐたが、今では小幡唯だ一人になつた。試補時代から支那方面に行き、芝罘領事、天津領事を經て總領事に進み、日置が南米から支那公使になるまで天津にゐたが、芝罘領事としては故水野幸吉、天津總領事としては伊集院に次ぐの名領事と云はれ、日支兩國人の間に令聞があつた。彼が公使館一等書記官に進んで日置の下に行つたのは、是非一枚支那の事情に精通するものを日置の補佐役に附けて置く必要があつたからで、公使が無能の日置だけにいろ／＼苦心が多かつた代りに彼の力量が自然引立つたと云ふ所がある。

日支交渉については外交總長の陸徵祥や次官の曹汝霖を向ふに廻して、表面にも裏面にも活動し、談判なども肝腎の日置よりは彼の方が押も利けば要領も得、隨つて重きを爲してゐた。小幡が傍にゐたからこそ北京の公使館は持つてゐたので、日置は單に名目上の公使に止り、彼が事實上の公使であつたのである。然るに政府も終に日置に愛想を竭し、伊太利の林を呼還して支那へ差向けることになると、小幡は和蘭公使になつた落合謙太郎の後へ行つて奉天總領事になることに一旦は內定したが、急に大使館參事官に進み、林が北京へ乘込むまで代理公使を勤め、現參事官芳澤謙吉の赴任を待つて歸朝し、間もなく小池張造と入れ代つて政務局長に任ぜられたのである。是れより先き小池は參謀本部の軍人と諜謀し、猪口才な眞似をして對支政策に惡い結果を及ぼしたので、責任上內閣更迭と共に罷めなければならぬ羽目にあつた。然るに外相の本野は多年露佛に膠着し、歐洲の情勢には通じてゐたけれども、支那問題については智識に乏しいので、政務局長の後任は是非支那通が必要であつたから、小幡の任命を見た譯で、實は彼が大使館參事官になつたのは政務局長の前提であつたのである。曩に彼を日置に配して補佐役とした如く、更に本野に配して對支政策上片腕たらしめたのは人を得たと云はれた。今度小幡の後に政務局長になつた埴原正直は、十七年以上も米國に駐勤した有數の米國通であるが總じて歷代の政務局長は支那通と呼ばれる人物を任用する習はしになつてゐる。是れは支那關係の問題が一番多くして最も面倒であるから、勢ひさうなる道理で、故山座圓次郎といひ、阿部守太郎といひ、倉知鐵吉といひ、小池といひ、いづれも嘗て支那勤めを經驗し、少くも支那に關して知る所ありとする人々である。それ故に小池の後任として小幡に考へ及ぶは當然の

順序であり、何人も適任なるを認めた所以である。

外交官には歐米向と東洋向とがある。珍田、松井、石井、佐藤などは歐米向に出來てゐるが、林、伊集院等は東洋向で、後者の雜馬住ひなどは何となく映りが悪い。小幡も東洋向の外交官で、是れまで唯の一度も歐米へ行つたことが無く、明治三十一年から今日まで支那にゐて、種々の事件に出會したし、又た支那人を知つてゐる。外交官の支那通と云ふ中にも智識の深淺廣狭がある。小幡は徹底的に支那を解してゐるか疑問であるが鳥瞰的に知ると云ふ方でなく、少くも全局に對する觀察と考慮を以て對支政策を誤らないように注意してゐる跡がある。それ故に從來の遣口は餘り筋道を外れてゐない。支那人に處する呼吸を解し、一つの定つた意見を有つてゐるようである。日支交渉事件のときなども、彼には一つの考へがあつて、屢々本國政府に意見書を送つたけれども、謂ゆるハイカラ外交官や青二才外交官の爲めに顧みられ無かつた。それ故に日置を援けて折衝の任に當るについては隨分人知れぬ苦心があつたらしい。彼は人間にドツシリした所があつて、頭も好ければ骨節もある。何方かと云へば豪傑肌の方で少しもハイカラな輕薄な所が無く、當世流の外交官としては餘りに無愛嬌で非外交的であるかも知れぬが、其所に彼の人格が光つてゐる。彼は派手な外交官でなく

して、イフシの描いた歴光りのする外交官である。單に人物と云ふ所より云ふも霞ヶ關の掘出者である。新内閣が支那公使を更迭して彼を任命したのは支那に對する新政策を意味すると共に、久しく權助外交でウンザリした人心を新にする必要もあつたからではあるまいか。

支那の政情も徐世昌が平和政策を以て南方に臨んで以來多少變化を來し、南北和平の曙光が見えてゐる。尤も支那のことだからオイソレと極りが附くまいが、林時代に比すれば今日は幾分時局が緩和してゐる。無論政府は今までのような片寄つた政策を改めて南北一視不偏で行くことゝ思はれるが、小幡も干渉に亘らざる範圍に收て、支那統一を實現せねばならぬ主張であると云ふから、其點に目標を置いて仕事をするだらうと思ふ。然し斯ういふ時機に於て公使の遣口は一段とデリケートを要し、充分に理性的省察的でなければならぬ。前任者が不評判であつたから一つは其の反動作用で、小幡の公使は好評であるが、未だ漸く赴任した許りであるから、今日直に評價を定めて了うのは少し早い。伊集院にしても、林にしても公使に成つたときは唯一無二の適材の如く謳歌されたが、後になつて仕事をすることになると期待を裏切つたと云ふので、批難をされたような譯で實際支那公使の位置は重大である丈けに却々面倒である。然し

小幡は多少對支政策を善改して行くに相違なく、少くも適任に近いと認めて好い。

▽地味な手堅い人々

川尻東馬

（上）

△カイゼルも最後は案外脆かつた、獨逸の軍國主義も、今や愍れ無殘の最後を遂げて、一足飛びに共和宣言とは、官僚政治、軍閥跋扈も、モウ此世界に跡を絶つべき運命の前提かと、世界の平和、人類の幸福の爲めに、洵に慶賀祝福に堪へぬ次第である。扨休戰條約も愈々成立して、之れから徐々講和會議の幕となるのだが、聯合各國からは、首相、外相其他一國を代表すべき大政治家共が、綺羅星の如く佛國指して集る樣である。中にも米國からは、元首自身が出馬して、國務卿以下全權特使を指揮するとの話。何せ、世界あつて以來の大戰爭、夫れが目出度、正義の勝利として局を結んだ跡始末。今後世界から斯樣な大慘禍の、因りて起るべき原因動機を除くが爲めの準備保障を、之れを機會に列國間に取極めて置かうとの重大會議であるから、世界各國、國民といふ國民が、皆一樣に此大會議に視聽の全部を注ぐのも、實は全く無理のない話だ。

△處が現內閣、否な原首相の僞りなき心中を解剖し來ると、我國としては、之れを出來る丈け手輕るに取扱うといふのが、其希望でもあり又方針でもあるらしい。成る程、首相平生の遣方から云へば、洵にさもあるべき事で、何事によらず自らは決して主張者の位置に立たぬ。大勢の動く處、大波の寄せて行く方向を、冷靜周密に見定めて居て、巧みに夫れに乘りて動くといふのが、彼れの世に處する大信條、大方針、即ち大勢順應が、彼れの唯一無二とも云ふべき處世訓である。彼れが今日大政黨の黨首となり、又總理大臣となつたのも、悉く皆此大勢順應主義の賜物で、熟柿の落るのを靜かに待つて居る氣長な處が、彼れの政治界に於ける大成功者として、今日ある最大原因である。

△自分からは決して働きかけぬ、何事でも最初は受太力となつて居るか、又は傍觀者の位置に立つて居て、靜かに機會の熟するを見て其虛に乘ずるか、又は大勢の動く處に巧みに飛び込んで、功果の分配に與らうといふのが、首相本來の常套手段であるから、今回の講和會議に於ても、どうせ日本としては國力相當な働きより出來ぬ、如何に名案妙計を立てゝ見ても、結局は

長い物に捲かれるの餘儀なき運命と、其結果に多寡を括つて、使者の役目などは誰れでも宜しい、態々日本内地から特派全權大使杯と大騷ぎせずとも、出先の大使共に一任して置いて、一向に差支ひない位に、腹の底には確かに夫れと決めて居たに相違ない。

△其證據には、最初霞ヶ關邊から、頻りと時日切迫した講和會議に向つて、本國から特使を派遣しても、事實間に合はぬと、特使派遣無用論を吹聽した一事でも判る。其に準備會議は年内に開けて、休戰期間三十日の内に大體形つくだらうが、本會議は明春にならねば開かれぬとの外國電報が來た。其處で今度は其準備會議なるものが、最も重大の意義ある會合で、愈々本會議となれば、全くの形式的な事許り、重大問題の根本義は、總て其準備會議で決定されて了ふ。其重大會議にこそ、國内一流の代表的政治家を特派するの必要はあるが、形式的の本會議に臨ます丈けが役目なら、何も態々特使派遣など大袈裟なとをする必要がないと、飽迄も時日は之れを許さぬといふ口實の下に、出先の大使で事を濟まさうと巧みに世間を首肯せしむる樣に許り持つて行こうとしたのである。

△併し世論は終ひに之を許さなかつた、貴族院邊の眞面目な連中は、平素の無口にも似合はず、眞先に特使派遣の必要を公言し出した。學者側からも大分此意見が唱道されるし、實業界にも、政治界にも、亦其他の一般社會にも、其聲が日を追ふて高まり來るので、飽迄も大勢順應主義の原首相は、更らに對内策として、其利害得失を考へ直したらしい、否な之れには相當に斯く信ずべき理由がある。加ふるに其時日切迫と云ふ、唯一の口實を與へた準備會議さへ、今は何時開かるべきか、一寸見當がつかぬやうだ。第一手近の英國などでは十二月十四日の總選擧が濟まぬ間は、迚も出かけて行く餘裕などあるべしとも思はれぬ。又聯合與國間の折合せ協調が、果してそう早く纒りがつくかどうか疑問である。ウイルソン大統領の十四個條を基礎とするとはいふものゝ、偖愈々實際問題に當つて見ると、國々に依りては色々利害が衝突して來る。先づ獨墺側に折衝する以前に、聯合與國の纒まりをつけねばならぬが、其折合をつける丈けでも、之れ以て却々容易なとではない。

△昨今の外國電報では、休戰期間の延長といふとを頻りに傳へるが、當然事實がそうなるより外に道はあるまい。夫れで準備會議の始まるのは、早くてクリスマスを過ぎてからの事であるまいかとも推測されるのであるが、聯合與國間の内情實際が判るに從つて、時日切迫、特使派遣の餘日なしとの、霞ヶ關邊で案出された口實は、次第々々に其理由が薄弱になり行く許り。今

や原首相も國民の希望に我を折りて、特使派遣丈けは事情止むを得ぬ事と觀念したらしく、之れは過日山縣公を窃かに訪問して事情を打ち明け、自分の意見も十分に述べたとの事だ。今度西園寺侯に上京を請ふたのも、詰まりは此問題に關する相談並に講和會議に提出すべき、日本としての根本方針、基礎條件等の協議にあると云ふ迄もなく、松方侯の歸京したのも、矢張り同樣の用向きに因るは勿論である。

△扨特使派遣の根本方針は、假りに元老、首相間に大體纏つたとした處で、愈其人選の一段に入ると、之れは又却々の難問題と云はねばならぬ。加藤高明子說最も高い樣だが、第一、原首相に反對黨首領を推薦するの雅量ありや、又一切萬事自ら干涉せぬと氣の濟まぬ首相が、假りに反對黨首領ならずとも、加藤子の如き外交家としては、我國當代の第一人者たる人物に、何等掣肘せずとの誓約を與へて、此大任を委せ切れるかどうか。更らに加藤子としては、外交調査會を共倒にして置いて、例令夫れは首相の推擧であり、又國民多數の希望であつても、果して此大任を受け得られるだらうかどうか。反對黨内閣の下に使者の大役とか、憲政會の自然に負擔せねばならぬ、共同責任の貧乏籤とか、斯樣な國內問題は、國家國民の爲めには、止むなじとて萬事を犧牲に供するとしても、直接自ら望んで行く大使命の根本問題に向つて、外交調査會の如き無責任の機關が介在して居り、加ふるに夫れが主義の問題としては憲法違反、事實問題としては不便不利有害無益であるのだから、夫れは却々に重大問題とならねばならぬ。

△自薦候補者の隨一は、例に依りて後藤新平男だが、無論原首相は問題にもしまいし、又英米に於ける男の評判を知るものは、皆一樣に身の程知らぬ、滑稽の沙汰だと一笑に附して居る。伊東巳代治子に至りては、若し推薦する人ありとせば、金子堅太郎子に犬養木堂君位のものだらう。其外に例の取捲連中が、世間の問題にする爲め、頻りと太鼓を叩いたり、提灯を持つたりしゝつあるのは、先刻御承知の通りとして、之れは最も捨き手の少ない候補者に相違ない。山本權兵衞伯は、案外眞面目に云つて居る人々もある樣で、伊東子や後藤男に比すると、候補者としては幾分意義もあるのだが、如何にしても武人出身、加ふるに外交家としては全然素人、殊に彼が如く、内閣の瓦解振りが瓦解振りであつた丈けに、諸外國には頗る通りが惡るいとの事、旁々以て實際問題となるには、却々以て容易の事であるまい。又牧野伸顯男との說もあるが、外交官としては後備役の一人で、而も大將級の履歷としては、單に一度外務大臣になつたといふ丈けの事。之れも適任といふ爲めでなく、或る人物の配

合上から、幾分緣故があるといふので、單に割り當てられた丈けの話。男自身も無論抱負あるにあらねば、假りに推されても、屹度斷はるに相違ない。又原首相としても、男を推擧するなら夫れは全く對內策としての意味で、ホンの申譯的に特使を派遣し、實際の外交交渉は、當然副使たるべき珍田・石井、松井、の三大使に全然任せる心底とより外に認むることは出來ぬ。

（中）

△斯くて特使の人選問題は、事實全く行惱みの間にあるが、種々物色した結果は、實際問題としても又人物の全く拂底せる折柄、旁々以て萬止むなき場合は、內田外相を特派することに落ちはしまいか。何れにしても、そう永くは愚圖々々しても居られまいから、本誌の公刊される頃には、大抵決定を見られそうなもんである。併し何れにしても、本國から遙々出かけるのであるから、講和準備會議には、或ひは間に合ひ兼ねることであらう。從つて最初の豫定通り、夫れ迄の間は珍田大使を正使、松井大使を副使として、不取敢準備會議に參列させることにならう。或ひは石井大使をも其內に入れるかも知れぬが、夫れは多分本會議の場合に於てするぢやあるまいか。

△序だから一言準備會議と本會議とに就て述べやう。既に調印された休戰條約に於て、今回の戰爭に關する講和條件だけならば、半分以上は早くも取極められてあるのだから、後に取殘された、直接戰爭終結に關する講和問題としては、償金の額とか、又占領されたる獨逸植民地の處分方法とか、其他執行上の細目に關する談判に外ならんのである。所謂準備會議と稱するのは卽ち之れで、聯合與國間の打合せさへ十分に纏まり、其大體意見さへ折合つけば、獨墺土勃を相手としての講和談判は、左程面倒なことはあるまいと思ふ。無論相手の迚も實行不可能な、不法過酷の條件を提出せば兎も角、苟くも我慢の出來る範圍の條件なら、大概の事は獨墺とても承知するに相違ない、否な事實は又承諾せざるを得ざる羽目に陷つて居る。而して此準備會議に對してならば、夫れこそ日本としては、大體大勢に順應するより外に致方ない立場にあるので、西伯利問題は全然此談判から除外されて居るし、又南洋占領地問題も、獨逸植民地處分問題の根本義さへ解決されれば、自然に之れも形つくといふもの。其他の問題に對しても、日本一國で假りにどうしたいとの希望があるにしてからが、到底自由勝手の主張は貫徹さるべき筋合のものでない。

△斯く觀じ來ると、政府筋で頻りに重大だ重要だと吹聽して居る準備會議なるものは、實は日本としては、單に大勢に順應して

行くより外に藝のない問題のみ多い様である。若し夫れ本會議に至りては、國際聯盟とか、軍備制限とか、民族自決とか、其他各種各方面の重大問題のみ附議さるべき、全くの萬國大會議で、獨墺土勃も矢張り各一國として參加し、今後の世界平和の保障、人類幸福の因りて保たるべき約束を取交はす、至重至大の會議であるから、內容は決して政府側の事もなげに吹聽せしむる様な、形式的な無雜作な會議ではない。少なくとも或る相當の永き期間丈けは、此會議の結果に依りて、世界の平和、人類の幸福が保障さるゝことになる。其基礎條件が議せらるゝのであるから、國民としては此本會議こそ、最も重大なる永遠に大影響ある問題として、出來る丈け周密親切に注視留意せねばならぬのである。

△扨て此準備會議に、國家を代表して參列すべき珍田、松井の兩大使の人物如何といふに、何れも共に地味な手堅い、事務にかけては極めて熟達した人物である。一概に外交家と言へば、其生活が華やかである爲め、自然に人物迄派手の様に思はれるが、兩大使共其性格は全く反對である。思慮は周密で人格も確實、何れかと云へば共に消極的の性格を備へ、事務上の事にかけては先づ手落ち遺漏等の滅多にない方である。其代り機先を制して奇功を奏せんとするが如き、俗に放れ業は共に望むべからざる人々で、好く云へば着實穩健、惡るく云へば無爲無策の評は免れまい。從つて駐剳國の政治家共からは、別に畏敬されることもない代りに、嫌忌され又疑惑を受ける様な不信用などは無論ない。何れかと云へば信用される方で、列國使臣間の受けも亦同様である。又其駐剳國民からも、特別に大持てもせぬ代りに、決して憎惡を受ける様な事はない。

△珍田大使の方は、政治家肌と云ふよりは寧ろ幾分學者肌の處があり、人格も良く、地味で穩健で、腹も相當に出來て居るから、洵に英國には適當の大使である。現役外交官としては、加藤子既に總理大臣格の位置となり、本野子逝き、井上侯退役した今日に於ては、內田外相と共に最古參者の位置に据つて居る。既に屢々外相としての候補者に呼聲あり、又一度は其就任を勸められたこともあつたが、終ひに謝絕して依然在外使臣を勤めて居る。外務次官としては永い經歷あり、且つ令名を馳せた人だが、大使としても、此大戰爭の間、英國にありて能く其任務を盡し、在外使臣中、最も好く帝國の利益を代表し、本國政府の眞意方針を聯合與國に諒解せしめたのは、君を以て第一位とするとの定評がある。故に君が今回の功績勞苦に對しては、國民一般に之を認めて疑はぬのは明かだ

△兎角永年外國に使して、日常華美な生活に慣れた人は、性格

も何となく輕浮に傾き、着實よりも場當り、地味よりも飛び上り者になりたがるのは通例だが。君は年を經るに從つて腹力が出來、人格の修養も亦人物として貫目も備はり、同時に自贊心も益々確かになつて居る。加ふるに學者としても立派なもの、又永く次官をやつて居たから、本省内部の事情も判れば、本國内の政況にも通じて居る。若し他日外相に就任する場合あるにしても、本野子の如く本國の事情には全く盲目で、足下から鳥の飛び立つのも知らずに居る様な、あんなヘマナ遣方は決してあるまい。

△松井大使は、石井大使と同期の人で、外交官としては、古參順から云ふと、珍田、内田兩子の次位にある人だが、石井大使の既に一度大臣となり、又大使としても餘程早く其位に就いたのに比すると、如何にも昇進の遲々たる方であつた。之れ一には君の不運にも依るが、他面自ら求めざる消極的の性分も、自然に其原因を爲して居るのである。其隱れたる功績は却々にある。二の例を擧げると、明治三十年頃、加藤子が英國公使時代に、日英同盟の抑々の端緒を發見したのは君である。何處かの祭會の席上で、時の宰相ソールスベリー卿から、英國政府に於ては、日英同盟締結の意志なきにしもあらざるを仄めかされた。早速之れを加藤公使に報告して、直ちに本國政府とも打ち合せ、此方から働きかけたのが遠因となり、終ひに後年之れが成立を見るに至つたのである。

△今一つは伊集院支那公使が、本國政府の方針に反して、盛んに支那で活動した時の事である。支那方面からは八釜敷小言が來る、公使は又却々本國政府の云ふことを聽かぬ、外務省も内閣も持て剩した揚句は、到頭君に其緩和方法を講ずべく、特別の使命を與へて派遣したが、漸くの事で伊集院公使を可然納めて、兎も角曲りなりにも大破綻なき丈けには尻を拭つて來た。之れなども確かに隱れたる功績の一つであらう。人物としては眞面目で周密で且つ熱心に働く。蘊蓄と腹力にかけては、珍田大使に迚も及ばぬが、其代り事務の捌き方と、交際社會に出て材料を得ることは、確かに一日の長がある。餘り手堅過ぎて、遣り出しても何の差支ひない事迄、兎角躊躇する傾きは明かにあるが、其代り間違や行き過ぎは決してない。從つて引つ込み思案とか戰々兢々の臆病者とか、又氣の利かん男だ杯と、動もすると無能者扱ひを受けるとは往々にしてある。併し之れは性分だから何とも今更ら致方がない。

△要するに準備會議參列使臣としては、第一、人物拂底、第二時日遠方からの派遣が或ひは間に合ひ兼ぬる問題、第三、駐劄地の便宜並に最近の歐羅巴事情に最も好く精通し居る關係

上、此兩大使を以て任ずることの、事實止むを得ざる次第でもあり、又差して不適任であるまいと思ふ。但し本會議にも依然此人々に一任して、本國よりは特派大使を差出さぬとあつては、夫れは餘りに世界の最重大問題、未來永遠に渉りて、多少其國家國民が其拘束を受くべき非常の重要案件に對し、餘りに手輕るに取扱ひ過ぎるとの非難、重要國務、世界的大問題に向つて、餘りに冷淡不親切なりとの攻撃は、原首相としても、此際當然起り來るべきを覺悟せねばならぬ。

（下）

△現内閣の對支方針一變は洵に結構な事で、寺内内閣の北方軍閥援助が、如何に支那内地に於ても、亦日本國内に於ても、各種各樣の弊害損失を伴つて居るか。殊に日支親善の大主義大方針に對し、何程の大損失を彼我兩國民に與へたかを思ふと、假令今後一切何事にも手を出さず、全くの無爲無能に了るにしても、前内閣よりは確かに日支親善の爲めに力を盡したと云へるのである。此意味に於て、小幡新公使の支那に赴いたことは、吾人の大に歡迎する處と云はねばならぬ。況んや支那公使としては、霞ケ關の内外を問はず、我國最も其人物に拂底を告げて居る現狀に照し、假りに十の缺點あり、又不十分なる處があるにしても、差詰め君を措いて、他に然るべきヨリ以上の適任者を得ると困難であるから、勢ひ玆に我慢せざるを得ないことにもなる。

△君は外交官中の支那通で、一寸一年半許り英國に行つたとある外は、在外勤務としては、全部支那と云つても差支いない位である。從つて支那上下の民情風俗に通曉し、又官邊軍閥の内情、南北の關係情僞、夫れは相當に複雜した細かな點迄、能く觀察が行き屆いて居る。殊に君の最も長所とも目すべきは、偏頗の處置を嫌忌する良心發作の甚だ强烈にして、情實關係や請托を容れることは、實に蛇蝎の夫れの如く嫌ふことである。外務省の官吏と云へば、兎角富豪の番頭然たる境遇に陷り易く、又大會社の手先に使はれる場合の多いことは、誰れも彼れも多く大目に見て居る處だが、此間に在りて只一人敢然として、全く正反對の操守態度を持續して來たのは君である。融通の利かぬ頑固者、又霞ケ關の變人と迄、實業社會は勿論、他の官署からも亦政治家連からも、通り相場をつけられる程、君は情實請托を拒ねつけるのが普通となつて居る。是れ無論良心の發作が人一倍强烈な爲めでもあらうが、元々は其性質であるらしい。

△支那と云へば、忽ちに情實と請托を聯想せしむる處に、而も

此變人が公使となりて赴いたのは、如何にも一種の大きな皮肉の樣にも感ぜられるが、更らに例の支那浪人と云へば、情實と請托、然らざれば離間中傷、又は不法なる利權獲得、或ひは煽動し、或ひは欺僞するが、其常習事となつて居るのに。君の如き全然是等の行動擧止を排斥する公使の任命されたのも、亦何となく大なる意義がある樣に解せられる。原首相、內田外相、是等の推擧任命者は、或ひは左程の深い意味あつての事にあらざるやも知らねど、第三者たる吾人の冷靜なる觀察からすれば、何か其邊に多大の含蓄あるらしく見做され、如何にも痛快なる皮肉、國家の爲め喜ばしき事の樣に考へられる。之れに依りて次第々々に浪人跋扈の惡傾向を矯め、彼の眞の日支親善を阻害しつゝあるバチルスに對し、幾分なりとも殺菌劑たるの功能を發揮し得れば、之れが爲めに彼我國民の浴する餘澤や、實に尠少なものではない。

△今後若し君に對する非難攻擊の聲起り、其排斥運動開始さるゝ場合ありとすれば、其表面の理由の如何に拘らず、又表面其役を承る者は、在支外人たると將た支那人たるを問はず、必ず背後に所謂支那浪人なるものゝ操り居るべきことは、今より之を逆睹するに難からぬ處である。過般其任命發表と共に、早くも大隈內閣時代、加藤外相の提案せる第五項は、根本を其立案提議に取れるものなりとして、時宛も支那公使館參事官たりし君の赴任を攻擊する聲支那に起り、外字新聞、漢字新聞間に一問題として報道されたのも、主因は勿論在支外人が、折に觸れ事に觸れて、日支間を離間せんことにのみ力むる、例の常套手段にあるも、其間早くも所謂支那浪人の一部が、之を利用せんとするの傾向はなかりしか。是れは當局者としては云ふ迄もなく、一般國民としても、今後大に注目すべき問題である。

△更らに例の軍閥外交は、此浪人等を手足として、不斷の活動を支那內地に試みつゝあることは、從來永い歷史附の事實。而して夫れが官僚、軍閥系の內閣ならざる時代に於て、特に露骨に不遠慮に働き出すのが、是迄必ず其例となつて居るのだから、宛も現內閣の時代に際會して、又々猛烈に頭を擡げ出さぬとも限らぬ。斯の如きは單り內閣當局者のみならず、國民としても嚴に監視して、此不法暴戾なる行動を容赦なく排擊せねばならぬ。

△君は頭の人でもなく、又腕の人でもない、才の人でもなければ、氣の人でもない、一言にして云へば極めて消極的の人物である。地味で手堅く、守ることには却々强毅持久性に富んで居るが、自ら進んで、事を計るとか、又一肌拔いで或る仕事を完成しようとか、何れにしても自ら計劃し遂行せんとの進取的勇氣にかけては、殆んど見出すに苦しむのである。但し受太刀とな

つての腰の强さ、乃ち消極的勇氣に至りては、之れ又多く其比を見ざる長所がある。要するに派手で人目を眩惑せしむる樣な放れ業は迚も君に望むと出來ん方で、何れかと云へば人氣に乏しく、兎角無爲無能の謗りは免れぬ事になり易い。其代り大なる過誤失敗抔は、之れ殆んど又皆無と云ふ安心も出來る。一言にして云へば、自屈ならぬ保守的の人的、積極的に國權民福の發揚伸暢は望むべからずだが、消極的に國家國民に損害迷惑をかけざる點丈けは、先づ安心して然るべしである。

△前內閣が極端に支那を攪き回はした後を承けての現內閣、其又公使が、林男の樣に無暗に一方に偏した遣方の後に、君の如き何事もせぬ人物が行くといふのは、極端から極端で、却つて一般支那人の誤解を解く上からしても、玆當分は至極結構の事と思ふ。無論之れが永久不變では全く以て困る話だが、少なくも一年位は、此無方針放任主義が、案外に支那人間に眞の諒解を得せしむる、好個の動機を與へるかも知れぬ。何れにしても眞の日支親善を完成せんとするには、國民間に双方の眞の理解諒會を得るにあらざれば、遂行成就結局不可能事に屬するを以て、此期間餘裕を與へる意味に於いても、差當りての對支方針は、當分現內閣の遣り方の外あるまいと信ずる。從つて公使としての小幡君の任命も、亦自ら時局に適した人選と云ふべしである。

▽時局當面の三外交家

鐵拳禪

大戰の幕が降りて、媾和の幕が開かれた。こゝ暫く豫備會議で、本會議は明年二月頃になるだらうと云はれてゐる。媾和會議の場所は、多分ヴエルサイユで、各關係國からは其の政府首腦部の人物が出かけて行つて、大いに掛引をやるべく、歷史上の驚異は玆に始まるだらうが、我が邦は所謂波濤萬里の外に在つて、長途御苦勞と云ふので、首腦的人物は多分失敬する風が見える。今時波濤萬里の舊夢に不安を感ずるでも無からうが、例の白紙首相の口吻に據ると、「特派大使の問題は未定なるも、獨逸は可成休戰期間の三十日間に媾和を成立せしめたい希望を持つてる模樣だから、案外早く目鼻がつくかも知れぬ。すると、自然時日の關係上特使派遣は不可能となる譯だが、目下は休戰狀態のことだから、その成行は何うなるか分らぬ。媾和に對する國民の期待は種々あらうが、帝國の參戰理由並に條件は既に明白な事實だから、今更過大な期待を持つとも無いぢや無いか。」と事もなげに片付けて、焦げ臭いなと云ふ顏もせずに、火燵蒲團のぼやを揉み消してると云ふ風である。

特派大使の人選では、當局者より民衆の方が乘り氣になつて、機會ある毎に八釜しく論議だてをしたが民衆を後援とすべき筈の平民内閣が、斯うけろり閑としてゐるのでは、至つて張合がない。内閣組織の當初、『民意尊重』を口にし、『大勢順應』を擔ぎ廻りながら、政綱を公表して國民の信任に訴へんとせず、『我が黨の主義政見は臨時隨所に發表して居たのだから、今更發表するにも及ぶまいぢやないか。』と何年古かの空證文を楯に取り、所謂大勢に順應した新政綱を公表せずに、好い加減に誤魔化さうとするのだから、媾和に對する態度の微温的なのも其人相當の態度とは思ふが、それにしても今少しく緊張しやうが有りさうなものである。こんなざまでは、平民内閣を歡迎した民衆の聲は、呪咀の焰と變らないとも限らぬ。大歡喜の瞬間の後に、大悲劇の起るの例を知るならば、今日の歡迎に對する反動の如何に怖るべきものなるかを知らなくてはならぬ。

それは然うとして、『自然時日の關係上特使派遣が不可能』となれば、豫備會議の正使珍田捨巳、副使松井慶四郎の兩氏が、駐英大使駐佛大使と云ふお手近な所にあるので埋草的に大役を振られたにも拘らず、最後の幕までも遣つてのける事になるかも知れぬ。外交家は政治家を意味するものとすれば、彼等は外交家ではなくて外交官である。外交官だからと云つて、少しの政治的技倆が無いとは云へぬ。松井は兎も角、子珍田は何程か政治的才能ある。外交官と云ふ風がある。獨裁的にやらせるには、或は役不足かも知れぬが、本國政府の訓令に基いて仕事をするのであつたなら、是等の人物でも澤山である。それに外國語も巧に饒舌るから、通辯を介してやるよりは、饒舌るだけでも便なりと云はれてゐる。が併し、媾和會議は、他の外交的案件の交渉とは違つて、臨機應變、電光石火的にやつてのけなければならぬことがある。大體は本國政府の訓令に準據するとしても、そんな場合に遭遇すれば、咄嗟に利害を判斷して、獨裁的に決して了はなければならぬ。然うなると、一々本國政府の訓令を待つて蠢動する外交官では不可い。矢張相當に信望あり、名聲あり、政治的才能あつて、國家の重責を荷うて立つの慨ある者でなくてはならぬ。白紙首相の微温的態度が、政府全體の空氣を支配するとすれば、その空氣から壓搾される所の訓令も、甚だ覺束ない次第である。正副使にして、その訓令を活用して躍動せざる限り、十分なる外交上の成果を收め得まいとの懸念を拭ひ去る事が出來ないのである。

○

子珍田は弘前の人で、安政生れの六十三歳。松井は大阪の人で、慶應明治の過渡時代の兒で五十一歲、明治ッ兒と云ふには

月が少し早過ぎる。このやうに兩氏は歲も一干支違つて居るから、その外交官たるの閱歷に於ても、先輩後輩の差はある。珍田が、正使となつて、松井が副使となるのは、その年齡、官歷から云つて、役人の任命としては當然なりとする。況んや、その人物力量から云つても、當然の順序なるをや。松井にしても、多少の己惚れの無いことは無からうが、珍田の副使となつたからとて、別に不滿はなからう。反りさへ合つて、協力して、束になつて掛れば、大抵の處までは押して行けよう。それに本國には白紙首相やら、過激外相やらが、太綱を綯ひながら用心して居るのだから。けれども、その役目だけでは束になつて居ても、思想感情が互に噛み合つて居れば、案外の處に破綻を生ずるものである。前内閣に反噬した過激外相の思想が、白紙首相と何れだけの協調を保ち、珍田・松井等のバタ濱の外交官見と何處まで相容れるだらうか。松井は年齡・學歷・官歷に於て過激外相の後輩だが、珍田は年齡と官歷に於て先輩だから、少しは鼻の先であしらふ氣味もある。

試みに兩氏の經歷を云つて見ると、松井は明治二十二年の法科大學出身で、外務試補を振出しとし、翌年には交際官試補となつて京城に在勤してゐる。珍田は東奧義塾の外人に就て英語を學び、下地が出來ると渡米してデポー大學に入り、博士號を土產にして歸朝したのは、明治十四年であつた。それから四年ばかり母校に教鞭を執つて居たが、洋行歸りの珍重される今日津輕の土の臭をなつかしんで居るでもあるまいと、東京に飛び出して、十八年九月外務省の判任御用掛を拜命し、翌年外務屬に進み、十九年七月交際官試補となつた。その交際官試補となつた年月にも、兩者の間には四年の距離がある。一は書生から一躍して斯の步を占め、一は先生から轉げ込んで斯の足場に踏み止まつたのだから、無論苦勞は珍田の方が仕拔いてゐる。而立の年から外交官生活に入つたのだから、可なり年が廻つて居たが、それだけ高等幇間氣質に染まずとする所がある。

珍田は公使館書記官から領事となり、一等領事、總領事と進んで、辨理公使となつた。伯剌西爾、和蘭の小國を勤め廻つて、特命全權公使となり、三十四年十一月に外務省總務長官の椅子を占め、なみの外交官と違ふと云ふやうな顏をして居た。實際珍田は一廉の働き手として名を賣り、四十年には男爵を授かり、明治十何年時分から自由民權を叫び續けて、今尙一平民で居る政界の名士と對照して、官界游泳の幸運に鄕黨の眼を見はらせたのであつた。その翌年特命全權大使となつて獨逸に駐劄し、次で駐米大使となり、洋々たる春の潮に掉して子爵とまで成り上つたのが、彼れが六十年の生涯である。今日駐英大使となつて

交際社會に持て、倫敦ゴルフ倶樂部の會員として輕快な運動振を見せてると云ふ事だ。それ程の元氣があれば、最う歳が歳でも、世界外交の檜舞臺に立つて活動しても、まだ却々腰の粘りがありさうである。尤も外交と運動とは別物だか、勝を制するの呼吸は同じ樣なもので、一種の元氣とか氣魄とか云ふものが、乾度それに伴ふ。

松井は外交官の型にはまつて、變通の自在を失つたせゐか、活躍の氣分に乏しい。その一生を貫くに、平々凡々を以てするやうに見える。公使館書記官から外務省參事官、大使館參事官と云ふ風に進んで、珍田のやうに大小の場數を多く踏んで居ないが、大きな舞臺は大抵見てゐる。外務次官から特命全權大使となつて、海外に出掛け、大戰外交の渦中に投じたが、これぞと云ふ目ぼしい働きもしないが、又大した失敗もないやうである。此頃帝國の代表者として休戰會議に列席したが、唯列席したと云ふに過ぎないやうである。休戰會議は顏さへ出せば濟むやうなものだが、講和會議は米國の正義人道にのみ依賴し、聽從し、後塵を拜して、それで濟むものでは無からう。靑島及び南洋占領地の處分は何うする積りか、西伯利問題は何う解決するのか、帝國の自衞上より支那問題を何う取扱ふ積りか。大戰觸接の部分關係は固より小範圍に過ぎないが、小範圍に過ぎないからとて、國家百年の大計上より輕視することの出來ないのは、餘りに能く分り切つた話である。彼等は久しく海外に駐劄し、可なり多くの要路の人々の顏を知つて居らうが、顏を知つてるだけでは何うもならぬ。白紙首相の國家百年の大計の肚を叩いて見ない間は、彼等を責めたとて無駄なことではあるが、彼等自身としても本國政府に報告し、若くは希望する何物かを持つてるだらう。獨逸通の靑木周藏が、却て獨逸に鼻を明かされた例もある。英國通、佛蘭西通、米國通と云ふ、通がりばかり寄つて集つて、束になつた所で仕方がない。珍田や松井の外交通は賴みにならぬが、唯珍田の多少なりとも政治的才能のある所が、松井の外交的辭令に巧みな點と相待つて、調子が善く行けば、或は事務的に大したへまをやるまいと、然う思はれるだけである。世界に對する發言權は、受身の外務官などに何で獲れるものか。

樽俎折衝と云ふやうな四角文字を擔ぎ出して、舞臺面を華やかに見せるには、無論先方の役者と押も押されもせぬ侯大隈とか、子加藤とかを繰出せば面白いのだが、それ程の芝居氣分にならずとも、首相原及び外相內田が轡を並べて陣頭に立つのが當然である。さなくば外相を一時大塊遞相にでも兼任させて、過激外相自身に死を決して出馬するが可い。それとも、自然時日の關係上不可能とあれば已むを得ないが、何うしても尻

ごみするとより外思はれないのは、平民内閣の爲に取らぬ。

○

政務局長小幡酉吉は、男林權助の散々ほじくり荒した畑を整理すべく、支那に赴任する事となつた。特命全權公使として出掛けるのは始てだが、彼れは曾て公使日置益の不在中、代理公使として働いた事がある。その時分、却て本物の公使よりも出來榮が好かつたので、その手腕を認められた。併し彼れの出來榮の好かつたのは、代理公使であつたからで、自身公使となつて責任を負ふ事となれば、あれ程自由に腕を揮へるか何うかは疑問だと、その才能は疑問に附されてあつた。今回彼れが本物の公使となつて、對支外交の衝に當るのは。この疑問を解決する鍵を握つたのである。その鍵の銀であるか、黄金であるかは暫く問はず、彼れは果して活腕活手の奥義を啓いて、當年の出來榮に裏書するの靈筆を持ち來すであらうか。

そこで、まづ小幡の何者であるかを知るの必要がある。彼れは金澤の人で、明治生れの四十六歳である。年齢に於て、文久元年生れの男林及び日置とは正に十二歳の差がある。それだけ溌溂たる元氣もあり、又新思想をも解して居り、外交官の舊套からも何程か脱して居ると見ることが出來る。尤も赤門を巣立した時分は、男林でも日置でも新智識を以て任じて居たが、外交界の遷徙鳥となつて渡り行く間に、漸くぼけて、羽毛が悪くなつたのである。小幡も法學士の稱號を後生大事にして、角帽を中折に換へて職にありついてから、最う二十一年にもなる。最初は警視廳から官階を運び上る積りで辛抱して居たが、初志を翻して外交官及領事官試驗を受けると、直ぐ合格の札がついた。それが三十一年の九月で、翌日から領事官補に突き出されて、新嘉坡在勤と云ふ事になつた。滿一個年經つて外交補となり、まだ端役ではあつが、墺國・英國等の活舞臺も踏んで見た。北清事變の際は、公使館二等書記官で、當時一等書記官であつた今の大使松井等と鐵火的洗禮を受け、亂後勳章なども貰つた。三十八年以降は重に支那廻りをやつて、芝罘・天津等の領事を勤め、餘り目立たない處に力瘤を入れて居た。總領事たるに及んで、確かりした彼れの腕前が、世界の視界に映ずるやうになつた。が、何分にも領事で鍛へた腕だから、外交の本舞臺に立つて、相當の技倆を揮へるか知らぬと疑はれたが、北京に乘込ませて仕事をやらせて見ると、公使の日置よりは南方の事情に通じ、支那の大勢も能く見て居たから、外交事務もてきぱきと捌いて行つた。北方贔屓の官僚が、動もすれば對支方針を誤らうとする間に介在して、調和の梶を取つて居たやうにも見えた。が、彼れが政務局長になつてからも、別に對支方針に變化

なく、援段主義に終始し來つた處を見ると、前内閣の木偶坊として、外交事務の末節に拘泥するばかりで、活眼を開いてなかつたやうだ。事務の上の敏活のみでは、駐支公使として覺束ない次第だが、彼れは從來の評判からして何か行りさうに思はれて居るし、又外國語と辭令のみに巧妙を矜る外交官と選を異にしてる所も見えるから、自身公使として局に當れば、局長時代よりは比較的自由な腕を揮へるかも知れぬ。それに前内閣の偏頗な對支政策を擲つて、新内閣の新政策の下に行動するのだから、それが彼れの意見に合致して居れば、非常にやりよい筈である。

處が、彼れが榮轉の所感を述べた一節を聽くに、『凡そ一國外交の根本方針は、一定不變のものでなくてはならぬ。内閣の更迭に由つて變更するやうなものでは、國家の爲に不得策である。我が外交の中樞たるべき對支方針に就て、殊に然るを感ずるのだが、今日のやうに國論が統一しないのでは、幾度駐支公使を更迭しても、滿足な成績を擧げることが出來ない』と云つて居るが、自信の無いにも程がある。國論の統一とは、民衆が政府の對支政策に共鳴しなければ不可いと云ふ風に聞えるが、それは官僚の得手勝手な註文である。若し國論の統一を欲するならば、なぜ民衆の聲に反して、物騷な援段主義などを擔ぎ出したのか。彼れは前内閣の木偶坊となつて、その政策の遂行に一臂の力を致して居た照れ隱しに、そんな事を云ふのであつたら思はざるの甚しき者である。新内閣の援段主義の張本たる男林を罷めて、彼れを任命したのは、必ずや對支外交刷新の爲なのである。間違つた政策を矯正せんが爲なのである。内閣の更迭に由つて變更するに不平を云ふのでは、彼れの前途も略知るべきのみだが、恐らく彼れの眞意は其處にあるのではなからう。今まで民衆の聲に耳を閉ぢて、自分等のやりたい事をやつて來た事の非を悟つて、國論の統一を欲するならば、その耳を塞ぐに用ゐた兩手を開放すれば可いのである。日支親善の空世辭を並べて、國論統一に暗に前内閣の政策を襲用するやうな事を匂はすから、赴任もせぬ前から小幡公使排斥の聲が南方から起るのである。

それでも、彼れは對支外交を我が外交の中樞と見て居るだけ責任の重いことを感じてゐるから賴母しい所がある。今後の對支外交が、彼れの手に由つて面目を一新するか何うかはまだ分らぬけれども、我意を押通さうとして失敗する男林よりも、屁理窟を云はずにてきぱきとやつてのける彼れの方が、案外成績を收め得るだらう。白紙首相の大勢順應主義で解決すれば、水至つて渠が成ると云ふ風に、うまく行くかも知れぬから。文久權助は古い頭から割出した意見を固執して、無駄な處に精力を

發したが、明治酉吉は新鋭の元氣で、手際よくやるだらうと、期待する者は期待してゐる。駐支公使は、決して灰殼な、無爲な外交官の勤まる所でないのである。（七・一一・九）

▽講和特派大使を送る……一記者

本號の人物評論欄に批判せられたる珍田・松井の兩大使が、講和會議に列席して重要なる役目を勤むべきは既定の事實なるが、尙問題の重大なるに顧み、本國より西園寺侯を正使とし、牧野男を副使として派遣せらるべきに決したりと傳ふ。講和會議の主要問題たるべきは、各自國家の利害の調節緩和よりも、寧ろ今後に於て永遠の平和を期する新世界の實現を促進すべき國際聯盟等の根本義に歸するものたる以上、我國の態度も亦此大潮流を如實に看取し、正當に理解し、强ひられて聽從するよりも進んで主張するの、聰明と慧敏と勇氣とによつて決せらるゝの外あるべからず。東西兩洋に亙る世界文明國總ての代表者を一堂に會して新世界創造の大問題を議するは、人間歷史あつて以來の崇高にして偉大なる出來事たり。七十歲以上の老齡を以て此會議に列するは、佛のクレマンソーの外、我西園寺侯一人たるべく、此老齡の一點、或は他の遙かに若き現在政治家の熱烈なる理想と共鳴を保ち得るやについて、多少の懸念なきにあらざるも、侯の聰明は恐らく此懸念をして懸念たるに終らしむるに足るべし。而して侯の識見と人格と閱歷と聲望とは、此會議に於て我國を代表するに不足なしとすれば、我等は侯の任命を喜ぶと共に、侯の老軀大任に當れるを多とせざるべからず。只侯が此世界的晴れの舞臺に登場する以上、洛北田中村に閑居する一老翁たるを忘れ、其昔議論もし、遊樂もし、隨分利かぬ氣をも出したる、其同じ巴里に於て、其昔の侯に若返りて、世界後進の政治家を揶揄一番する位の元氣を出さねばならぬ義務あることを深く心に銘せられんことを望む。侯にして此元氣さへあれば、我等年若き國民が、日本帝國を背負うて世界に活動せんとするに當り其の前途を滑かにせざるまでも、更に艱險を加ふる程の迷妄の擧措を執らるゝことあらざるべし。是れ我等の與々も侯に切望する所たり。

評論

時論三項

法學博士 吉野作造

☆國民思想統一論者に與ふ

國民思想の統一と云ふ事は此頃著しく世上の問題に上つて居る。臨時教育會議に於ても業々しく問題にせられて居るが、獨り宗教界教育界等ばかりでなく各方面に於て此の言葉を耳にするのである。若し之が今日の場合國民の思想を一層國家的に緊張せしむる事が必要だと云ふ意味から來るものであるならば洵に當然の事ではあるが、又一方に於ては今頃俄に事新らしく說かるべき問題でも無いやうに考へらるる。此頃急に此問題が喧しく說かるゝに至つた所以のものは、茲に何等か之を促した特別の理由ありと見なければならない。然らば何が國民思想の統一を叫ばしむるに至つた理由かといふに、予輩の觀る所に依れば少くとも二つあると思ふ。一つは聯合與國の勝利に伴ふ民本主義的思想の急激なる躍進であり、他の一つは之に共鳴する事の結果として我國青年の思想の急激なる進歩である。之を部の人は西歐危險思想の襲來となし、青年思想の動搖となし斯くして日本國體の精華が傷けらるゝの虞れありとする。而して所謂日本古來の美風を力說して此の憂ふべき風潮に當らんとするのが即ち思想統一問題の起つた所以ではあるまいか。

思想統一問題の起因果して右の如しとせば、予輩は先づ次の二點に識者の反省を求めて置きたい。

第一は目下西洋に急激なる飛躍を試みて居る所謂民本主義的思想は共本質に於て必ずしも總て日本の國體と相容れざるものではない事である。無論露西亞のやうな極端に過激なものもある。然し如斯は歐羅巴に於ても排斥せられ居る事は云ふ迄もない。故に今現に西歐に活躍して居る思想と云へば獨逸を共和國ならめた思想しであると云はなければならない。併し之は共和

主義を共本質とするものであらうか。若し然りとすれば、此の思想が更に初めから共和國たる瑞西に波及する意味が分らない。現に和蘭、丁抹に於ては未だ君主制を覆して居ないではないか。若し夫れ英、白、伊に於ては、君主制は毫も動搖を見て居ないではないか。故に予輩の見解では、現時西歐に横溢して居る所の思想は、純然たる民本主義を本旨とするものである。獨逸の君主制は偶々民本主義の徹底を妨げたるが故に覆へされた。民本主義其物は必ずしも直ちに君主制に反對するものではない。

第二は西歐思想の影響を受けて我國青年の思想が大いに動搖して居ると云ふけれども、識者は果して今日の思慮ある青年が何を要求して居るかと云ふ事に關して十分なる觀察と考慮とを遂げた事があるか。又彼等が彼等の所謂青年思想の動搖に對抗して防衛せんとするもの丶果して何たるやを反省した事があるかを尋ねたい。彼等の防衛せんとするものは金甌無缺の我國體であると云ふならば、今日の青年は之に何の異存も有たない。けれども世間には新時代の理想と要求とに合せざる幾多の古習舊慣に依つて組みなされたる「現狀」其物を維持する事を以て、國體を維護する所以なりなどと誤想するものがある。之に向つて進歩思想を有する青年の極力反對するは決して不當の事ではない。故に予輩は國民思想統一の必要を絶叫する人々に向つて、斯くして彼等の防衛せんとするもの丶本體如何に反省を求め、續いて今日の青年の眞の要求如何を冷靜に攻究せられんことを望まざるを得ない。國を誤るものは新しき要求を揭ぐるものよりも、寧ろ古き思想に執着する頑迷者流に在つた事は、昔から今日まで歴史の上に最も明瞭なる事實である。

國民思想を統一せんとする其志は甚だいい。然し乍ら此目的を達するの一方法として強いて日本固有の風俗習慣に執着せしめ、以て歐米思想の流入を阻止せんとするのは重大なる誤謬である。西洋料理でも我々日本人の身體は立派に養はれる。活世界に活動するには、和服よりも洋服が可いと云ふ時代に於て、獨り精神界に於て鎖國主義をとる事は飛んでもない間違であるのみならず、又事實行はれ得べき事でもない。

加之歐米の思想を一向ら危險と見るのも亦大いなる誤りである。歐米の民本主義は必ずしも君主主義と相容れざるものでない事は先きにも述べた通りであるが、歐米の學說の中には、本の如き君主國體を讚美するものが決して尠くはない。一體國家の理論に於て其の邊りのいゝ點から云へば、君主國の方が遙かに民主國に勝ることは學界の定論と云つていい。只君主國の成立するには永く國民全體の絶對的崇拜の對象たりし君家がな

けれはならない。不幸にして西洋には斯くの如き君家がない。有つてもそは皆歴史が新しく、隨つて國民は只何となく有り難さに涙がこぼるゝと云ふやうな一種の靈感を之に對して有つことは出來ない。故に彼等は君主國は造るべきものではないと云つて居る。隨つて本當の君主國と云ふものは容易にあり得べからざるものとして諦めて居つた。然るに獨り之れあるは我日本のみで、之が即ち我々の萬國に誇る所であるが、西洋の學者も日本を知つて初めて本當の君主國の存在し得べき一實例を發見した譯である。日本の事情が段々西洋に分るに從つて彼國學者の中には此點に於ける日本國民の幸福を羨み、之と共にあれ程結構な國體を有つて居りながら、先輩政治家の頑迷にして民本主義的政治の徹底的遂行に迷つて居るのを腑甲斐なく感じて居るものは少くない。

併し大體に於て西洋は民主的の國である。日本のやうな君主國體は彼等の知らざる所である。それ丈け彼等の政治論には餘程民主的の色彩に富むけれども、それでも西洋の民本主義は十九世紀の初め以來今日に至るまで三大變遷を經、今日は餘程純化し、國體論とは何等相亙らざるものとなつた。第一期の民本主義は天賦人權論に根據して居つたから、君主國體と相容れざるは已むを得ない。第二期の民本主義は國民の多數を占むる第三階級の權利の伸張を根據として立つて居つたから、之れ亦不辯なる階級鬪爭を導き、從つて國家の統一を破るの譏を免れなかつた。而して今日の民本主義は、國家を組織する各分子は各々國家の經營に關して盡すべき積極的の分擔を有するといふ事に根據して居るから、君主主義とも國家主義とも矛盾せざるのみならず、却て益す之を援け之を堅うするものである。ウイルソンが屢々唱ふるデモクラシーは畢竟此意味の者に外ならない。

果して然らは西歐最近の思想が我國に之を迎へて何の妨げ無きは明白ではないか。況んや中には日本國體の讃美論者すらあるに於ておや。故に心を落着けて能く之を讀んで見れば、却て我々は西洋の思想によつて所謂忠君愛國の念を養はるゝ事がある。陳腐な日本料理には時として腹を毀はす事がある。時々西洋の料理も喰つた方が身體の爲めにいゝ。國民思想の動搖を一概に歐米思想の流入に歸するは頑迷固陋も亦甚だしい。

以上の見地から予輩は大いに歐米思想の流入を歡迎し、又其盛なる研究を奬勵したい。併しながら之と共に予輩は世の多くの人と共に今日の青年は歐米の思想を我々が解する如く解さない。動もすれば其眞髓に觸れずして妙に曲解するやうな事實を認めるものである。此點に於て歐米の思想其物に罪あるにあら

ざるも、之が流入の結果青年の間に一種の危險思想を釀成するの事實を看逭すものではない。そこで一派の人は之を以て歐米思想の流入に反對するの理由となすのであるけれども、予輩は斷じて此考に贊成する事は出來ない。何故(なぜ)なれば之は流入の阻止によつて目的を達せられないからである。而してかゝる狀態の生ずる眞因は、予輩の觀る所に據れば、決して外にあるにあらず内にありと言はなければならない。

今日の青年が歐米の健全な思想に觸れて、動もすれば之を曲解する所以のものは、彼等に社會の現狀に對する鬱勃たる不滿があるからである。彼等は此鬱勃たる不滿を合理的に說明すべき學說を求めて已まない。偶々歐米の思想に觸れて得たり賢しと其一端を取つて以て自分の議論の武器にするのである。故に予輩は青年の思想を適當に導かうと言ふならば、先づ其根源たる社會の現狀に對する不滿なからしめん事に骨折らなければならないと思ふ。

然らばどういふ點に於て彼等は不滿を感じて居るか、之は一々舉げていふの必要は無からう。一言にして之を總括すれば彼等は未だ國家の有難いといふ事を沁々感ずるの機會を與へられて居ない。封建時代の武士ならば家に封祿あり、國恩の厚きは日夕之を思はさるを得ない。今日と雖も國家あつて我々の生命の安固あり、國恩の優渥なる、理に於て之を知らざるにあらざるも、生活の壓迫兵役徵税の不公平、其他公平均等を缺く種々の施設よりして國民は有難さを感ずるよりも、より多く苦痛を感ずるやうになつて居る。固より此點は各國共通の現象であるが、各國は各々精細周到なる社會政策の以て出來る丈け此缺陷を補はん事を苦心して居る。而して此點の最も等閑に附せられて居るのは我日本ではないか。故に予輩は此點に着目して直ちに快刀を其禍根に加ふる事が何よりの急務であると思ふ。主觀的の立場より國民の個人道德を說くのなら、身を殺しても仁を爲せといふに妨げなきも、客觀的に國家經營の大本を定むるの立場からするならば、國民思想の統一を迫る前に、先づ社會の現狀に對する不滿の起因を一掃しなければならない。

予輩の觀る所に據れば國民思想の統一といふ事は事實不可能である。否、單に民心を國家的に緊張せしむるといふ以外に意味を成さないものと思ふ。國家の爲めに働けといふならば、國民として何人も異存あるまい。唯斯く〳〵の方法によつて國家に盡せと其内容を示して來る事になると、人各々觀る所を異にすべく、又觀る所を異にする點に妙味がある。國民思想の統一

も古來の美風たる家族制度を尊重せよとか、敬神の念を鼓吹すべしとかいふが如き內容を指定するに至らば、之れ實に思想の統一を圖つて而かも思想の混亂を誘致するものと言はなければならない。思想統一の事業は教育を刷新し、優良なる教育者に一任して、國民の理性と品格とを高むるに盡力せしむれば足りる。政治家なぞは寧ろ健全なる思想の發生に適する社會の物質的基礎を改善する事のみに全力を振へばいゝ。

何ぞ進んで世界改造の問題に參與せざる

近く開かるべき講和會議の問題に關し、我國論壇の一部には歐米の問題は專ら歐米の決定に任かし、日本は主として東洋の諸問題の有力なる決定者たるべしと唱ふるものがある。若し此意味が歐米に於ける個々細目の決定は出來る丈け歐米に讓るの方針を取り、其代り東洋問題の決定は出來る丈け我々の主張を容れて貰ふ事としようといふ意味ならば我々は固より同感である。然しながら若し日本が東洋の問題に關する殆んど絕對的の決定權を認めらるゝの代償として、他の歐米方面の問題に關する發言權を犧牲にしてもいゝといふ意味ならば、我々は斷じて之に反對せざるを得ない。

從來の戰爭は兩立し得ざる利害の衝突から起り、從つて講和も亦兩立し得ざる利害關係の一時的な、人爲的な、又彌縫的な技巧的調停に依つてなされたのであつた。今度の戰爭、從つて又之を終結すべき講和談判も右の如き性質のものであるならば、歐米の問題は之を歐米人の決定に委し、我は獨り東洋の問題に對する優良なる發言權を獲得すべしといふは極めて適切の議論である。然しながら今度の戰爭は固より其直接の起りは利害の衝突であつたけれども、漸次其の性質を變じて正義と侵略との爭となつた。從つて今度の講和會議は單に利害の調節のみを以て終るものでは無い。否、寧ろ之は附隨の事業ともいふべきであつて、主として攻究せらるゝのは、永久平和の保障を目的とする世界改造の問題でなければならない。果して然らば之れ最早や歐米人のみの問題ではなくして總ての世界人類の共同の大問題である。少くとも今度の戰爭に參加した總べての國家の平等に發言權を主張し得べき問題である。單に利害の調節のみを目的とするものであるならば、講和會議に於ける發言權の範圍と程度とは自ら各國家の今度の戰爭に對する實際的努力の夫によつて定らなければならない。其の方面も無論ある。然し

乍ら少くとも世界改造の大問題に於ては、南米の小國と英米等の大國との間に決して發言權の輕重の別あるを許さない。只事實會議の席上に於て特に或國の發言が重きをなすと云ふ事はあらう。只其の重きをなす所以は斷じて强大なる國家を背景とするが爲めではない。講和使臣其人の人格と、彼の代表する國民の精神的品格が實に其の發言を重からしむるものでなければならない。

斯くして我日本は世界改造の大問題に對して英米と全く同等の發言權を有して居る。而して我政府當局と國民とは果して此點に關して明確なる意識を有つて居るであらうか。此頃は斯んな馬鹿なことを云ふものが餘りなくなつたが、一時は我國の戰爭參加が專ら日英同盟の誼による、而かも地中海に貴重なる艦隊を送つたのは何の根據に由るかなど丶說くものすらあつた。而して地中海艦隊派遣其他種々の方法に由つて現に歐洲の眞中の戰爭に參加して居りながら、今尙世界の問題に對する我れ自らの發言權を十分意識せざるもののあるは寔に慨嘆に堪へない。之には世界の眞中に於ける帝國軍隊の花々しき活動を、何等正當の理由なくして殊更らに秘密にして居つた當局も惡い。然し罪の源は要するに國民の世界的同感の極めて淺薄なるに歸せなければならない。福田博士の如きは今年夏頃から日本の須らく進んで講和を提議すべきを主張して居られたけれども、世界的同感の背景を缺く我國民の間に何等の反響が無かつたのは怪むに足らない。現在の日本國民が後備へとなつて居るのでは、博士の達見も嘸ぞ心細い事であらう。

併し問題はいよ〳〵具體的になつて來た。國民の精神的準備の熟否如何に拘はらず、世界改造の問題は遠からずして吾人の眼前に提供せらるゝ。遲蒔きながら我々は全力を盡くして此點に國民の覺醒を促さなければならない。講和問題に關する各般の準備事項も亦此見地を根本として攻究せれなければならない。若し夫れ講和大使の人選に至つては、須らく一に此見地に依るべきは論を俟たざる所である。今度の談判は支那の李鴻章や露西亞のウイッテを相手とするのとは事が違ふ。樽俎折衝の間に君命を辱めずといふと、如何にも外、辭令に巧みにして、內、深智遠謀を藏するの、謂はゞ腕の冴えた喰へぬ奴を適任者とすべきが如きも、世紀の新時代に於ける講和大使としては之れ丈けでは足りない。何よりも大事な資格は廣汎なる文化的修養と敬虔なる道德的品性とを結び付け、而かも世界の思想に透徹したる理解を有し、あらゆる問題に最も高尚なる見識を有す人物でなければならない。

布衣宰相エーベルトの新任を観て我貴族階級の覺醒を促す

革命後の獨逸がフリードリッヒ・エーベルトによつて統轄せられて居る事は已に吾人の知る所である。彼は畢竟シャイデマンの傀儡に過ぎないといふやうな說もあるけれども、之まで餘り名の知れなつかつた彼が、一布衣より身を起して宰相の位に即いたといふ事は、貴族主義の盛んであつた獨逸に於ては兎も角も非常に珍らしい現象である。彼は一八七一年の生れで、正規の教育としては初等の學校に通つたに過ぎない。幼にして馬具製造の小僧となり、南北獨逸を放浪して青年時代を過した。壯年に及んで新聞に關係し、段々頭角を顯はすやうになつたけれども、職業の點より觀れば要するに一馬具製造業者に過ぎない。而かも尚一國の宰相に擧げられた所以のものは、蓋し彼の人格と能力との非凡なものあるが爲めであらう。獨逸に於て此現象を觀るは是れ現代の政界に於て最大の發言權を有するものは最早や所謂經歷にあらず、門地にあらずして、人格と能力とであることを示すものではないか。

然るに斯の現象を觀て我國一部の人の間に心中密かに杞憂を抱くものがあるやうである。あんな勞働者上りが天下の政權を執るやうになつては將來の社會はどうなるだらう。社會の秩序が之で保たれて行くものかどうかと心配するのである。露西亞の混亂と云ふやうな事もあるから、斯く心配するのも一面に於て無理はない。然しながら若し斯くの如き心配の陰に、貴族が貴族として崇められて居つたやうな從來の狀態の段々變つて行くことを懸念し、換言すれば彼等の眼から觀た所謂階級的秩序の紛更せらるゝ事を憂ふるの念が潜んで居るのなら、之は斷じて正當の憂ではない。

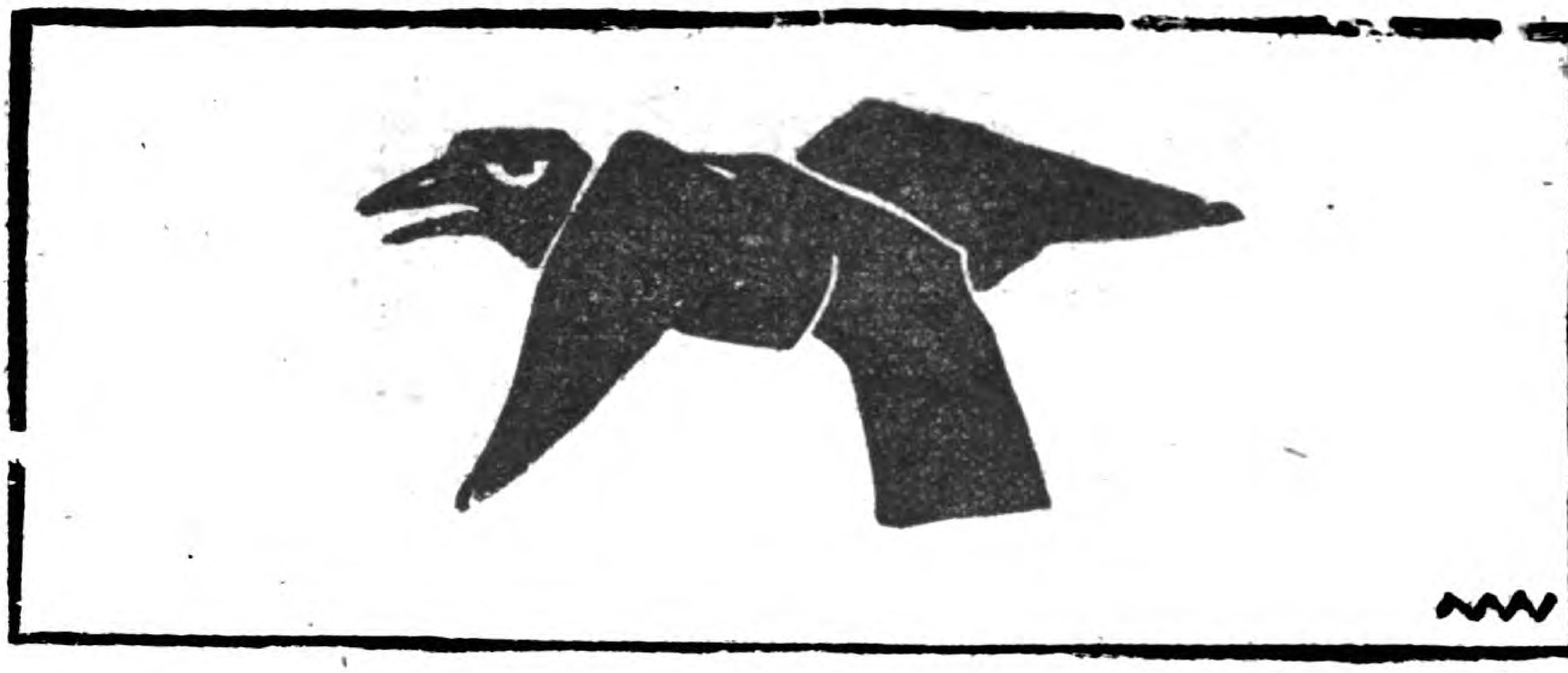
今日我國の貴族社會が今尚封建時代の榮華を夢みつゝあるもの多き事は、我輩の甚だ遺憾とする所である。封建は階級的門地が專ら物を言ふ時代である。人を命令し人を服するが爲めには、偶々高い門地に生れたといふ事の外に道德的に又智識的に左程努力するの必要は無かつた。努力せるものは固より傑出せる名君として尚一層多大の尊敬を受くることは言ふまでもないが、然らざるも彼は尚人を服し人を役するに事缺かない。今日は封建の制度を廢して四民平等の時代となつた。けれども尚封建の餘勢が今日に及び、名門の貴族は依然として社會的に優秀なる惰勢的高地位を占めて居る。併しながらかゝる惰力は決して永く續くべきものではない。況んや人を服し人を命ずるは君主一人の大權に屬し、他は凡て法律の前に平等なりとす

るの新主義が段々明白になつて居るに於ておや。故に貴族が國家の特別なる恩惠に答へ、國民の先達として依然指導的地位を占めんと欲するならば、人に服せられる丈けの人格と能力とを養ふべく、先づ以て大いに努力奮闘する所なければならない。斯く努力奮闘する所の貴族主義は、新らしき時代に於て新らしき意味を有つて其存在を續け得る。然らざれば彼等は所謂白く塗りたる墓の類ひで國家にとつて無用有害の長物である。

　故に封建制度の崩壊は或る意味に於ては貴族にとつて一個の致命傷であつたと同時に、或る意味に於では貴族に對して新時代に生くる爲めの新方針を暗示警告するものであつた。封建時代は努力なしに人を服するの地位を彼等に與へた。新時代は大いなる努力に依つて初めて其の地位を保ち得べきことを彼等に敎へた。こゝに封建制度崩壊の道德的意義が存する。若し彼等が自ら何の特に努力する所なくして平民の己れを敬はざるを不滿とし、更に平民の我は顔に跋扈するを憂ふるならば、之れ徒らに人を責むるの譏を免れざるのみならず、甚だ又僭越の沙汰と言はなければならない。

　然り而して以上の如きは啻に封建的貴族に就いて云ふばかりではない。新時代に於ける貴族についても又同等である。一時の功を以て貴族の別に加はつても人格能力の全般に渉つて人を服するの素質を缺けば、平民の眼より見て彼等亦白く塗りたる墓に過ぎない。而も多くの新貴族は自らの德を以て君より與へられた最高の地位を全うするの修養を怠つて、只貴族たるの故を以て傲然として平民に臨まんとする。甚しきに至ては物質的利益の提供に依つて辛うじて地位に對する尊敬を購はんとするものすらある。斯くして益々平民の侮蔑を招くは當然ではないか。

　今や世界は人格と能力とのみが最高の權威たらんとする時代である。曠古の變局は益々人材の蹶起を促し、門地經歷の活動すべき餘地は益々狹められた。我國でも初めて無爵の宰相を出して天下之を異となして居る間に、獨逸の宰相は更に飛び越えて勞働者から出た。之れ遇々能力主義の發揮に外ならないけれども、又一面に於て貴族主義に對する一大侮辱と見るべきではないか。初めから貴族の制を認めざればよし、苟も貴族制を立てて國家の殊寵を貪る特殊の階級を認むる以上、彼等は大いに發奮努力して此鴻恩に報ゆる所なければならない。然らざれば貴族制を認むる何の必要があるか。貴族を以て皇室の藩屏と見たのは、人民を以て君主の敵を考へた舊時の理想である。四民等しく陛下の赤子たる今日に於て、貴族自身の努力が如何に藻掻いても平民がとても寄り付けない程の高い自覺と堅い能力とを養ふにあらずんば、貴族制は斷じて無用の長物である。



禪讓

田中貢太郎

一

舜は帝の前で琴を彈いてゐた。獸の脂肪を燃やした燭火が室の内を明るく照らしてゐた。彼は愼ましく前屈みに坐つて、三尺六寸六分ある嶧陽產の孤桐の臺に張つた五絃の糸の上に、その白い指を走らしてゐた。

堯の眼には、さうした舜の容が如何にも狡黠らしく映つた。彼は徐州の縞絹をふはりと著て、脊の高い體を床の上に長々と橫たへてゐた。その背後になつた淺絳色の玄纁を張つた壁には、投槍と獸皮の鞘をした劍とがかけてあつたが、その投槍の刀身は、カルヂアあたりから輸入せられた銕で作つた物であつた。

南風の薰ずる
吾が民の慍を解くべし
南風の時ある
吾が民の財を阜にすべし

舜は琴に合はせて、南風の詩を歌つてゐたが、堯の耳には入らなかつた。彼は燭

火の光に浮きあがつて見える舜の横顔を充血した眼で見入りながら、あんな殊勝らしい顔をして琴を彈いてゐても、心では、どんな事をたくらむでゐるかも分らないぞと思つた。

堯の足もとの方に在る牀には、妖艶な裝をした三人の宮女が並んで腰をかけてゐた。堯は黄河地帶に蕃殖した漢人種の百姓民族と深い關係を持つた軒轅族の酋長で、黄帝以來傳へた帝の座席に坐つてゐる者であつた。彼は黒金のやうな強い魂の持ち主で、物に凝滯を感じた事はなかつたが、昨年來、原因の分らない悒鬱に襲はれるやうになり、それと共に夜も眠られない事があるので、枕もとで琴を彈かして、快い睡を誘うてゐたが、それが夏に入つて、共工族の討伐から歸つて以來、彈奏者の一人になつてゐる舜に對する不安が起つて、悒鬱の對象となつた爲に、ますます亢奮するばかりであつた。

敵を屠れり
敵を屠れり
堯は千人
舜は萬人

奇怪な童謡が又しても彼の頭に浮んで來た。それは赤い銅盤のやうな月の光が平陽の街路に流れてゐる晩であつた。彼は一人の侍臣を伴れて微行してゐた。彼が夜、平陽の街路を微行したのは、それが初めではなかつた。或る時、それは七八年も前の事で、郊を祭るの前夜、星がうなるやうな聲を立てゝ平陽の空を南から北へ向つて飛んだ歳であつた。彼は隣部落に住んでゐる酋長の許へ密かに行つてゐた、朏の晩で銀鉤のやうな月が西の空に在つた。五六人の百姓が街路の上に坐つて酒か何かを飲んでゐたが、その内の一人は、小石を打ち合はして調子を取りながら歌つた。それは堯の

德を贊美する意味の物であつた。又少し歩いてゐると、焼火をしてゐる家が在つて、その中で老人が何か口に入れたなりで、食ひ肥つた大きな腹を突き出して、それを輕く片手で叩いて歌つてゐた。

日出でて作き
日入りて息ふ
井を鑿りて飲み
田を畊して食ふ
帝力何か我に有るや

彼は之を聞くと、大聲を出して笑ひ出した。それ以來、彼は己の一擧一動が百姓に反應する事を知つたので、何かの時には微行する事になつてゐた。

奇怪な童謡を聞いたのは、今回の戰捷に關して、百姓が何んと云つて己を贊美してゐるかを知らうと思つて微行した際であつた。彼は平生のやうに侍臣と同じく百姓の服を著けてゐた。戸外には、黄土に照りつけてゐた暑い陽の餘炎が冷めて、涼しい風が動いてゐた。鼓の音と磬の音とが入り亂れて、街路の上には、幾組もの男女の群が口々に歌ひながら、月の光を浴びて踊つてゐた。彼はその間を縫うて歩いた。十五六人ばかりの若い女の群が、月の陰になつた片側の暗い所から、夢の中の人のやうに、足音も立てず、ひらひらと走り出て來て、彼と侍臣とを中に取り込めて、「敵を屠れり、敵を屠れり、堯は千人、舜は萬人、屠れり屠れり――と歌ひながら、その周圍をぐるぐると踊り歩いた。鼓と磬を持つた二人の老女は、列をはなれて音頭を取つてゐた。

彼は不快と不安との中に、踊子の輪の解けるを待つてゐた。待ちながら百姓はもう己よりも舜を贊美してゐる。この

上は、已の座席まで舜に與へなければ措かないだらうと思つた。——兄を倒して帝の座席を簒奪してゐる彼は、已を學ぶ者の顯はれて來るのを恐れた。彼は丹朱と云ふ後繼を持つてゐた。

この夜の不快と不安とは、活々として彼の神經にあつた。童謠の起つた曩日の事が彼の頭を掠めて行つた。……數年來軋轢してゐた幽州の部族に眼をつけ、冀州の高原に雪が消えて、南風が吹き渡ると、軍を整へて北行した。そして、兩軍が遭遇したのは、共工族の牧場となつてゐる山谷の間であつた。谷間の窪地には、あはただしい花の季節が來てゐて、杜鵑花や車百合が一面に咲いてゐた。不意の闖入者に驚いた數百の羊は、悲鳴をあげて逃げ惑うてゐた。共工族は斜陽の射した丘の上に群がつて、谷の下になつた味方の軍を下瞰してゐた。脊の圖拔けて高い共工の酋長は、銅の頭盔兜を著、鱗綴の鎧を著て、長い大きな槍を手にしてゐた。味方の軍士は、それに突き伏せられて進めなかつた。堯は駱駝の龍馬に乘つて、その容を數瞬もせずに見守つてゐた。堯の琴彈となつて、その傍に侍してゐた羊飼の若い男は、腰につけてゐた投石器を取つて、それに手ごろの石を入れ、敵の方に近付いて行つて、矢比をはかつてそれを飛ばした。石は酋長の面に中つて、仰向けに倒れた。味方の軍人が群がつて行つて、酋長を刺し殺した。敵はそれが爲めに一支へもなく散亂した。羊飼の子の腕は、とても人間業ではなかつた。

舜は琴を彈き續けてゐた。堯は魔神のやうな感じのする、若い琴彈に呪ひの眼を向けずにはゐられなかつた。彼は體内がうづくやうに苦しくなつたので、傍に在る陶器の盞に手をかけた。宮女の一人が起つて行つて、彼の枕もとの卓の上に載せてある酒袋を取つて、山羊の乳から出來た酒を注いだ。彼は饑えかはいた人のやうに、がつがつしながら飲んで、又琴彈の方を見た。

禮縵縵たり
日月光華あり
旦復た旦

舜は又かう云つて歌つた。

朝、堯は三人の侍臣を伴れて宮中を出た。侍臣の一人は、彼の投槍を持つてゐた。黃河支流の汾水の陽に建てられた平陽の都城は、民家の屋根越しに眼をやると、代赭の肌を露はした山脈が四方にそゝり立つて見られた。街路はさらざらした黃土からなつてゐた。秋風はこの上を吹いて、薄すらと土煙をあげてゐた。交易に行く百姓は、驢馬の脊に種々の物を積んで、その中を往來してゐた。毎晩の不眠の爲に充血してゐる堯の瞼は、ピリピリした痛みを感じてゐた。帝に行き逢ふた百姓は、皆拜をして通つて行つた。堯はそれが厭はしかつた。彼は卜者の許へ行く所であつた。彼は舜の存在が一族に取つた凶であるか、吉であるかを占はふとしてゐた。

卜者の居る所は、市の大通を横切つて行つた汚い裏町であつた。大通では物々交換の交易が始まつて、四方から集まつて來た百姓が街路に溢れてゐた。堯の歩いてゐる直ぐ右手の方では、一疋の山羊と絺らしい織物の巻いたのとを交換しようとして、山羊を伴れてゐる方の男は、織物の端を繰り擴げて、その地質を陽の光に透すやうにしてゐた。その後の方では、切口の血みどろになつた、野獸らしい赭毛の胴體を砂の上に据ゑて、肥つた男が、大きな籠を背負つた女と何か云つてゐた。堯の左手になつた方では、五六人の者が何か取り圍んで、それに指をさしながら、口々に喚いてゐた。その中の一人は、仰向いて陽の方に片手をやりながら、盟でもすると云ふやうな容をしてゐた。

堯は多くの百姓から敬禮を受けるのが厭であつたから、なるだけ百姓に見られないやうにと思つて、足早にさつさと歩いた。それでもその路筋に立つてゐた百姓は、帝の微行姿を見付けずには措かなかつた。彼等は交易してゐた相手と一所に拜をした。從來の堯であつたなれば、から云ふ場合には、言葉をかけないまでも、屹と百姓を勞はるやうな眼付をして行つたものであつたが、その日は何か物厭はしさうな顏であつた。籠に盛つた鹽を足もとに置いてゐた男は、不審さうに帝を見送つてゐた。

裏通には俘囚となつて伴れて來られた者や、軒轅族の文明を慕ふて漂泊して來た浮浪などが住んでゐた。其所には獸皮や木皮木葉などを屋根にした汚い家がごたごたと續いてゐた。堯はその家の一軒に入つて行つた。黑木を掘立てにした四方に障壁の無い狹い家の中には、土の上に草の圓座を敷いて、脊の低い蛙のやうな眼をした老婆が坐つてゐた。老婆の前には、石で圍んだ爐があつて、それに火が暑く燃えてゐた。老婆はその火を見詰めるやうにして、口の裏で何かくどくどと呟いてゐた。それは數年前、靑州の方に行つて、岱宗に登つて羊を燔いて天を祭つた時、その麓から伴れて來た者であつた。

『――――』と、侍臣は老婆の名を呼んだ。老婆は顏をあげて見たが、帝を見付けると靜に兩手を捧げるやうに延べ、首は俯向けられるだけ俯向けて拜をした。

堯は入口にある小さな牀に腰をかけた。侍臣はその背後に立つてゐた。

『帝、私に何の占ひを仰せつけて下さいます。』と、老婆は媚びるやうに云つた。

『此所に或る男が居るが、それをその儘にして置くが好いか、それとも直ぐ除く方が好いか、それを占ふて貰ひたい。』

と云つて、堯は眼をつむつた。

老婆は室の隅の棚の前に行つた。其所には獸の骨や龜の甲良の斷片などが澤山置いてあつた。老婆はその中から一片の薄黑い龜の甲良を持つて來て、圓座の上へ兩足を組み違ひにして坐り、口の裏で呪文を唱へ唱へして、その甲良を火の中に入れ、矢張りその唱へを續けてゐたが、やがて火箸でその甲良を撮みあげた。甲良は火の爲に所々に龜裂を生じてゐた。老婆はその龜裂をぢつと見て考へてゐた。

『帝、これは、この儘に、そつとして置く方が宜しうございます。除くにしましても、自然と放れて行く時を待たねばなりません。これを、さうしないで、無理にでも除かうとしようものなら、屹と災が起ります。』と、老婆は堯を見上げた。

堯は眼を見開いて、老婆の顏を見返しながら、一つ輕く頷付くと、その儘體を起して外に出た。侍臣も帝に隨いて、その背後から出やうとしたが、その中の一人は老婆に向つて、この謝禮は今日明日の中に、宮中からさげられると云つて知らした。

宮中の方に歸つて行くべき筈の堯は、ずんずんと前の方へ行つた。侍臣の或る者は、帝は何處へ行くだらうと思ふて不審する者もあつたが、中には知つてゐる者があつて、帝はまだ疑ひが解けないから、筮卜の老人の所へ行くだらうと思つた。

堯は民家續きになつた丘の下へと行つた。其所には丘の腹へ穴を鑿つて、その入口へ、獸皮や木皮などを釣して、穴居生活をしてゐる者があつた、その一軒には、木彫の仙人のやうに痩せからびた髯の白い老人が、兩手の掌をうへ向きに重ねて坐つてゐた。堯はその家へと這入つて行つた。

『これは、帝でございますか、』と、老人は拜をした。

堯は低い穴の中に脊を屈めて立つた。侍臣は朝陽を浴びて入口に立つてゐた。老人は黒い獸皮を持つて來て堯の前に敷いた。堯はその上に足を投げ出して坐つた。

老人は己れも獸皮を敷いてゐた。老人は座にかへると、『帝、何を私に仰せつけて下さいます。』

『一人此所に男が居る、それをその儘にして置いて好いか、それともそれを除いて好いか、占ふて貰ひたい。』

老人は坐つたなりに體を背後に曲げて、机のやうな竹を編んで作つた臺から、小さな木片のやうな物を數本取つて、それを座の上で弄り出した。それは易の卦を刻んだ八本の筮木であつた。老人は又體を臺の方に向けて、その上から竹を短冊のやうに削つて革で綴り合せた物を取つて、それをばらばらと繰りはじめた。その竹簡は易の文字を一枚一枚に刻みつけたもので、六十四枚あつた。伏羲が象を天に觀、法を地に祭して畫したと云はれてゐる易の卦は、もと支那に移住して來た漢民族が葱嶺の彼方から持つて來たアッシリヤの楔形文字を集めた字書で、卜筮に關係のある物ではなかつたが、彼は一心になつて、その竹簡の文字と筮木の文字とを見合せて考へてゐた。そして、やつと斷案が浮んだのか、竹簡を下に置いた。

『帝、この者は直ぐお除きになるのが宜しうございます。これは噬嗑の卦と申しまして、小人が君と臣との間に在つて邪魔をして居りますから、噬み摧くやうにそれを除けば、君と臣との間が、魚と水とのやうに、よく合體すると云ふ卦でございます。』

『うむ、さうか、』堯は二度ばかり領付くと、老人の事は忘れたやうに、足を返して歩き出した。侍臣は又老婆に云つたやうに謝禮の事を云ひ置いて、その背後から隨いて行つた。

日は高くなつてゐた。堯は老婆の言と、老人の言とを二つながら頭に置いて、どつちが本當だらうかと、考へ考へ歩

いてゐた。そして、時々いかつい眼を見開くやうにして、暑い陽の照りつけた黄土の上を佗しさうに見た。

堯は牀に腰をかけて考へ込んでゐた。前は直ぐ廻廊になつて、其所から三段になつた簡素な土の刻階が付いてゐた。その刻階の右側に一本の草が生へてゐて、それに丁寧な垣をめぐらしてあつた。それは蓂莢と云ふ草で、月の一日から十五日までは、毎日一枚づつの葉を著け、十六日から晦日までは、毎日一枚づつを落とした。小の月には、一枚の葉が凋んだなりに絡み付いて落ちなかつた。日の旬朔はそれで知れた。その日は、十枚ばかりの淺緑の葉が正午に近い陽の光を吸うてゐた。その向ふは、廣い庭園になつて、熊や羆や豹などの猛獸を放つてある獸園の木柵の一部が、薄赤くなつた落葉樹の林の間から見えてゐた。木柵の傍には裘を著た二人の奴隷が、向き合つて蹲みながら何かやつてゐた。

堯の傍には誰れもゐなかつた。それは傍に人のゐるのが煩さいので、侍臣を追ひやつた爲めであつた。さうして彼は一人になつて、さつきの占ひの事を考へてゐた。……無理に除かうとしようものなら、屹と災が起ると云ふが、筮卜の方では、君臣の間にあつて邪魔する小人を噬み摧くやうに除けば、君と臣との間が旨く合體するから、早く除くが好いと云つたではないか、何故筮卜の方が好いと云ふに、龜卜の方で惡いと云ふだらう。それでは、筮卜の方が間違つて居るだらうかと考へて行くと、龜卜の老婆を非常に信用してゐる彼は、筮卜を龜卜よりも重く見る事は出來なかつた。が、併しと、彼は又惑ひ出した。……黄帝でも筮卜をやつてゐる。筮卜も驗の無い物でもあるまい。驗があるとすれば今日の筮卜も當らないとは云へない。當つて居るとすれば、羊飼の子を除いても好い事になる、一思に除かうか……、彼は己の考を其所までは押し詰めて行くが、本能的に龜卜の老婆を信用してゐるので、何時も其所まで行くと、無理に除かうとしようものなら、屹と災が起ると云つた龜卜の言へ、その考へが電光のやうに飛んで行つて、又もとの混沌た

る物としてしまふ。

『どうも可笑しいぞ、俺はこの頃、どうかして居るぞ、』と、彼は蒼白な長い顔を一二度振つてみた。彼は己の慾望から兄を倒してさへ、別に疚しいと思つた事はなかつた。彼は己の勢望が盛になつて來ると、毫に人をやつて兄の摯を威嚇した。摯は恐れて、黄帝以來傳へた黄冠と純衣とを持つて、この唐國の平陽にゐた彼の許へと來た。そして、彼の部下に監視せられて、その妻孥と共に一輛の車に乘り、これから黄河地帶に恐ろしい多が來ようとして、凍雲が密々と封じた空の下を、悄然として南の方に去つた。……『何故、こんな事が氣になるだらう、俺はどうかして居るらしいぞ、』

堯は不意に起ちあがつて、室の中をせかせかと歩いた。そして、卜占の事を頭に浮べて、俺は從來占ひはやらして居るが、それは單に右か左かを決するばかりで、それが爲にやらうと思つた事を中止した事はないぞ、占ひなんぞはどうでも好い。何故俺は自分でかうと思ひ立つた事を、何故思ひ通りにやらない、俺は帝ぢやないか、天に代つて百姓を治めて居る者ぢやないか、俺の心は神の心ぢや、神の心に浮んだ事に惡い事があるか、何故俺は心に浮んだ事を、浮んだまゝにやらない。神の心に間違がある筈がない。……と思つて來ると、彼の心は從來の堯の心になつて來た。……よし、俺は思ひのまゝにやらう、舜が生きてゐて、俺の爲に惡いと云ふなら、一思ひに彼奴を除かう、……

『帝、帝、』

其所には侍臣の伯夷が立つてゐた。堯は默つたなりにその顔を見た。

『おでましを願ひます。』

『何んだ。』

『もう皆が揃ひまして御座います。』

その日は有力な幕僚が集まつて來て、一所に食事をとりながら、軍事と政事とを議する日であつた。堯はやつとそれを思ひ出した。

『うむ。』

堯が頷付くと、伯夷は室を出て行つたが、その後で、堯はもう頭を舜の方にやつて、會議の事は忘れてしまつた。……彼奴を除くとして、殺すとなれば、誰れかに命じさへすれば好いし、自分で彼の鋭利な鉞の投槍を用ゐても好いが、彼奴は普通の奴隷と違つて、共工討伐に大功の有つた事は、百姓が知つて贊美してゐる程であるから、何か好い名目をこしらへなければならぬ。どう云ふ名目にしたものであらうかと、彼は又考へた。

…無理に除かうとしようものなら、屹と災が起る、と云つた老婆の言が執念くよみがへつて來た。……何故、無理に除いては惡いだらう、それでは、もし、此所で一思ひに彼奴を殺したとしたら、どう云ふ事になるだらう、彼奴の九族が俺を恨んで、仇として狙ふと云ふのか、そんな事なら獸園の羆ほども恐ろしくは無い。それとも平陽の百姓が俺に叛くと云ふのか、假令へ叛いた所で、宮中には何時でも千人位の軍士が居る、一夜の中に市街を焦土にして百姓を一人も遺さず殺す事が出來る。それとも俺の下風に立つて居る四方の酋長が叛くと云ふのか、舜一人の爲にそんな事は決して無い。それなら何の災が起るのか、天に代つて百姓を治めて居る俺に、天が罰を下すと云ふ事は無い筈ぢや、別に災の起りさうな事は無い。何故無理に除くが惡い。何時までも此儘にして置かうものなら、どんな事になるかも分らない。平陽の百姓はもう俺の座席を彼奴に與へんばかりな事を云つて居る。とても、自然に放れて行く時なんか待つて居られるものでない。筮卜の方は、噬み摧くやうに除くが好いと云つて、俺の考へと一致して居る所がある。いつそ筮卜に從つてやらうかと、彼は考へて見た。併し、彼の頭の何處かには龜卜の言が覗いてゐるので、彼はどうしても決斷が出來

なかつた。……それでは、無理に除かないで、何か自然に除く手段は無いのか。……
『お父様、』と云ふ聲が、煩悶の中の堯の魂を呼び悟ました。
堯の前には、若い丹朱が立つてゐた。
『お父様、いらして下さい。皆が待ちかねて居ります。』
『よし、よし、』と、堯は領付いて、『今日は何か話す事でも有るかな、』と云つた。
『鯀が暴逆を働くと申して居りますから、その討伐の事も定めねばなりますまい。』
『羽山の鯀か、たいした事もなからう、』
『四嶽どもが申しますには、共工などの比ではないと申して居ります。』
『さうか、』と云つてゐる中に、堯はふと考へた事があつた。『舜も來て居るか、』
『舜は謙遜して出てまゐりません。』
『謙遜やら何やら分つたものぢやない……、が、まア好い、少し用事があるから、あれも呼ぶが好い。』
『ぢや、呼んでまゐりませうか、』
『あゝ、呼んで貰はふか、』と、堯が云つた。丹朱は廻廊を通つて向ふの方へと行つた。
舜は己の室で、仲間の者と山羊の乳を飲んでゐた。その一人は夔で、一人は皐陶であつた。夔は磬を拊つが上手で、この男が手にした黒い石くれを拊つと、獸園の猛獸どもが舞踊をやると云はれてゐた。
皆二十四五歳の若い者同志であつた。三人は乳を飲みながら、今日の會議の噂をしてゐた。

『鯀を討伐するだらうか、』と、皐陶は舜を見て云つた。何事にも規矩を立てずには措かないこの男は、かうした親しい談話に於ても、體を眞直にして、相手の顔を正視してゐた。

『やるかも知れない。四嶽さんなどは、その積りらしいから、』と、舜は白い齒並をチラと見せた。

『貴君が又功を立てゝくれると好いな、』と、夔が云ひ出した。『共工の時には、帝の傍で見てゐたものゝ、まさか投石器で敵を倒すとは思はないから、契と二人で笑つてゐたら、豪い事になつたものだ。』

舜はその時の功によつて、十日目毎に行はるゝ會議の席へ列する事を許されると共に、宮中へ室を貰つたので、仲間をはじめ多くの軍士達と一所に住んでゐた窮廬の住居を出て宮中へ移つてゐた。

『平生、德を積んで居るから、鬼神の旨にかなふたからぢや、』と、皐陶が重々しく云つた。

『そんな事は無い。あれは、ほんのまぐれあたりさ、まさか共工の酋長が、羊をとりに來る獸のやうに、倒れるとは思はなかつたよ、』

皆の盞に乳が無くなつてゐたので、舜は體を起して、桌の眞中に据ゑた、蛸だの人手だの云ふ海の下等動物の羹を燒き付けた甕を持つて注いで廻つた。

夔はそれに口をつけながら、『功名も惡くはないが、考へてみれば、厭な事ぢやないか、豪くなればなるで、人の嫉妬を受けるし、氣苦勞も大きくなつて、まかり違へば、生命まで棄てるやうになる。人間ばかりでない、鳥でも獸でも、能のある物は、人間に獲られて、殺されたり、繋がれたりする…』と、この現世の慾望に興味を持たない樂師は、荒唐な心の影を口から出るに任せて演べ立てた。『…帝のやうになれば、世の中の事は自由自在になる代りに、夢にまで夷狄や謀叛人の事を心配しなくてはならん。それよりは、豪くも無く、名も無ければ、氣も使はず、生命も棄てずに天命を全う

する事が出來る、…貴君は、許由の話を知つて居りますか、』と、皐陶の方を向いて云つた。

『いや、知らん、』

『さうですか、いや、それは、變な爺さんでしたよ、何時か宮中へ來た時に、帝が冗談に、俺も飽いて來たから、お前が帝になつてくれないかと云つたら、それを本氣にして、平陽を逃げ出し、耳の穢を洗ふのだと云つて、谷川で洗つてゐると、巣父と云ふ男が、犢に水を飲ましに來て、その譯を聞くと、飲まさずに行つちまつたと云ふ話ですよ。』

『うむ、』

『私は、それも面白いと思ふが、許由と巣父はまだ肉を喫ふ人間ぢやて。それよりは、姑射の山にゐる神人のやうになりたいな、その神人と云ふのは、何時の時代から居ると云ふ事は分らないが、それでも顔は處女のやうに美くしく、肌は雪のやうに白いと云ひましたよ。それで何時も風を吸ひ、露を飲んで、心が向けば雲に乘り、龍に駕して、四海の外に遊ぶと云ひますからな、』

舜は默然として聞いてゐた。彼は如何なる事でも、ぢつと心の中にしまつて置く性質であつた。

皐陶は默つて居られなかつた。彼は、その虚無放恣な人倫を誑警したやうな言に對して、辯を詰らうとした所で、丹朱が還入つて來た、で、皐陶はその儘口をつぐんでしまひ、舜は丹朱に随いて室を出た。

宮中の大廣間には、室の中央に卓を長方形に据ゑて、右側の南向きになつた方に、背後に織文の帷を垂れて堯が座り、その右には、球玉や碼碯の胸飾をした妃の稷が、豐麗な肉付を見せて座つてゐた。そして、妃の左に一つの空席を置いて、二人の若い女が並んでゐた。二人とも貝錦と云はれた楊州産の貝の模様を織り出した花のやうな衣を着け、下に靑絹の裳を垂れてゐた。それは一人は娥皇と云ひ、一人は女英と云ふ丹朱の妹であつた。左側の北向きになつた方には、

堯の大臣とも云ふべき十餘人の幕僚が座つてゐた。その中で東方の酋長の事を主つてゐる義仲、南方の酋長の事を主つてゐる義叔、西方の酋長の事を主つてゐる和仲、北方の酋長の事を主つてゐる和叔の四人は、四嶽の官と云ふ事になつてゐた。放齊、讙兜などもその中に交つてゐた。

丹朱と舜とが這入つて行くと、堯は直ぐ舜を桌の左の端に呼んだ。丹朱は堯の左側の空席へ著いた。

『舜、其方は䖍を討伐して來い。』と、堯は突然云ひ出した。

舜は當惑した。堯はその顏の筋肉の動きも見落すまいとして、ぢつと見詰めてゐた。

『共工の時のやうにやつて來たなら、此所に居る娥皇と女英とを其方にやる。』と、堯は又云つた。……敵の手で失へば自然と放れるも同じ事ぢやと、彼の頭の中には、辯解らしい考が浮んでゐた。

人々の中には、興味ある眼を姉妹の方に向けた者があつた。娥皇と女英とは、云ひ合はしたやうに顏を見合はして、それから俯向いてしまつた。

舜は辭する事が出來なかつた。彼はやむを得ず䖍族討伐の途に著く事となつた。

帝の胸中を知らない者の中には、羊飼の子に嫉妬の眼を向ける者もあつた。

二

堯は頭の中が急に喁々として、名狀する事の出來ない歡喜に浸されたので、周章しく室を出て、幕僚の詰めてゐる所へと行つた。

晩春の薄曇のした日であつた。庭園の樹木の間では、十人ばかりの宮女が集まつて、鞦韆に興をやつてゐた。新緑をつけた巨樹の枝に燃えるやうな緋の條をかけて、それに倚つて體を動かす女の姿が遠くの方から小さく眺められたが、

堯の眼には入らなかつた。彼はそはそはと步いてゐた。

平生幕僚の詰めてゐる所は、大廣間に隣つた室であつた。堯は其所へ入つて行つた。その日は、四嶽の羲叔と和仲の二人、放齊、弃、契、垂など云ふ者がゐた。その中で、弃は耕農の事に精しいので、百姓に稼穡を敎へてゐる者であつた。契はもと西方亞細亞からバビロニア、アッスシリアの文化を傳へて來た商人であつた。その日彼は、帝の乘車が古びたので、バビロニア風の彤塗の車を新らしく造らうと云つて、工匠の垂と相談してゐる所であつた。彼は額の禿げた傲慢に見える鉤鼻を持つた男であつた。垂は單純な何時でも相手に腹の底を見せて話をすると云ふ風の男であつた。二人は話に氣を取られて帝の來たのも知らなかつた。

『おい、契、何の馬鹿を云つて居る、』

何か包み切れない愉悅を持つてゐるやうな聲がしたので、契も垂もその方に眼をやつた。脊の圖拔けて高い帝の姿があつて、他の者はもう拜をすました所であつた。二人も驚いて拜をした。

『皆、もう、くだらん事に氣を使はなくても好いぞ、』

堯は片手を振つて悅しさうに云つた。昨年あたりから悒鬱な暗い顏をして、殆んど別人のやうになつてゐた帝の本當の顏を、久しぶりに見せられるやうに思つて、人々は上氣したやうなその顏に注意した。

『おい弃、お前が骨を折らないでも、穀物は自然に生へて來て、いくら百姓が食つたつて食ひ切れないぞ、』と、堯は顏の平べつたい色の黑い弃の顏をぢろりと覗き込むやうにした。

放齊は堯の牀を直して迎へやうとした。

『そんな物はいらない。』と云つて、彼はそはそはと室の中を步いて、『俺は、今午睡をしてゐて夢を見たが、其所には帝

の座席を覗つて居る奴も、謀叛をたくらむ奴も、面倒な酋長も、夷狄も、そんな奴は一人だつて居らんぞ。それで家と云ふ家は、どの家を見ても丹碧の粲然とした宮殿のやうな家ばかりぢや。街路には球琳や琅玕を一面に鋪いて、天花が何時もその上に繽紛と降つて居る。又何處ともなく天の伎楽が聞えて居つた。青い錦繍を垂れたやうな林には、孔雀や鸚鵡などが囀り、川は川で、瑠璃や瑪瑙の上を白銀を熔かしたやうな色をして流れて居るし、百姓は其所で晝夜の別なく酒を飲んで戯れて居る。不思議な所へ來たものだと思つてゐると、其所は矢張り平陽で、俺は車に乘つて居るぢやないか……』

皆眼を見張つて彼の顔を見た。彼は悦しくて體がぞくぞくすると云ふ風であつた。

『…これは、俺の德によつて、陶唐の天下が治まり、今にこの平陽が左樣なる兆ぢや…』

彼は義叔の背後の方に行つた。其所には八花稜形になつた銅鏡をかけた柱があつた。彼はふとその鏡に眼をつけ、その前に背を屈めて已の顔を映して、『この眼を見ろ、俺の眼は、伏羲の眼よりも、黄帝の眼よりも尊いぞ…』と、横手の方を見て、此方を向いてゐる契の顔を見て、見すゑて瞳の動かない眼をそれにやつて、右の指を已の顔にやり、『おい、この眼が見えるか、』

人々はこの驕慢の言を聞いて驚いた。

彼は今度は契と並んでゐた放齊の顔をぎよろりと見た。『どうだ、お前は分るか、この智惠の足りない奴、』

放齊は呆れてゐた。堯はもう放齊に云つた事も、契に云つた事も忘れてしまつたやうに鏡の面を凝視した。

『今まで帝になつた者で、こんな尊い眼を持つた者があるか、黄帝などは、俺の足もとへも寄れない奴ぢや、』

舜が還入つて來た。彼は後宮へ行つて稷妃の機嫌を伺ひ、それから帝の室へと行つたが、宮女の一人が帝は此方へ來

たと知らせてくれたので、追ふて來た所であつた。彼は先月になつて鯀族討滅の功を收めて歸つたので、帝から娥皇と女英の二人を貰つて第二宮に置かれてゐた。

ふと舜を見付けた堯の眼は、燒き付けられたやうに動かなかつた。舜は不思議に思ひながら拜をした。

『その眼は、づるい眼ぢやぞ、油斷の出來ない眼ぢや、…分つたか、』

舜は何と云つて好いか分らなかつた。彼は呆れて立つてゐた。

『…なんだ、その眼は、何と云ふづるい眼ぢや、貴樣が幾何づるい事をしようとしたつて、俺には、ちやんと分つてゐるぞ、』

堯の眼は憎惡に燃えてゐた。舜には合點が行かなかつた。

『俺の眼は貴樣などに眩まされはしないぞ、』

『はい、』

『はいとはなんだ、こら、』

堯は腰に釣した劍に手をかけて、舜の方へ進んだ。羲叔と契とが驚いて起ちあがつて、堯の傍へと寄つた。丁度その時、丹朱がその室へ來たが、これを見ると飛んで行つて、劍にかけた堯の手を摑んだ。

『放せ、何をする、いかん、』

堯は凄い聲を出して無理に劍を拔かうとしたが、三人に押へられて動けなかつた。その隙に放齊と弃とが舜を連れて外へ出て行つた。

燃えるやうな感情が通り過ぎた。堯は丹朱に眼が注いた。『よし、もう好い、あの羊飼の子を赦してやつた所ぢや、本

當に惱るもんか、』と、急に笑ひ出して、右の掌を契の天窓に加へて、『…惱りはしないよ、こんな弱いお爺さんに惱るもんか、』

契は苦笑した。堯は室の中を歩いた。丹朱はその容を不審さうに見てゐた。

『…舜のやうな奴に何が出來る、あんな羊飼の子なんかに何が出來る…』堯は銅鏡のかゝつた柱を廻つて、丹朱の所に戻つて來た。『…舜よりお前の方がよつぽど豪いぞ。』

舜は放齊と弃とに別れて、後宮の横手の廊下から二宮の方へと歸つて來たが、堯の惱からその態度から、腑に落ちない事だらけであつた。…非常に機嫌の好い顔をして入つて來て、夢の話をはじめ、その後で鏡を見て、俺の眼は、伏羲の眼よりも、黄帝の眼よりも好い眼であると云つてゐた所であつた、と話した放齊の言を考へても、これと押へる所はなかつた。

併し、その刺すやうな言と、燃ゆるやうな憎惡の眼付とは、何か事情が無くてはならぬ。もし、と彼は考へて、己が帝の二女を貰つた爲に、誰れかの嫉妬を買つて、帝に中傷せられたでは有るまいかと思つた。この嫉妬と云ふ事は、彼がはじめから戒愼してゐる所であつた。彼は豫期してゐた恐れが、いよいよ襲うて來たやうに思つた。

彼は默々と考へ込みながら二宮へ入つて、己の室の方へ行かうとすると、女英が何時の間にか傍へ寄つて來て、片手に縋り付いた。

『お姉樣の所へばかり行つては、いけないぢやありませんか、』

舜はまだ半分己の考の方へ頭をやりながら、『そんな事はないよ、』

『だつてお姉樣の室の方へ行つてるではありませんか、』
舜は己の室の前を通り越してゐた。女英は黑い大きな瞳で舜を見た。舜は微笑した。女英はその手を強くひいて、後戾りをして己の室に入り、入口へ淺黃色の帷を垂れて、その端を左右の柱に著けてある紐で縛つた。
『昨夜もお姉樣の所へ行つて置きながら、又、今日も行かうとなさるのは、あまり酷いぢやありませんか、』
女英は床の端に腰をかけてゐる舜の傍へ行つて、びつたり並んで腰をかけた。舜は矢張り微笑してゐた。
『そんなにお姉樣がお好きでございますか、』
女英はかう云つて、片頰を舜の肩先に押し當てるやうにして縋り付いた。
『昨夜は伯夷が來て、遲くまで話して行つたから、娥皇の所へは行かなかつたよ、』
『そんな事はないでせう、行つたでせう。』
『それは天の神がよく知つて居る、』
舜は女英に體を任せたまゝで、靜に物優しく云つた。その微溫的な態度が女英には何時も物足りなかつた。彼は冉々と肉體に喰入るやうな力が望ましかつた。と、彼の本能は或る物に牽きつけられた。そして、それが小鳥のやうな感じのする靑い衣を著けた若い女となつて來た。これは敵地から掠奪して來た者であつた。五六疋の馬の背に、二三人宛縛り付けて來た女を、堯の面前で繩を解いておろしてゐると、その女は一人遁れやうとした。馬と一所に來てゐた軍士が追つて行つて捕へた。この女は、その中でも勝れた容貌を持つてゐた。堯は庭におりて行つて、それを軍士の手から受け取り、猶も遁れやうとする女をしかと抱き縮めて、脊の高い體をゆつたりと運んで、己の室の中へと入つて行つた。……彼には、かうした父の腕が舜にも有つて欲しかつた。

『あなたは、戰に行つて、どうなさるのです。』
舜は堯の眼付を考へてゐた。『どうとは、』
『戰に行つた時にも、こんなにおとなしくして居るのでございますか、』
『私には帝のやうな勇氣がないから、何時でもこんなさ、』
『それでは、どうして、共工の酋長や鯀が討てました。』
『共工の酋長は、中ると思はなかつた石が中つたまでだ。』
『そんな事はないでせう、何處かに人に見えない勇氣がありませう、……その勇氣を見せて下さいまし、』
女英は縋り付いてゐる手に力を入れた。舜は矢張り微笑しながら、右の手を女英の肩にかけた。
『私には、とても帝のやうな勇氣が無い。』
室の外には、娥皇がそつと立つてゐた。彼は妹が舜を伴れて室へ入らうとするのを見て、その嫉妬から牽きつけられたものであつたが、彼は妹と違つて、愼み深い弱い心を持つてゐるので、さうした容を人に見られるのが恐ろしいやうな氣でゐた。彼は絕えず前後に注意しながら、耳を傾けてゐたが、中の聲ははつきりとはしなかつた。
丹朱が舜の室の方からやつて來た。娥皇はびつくりして逃げて行かうとすると、丹朱が見付けて呼んだ。娥皇は仕方なく其所に立つてゐた。
『舜はどうした。』
娥皇は憚られて妹の室の中にゐると言へないので、『私も探して居りますが、此方にでもゐないでせうか、』
丹朱が聲をかけると、女英が入口の帷を開けて顏を出した。丹朱は歸つて行かうとする娥皇も呼び入れて、一所に中

へ入つた。

『さつきは、びつくりしたらうが、心配する事はないよ。』

丹朱は己を迎へた舜にかう云つて、傍の牀に腰をかけた。

『何故あんなに惱られたでせう、』と、舜は聞いた。

『今、行つて聞からうと思つて居るが、誰れに聞いても譯を知らない……、なに、あれから直ぐ機嫌が直つて、室へ歸つたよ、』

女英が丹朱の顏と舜の顏とを見比べながら聞いた。『何かあつたんですか、』

『さつき、お父樣が舜を惱つたが、たいしたことはないよ、』

『何故惱つたんでせう、』

『どうも分らないが、何か他に腹の立つ事でもあつたらう、』

丹朱と二人の妹とは、連れ立つて堯の室へと行つた。そして、入口に立つて丹朱が聲をかけると、宮女が來て帷を開けてくれた。

堯は床の上で酒を飮んでゐた。『あ、來たか、來たか、』と、三人の子供の顏を見廻はして、『それぢや、皆で酒宴をしよう、其所へかけるが好い。』

その言から態度から如何にも悅しさうであるから、舜に對する感情も消えてゐるだらうと思つて、苦勞症の娥皇の心が先づ解くなつて行つた。

三人が横手の桌の方へ行つて腰をかけると、堯も床をおりて來て、丹朱と並んで腰をかけた。數人の宮女は、室を出入して酒宴の構をした。陶器の鉢に盛つた橘柚なども持つて來た。

『舜はどうした。舜よりは丹朱の方がよつぽと豪いぞ。』と云つて、堯は己の前にゐる女英の顔を見て、『これ、分つて居るか、舜よりは兄さんの方がよつぽど豪いぞ。』

『さうですとも。』と、女英は云つたが、父の言が平生の父の言でないやうな氣がするので、ちらと丹朱の方に横眼を使つた。

丹朱は苦笑を口元に見せてゐた。『いや、舜は英雄ぢや、私なんかと比べ者にはならない。』

『何が英雄ぢや、彼の眼を見たか、づるい、油斷のならない、始終何かたくらんで居る奴ぢやぞ。』

皆の前に置いた盞に酒を注いでゐた宮女は、堯の言におびえて、娥皇の盞に注がうとした酒を滴した。

『お前達は彼奴をどう思つて居る、彼奴は油斷の出來ない奴ぢやぞ。』と、堯は空間を睨みつけて、『彼奴は帝の座席を覘つて居る奴ぢやぞ、油斷をするな。』

『そんな事はないでせう。』と、女英が打ち消した。

『たわけ者、何を云ふ。』と、堯は叱りつけて、『お前達は、もう舜に騙されて居るから、分らない。』

『そんな事はありませんよ。』と、女英は腹を立てゝ、『舜は、そんな惡い者ぢやありませんよ。』

『もう許さん。』

堯は手にしてゐた盞を女英に投げ付けて、起ちあがつた。丹朱は驚いて堯を押へやうとした。

『お父樣、そんなになさらなくつても好いぢやありませんか。』と、娥皇が女英を背後にかはふやうにした。

『まだお前がそんな事をするか、お前も女英も許さん、舜に騙されて居る奴は、誰れでも許さん、出ろ、此所には置かない、』

堯は桌を突き飛ばすやうにした、丹朱はその腕を押へて宥め宥めした。娥皇と女英とは手を取り合つて、室の外へと出て行つた。

『出ろ、もう決して來る事はならんぞ、』

堯は二人の姿が無くなつても、その方を睨むやうにしてゐた。

『出ましたよ、もう、おかけになつたら如何です。』

丹朱は堯に腰をおろさせやうとした。堯は丹朱の顏をぢろりと見て後に腰をかけながら、『もう好い。彼奴等を追拂つたから、氣が清々する、』

宮女は新らしい盞を堯の前に持つて來て、それに酒を注いだ。堯はそれを一口飲んで、『お前はなかなか豪い、舜などに負けないぞ、』

丹朱は默つてその顏を見てゐた。

『お前なら帝になつても立派なものぢや、舜なんかが何になれる、あれや羊飼の子ぢやないか、あんな弱い奴が何になる、俺の兄の摯なんかも弱かつたから、俺の所へ降服して來たぢやをいか、』と云つて、何か考へ浮べた堯は、傍に立つてゐる宮女の顏を見て、『義叔や放齊なんかの居る所へ行つて、皆で直ぐ來いと云へ、』

宮女は靜に出て行つた。丹朱は皆を呼んで何をするだらうかと思つた。

『今日は皆を呼んで考を聞いてみねばならん、』

堯は空間を見詰めるやうにしてゐた。丹朱は父の態度が不審でならなかつた。どうして、あんなに舜を惡く云ふだらうか、舜をあんなに云ふには、何か舜の不逞な行を知つたからであらうかと思つた。さう思ふと、父を神のやうに思つてゐる丹朱は、其所に疑問を挾まずにはゐられなかつた。……併し、舜の周圍には、不純な對象は見付からなかつた。

どかどかと足音をさして、羲叔、和仲、放齊、契、垂、弃などが入つて來て、堯の前に立つた。

『お前達に聞くが、俺の後で帝になる者は、誰れと思ふのぢや、』

『それは、もう、丹朱樣と云ふ事は、天が定めた事でございます。』と、羲叔が恭しく云つた。

『さうか、』と、堯は領付いてから、他の顏を見て、『他の者はどう思ふ。』

皆口を揃へて羲叔の云つたと同じやうな事を云つた。堯は非常に滿足らしい顏をして、皆に酒を與へた。宮女は人々の間を巡つて酒を注いだ。

『舜の奴に何が出來る、あれや羊飼の子ぢやないか、』と、堯は又思ひ出したやうに云つて、『丹朱にかなふもんか、丹朱は俺の子ぢやないか、俺は天に代つて百姓を治めて居るから、神もおんなしぢやないか、丹朱は神の子ぢや、』

羲叔は、ふと、帝には惡鬼が憑いたではあるまいかと思つて、瞼の爛れたやうな底光のする堯の眼に注意した。

『放齊、今日の褒美に物をくれてやる。大藏から貢物の織物を出して來い。』と、堯が云つた。

放齊は室を出て行つたが、間もなく二人の奴隷に各一つの篚を持たして來た。それには袞州の織文、青州の絺、徐州の織絹、荊州の玄纁など云ふ織物が盛つてあつた。放齊はそれを一卷づゝ人々に渡した。

堯は體全體に疲勞を見せて默り込んで來た。丹朱がこれに眼を止めた。

『お父樣、お休みになつては如何でございます。』

堯は頷付いて起つたが、眼はもうつむつてゐた。日が暮れて室の中には燭火が點いてゐた。堯は魂の抜けた人のやうに、丹朱の手に摑まつて床の方へと行つたが、一二度よろよろとした。

宮中の者は、又暗鬱な顏をして室の中に籠つてる堯を見た。怪しい發作のあつた翌々日は、大廣間の會議の日であつたが、彼は其所へも姿を見せなかつた。

その翌日の事であつた。丹朱は平生のやうに父の機嫌を伺ひにその室へと行つた。それは午後の靜寂が殿閣に流れてゐる時であつた。堯は床の上へ横になつて寢てゐたが、丹朱の足音がすると、おびえたやうに充血した眼を見開いた。

『お父樣、御退屈のやうでございますが、琴でもお彈かしになつたら如何でございます。』

丹朱はかうして舜を父に取り做さうとしてゐる所であつた。

『舜でも呼びませうか。』

廢墟のやうになつてゐた堯の頭に、或る閃きがのぼつた。『うむ、舜か。』

『舜を呼んでお彈かしになつたら如何でございます。』

『うむ、呼んでも好い、呼んで來い。』

丹朱は父が舜の事を氣にしてゐない樣であつたので、重どろんでゐた氣分が輕くなつた。彼は急いで出て行つた。

堯は仰向けに體を寢かして、眼を壁の方にやつた。其所には投槍と劒とがかゝつてゐた。

丹朱は後宮の横から廊下を通つて、舜のゐる二宮の方へ行かうとして、ふと見ると、暖に陽の射した二宮の庭前では二三十人の軍士が集まつて來て、角力をやつてゐた。足を飛ばして烈しく蹴合つてゐる力士を中にして、砂の上に坐つ

て見物してゐる人々の後の方に、舜が娥皇と女英とを連れて立つてゐるのが見えたので、彼は其所からおりて行つた。そして舜を連れて、二人で堯の前へ歸つて見ると、堯は又初めのやうに横に長々となつてゐた。

『舜か、御苦勞だが、一つ彈いてくれ。』と、堯は眼をつむつたなりに云つた。

宮女が琴を持つて來た。舜はそれを受け取つて、平生のやうに帝の方を前にして獸皮の上に坐り、靜に彈きはじめた。

堯は身動きもしなかつた。丹朱はかうした靜穩な場面を見ると、いよいよ父は、舜に對して何の隔意も持つてゐないと思つた。さう思ふと、彼は一刻も早く二人の妹に知らしてやりたくなつたので、大きな足音をしないやうにして、そつと出て行つた。

舜は琴の上に俯向いて、一心になつて彈いてゐた。堯の足もとの方の牀にゐた宮女の二人は、うつとりした眼付をしてその音に聞きとれてゐた。

堯に囁く者があつた。今だ、今だ、今だ、……と、今まで身動きもしなかつた堯は、不意に床の上にはね起きた。舜は不思議に思つて顔をあげると、投槍を手にして己の方を覘つてゐる惡鬼のやうな堯の姿が見えた。舜は驚いて體を左にかはした。投槍は音を立てゝ飛んで來て、琴の臺を貫いた。舜は室を逃げ出した。

堯は床から飛びおりて、投槍を拔いて舜の後を追はふとしたが、臺が附いてあがつて拔けなかつた。彼は腹立しさうにそれを叩き付けた。臺が碎けてやつと槍が取れた。

舜は廊下を走つて、二宮へ逃げて來た。遠くの方では堯の叫ぶ聲がしてゐた。彼は女英の室の中へと這入つた。

室の中では、二人の兄妹が笑ひながら話してゐたが、舜が周章しく入つて來たので、丹朱は心を顚はした。

『…帝に槍を投げつけられた。』

舜の言の切れた所で、遠くの方で人の怒鳴る聲がした。

『あれは、帝だ。』と、舜は入口の方に眼をやつた。

女英は牀から飛びあがるやうに起つた。『お兄樣も、お姉樣も、早く外へ出て、お父樣を宥めてゐて下さい。』

丹朱と娥皇とは周章てゝ出て行つた。女英は舜の腕を摑んで窓の下へ行つた。

『さ、貴方は、この窓から逃げて下さい。それから私をお忘れにならないやうに……』

室の外へは、もう堯が來て怒鳴つてゐた。舜は窓の枠に飛び付いて、靜に體を戶外に出しながら、最後の一瞥を女英の顏にやつた。

堯が支へる二人の子供を押し除けて、室の中へ入つた來た時には、女英が一人立つてゐた。

『舜はどうした。』

投槍を手にした堯は、恐ろしい顏をして女英を睨み付けた。

『お姉樣の室の方へ行つたやうです。』と、女英は欺いた。

堯はその儘出て行つた。女英は室の中に衝立つたなりで、舜の事を考へてゐた。

三

堯は舜が遁走した事を知ると、軍士に命じて追蹤さした。丹朱はじめ娥皇女英二人は、密に心を痛めてゐたが、間もなく追蹤者は、手を空うして引揚げて來た。

舜は廢の生れであつた。堯は其所へも人をやつて舜を搜索さしたが分らなかつた。年が明けて翌年になつても、依然

としてその所在は不明であつた。

その八月、堯は西嶽の華山へと行つた。彼は舜の所在の分らないのを見て、路傍に餓死しないまでも、流離の人となつて、再び唐の都城に入るやうな事はないと思ふやうになつた。さうして、彼は舜の脅威から遁れる事が出來た。その時分から彼の神經も稍沈靜して、發作も收まつて來たので、暫く忘れてゐた巡狩を思ひ立つたものであつた。

當時、東方の岱山、南方の衡山、西方の華山、北方の恒山は、四嶽と云つて祭天の場所として神聖視されてゐた。命を天に受けて萬民を統治してゐると自信する族長は、今年は岱山、明年は衡山と云ふやうに登嶽して天を祭つた。山上の最高所に壇場を設けて、その上に柴を積み重ね、生きた羊をその上に置いて、それに火をかけて焚いた。炎々として天に冲する焰の中に、哀れな牲の獸は焦死する。それは、その薫煙が天に昇つて、上帝に享けられると思ふからである。祭天と共に、又その地方の名山大川も望祭した。それは、その地勢の磽确にして荒凉を極めた高原に蕃殖した漢人種が、自然の偉大と刻薄とに恐怖してから起つた習俗であつた。祭祀が終ると、その方面の各酋長を山下に集めて會見した。

堯は數頭の白馬に牽かした彤車に乘つてゐた。一行は道を西南に取つて進んだ。隨從の軍士は千人に近かつた。軍士の隊伍の間に挾まつて、舍營の具を乘せた馬や駱駝が行つた。食糧にする爲めの羊や山羊も數百頭連れてゐた。

代赭の肌を見せた連山に支へられた高原が日々一行の前に在つた。空には山羊の乳の色をした雲がふはりと浮んでゐたり、斜陽に紅く染まつた雲が烈しい西風に吹かれて斷蓬の如くに飛んだ。舟筏を造つて黃河の濁流を渡つた日には、灰白色の雲がかゝつて、時雨がさらさらと降つて通つた。馬はその時雨の中に悲しさうに嘶いた。

黃河の南岸には、函谷の山脈が聳えてゐた。その日はまだ午陽になつたばかりで、日沒には間が有つたが、雨になつ

たので、小さな谷間の地に宿泊する事となつた。そして、馬や駱駝の背に在つた獸皮の天幕をおろして、それぞれ穹廬をこしらへた。

　舍營の用意が調ふた所で、雨が歇んで微陽が射した。車の中に體を橫にしてゐた堯は、靑絹の帷をかかげて外の方を見た。磅礴として空中に滿ちてゐた雲霧が消えて、雨に濡れた野の容が眼新らしく感じられた。直ぐ向ふの方に高まつた丘の上に眼をやると、黃葉した林樹の間に、數十の穹廬の屋根の隱見するのが見られた。

『和仲、和仲、』

　堯が大聲で呼ぶと、車の背後の穹廬の中から和仲が出て來た。

『あすこに聚が在るのか、』

　堯は指をさして敎えた。西方の酋長の事を掌つて、この方面の事に精しい和仲にも記憶がなかつた。

『從來は何もなかつた山でございますが…、どうも遊牧者でございませう、』

『さうだらう、俺もあすこに聚が在つたやうに覺えない。』

『どうも遊牧者でございませう、人をやつて詮義をさしませう、』

　和仲と入り代つて、侍臣の一人が新らしい山羊の乳を盞に入て持つて來た。堯は手を延べてそれを取り上げながら、腰をおろして旨さうに飮んだ。何處からともなく軍士の歌ふ牧歌が聞えて來た。彼はゆつたりとした氣分になつて、聞くともなしにその牧歌を耳に入れてゐると、何時の間にかとろとろとして來た。

　そして、半時ばかりも睡つて、眼が覺めると、その周圍を步るく積りで車からおりた。和仲と放齊とがそれを見付けてやつて來た。

『帝、あの丘の窮廬は、矢張り遊牧者だと申します。』と、和仲が云つた。

『さうか、』

堯は頷付いて、濡れた秋草の上を踏んで歩いた。和仲はそれを追ひかけるやうにした。

『百人はかりの者が、馬や羊を澤山連れて居るさうでございます。』

『うむ、』

『平陽の方へも度々交易に來た事があると見えまして、お供を申して來た者の事を聞いて居つたと申します。』

侍臣の入つてゐる窮廬の背後に廻はると、二三本のひよろ長い裸樹が在つて、それには車につけた四頭の白馬が繋いであつた。馬は俯向いて草を嚙んでゐた。堯は勞はるやうな眼付でその馬を見た。御者の一人はその傍に坐つて、口笛を吹いてゐた。落ちかけ斜陽は、帝の車を中に圍むやうにして立て連ねた窮廬の屋根を淋さうに照らしてゐた。

靜かな夕暮であつた。もう生魄(せいはく)に近い月が東嶺の上に光り出した。北地から來る雁の群は物佗しい聲で鳴いて通つた。窮廬の口にはそれそれ火が燃えてゐた。堯は侍臣の住んでゐる窮廬の中で、燒いた羊の肉を喫してゐた。食事が終ると、隨從してゐた夔が磬を拊ちはじめた。その音に牽きつけられて周圍に集まつて來た軍士の中には、月の下で踊り出した者さへあつた。

堯は遲くまで侍臣とゐて、それから車の中に歸つて寢た。月の光は靑絹の帷を染めてゐた。黃河の流れが耳に付いて來たが、それも暫時の事で、直ぐ快い睡に落ちて行つた。

朝になつて眼を覺しかけた所で、車の外から呼ぶ者があつた。

『少しお話し申したい事がございますから、どうか一寸お起なさつて下さいませ、』

璧は放齊の璧であつた。

『なんだ。』

『不思議な事が御座いますから、一寸お起きを願ひます。』

堯は精神がはつきりとしたので、起きあがつて帷をあげた。放齊と和仲とが、褒を著た一人の軍士を連れて立つてゐる。薄すらとした曉烟が四邊に漂つてゐた。

『なんだ。』

放齊は兩手に捧げるやうにして、獸皮の鞘に包んだ劍を持つてゐた。

『これは帝のお腰の物でございますか、』

それは確に手練の物であつた。堯は驚いて車の中を見た。宵に寢る時車の背後にかけた筈の劍は見えなかつた。

『それは何處にあつた。』

堯は不審しながら、放齊の手から劍を取りあげた。

『それに付きましては、この者ですが、』と、放齊は軍士に指をさしながら、『この者が起きた所へ、羊飼の男がそれを持つて參りまして、私は舜の使でございますが、昨夜舜は久々で帝にお眼にかゝつて、この劍を拜借しましたが、もう入用が無くなつたから、お返し申して來いとの事で使に參りましたと申しまして、この者に手渡して歸つたと申します。』

堯の頭には恐ろしい混亂が起つた。彼は凄い顏をして默つて立つてゐた。…車の中の劍を持つて行く位であるなら、突かうと思へば突けたのだと思ひ出した。さう思ふと、已の運命が舜の掌中に入つて行つたやうな氣がして來た。彼は堪へられなかつた。

『討て、討て、』と、彼は叫ぶやうに云つた。

隨從の軍士は戰鬪の準備を整へて、その半數は堯の車を衞り、半數は遊牧者の方へと向つた。曉烟に拭つたやうに晴れて、出たばかしの朝陽が、丘の麓へと進んで行く軍士を照らしてゐた。

遊牧者はもう何處へか行つてしまつて、影も形もなかつた。勢込んで攻め登つた軍士はその儘引返した。

『他を探さして見ろ、そんなに遠くは逃げられない筈だ。』

堯は齒嚙みをして怒つた。軍士は又他の方へとやられたが、其所にも見えなかつた。それでも彼は諦められないので、その日は終日その附近を捜索さしたが、どうしても見付からなかつた。

翌日になつて、やつと華山へと向つた車の中には、暗欝な堯の眼が空間を詰めてゐた。

四

堯の軍は蒲坂へ一日程の所へ行つて駐まつた。それは數年前、黃河河畔で堯を戰慄さして以來、その消息を絕つてゐた舜が、突然現はれて來たので、それを討滅する爲めであつた。

蒲坂は平陽の西南に當る土地で、北、西、南の三面が黃河の流れに沿うてゐた。舜の故鄉の虞は、その隣になつてゐた。西に巡狩した堯は、何時も其所を通過した。その蒲坂へ澤山の部下を率ゐた舜が、何處からともなく移つて來て、軒轅族の勢力に暗雲をかけたのであつた。

三千に餘る軍兵は、初夏の野に夜營を張つてゐた。堯は車の傍に作つた窮廬の中で、數人の幕僚と食事をやつて、それがやつと終つた所であつた、窮廬の人口には、火が盛に燃えてゐて、その光が宵闇の空をぼかしてゐた。軍の前線を見廻はりに行つてゐた丹朱が、三四人の從者を伴れて入つて來た。

『お父樣少し申しあげたい事がございます。』

堯は義叔と話してゐた話を切つて丹朱の方を見た。

『なんだ。』

丹朱は舜の前に有る獸皮の上に腰をおろした。

『今、舜の方から使が參りました。』

『使が來た、何と云つて來た。』と、堯は頰の肉の落ちて黄ろくなつた顏に緊張した表情を見せた。

『帝のお叱りを受けて、身の置き所が無い爲めに、遊牧者となつて漂泊して居る内に、部下が出來たから、それを伴れて蒲坂へ歸つたものゝ、帝に敵對する心は毛頭無い。若し、帝のお許しが出るなら、澤山の羊と、寶物とを奉つた上で、三危方面へ出かけて苗民を討伐したいと、こんなに申して居ります。』

『あの、劍の事は何とも云つて居らんか。』

『それも申して居りました。あれは舜の部下が舜に知らさないで、こつそりやつた惡戯ぢやそうでございます。後でそれが知れると、その者を舜が殺したと申します。』

『さうか。』

丹朱はぢつと父の顏色を伺つてゐた。堯は義叔の方を向いた。

『お前はどう思ふ。』

義叔は考へ込んで直ぐに返事をしなかつた。

『私の考へますには、舜の云ふ事も全然嘘とは思へませんから、好く調べた上で、いよいよ間違が無いと云ふなら、許

して苗民を討伐さしたらどうかと思ひます。』と、丹朱が云つた。

堯も好んで戰をしたくはなかつた。刻みつけられた舜に對する恐れの上に、神經の衰への爲めに無闇に物事が危まれ出してゐた。

『とにかく、使の者に逢つてみやう。』

前線から送られた二人の使が堯の前に來た。一人は脊の高い若い男で、一人は體の大きな腕力のありさうな男であつた。二人は堯の前に進んで拜をした。

『その方達は、舜に長く隨いて居つたか。』

堯の言に對しては、その脊の高い若い男が、重みのある爽かな言で返辭をした。

『舜はその方達と一所に居る時には、何時もどんな風にして居る。』

『何時も笑つて居ります。』

…宮中にゐた時と同じ態度だなと堯は思つた。

『遊牧の間に爭鬪をした事は無いか。』

『苗民に逢ふとか、流賊に逢ふとかした時には、戰を致しました。』

『負けた事はないか。』

『滅多に負けた事はありません。』

『軍士の數はどれ位ある。』

『二三千は有ります。』

『蒲坂へは何の爲めに來た。』

『故郷の虞へ兩親に逢ひに來たのと、一つは帝からお叱りを蒙つて居りますから、機會を見付けて、お許しを受けたい爲めでございます。』

『では、さがつて待つて居れ、』

二人の使は、軍士に送られて後陣の方へと行つた。

堯の前では、評議がはじまつた。舜に好感を持つてゐる丹朱をはじめ弃、契、皐陶などは、舜の討伐を中止させようとした。

『討伐するにしても、苗民を討伐さした後にすれば、手を濡さないで苗民討伐の功が收められる上に、その困憊に乘ずる事が出來ますから、勞がすくなくして目的が達しられますかと思ひます。』と、契は云つた。

…無理に放さうとしやうものなら、屹と災が起ると云つた龜卜の豫言が堯の頭の何處かにあつた。彼は契の言に耳を傾けてゐた。

『とにかく、今度は舜を許して、丹くその本心を見た上で、それで不臣の志が有るやうで在つたら、その時に討伐しても宜しうございませう、』と、丹朱が云つた。

綠に埋もれた野の中を堯の車は蒲坂に向つて進んだ。車の左右には、丹朱をはじめ堯の幕僚が馬に乘つて附添ひ、前後には百餘人の軍士が警衞してゐた。

野の其所此所には、小さな聚落があつて、耕かされた田圃には、稷黍が生々と茂つてゐた。人々は輕い心持ちになつ

て、これに一瞥を與へて過ぎた。

堯の軍兵は數里の後に置かれてゐた。二人の使の歸つた翌日、舜は數人の部下と半日程の野に來て丹朱と會見したので、堯は蒲坂に臨んで舜からの獻納品を受ける事となつた。

午に近くなつて、堯の一行は、蒲坂の入口になつた楡の林の所に行つた。其所には舜が數十人の部下を伴れて堯の來るのを待つてゐたが、白馬に牽かした彫車が眼の前に來ると、皆地上に跪いて拜をした。幕僚は皆其所から馬をおりて、親しく舜と久濶を叙した。舜は丹朱と並んで堯の車に引添ふて歩いた。

蕭條とした聚落も舜が移つて來た爲めに面目を改めてゐた。路の兩側には澤山の民家が連つてゐた。舜の住居は、民家の裏手になつた丘の裾に在つた。大き黑木を掘り建てゝ、それに木皮を葺いた嚴かしい家屋であつた。そして、屋敷の周圍には、部下の住んでゐる數百の窮廬が建ち並んでゐた。裏手には水の蒼々とした沼池が在つて、その緣から丘上にかけて放たれた數千の羊や山羊が群をなして遊んでゐた。

堯の車は屋敷の前に行つた。其所には木柵を結うて關門を設けてあつたが、幅が狹いので車は通らなかつた。で、堯は其所からおりて、車と一所に警衛の軍士も殘して、十餘人の幕僚だけを伴れて入つた。舜も一人になつて堯に引添うて入つた。

清楚な裝をした女が十人ばかり入口に待つてゐて、一行を室の內へと導いた。其所は紫色の帷を垂れた廣い大きな室で、眞中の卓の上には、綾羅錦繡の類を山と積み重ね、それに添へて寶石の種々を入れた筐を置いてあつた。

幕僚と一所に堯が席に就くと、舜はその前に膝で步くやうにして行つて、三拜九拜の禮をした。堯は舜に對する感情を新らしくしてゐた。

『無事で結構、これから苗民の方はお前に頼まう。』

丹朱はこの容を見て非常に嬉しかつた。彼は早く平陽に歸つて、この事を妹に知らしてやりたいと思つた。可憐な姉妹は、何時か舜が戻つて來る者と信じて、他へ嫁がうとはしなかつた。それは春の月の明るい晩であつた。二人の女は室の窓に射し入る月の光を浴びて、舜の事を話して手を取り合つて泣いてゐたが、女英の方が物の憑いたやうにして、

『お姉さん、二人で宮中を拔け出して、尋ねて行かうではありませんか、屹と舜は、そのあたりを笑つて歩いて居りますよ。』と云ひ出した。娥皇もそれに誘はれて、二人で室を出やうとする所へ、折好く丹朱が這入つて行つた。二人はもう動く事は出來なかつた。……

舜の討伐の事が知れると、出發の前夜、姉妹は丹朱の兩手に取り縋つた。氣弱い娥皇は泣くばかりであつたが、女英は、『そんな慘酷な事をしないやうにして下さい。もし、舜にどうか云ふ事でも有りますと、貴郎もお父樣も、二人で呪ひますよ。』と云つて怨んだ。……今日からかうした事も昔語になるのだと思ふと、何んだか甘い涙が背のあたりから滲み出るやうに嬉しかつた。そして、丹朱は又思つた。野で會見した時には、云ふ事が出來なかつたから、今日は後で舜にも話して悅ばしてやらうと思つた。

舜が堯の前を退いた所で、その部下が來て、舜の耳に囁いた。舜は領付いて、又堯の前に行つた。

『饌の用意が出來ましたから、どうか彼方の室へ……』

堯は默つて起ちあがつた。舜はその傍に添うて次の室へと出て行つた。室の口に立つてゐた女も、その背後から隨つて行つた。二人の姿が見えなくなると、部下は幕僚の傍へと行つた。

『私がお供申します。』

帝と離れてはすまないと思つてゐる幕僚は、もう腰を浮かしてゐたので、直ぐ牀を離れた。部下は先に立つて導いたが、もう帝は見えなかつた。部下は廊下のやうな薄暗い所を通り、狭い室の入口へ行つて、己はその入口へ立ち止まつた。

『さあ、どうぞ、』

十餘人の幕僚がどかどかと急いで入つた。中は檻のやうに黑木を建て廻はした陰慘な室であつた。人々は驚くと共に、部下が室を間違へたものだらうと思つて、云ひ合はしたやうに入口の方を見た。と、同時に入口の戸がぴつたり閉ぢた。人々は本能的に外へ飛び出さうとして入口へ崩れて行つたが、戸はぴりりとも動かなかつた。

舜に伴れられて行つた堯も、入口へ舜を殘して一つの室へ入ると、戸がぴつたりと閉ぢた。其所も黑木の檻のやうに建てた室であつた。

『開けろ、開けろ、開けろ、』と、堯はその戸を叩いて怒號したが、返事をする者はなかつた。

それは虞族が軒轅族に對して畫いた陰謀であつた。闕門の外にゐた警衛の軍士も殺戮せられた。野に駐まつてゐた本隊も不意の襲撃を受けて潰亂した。

虞族の一隊は、敗走する軒轅族を追うて平陽に迫つて、またたく間に其所を焦土にした。汾水を埋めた死體の中には娥皇と女英の死體が見出された。

數日にして軒轅族の勢力が一掃されたので、堯の幕僚は拘禁を釋かれたが、行く所がないので、弃、契、皐陶、夔などは、舜の許に留まり、丹朱や義叔などは、彷徨乎として蒲坂を去つた。

堯は拘禁せられた一室の中で、怒鳴つたり泣いたりして狂つてゐた。

五

軒轅族を倒した舜は、蒲坂を都城にして帝となつた。そして、拘禁せられた堯は、狂躁を續けて數年の後に死んで行つた。舜はこの容も微笑を以て見守つてゐた。舜の左右には、禹、皐陶、契、弃、伯夷、夔、龍、倕、益、彭祖などがゐて、その經營に力を致したので、虞族の威力は遠く揚子江の彼方にまで及んだ。その中に軒轅族顚覆に主功の有つた禹が、年と共に其勢望を加へた。

その禹が某年、漢水を渡つて梁州の地へ苗族の討伐に向つたが、不意に途中から引返して來て、黄河の向ふの險要の場所へその大軍を置いたので蒲坂の都城はこれが爲めに動搖した。

舜は伯夷を禹の許にやつて、その理由を聞かした。伯夷は夜に入つて降り出した初秋の雨を冒かして、數人の從者を伴れて宮中に歸つて來たが、雨に濡れた衣裳を着代へるに及ばずして急いで舜の前に出た。

『あゝ伯夷か、禹は何と云つた。』

舜は伯夷の歸るのを待ちながら、益と禹に對する善後策を議してゐる所であつた。

『德を待つて臨まないと、討伐は出來ても苗族が心服しないから、德を收めてから行く事にしたと申して居ります。』

伯夷の言には冷笑の語氣が交つてゐた。舜は首を傾げた。

『德を收める、苗民の傍にゐて、德を收めるなら苗民に分るだらうが、こんな所にゐて德を收めても役に立たないぢやないか、』

『そして、陣中では、鼗と磬とを鳴らして、干(たて)と羽旗(はばた)を持つて舞をやらして居るのを、私も見て參りました。』

『それは、德を收めるぢやなくて、兵を耀(かゞや)かして居るぢやないか、』と、益が傍から云つた。

漠然としてゐた恐怖に形が出來たやうな感じが舜の心を脅かした、併し、それは豫期してゐない恐怖ではなかつた。

『帝、伯禹の胸中が私には不思議に思はれます。』

伯夷は口元に力を籠めて帝の顔を見た。

『さうだ。どうも不思議ぢや、』と、舜は頷付いた。

『この一二年、どうも伯禹のする事が不思議でございます。』と、益は濁りの有る聲で云つて、一寸室の四隅に眼をやつて注意を拂ひながら、『これは、少し警戒しないとなりません、』

『うむ。』

舜の心は、直ぐ軒轅族を覆した當時の禹に行つた。彼は物凄い程あざやかであつた禹の手際を感じながらも、若しあの陰謀を己の身に加へられたらどうするかと云ふの鬼胎を何時も抱いてゐた。その魂胎が、實際となりさうになつて來た。如何なる場合にもゆとりのある彼の心も、不安を感ぜずには居られなかつた。彼は禹との關係を考へた。…平陽を逃げ出した若い男は、野獸のやうに人を避けて、荒野の中を彷ひ歩いた。四日目の夕方になつて、蕨草の青々と延びた丘の下に出たが、飢と疲との爲めに、野の中に露出した石に凭れたまゝで氣絶した。そして、氣が付いてみると、彼は數人の遊牧者のゐる窮廬の中に寢かされて、背の高い眼の澄んだ若い男の手にした、革袋の中の山羊の乳を口に入れてもらつてゐた。それは鯀族の支孽(しげつ)であつた。……己は、この背の高い男と邂逅した爲めに、堯から帝の座席を奪ふ事が出來たが、又、この男から自分の座席を狙はれるやうになつたと云ふのは、己の座席は、この男から暫時借りてゐたやうなものぢや、と思つた。

舜が考へ込んでゐる間、益と伯夷とは、互に意見を[illegible]は[illegible]てゐた。禹に異圖の有ると云ふ事は、二人とも認めてゐた

が、それをどうすると云ふ事は出來なかつた。

『帝、形勢を見た上で、宜しくないやうであれば、商の方に行つて、彼所で軍士を調へては如何でございます。』

益は商にゐる契に依るより他に手段が無いと思つた。舜も契に依るか、岐山の麓にゐる弃に依るかしなければ、禹を討滅する事は出來ないと思つてゐた。

『併し、まだ、二三日見た上でないと分かりませんから、』

伯夷はまだそれ程事態は切迫しないと考へた。併し、かうして評議をしてゐる三人の背後には、もう危機が迫つてゐた。禹の率ゐた大軍が、降り頻る雨の中に舟筏を作つて、黄河を渡つてゐたのであつた。

後宮に行つて妃と床を並にしてゐた舜は、あはたゞしく呼ぶ侍臣の聲に眼を覺ました。禹の率ゐた軍士が蒲坂になだれ込んだ所であつた。舜は妃と一所に別室に眠つてゐた我が子の商均を伴れて、後宮の庭から出た。五六人の侍臣と宮女の二三とが隨ひて出た。

雨はもう歇んで、黎明に向つた空には、薄雲の隙から蒼白い月が射してゐた。一行は牧場に出る小門を開いて沼の縁に出た。恐ろしい叫喚の聲に魂をおのゝかしながら、見るともなしに宮殿の方を振り返ると、民家の燒ける火の光が宮殿の屋根を血の色に染めてゐた。一行は雨に濡れた荊棘を踏んで丘の上へと登つて行つた。舜は商均の手を率いてゐた。後宮で婦人の手に大きくなつた少年は、恐れに顫へてゐた。

『恐い事は無いぞ、この山を越へさへすれば、惡い奴は來ない。』

舜は歩きながら、死人のやうな顏になつてゐる我が子の顏を覗き覗きして力を付けた。丘の下の喊聲が物凄く反響をかへした。何時の間にか益が數十人の軍士を伴れて、一行に續いてゐた。

數町登ると峠になつて、蒲坂の都城は見えなくなつた。

益は舜に近付いて顫へる聲で云つた。舜は返事をしたばかしで背後は見なかつた。

『帝、帝、もう宮殿へは火がかゝりました。』

『もう、大丈夫ぢやぞ、』

舜は又かう云つて我が子の顏を見たが、それでも休まさうとはしなかつた。少年の手は氷のやうに冷めたかつた。

夜が明け離れて、一行は安邑と云ふ聚落におりた。安邑には禹の軍士が數百人屯集してゐた。

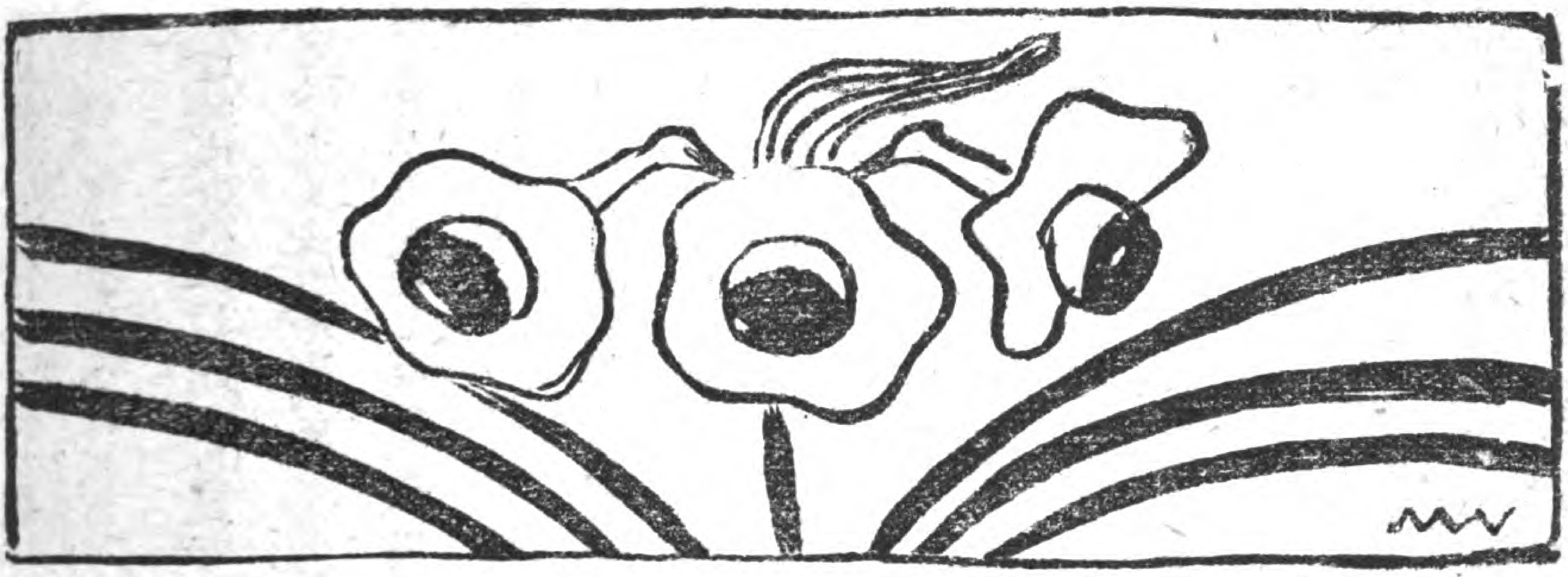
舜を護衞して來た數十人の軍士は、禹の軍士の爲めに殺戮せられかけた。舜は泣き叫ぶ我が子を片脇に抱きながら、さらざらした黄土の上に座つて、冷然としてその容を見てゐた。益と妃とは、走つて逃れやうとしたが、禹の軍士の爲めに捕へられた。舜はこの容も見てゐた。

禹の軍士は禹に迫つて來た。皆鮮血に赤く染められた銅製の刀を持つてゐた。舜は動かなかつた。

軍士の一人は、老いて肥滿した舜の胸のあたりを突いた。舜は背後に倒れかけた。我が子を抱き縮めてゐた腕の力が抜けた。商均は夢中になつて放ね起きやうとした。他の軍士の刀がその首に觸れた。彼は父の死體の上にのしかゝるやうにして死んだ。冷たい朝陽の光がそれにかゝつた。

六

虞族を倒した禹は、安邑に都城を構へた。彼は軒轅族と虞族との覆滅に鑑みて、我が家の權勢を强大にする事に勤めた。それが爲めに四方に政令が行はれて、群雄の恐るゝ所となり、已の座位を我が子の啓に傳へて、曲りなりにも十七世四百三十二年間その勢力を保つ事が出來た。



空想の花

上司小剣

一

不圖眼の覺めた和三郎は、あたりをキヨロ〱見廻はした。何んだか餘りに明るいので、腦の中にまで光りが滲み込むやうな氣がした。

『一體何時だらう。』と、和三郎は先づ考へた。さうして、いつもならば、かういふ折に屹度出る欠伸が、一向出ないのに氣が付いた。無理に欠伸といふものをしようとして、いツぱいに口を開いてみたが、どうしても欠伸が出ない。一體欠伸といふものは、無理な働きに疲れた腦へ溜る一種の毒瓦斯で、それが口や鼻の奥から漏れて來る爲め、若しくは自然に漏らさうとする爲めに起る生理上の動作だといふことを聞いてゐたが、して見ると、今かうやつて口を開いても、欠伸が催して來ないのは、自分の頭に疲れと、それに伴ふ毒瓦斯との殘つてゐない爲めであらうか。と和三郎は考へた。

何んにしても、近頃にない清々した快い氣持ちである。

『お作、……お作。……』と、和三郎は少し間をおきつゝ、妻を呼んでみた。けれ

ども返辭がない。

『忠一、………忠一。………』と、息子の名を呼んでみた。矢張り返辭がない。

『みんな啞になつたのか。』と、和三郎は持ち前の皮肉な考へかたをして、今度は無意識にまた一つ欠伸をしやうとして口を開きかけたが、矢張り毒瓦斯は出て來ない。

この間に一つ鐵砲の掃除をしておかうと思つて、いつもの床の間の隅を探ぐりに行つたが、どうしたことか鐵砲が見當らない。

昨夜晩く歸つて來て、あの獵銃をば確に此處へ置いた筈である。それが見えなくなつたのは、どうしたものであらう。彼れは今までだと、かういふ場合に、直ぐむら〳〵と肝癪を起して、家内中の人間の名を呼びつゝ、怒鳴り立てるのであるが、今日はどうしたことか、其の肝癪が起らない。丁度欠伸が出なくなつたと同じやうに、肝癪も起らないのである。額に青筋の浮ぶこともない。

和三郎は、昨日の獵に一日を費してもまだ足りなくて、仲間の獵夫五六人とゝもに、向ふ山を狩り暮したことを覺えてゐる。手を負はした牝鹿の池を渡つて逃げたのを追ひ廻はし、暗くなつてから撃つた鐵砲の筒先きに、シュツ〳〵と火花が走るのを見て、甚だ壯觀だと思つた。さうして日沒までといふ規則に反いて、こんなことをしてゐるのを、若し巡査に見咎められたら、大變なことになるであらうと考へて、少し怖くなつて來たのをも覺えてゐる。

到頭其の牝鹿を撃ちとめて、先づはこの日の稼ぎも出來たと喜びながら、牝鹿の四足を藤蔓で結はへ、松の生木の枝を拂つたので差し擔ひにして、寺家(じげ)まで戻り、獲物を川へ浸して石をおもしに流れ去らないやうにと、自分が殊に氣を付け、仲間に別れて川端を立ち去つてから、また後戻りして、藤蔓の端を杭に結び付けたことを覺えてゐる。それから歸

って、臺所の圍爐裡の側で飲んだ二合のおしきせが、どんなに可味かつたであらう。

『待てよ。………』と獨言して、和三郎は漸く床の間の甚だ綺麗になつてゐるのに氣が付いた。惠比須さまが鯛を釣つてゐる繪を描いた紙の掛けぢが、先代このかた煤ばんでか〻つてゐたのに、それが何處へか取り外されて、其の代りには、いつかお寺で見た極樂天堂の畫を、もつと〱美しく立派にしたやうなのが掛かつてゐる。前の三社よりはずツと大幅で、一目見ただけでも、身も心も春めいて、浮き立つやうな氣がする。

こんな美事な掛けぢは、兎ても俺の家なんぞにはなかつた代物である。俺の家ばかりではない、世の中にこんな、たまらないやうな美しさをもつた畫があらうとは思はなかつた。

さう思つて、和三郎は、稍暫らく何事をも忘れて、ぢいッと其の畫に見惚れてゐた。描いてある人物の一人々々に皆魂魄が籠つてゐるやうで、こッちで笑へば畫の方でも笑ひ、こッちで喜べば畫の方でも喜ぶといふ風に見える。さうしてこの畫の世界には樂しみといふことより外には何もない、哀しみといふこと〻怒りといふこと〻は、疾くに忘れてしまつたといふ風な顏をしながら、働いてゐるのか、遊んでゐるのか、さッぱり見別けの付かぬ樣子をしてゐる。

だゞもう、恍惚として灘の上酒に醉ふたやうな氣持ちで、和三郎は稍長いこと其の畫を見詰めてゐた。

つひぞ掛けぢとか畫とかいふものに頓着したことのない和三郎であるが、この畫ばかりには、妙に引き付けられて、床の間の前を立ち去ることが出來なかつた。それで、たゞもう、うーんと唸つてゐた。

二

何んといふ名の畫家が、こんな見事な畫を描いたものであらう、とさう思つて、和三郎は見るともなしに落款を見る

と、これはまたどうしたことか、『忠一畫』としてある。忠一とは俺の息子だ。あいつが眞逆こんな畫を描く筈もない。裏の土塀へ消炭でかいた『へのへのもへ』の拙さと、この畫の見事さとは、もとより比べものにも何んにもならぬ。

しかし、よく見ると、この『忠一畫』としてある三字には、何處かに見覺えがある。や見覺えどころではない、これは正しく忠一の手蹟だ。和三郎はかう思ふと不思議さに混つて、嬉しさが込み上げて來た。

あんまり畫にばかり心を奪はれてゐたので、今まで氣が付かなかつたが、床の間の掛けぢばかりでなく。家の內全體が見違へるほど綺麗になつてゐる。自分が今此處で眼を覺ましたのだから、自分の家だと思つてゐるもの丶、これが外から入つて來たのだと、屹度他人の家へ間違へて入つたのだ思ふであらう。間取りや何かゞ元のまゝであるから、今でもかうやつて安心して居られるもの丶、しかし何うかすると、眠つてゐた間にこんな家へ運び込まれたのではないかと思はれてならぬ。第一妻や子の名を呼んでも返辭のないのが不思議だ。

『お作、………お作。………』と、和三郎はまた少し聲を高くして呼んでみた。

『はい、只今。………』といふ聲が納戸の方でした。『はい、只今。………』何んだ人を馬鹿にしてゐる。そんな返辭は町の旦那衆の奥さんと呼ばれてゐる女どもの口から出る返辭だ。この片田舍の獵夫の嚊が、『はい、只今。………』もないものだと、和三郎は思つたが、いつもならそんな場合に、屹度癪に障つてならないのが、今日の特別な晴々した心は、どうしても癪などといふものを起させない。

けれども、其の『はい、只今。………』がどうしても氣にかゝる。俺の嚊は、そんな芝居染みたことをする女でないのだが、今日は俺が特別に晴々と心持ちが好いやうに、嚊も少し浮かれ氣味になつてゐるのであらうか。そんなことをしてゐて、晩に買ふ米とおしきせの二合とは差し支へはないのであらうか。昨日の獲物のあの牝鹿が、今日賣れたら、

割前が來るであらうが、さうでないと少し困る。矢つ張り、お作に遣り繰りをさせなければならない。

こんなことを考へてゐる和三郎の耳へ、ふいと心持ちの好い音が入つて來た。言ひ知れぬ快い響である。琴でもなければ、三味線でもない。勿論あの祝日に學校で醜い女教師が彈くオルガンなんぞではない。一體何んであらう。

和三郎は踊り出したいやうな氣になつて、つひふら〳〵と其の妙へなる音樂に操られつゝ、納戸の方へ入つて行つた。音樂は納戸あたりから聞えるのである。

見ると驚いた。納戸の中で、ゆツたりと椅子に腰をおろして、得體の知れぬ樂器を弄んでゐるのは、現在我が妻のお作であつた。昨日まで、不如意な家政の切り廻はしと、女には過ぎた力仕事とに窶れ疲れて、健康に生れ付いた其の身體も方々に弛みが出來たらしく、幾ら姥櫻でも、三十六にしては少し老け過ぎてゐると思つてゐたのに、それが急に若やいで、二十四五に見えるほどになつてゐる。

何んだか知らぬが、龍宮の乙姫さまのやうな扮裝をして、手に持つてゐるのは、琵琶でもなく、琴三味線でもなく、變な形をした樂器である。

これがほんたうに、家のお作なのであらうか。お作の成れの果――ではない、生れ更はり――なのでもあらうか。と首を傾げながら、和三郎は恐る〳〵と言つたやうな氣味を少し混ぜて、試みに、

『お作。………』と呼んでみた。

『はい。』

樂器を弄ぶのを止めて、かう答へた聲は、樂器の音にも勝るかと思はるゝやうな美しい聲で、調子は矢張り元のお作に違ひないが、昨日までの濁み聲とは、玉と瓦とほどの相違がある。

俺の鐵砲が見えなくなつて、こんな琵琶みたいなものが出て來た。といふやうなことを考へつゝ、和三郎は、お作が傍へ置いた樂器を見詰めてゐたが、何んだか怖いやうな氣がして、手に取つて見ることは出來なかつた。

『お作。……』と、和三郎はまた妻の名を呼んでみた。

『はい。』といふ金鈴のやうな聲は、昨日まで紫色をしてゐた彼女の唇の、今日は眞紅に燃ゆるやうな色になつたのを漏れて出た。

『ねえ、あなた。……』

和三郎はそれを聞くとまた喫驚した。さうしていよ〳〵これは芝居だわいと思つた。昨日までは、『何んだい、お前さん。』と、噛み付きでもしさうにしながら言つた其の同じ口から、幾ら唇の色が紅くなつたとは言へ、『ねえ、あなた。』はふざけ過ぎてゐると思はずにゐられなかつた。

『ねえ、あなた。……わたしをお呼びになるのに、お作……と呼び棄てはいけませんよ。わたしは構ひませんけど、村の人が皆笑ひますよ。さんを附けてね、お作さん……とかう呼んで下さいましな、どうぞ。』

樂器なぞを弄ばずとも、話聲が其のまゝ音樂のやうで、言葉が直ぐ詩であるとさへ思はれた。

三

『お作、お作……さん。……俺の鐵砲は何うした。昨夜確かに床の間へ立てかけて置いたんだが。……』と、和三郎は少しきまりわるい思ひをしながら、妻に訊いてみた。

『あなた、何うかもう少し、お言葉を綺麗にして下さいましな。……第一俺といふやうなことは、もう誰れも言ふものがありません。わたしですから、俺といふ言葉の意味も解るのでございますが、ほかの人には解りません。どうぞね、

わたし」と仰ツしやつて下さいまし。………俺なんぞと申す言葉は、百五十年も前にあつたさうで、昔しの小說にはよく出てまゐりますわね。』

つんと澄ましてゐるのでもなくて、お作の樣子は何んとなくキリツとして、氣品が高い。これが昔しの鄉士の末の零落した貧乏獵師の嬶と思はれやうか。よしんば祖父時代の鄉士に逆戾りしたとて、これだけ品のある妻は得られまい。――和三郞はたゞ譯もなくそんなことを考へた。しかし、俺は現に昨夜山狩りから戾つて、二合のおしきせを飮んで寢る時まで、俺といふ言葉を使つてゐたのだ。それが今朝になつて、俄に通用しない。そんな馬鹿々々しいことがあるものかと考へつゝ、

『………百五十年も前の言葉だ。じやうだん言つちやいけない。俺は昨夜まで自分のことを俺と言つてたんだ。獵から歸つて、牝鹿を一頭擊ち止めたことをお前にも話して、喜ばしたぢやないか。』と言つてみた。幾ら言葉を銳くして、突ツかゝるやうに言はうとしても、どういふものか、そんなけんどんな言葉は出ないで、優しみのある、情の籠つた言葉になつてしまう。成るほどこれでは、俺といふ言葉が似合しからぬ。

『ほゝゝゝ。あんなことを。………あなたは夢を見てゐらツしやる。ほゝゝゝ。』と、お作は笑つて取り合はない。

『さうだ、俺は………いやわたしは、夢を見てゐるのかも知れない。何んだか先刻からちツとも樣子が分らない。……』

『わたしも、あなたの仰ツやることが、少しも分りませんわ。鐵砲………だなんて、そんなものは、今の世に何處へ行つたツてありやしませんわ。つひ先頃まで、博物館に一挺ありましたけど、先祖の作つた罪惡を思ひ出していけないといふことで、燒き棄てゝしまひましたわ。………さう〳〵、百科全書の中の畫にありますね、あれで見るだけですよ。』

『博物館だとか、百科全書だとか。獵師の女房がえらいことを言ふやうになつたもんだね。お前はまだ博物館なんて、

見たことがなかつたぢやないか。第一遠い町へ行かなければ、そんなものはありやしない。』と、和三郎はけゞんな顏をした。

『………町。………ほゝゝゝ。』と、お作はまた笑つて、『或るほど、百五十年も前には、そんなものがあつたさうでございますね。人間が、うぢや〳〵と一つところへ集つて、軒と軒をくッ付けて家を建てたのですね、それが町でございませう。………それも圖書館にある百科全書で見ましたわ。何んでも其の時分の人間は、人間の生きてゐるのに必要なものを拵へるのに骨折らないで、賣つて儲かるものを一生懸命になつて作つたのださうでございますね。當てもないのに、これを拵へたら屹度賣れるだらう、儲かるだらうぐらゐに思つて、其の頃にはあつた職工といふ特別の階級の人間を大勢働かして、わるい空氣の中でせッせとやらしたものださうでございますね。そんな無理なことから、自然に町といふやうなものが出來るやうになつて、波のやうな屋根瓦の下に、人間がうぢや〳〵と蠢めいてゐたのでございませう。………今の世の中には、もうそんなものはございませんよ、食べるものや着るものを作ることを打ちやらかしといて、玩弄品や人形の着物や、人殺しの道具を拵へるのに夢中だといふやうな氣狂ひじみたことはありませんもの。ほゝゝゝゝ。』

『お前の言ふことは、何んだか、さツぱり解らない。………第一俺は、………いやわたしは、鐵砲がなくちや、今日から働くことが出來ない。………じやうだんを言はないで、早く鐵砲を出して呉れ。』

『ほゝゝゝ。まだあんなことを。ほゝゝゝ。』と、お作はどうしても取り合はない。

『困るなア。………働かないぢや食へないぢやないか。』

『働く。………あなたはよく字書を探がさなければ分らないやうなことを仰ツしやる。働くことゝ、遊ぶことゝが別こ…

ゐたのは、矢つ張り百五十年も前のことでございますよ。………今ちやね、一年三百六十五日のうちで、毎日一人が五時間づゝ、僅か十七日だけ働けば、――昔し風に言つて――御覧なさい、あの綺麗な田や畑から食べるものが餘るほど取れるんですよ。………つひあなたの眞似をして、働くなんていふ昔しの言葉を使つてしまひましたけど、ほんの運動がてら、氣に向いた時に一寸田や畑へ出さへすれや、もうそれで食物は十分に取れるんですもの。………ですから大抵の人は一日五時間十七日ぐらゐぢや足りないと言つて、其の倍の二十四五日も一年中に田畑へ出る割合ひにやりますから、何處の家でも皆、食物が餘り返へつてゐるぢやありませんか。………百五十年も前には、百姓といふ特別の人間が毎日暗いうちから、星の光る夕暮まで働いても――これこそほんたうに昔し流の働くといふ言葉ですわ――まだ食物が足りないで大騒動の起つたことがございますのね。それを考へると、まるで夢のやうでございますわ。』と、お作は靜かに〳〵言つた。

『うーん。………』と、和三郎はたゞ唸つてゐるだけである。

四

『お前が先刻鳴らしてゐた、其の變な形のものは、それや何んだらう。』と、和三郎はお作の傍に立てかけてあるあの樂器を指さしつゝ問ふた。

『これでございますか。』と、お作はそれを取り上げて、『これは矢ッ張り琴でございますよ。』と言ひながら、靜かに歌ふて、彈いた。

東の空のほの〴〵と
汝が世は白みそめにけり。

この曉のさまを見て、
運命をいかにうらなはん。
ことにさやけき紅の
光をはなつ明星や、
やがて處女となるまでの
汝がおひさきのしるべせよ。
朝風舞をまふごとく
遙かに雲の袖を吹き、
雞は寢覺におどろきて、
まづしのゝめを呼びにけり。

聲の美しいことと琴の音の妙へなること。和三郎はそゞろに感心して、また恍惚となつてしまうた。

『いつの間に、お前はそんなにいゝ聲になつたのだ。……其の歌をうたふことや、琴を彈くことを誰れに敎はつたんだい。』と、和三郎は不思議でたまらないといふ顔をして、妻の側へ摺り寄りつゝ問ふた。昨日までは變に日なたくさく、泥臭さかつた彼女が、今日は實に百花の精を集めて搾つたといふやうな匂ひがする。

歌といへば、地主に雇はれて稲を抜きながら、頭から塵埃を被りつゝ、『一つ小山の竹松さん、のう竹松さん。……』なぞと濁聲でやつてゐたのが、あんな上品な歌をうたふやうになつた。何んにしてもこれは何うかしてゐると、和三郎

は腕を組みつゝ、頻りに考へた。

『わたしは、これで、歌も琴も皆下手な方ですよ。皆さんはもつと〳〵お上手で、聲もいゝんですよ。それや聽いて御覽なさい。』と、お作は樂器をまた元のところに立てかけてから言つた。

『皆さんて、この邊の百姓の女房や娘が、皆歌をうたつたり、琴を彈いたりするのかい。………へーん。』と、和三郎は馬鹿々々しさうな顏をした。

『百姓？　ほゝゝゝ。……百五十年も前にはそんな特別の仕事をする人があつたんでございますツてね。……　德川家康とかいふ大將が言つたさうぢやございませんか、百姓は死なぬほどにして置けツて。……　田畑を作つて年貢を納める爲めに生れて來たやうな、其の時分の百姓といふものは、農は國の本だとか、國の寶だとか言はれながら、粗末なものを食べ、汚ないものを着て、いつも鋤や鍬を握つて、腰を屈めてゐるものときまつてゐたのでございますね。身體を眞ッ直ぐにして立つことゝ、暇のあることゝは、百姓といふものに取つて分不應のことだツたのでございませう。成るほど、死なぬほどにして置けと大將に言はれた通り、やつと生きてゐるといふだけだツたのでございませう。………けれども今日では、もうそんな百姓といふやうな特別な人間はございませんの。百姓と言へば、世界中の人が皆んな百姓なのでございませう。何んしろ先程申しました通り、一人がほんの少しばかり其の爲めに身體を動かしさへすれば、食物は餘り返へるのでございますもの。………昔しの人は何故あんなに馬鹿であつたかと、それを考へると可笑しくなりますよ。働くなんて、御大層なことを言つて、………』

お作の話は、其の音樂にも劣らぬまでに美しく聞えるが、どうも和三郎の腑に落ちないことが多かつた。

『どうも、俺……いやわたしはよく分らない。しかしそれはまア追々分るだらうから、後廻はしにしておいて、お前

は一體其の歌や琴を誰れに習つたのだ。……それからいろ〳〵と物識りになつてるが、一體いつの間にそんなことを覺えたのか、學校へでも入つたやうだね。』と、和三郞はいぶかしく思ひながらも、それを顏色には現はすことが出來ないで、矢振り晴々した調子で問ふてみるより外はなかつた。

『學校？……』と、お作は却つて不思議さうに首を傾けた。さうして漸く思ひ付いたといふ風で、『さう〳〵、學校といふものがあつたのですね。兵營とか學校とか監獄とか、あなたのお馴染な、いろ〳〵のもの丶中で、それでも學校だけは、つひまだ五十年餘り前まで、形だけでも殘つてましたが、今では到頭それも無くなつたのでございますよ。』と、さも〳〵面白さうに言つた。何が面白いのか、和三郞には分らなかつた。

『學校が無くちやあ、仕樣があるまいね。』と、和三郞は自分が眠つてゐる間に、自分の家の內がスツカリ變つて、建直したやうに綺麗になつたのを怪むと丶もに、世の中がまた家の內と同じやうに變つてゐるのを想像して、驚くべきことが嘸多いであらうと思つた。

『學校でなければ、人を敎へることが出來ないと思つてた開けない時にでも、少しづ丶學校の無用を唱へた人があつたのださうでございますね。詰まらないお荷物だとか、馬鹿々々しい鑄型だとか言つて、學校を貶した人も少しはあつたさうでございますが、初めは唯變人の言ひ草だと思はれてゐたことが、いよ〳〵ほんたうになつて來たんでございますよ。學校なんて、窮窟な鑄型に嵌め込まれないで、人間はもつと樂々にしてゐながら、自由に物を覺えるやうになつたのでございますよ。……何んしろ、一年三百六十五日の中で、食物を取る爲めに入用なのはたツた二十日ばかりですもの。昔しのやうに活きてゐる爲めに心配したり、食うのに苦勞したりることは、決してないのでございますから其の餘の三百四十日ばかりから眠る間を差し引いた殘りといふものは、善い智惠を磨き、分別を養ひ、藝事を覺え、快樂を

味ふのに使はれるのでございます。わたしだつて、誰れにも習はずに、これだけのことを覺えましたし、歌や琴も自然に會得するんでございますよ。忠一はまた畫が好きで、あの床の間に掛けてありますあの軸物ね、あれはクラブの寫生でございますが、あれくらゐのものは直ぐ描くやうになりましてございますよ。活きて行くといふことに少しも困難がないから、持つて生れた才分は、誰れでも自由に表はすことが出來るんでございますもの。』

『うーん。……』と、和三郎はたゞ唸つてゐるばかりであつた。

其處へ、輕い靴の音が聞えて、お伽話の王子みたいな、天鵞絨の服を着た忠一が、踊るやうな足つきで歸つて來た。

五

あのまあ、始終ぬツたんぼうの忠一が、まるで貴公子のやうになつたのに、和三郎は暫し呆れてゐた。しかし襤褸と手鍋とを提げるのに餘念もなかつたお作が、『お作』と呼ぶには勿體ないまでに、奧方然として來たのに比べると、忠一の姿は丁度釣り合ひが取れてゐた。

こんなに立派になつて、何故下女も下男も置かないのかといふことを、和三郎は不圖考へて、妻に問はうかと、よツぽど思つたが、滅多なことを言つて、また笑はれるのも厭やだと考へたので、默つて忠一の姿ばかりを見詰めてゐた。

十七にもなつて、行儀も何も知らず、よく惡い事ばかりする小僧だと思つてゐた忠一が、自分とお作とに向つて、ちやんと挨拶したのも、意外と言へば意外だが、其の裝ひと姿とに對しては、相當のことで、別に不思議ではなかつた。これならあの見事な畫も描ける筈だと、和三郎はスツカリ感心してしまつた。さうして、なほも忠一の樣子ばかりを見詰めてゐた。

『忠一さん、あなたはね、お父さんの御案内をして、少し外を歩いておいでなさい。今まで何處におゐでたんですか。』

と、お作の忠一に物を言ふさまが、極めて物靜かで、優しく、慈愛が籠つてゐるのに、和三郎はまた感心させられてしまつた。さうして昨日まで、『おい忠公。』とお作が呼ぶと、『なんでえ、おッかア。』と忠一の答へてゐたのを思ひ出して、何が何やら、夢に夢見るとはこんなことかと、總べてが分らなくなつてしまつた。

『僕ですか、圖書館に居りました。百五十年ほど前の文敎記錄といふものを讀んでゐますと、其の時分には敎育會議とかいふものがあつて、少しばかりの人が集つて、人を敎へることの筋道を相談したんですつて、あんまり可笑しいから、皆んなで笑つたんですよ。』と、忠一は無邪氣な樣子で母に言つて、

『さアお父さん、まゐりませう。』と、和三郎を促した。

『あゝあなた、お寢衣のまゝぢやいけませんわ。』と、お作は忠一の後から外へ出ようとする和三郎に追ひ縋つて、其の着衣を改めさした。

今まで氣が付かなかつたのを不思議に思つて、和三郎は其の純白な、柔かな寢衣に見入つた。さうして、それを脫ぐのが惜しまれてならなかつた。毛織でもなさうだし、絹物ではなし、得體の分らぬふつくりしたものに、身體を包まれてゐたのが、どうして今まで分らなかつたのかと思つてゐるうちに、いつか其の寢衣は、するするすると身體から滑べり落ちて、其の代りには、如何にも外を步くのに都合の好さうな、身輕で溫かなものを纏はされた。

『さア、行つていらッしやいまし。』と、お作は裏口まで送つて出た。出入をするのに裏口の方が便利なのは、元のまゝ變りがなかつた。

背戶に小溝があつて、淸らかな水のちろちろと流れてゐるのも、また元のまゝであつたが、其處に蹲まつたやうになつてゐた崩れかけた土塀は、拭ひ去つた如く形を留めないで、其の跡らしく思はるゝあたりには、石榴が美しく實を結

んでゐた。

小溝を跨ぐと、向ふに土手があつて、其の上で、子供等が鳶を揚げるのであるが、土手の芝草が綺麗に磨きをかけた如く光つて、野菊でゝもあらうか　小ひさな花が、笑つてゐるやうに咲き揃つてゐる。

土手の前から小溝への間へかけては、帶のやうに細長い田であつたが、今は畑に變つて、果樹らしいものが、ずうつと植ゑられてある。しかし今は花も實も着けてゐない。

『此處は仕樣のない瘦土で、何を植ゑてもうまく行かないから、こんなことにしてあるんで、氣候も此處は天然のまゝに打ちやらかしてあるんです。………それでも、かうやつて梨の樹を植ゑたら、一年に一度は實が生りますよ。』と、先きに立つた忠一が、昨日に變る血色のよい手を振り〳〵指さし示した。

『こんなとこへ梨を植ゑて、實が生つたら、盜まれるだらうな、垣根でもして、入口の戶に錠をおろしとかなけやいけない。………一體何處の家で持つてゐるんだ。』と、和三郎は細長い梨畑を見渡しながら言つた。忠一はくす〳〵笑ひ出して、

『ほゝたうにお父さんは、阿母さんの言つた通り、字書でも引かなけれや解らないやうなことを、よく仰つしやいますね。』と、まるで取り合はなかつた。

『だつて、さうぢやないか。垣根がなけれや、人が入つて盜むだらう。垣根があつたツて盜むだらうが、それでも垣根さへあれや幾らか安心といふものだ。』と、和三郞は却つて、忠一が矢張りとぼけたことを言ふと思つてゐた。

『垣根？ ………垣根？ 』と、忠一は稍暫らく考へてゐたが、どうしても思ひ出せない樣子で、かくしから赤い表紙の小ひさな字書を取り出して引き始めた。さうして莞爾と笑ひながら、『人の通行を妨ぐる設備、と書いてありますね、

塀とも柵とも言つたんでせう。そんなものは、今の世にありませんよ。欲しいものは、何んでも勝手に取つて、食べもすれば用ゐもする。それを拒むものはありません。昔しは垣根なんぞ拵へて、或る一人の人がいやに慾張つたから、自然にまたそれを欲しがるものが出て來たのでせう。欲しがるのは自然で、垣根を拵へるのは無理なのでせう。……お父さん御覽なさい、何處の家だつて、垣根なんていふものはありませんよ。』

忠一が指さした方を見ると成るほどそんなものは一つもなくて、家だけが美しく畫のやうに、ぽつり〳〵と建つてゐた。『さうかなア、欲しいものが皆自由に得られるから、盗むといふことはなくなる。盗むことがなくなれば、垣根もいらないのか。』と、和三郎は首を傾げつゝ獨言をしたが、どうもよくは呑み込めなかつた。

『そんなことを言ふけれど忠一、ドッサリあるものはいゝが、數の尠いものは矢ッ張り大勢の人へ行き渡らないから、持つてゐる人と持つてゐない人とが出來て、欲しがつたり、盗んだりすることがありやしないか。……黄金とか寶石とかいふものは。……』

『あゝ、あの昔しの野蠻人の玩弄品ですか。野蠻人はあんなキラ〳〵光るものを身體に着けて喜んでゐたんださうですが、今は博物館の棚の上で、塵埃まみれになつてますよ。誰れがあんなもの欲しがるもんですか。……昔しは數の尠ないものが貴重品だつたんですね、隨分變な話だ。今は數の多いものが貴重品で、つまり必要だから多く出來るといふ自然の掟に合つてるんですよ。昔しの野蠻人は、隨分自然の掟に外れたことをして、生きてゐたものと見えますね。……人間同志が傷つけ合つたり、殺し合つたりしたのも、それが爲めでせう。……』と、忠一は少しも生意氣な風はなくて、しッとりと重味のある口調で言つた。

『さうかね。俺には何んだか、解つたやうな解らないやうな氣がしてるが、しかしあの梨畑は誰れが持つてるんだね。

と、和三郎はもう行き過ぎてしまつた細長い梨畑の方を振りかへりつゝ言つた。
『誰れが持つてる？ ………』と、忠一はけゞんな顏をした。
『誰れの所有地なんだ。』と、和三郎は重ねて訊いた。
『所有地？ ………何んのことですか。………』と、忠一はまた急いで字書を引き始めた。

六

いつの間にか和三郎は、いろ〳〵の野菜や穀物類の、こぶ〳〵と勢ひよく伸びたり繁つたり實つたりしてゐる肥沃な田園の中に連れられて來てゐた。
引き込まれた水は、淸らかに流れ、野菜類は春のものも秋のものも皆一所になつて、見たゞけでもおいしさうに肥え育つてゐた。苺が紅く滴りさうになつてゐるかと思へば、トマトがそれと色を競ふやうにして、枝もたわゝに實つてゐた。こつちに筍が黃色い芽を出してゐるかと思へば、あつちには葷が巧みに栽培されてゐた。
『筍や松茸まで、畑に作るやうになつたのか。』と、和三郎は寧ろ嘆息するやうにして言つた。
『お父さん、雨が降つて來たやうですね。あんなにいゝお天氣でしたが、矢つ張り秋は空模樣が變り易いんですね。』と、忠一は空を仰ぎながら言つた。
『さうか、それは困つたね。傘を持つて來れや好かつた。』と言ひ〳〵、和三郎も空を仰いだが、成るほど一面に曇つてゐて、太陽の形は見えないやうだが、雨の滴の落ちて來る樣子は更らになかつた。
『お父さん、大丈夫ですよ。此處に居れや濡れやしません。』と、忠一は微笑んでゐる。
『雨が降つても、濡れない。………そんなことがあるのか。』

『えゝ、この上が皆ガラス張りになつてゐますから。………』

『なに、ガラス張りだ。』………そんなことが、………』と、和三郎は意外に思つて、また空を仰いだが、成るほどさう思つて見ると、上の方に霧のかゝつてゐるやうなのが、ガラスなのであらう。それにしても、接ぎ目一つ見えなければ、桟や骨の現はれてゐない、技術の巧みさには、まだ自分が欺かれてゐるのではないかと思はれた。

『お父さん、昔しの野蠻時代にも、これの極く小ひさなのがあつたんでせう。ほら、何とか言つたんですね。』と、言ひ〳〵忠一はまたかくしから字書を取り出した。

『お父さんにお話しするには、一々古語の字引がいるんですから、面倒くさいや。』

こんなことを言つて、忠一は字書を繰り披いてゐたが、やがて、大變な發見でもしたやうに、

『さうだ〳〵。溫室！　溫室！』と叫んだ。さうして『ねえお父さん、溫室と言つたんでせう。……此處は詰まり其の溫室の大きなのですよ。この田も畑も皆大きな溫室の內にあるんです。』と、廣い田圃を見渡しながら言つた。

『うーん。………』と、和三郎はたゞ呆れてゐるばかりであつた。

『お父さん、こんなにまでするには、隨分長いことかゝつて、大勢の人が骨を折つたんですよ。』と、忠一は莊重な口調になつた。さうして、『でもね、大昔しからあつた戰爭といふ厭やなことが、國際の上にも、種族の間にも、また階級とか言つた昔しの習慣の點にも、皆無くなつたものですから、それに費してゐた無駄な人間の力を、かういふ方へ持つて來ることが出來たので、こんな大きな溫室が、世界中方々に造られるやうになつたんです。』

『うーん。………』

『お父さん、百五十年も前に、或る一部の進んだ人によつて唱へられてゐました集約農法といふのが、立派に出來上つ

て、追々とそれが改良されたんですよ。………農作の上に天候を心配するといふやうなことは、隨分長くやつてゐた人間の惱みだつだんですが、かうなつて見ると、全く昔しのことは馬鹿々々しいんですね。』

『うーん。………』

『御覽なさい、向ふの方でやつてるでせう、若い男や女が、………あゝやつてあの丸いものを一つ動かしてさへゐれば、田畑が耕されもするし、種を蒔くことも出來るし、草を取ることも出來るんです。これはもう百五十年も前に、フランスあたりでやつてゐたのを少し改良したばかりなんですが、蒸汽の力で鋤や種蒔き機械を動かしてゐたのが、電氣の力に變つたゞけで、一層簡便になつたのです。………詰まり大昔の粗放耕作が集約農法に變つた爲めに、同じ廣さの地面から十倍以上、事によると百倍ぐらゐの作物を收穫することが出來て、人は皆欲しいだけの食物を勝手に取つた後は、牛や羊や豚や雞の餌にしますし、あゝやつて、誰れにでも食後の運動がてら、耕作が出來るんですもの、勞働とか分配の苦情とかいふ、古語辭典を引かなければ解らないやうなことは、全く大昔しの夢になつたんです。』と、忠一の話し振りは、だん〳〵重々しく、お辭儀をして聽かなければならないもののやうになつた。

七

和三郞は忠一に連れられて、山川の岸へ出た。此處はよく獵に出た時獲物を浸けたところだ。けれども今は、そんな穢らはしい獸の死骸なんぞはなくて、澄み切つた水が岸の小笹を洗ふて流れてゐる。

『少し寒くなつた。』と、和三郞は心もち身を震はしながら言つた。

『さうでせう、此處はもう、天然のまゝの氣候ですから。………溫室の內ぢやありません。………雨がやみました。』と、忠一は空を仰ぎつゝ言つた。

對岸から、若い女が大勢、いろ〳〵の食物や食器らしいものを持つて、橋を渡つて來るのが見える。

『あれは何んだね、お寺で何んとか講でも勤めるのか。』と、和三郎は其の女の群れを見詰めつゝ言つた。

『いゝえ、晝飯の支度をするんでせう。あゝやつて毎日氣の向いた人だけが食事の用意をするんです。昔しのやうに、仕事と遊ひとの區別がありませんから、何んでも氣の向いた人間だけが、好きなことをしてゐれや、それでいゝんです。』と、忠一も其の女の群れを眺めてゐた。

『あんなに大勢で晝の仕度をするところを見ると、村の人が一つ處へ集つて、食事をするんだと見えるね。』

『さうです。あの大きな溫室の內に花園がありますから、大抵其處へ食卓を並べて、皆んな一所にやります。………しかし氣の向かないものは、自分の家で自分に拵へて食べたつて無論構はないんです。總べてが自由ですから、料理を拵へる方も自由なら、食べる方も自由なんです。………しかし、仕事と遊びとの區別がまるでないんですから、誰れか知ら拵へるものがあつて、誰れか知らまた食べに來るものがあるんです。さうして拵へる分量と食べる分量とが、大抵しつくり合ふのも、妙ぢやありませんか。』

『うーん。………』と、和三郎はまた唸り出した。

『何んだか若い女ばかりだね。俺の知つてるのを居るのだらうが、まるで活々と樣子が變つてるから、さつぱり分らない。』と、和三郎は橋を渡つて來る女の人を、一人〳〵改める風にして言つた。

『いゝえ、この中には隨分年を取つた人も居るんですよ。あの玉菜の入つた籠を提げてる人は、あれでもう五十ですが、二十歲ぐらゐの人とさう變りませんね。』

『あの人が五十？ ………』と、和三郎は今までのうちで一番驚いたやうな顏をした。

『生きて行くことに就いて、苦勞といふものをしないんですもの、顏に皺がよることなんぞありやしません。………心を痛めるともいふんでせう、苦勞といふ言葉は。………』と、忠一はまた字書を出しかけた。

其處へ、矢張り野菜の入つた籠を提げた、十四五と見ゆる少女が橋を渡つて來て、いきなり忠一に縋り付き、堅い〳〵握手をして、にツこり笑ふと、バタ〳〵と無邪氣に駈け去つた。

『あれは何んだ。………』と、和三郎は少し眼を光らした。

『あれですか。あれは僕の戀人で、許嫁です。僕が二十五になつて、あの人が二十四になつたら結婚するんです。』と、忠一は憚り氣もなく言つた。

『うーん。………』と、和三郎はまた唸つた。さうして言ひたいことがドッサリ胸に湧いて來たけれど、うつかり物を言ふと、また恥を掻くと思つて、たゞ唸つただけてばかりゐた。

それからまた二人は、淸らかな川端道を、ぶら〳〵やつて來ると、和三郎の眼には、今までまだ一度も見たことのない大きな樹木が、蒼い淵の上へ、一面に枝を張つてゐた、麗しい花が、いツぱいに咲いてゐた。

『これは何んといふ花だね。眠の覺めるほど綺麗ぢやないか。』と、和三郎は顧みて忠一に問ふた。

『これは空想の花といふんです。………この花から、現實といふ實が結びます。』

忠一の答へは、ハツキリと、確かであつた。――

（千九百十八年十一月十八日）



敗者

久米正雄

K新聞の演藝記者をしてゐるW君の肝煎で、同好の文士たちに活動寫眞の見物をさせて呉れる會が、毎月一回淺草で開かれる事になつてゐた。丁度十月初めの例會日だつた。或る雨催ひの、うすら寒げな日だつたけれども、活動寫眞を見物するには、かつと晴れ渡つた晝なぞよりも、却つて落着いて見られさうな天候なので、私は一種の小娘のやうな樂みを抱いて、三時と云ふ定刻を餘程過ぎてから、いそ〱と家を立出でた。

私は何となく心急いで焦ついてゐた。と云ふのは、其日は朝から手違ひ續きで、會へ行かうとする出先へ、或る極く下らない俗用を携へて、同郷の友人に舞ひ込まれたため、一時は見物に行くのをよさうと思つた程、心に一種の氣落ちを感じた。が、其話と云ふのが、案外手早く片付いたので、もう彼是四時近いが、毎も見物は夜までかかるので、顔出しだけでもして置いた方が、幹事のW君に申譯も立ち、又俗用で欝屈した私の心も、幾らか紛れるかと思つて、再び出掛ける氣になつたのだつた。そのため

私の心持は、途中の電車を可なり遲緩しく感じた程、先の世界へ強く牽かれてゐた。

私は曇り切つた空の色を映して、鈍く薄光りを帶んだ電車の窓を、うそ寒い思ひで眺め乍ら、行く先のT倶樂部といふ常設館内の、薄暗いながらにコムフオタブルな、而して濁つたながらに誘惑的な、騷がしい乍らに澱んだ空氣を思ひ浮べた。そして其處には暫く會はないT君や、S君なぞが、例のタキシードか何かの洋服を着て、頤の上に握り拳の親指を當て乍ら、ノートルダムの怪物が薄明の巴里を見渡すやうな恰好で、ぢつとスクリーンに見入つてゐる姿が浮んだ。殊には二三日前會つた時も、一所に其處で落合ふ約束をしたIが、何か談じたげな唇を左の方へ痙攣らして、自分を待つてゐて呉れるだらう。又そこには先輩のM氏や、洒脱なU氏が並んでゐる筈である。其人々の間に伍して、何か奇警な批評の一つも交し乍ら、一夕を笑ひ興じうると云ふ私の豫想は、元來が賑かな所を好む私の性情を、胸の底に熱を持つほど浮き立たした。一刻も早く向うへ行つて、一刻も早くその空氣に浸りたい。さう思つた私の心は、殆んど稚氣をさへ帶びて焦れてゐた。

私はT町で電車を下り棄てると、泥濘の道をずん〲急いで、眞つ直にT倶樂部に向つた。而して其處の入口で、危ぶむやうにかう尋ねた。

「Wさんの連中は來て居ますか。Kが來ましたとさう云つて下さい。」

そこの特等の入口の下足番は、かう云ふ招待客に對する一種の形式的な尊敬と、胆の底では只で見せてやるのだと云ふやうな、一種の輕視を態度に見せ乍ら、女給を呼んで命を傳へさせた。私は其間の一二分を待つてゐ乍ら、毎も感ずる招待客としての屈辱を、ぼんやり心に感じてゐた。かう云ふ活動や芝居なぞは、もう金を出して見る氣のしなくなつてゐる私だけれど、何の報酬をも豫期せらるゝ事なく、只で見せて貰ふと云ふ事には、一種の苦痛が伴ふのを常とした。

それは私の並外れた氣弱さから、殆んど僻んでさう感ずるのかも知れなかつた。

やがて女給は戻つて來た。而して「いらつしやいます。どうぞ此方へ。」と私を招じた。

「連中は澤山來てゐるかい。」私は階段を登り乍ら、女給の後ろから聞いてみた。

「えゝ、五六人來ておいでのやうでございます。」

五六人來てゐるのなら、殆んど例もの顔揃へだから、T君たちもゐるに相違ない。私は直ちにさう推斷して、導かるる儘にそこの特等席へ入つた。

丁度映寫中のことで、館内はすつかり暗かつた。戶外の明るい所から、急に暗闇の中へ入つた私は、まだ眼の調節が取れないため、殆んど人の並んだ間の通路さへ判明しなかつた。

「どうぞこちらへ。」女給がもう一度促した。私は衆人が熱心に見てゐる中へ、不意に入り込んで其場の空氣を亂した、一種の闖入者としての耻らひから、見咎めてゐるのでもない人の視線をさへ妙に氣づまりに感じて、思はず汗ばみ乍ら從いて行つた。

「やあ、よくおいでになりました。さあどうぞ此方へ。」と突然その薄闇の中から、W君の太く和みのある聲音が響いたので、よく瞳を集めて見定めると、そこの座席の端に、同君の短いが豐かな洋服姿が見えた。

「いえ。どうも遲くなつて濟みません。」

私はかう云ひ乍ら、W君の明けて呉れた座席へ、進み寄らうと身を橫にし乍ら、ふと前方に並んでゐる、同志の顏を見渡した。もう幾らか私の眼も、館内の暗に馴れかゝつてゐた。朧ろげ乍らも人々の輪廓が、蠟燐寸で壁に描いた畫のやうに、仄のり白く浮出して見えた。

けれども一と通り見廻した所では、T氏たちの姿はなかつた。たゞ私の座るべき席の直ぐ横に、殊に親しいIがゐた。Iは妙に悶苦しい表情を浮べて、一種困惑したやうな眉を寄せ乍ら、私にちらと會釋した。私は妙だと思ひ乍ら、まだ何故とも氣付かずに、其傍へ席を下(おろ)さうとして、更に何氣なく其隣りの、即ち私と一人置いた隣りの、人の顏を鳥渡見やつた。

其瞬間に私は愕然とした。直ぐ弱い心臓へ、激しい衝撃がどきんと來た。私は一時明に立竦んだ。而して實際自分の眼を失ふた。私は自分で自分の作り出した、一種の幻影ではないかと思つた。元來が視覺連想型(ヴイジユアルタイプ)の私は、自分の心を始終囚へてゐる顏の幻視を、かう云ふ頭惱を亂された際に、起さないとも限らなかつた。が、自ら屹と氣を立て直して、見定めた私の瞳は、再びはつきり彼の顏を認めざるを得なかつた。

確かにZである。！　今私の怪訝な凝視の中には、ちか〳〵と刻むやうな映寫の送光に從ひ、スクリーンから斷續して來る反射によつて、ぶる〳〵顫(ふる)へる明暗を見せ乍ら、圓いうちに澁味を含んだZの顏が、大寫しの人物のやうに浮び出た。彼はとうに私に氣づいたものと見えて、もう何氣もなくその視線を、正面の寫眞の方へ向けてはゐたが、その眉の間に深く寄せた、前からの慣ひ通りな苦味走つた皺は、唇の兩端をきつと引付ける癖と共に、彼の內心の動搖を、明に外部へ表はしてゐた。彼の表情は驚愕でもなかつた。怒氣でもなかつた。憎惡でもなかつた。羞耻でもなかつた。輕蔑でもなかつた。憐憫でもなかつた。只一種の動亂であつた。而した其中に感情が含まつてゐるとすれば、只、私を無視してゐたいと云ふ、自尊の努力だけらしかつた。

私は一瞬時呆然としてゐたが、すぐ氣を取り直して腰を下した。私の胸の中では、心臓がどきん〳〵と鳴つてゐた。私はその高い鼓動が、隣りにゐるIに聞えるのを恐れた。私はそつとIの顏を盗み見た。二人の今迄の關係を、恐らく

は最もよく知つてゐたIが、私とZとの此の邂逅から、双方がどんな切迫した感情を抱くかは、悉く知つてゐるべき筈であつた。併し私はIの前で、又Zに對する心弱い敗者の態度を、はつきりと見られたくはなかつた。私とても出來るならば、こんな紛糾から超然とした、高踏的な態度を取りたい氣があつた。殊にZからまだ壓迫されて、慌てたり怯んだりする醜態を見せるのは、尠なからず自分の誇りを傷けるものだつた。

私は平氣を裝ふて、前方のスクリーンへ映寫された、或る連續提供物の一場面に見入つた。而して心の中では、Zの事ばかり考へてゐた。

Zは私の親友であつた。高等學校へ入つた時から、一年ほど前まで、六七年間ずつと友誼を續けて來た。勿論その長い年月の間には、幾らか友情の親疎の干滿はあつた。が、其最も疎い時でも、二人は互の好意をはつきり感じてゐた。二人は同じ下宿に同居してゐた事もあつた。同じ布團に寢た事もあつた。殊に最近の一二年は、一所に同人雜誌を發行したり、同じ創作を目的として來たために、殆んど毎日顏を合せぬ事はない位、親しい關係になつてゐた。

彼から私が影響を受けた事も、決して尠くはなかつたけれど、私から彼に與へたものも、自分から云ふのはをかしいけれど、可なり多大であるに違ひなかつた。彼は私との交誼に依つて、殆んど現在の境遇を贏ち得たと云つても、それは殆んど誇張でなかつた。尤も彼から云はせれば、現在の如き苦しい境遇に、知らず識らず陷し入れられたのも、私の所爲に違ひはなかつた。兎に角彼を幾らかでも世間的に、活動せしめた原動力は、私が與へたと云つても差支なかつた。彼から云へば別な路を取つた方が、ずつと幸福だつたと云ふかも知れんが、彼を創作的に傾け、彼をH先生の門下に誘ひ、先生沒後のH家へ近づかせたのも、半ばは私が居たゝめに外ならなかつた。勿論彼も私のために、同じ程な相互扶助はして呉れたけれども。

彼は其意味に於て、別れる半年ほど前までは、私にも一種の兄事を敢てしてゐた。卽ち彼自身の成長や、出世に私が役立つてゐる間は、彼は意識的にすら私の下風に立つてゐた。が、一旦彼自身の方の基礎が確立して、私に弓を引いても差支ない時期に到達するや、彼はその虚無的な惡魔性を賴みに、猛然と私を反噬し出した。

初め私がE子に戀した頃、彼は勿論私のために好意を持つて吳れた。が、一旦E子や其母たちの心が、其時分から同居してゐた彼自身の方へ、傾いて來た事を知るや否や、前に私に持つて吳れた好意を、結果として逆に利用するやうな態度を取つた。或意味で彼は居直つたのだ。

私が彼とE子との間に、日夕起居を共にしてゐる所から生ずる、一種の親しい關係を直覺して、それに對する嫉妬を正直にも表白した時、彼はどう云ふ態度を取つたか。

「僕は君に對して出來うる限りの好意を盡した。E子さんと君との關係も、半ばは僕の好意で此處まで來たのだ。それに何だ。君は僕のその好意を無視して、僕たちを疑つたり嫉んだりするのか。それが僕に對する酬ゐやうか。それならば宜しい。僕の方にも覺悟がある。君がそんな心持を抱くのなら、以後僕は君に對して何の好意も持たない。僕は僕で勝手な事をする。君もその積りでゐて貰はう。」

彼はかう露骨ではなかつたが、大體こんな事を云つて、私に反噬の宣告をした。彼の言葉は一見、非常に合理的であつた。が、其裏に匿されてゐる心持には、後の結果から判斷するに、彼は私の嫉妬をいゝ機會に、合理的な外皮を被つた、裏切りを企圖したものと見られても仕方のない所があつた。

彼と彼女に對する私の嫉妬。それは一見甚だ非理に似て、しかも是ほど合理的なものはなかつたのだ。あの際嫉妬を起さないとすれば、それは決して人間ではなかつた。彼等は私の嫉妬のために、彼等の關係が促進されたやうに云ふけ

れど、それは全く外面のみの申譯で、後の結果から察して見ても、彼等は嫉妬に價するものを、内心持つてゐなかつたと云ひ切りうるか。

たゞ私の嫉妬の表白法が、拙かつたと云ふのならそれは仕方がない。併し私の嫉妬そのものが、彼等の反噬に價するほど、それほど非理であつたと云ふのは、彼等の全く申譯に過ぎない。加ふるに私の嫉妬の表白法なるものも、彼女に手紙を寄せて、其中に正直に述べたゞけであつて、それは私の性質の善良さこそ證明すれ、悪辣な分子なぞは毫末もなかつたのだ。たゞ外見上甚だ卑劣に見える此の嫉妬が、彼等に乘ずべき機會を與へたのだ。單に僕の政策上の破綻に過ぎなかつたのだ。態度の上から云へば、嫉妬すべからざるに嫉妬した私よりは、それを逆用した彼等こそより悪辣ではないだらうか。

Ｅ子がＺに傾いた事、それには私も運命として、諦める外ないものがあつた。彼女の心が私にすつかり解つた時、私は彼等に對して、毫末も今抱いてゐるやうな憎悪は、抱く事ができなかつた。私は今でも決して、あゝなつた事件そのものを、恨んだり憎んだりする氣はない。たゞ私はその事件に際して、彼等一味の取つた態度、その悪意ある態度に對して、極端な憎悪の念を持つてゐるのだ。

Ｅ子と私との問題が破談になつて、Ｅ子が當然彼自身の所へ來る外ないと知つて以來、Ｚは如何にして其事を、合理的に運ぶべきかを苦心した。而して更に積極的には、如何にして私の勢力を、完全に驅逐すべきかに苦心した。

彼等は私を不幸の淵に沈めて置き乍ら、自分たちの措置を顧みなかつたのみか、自分たちの措置に依つて、一人の青年を殆んど破産狀態に陷れ乍ら、それを只管その青年の罪だとなして、いやが上にも其青年、——即ち私を破滅させやうとした。

彼等は私が愈々堪へられなくなつて、大阪落ちを企てた時に、邪魔物がゐなくなると云ふ意味で、そしらぬ顔で賛成した。そして私がその企てが自分の破産を、益々大にするものであるのを知つて、其決心を飜へした時、彼等は自分が大阪へ行かぬのを憤慨した。成程彼等から云へば、私の薄志弱行が、嫌悪すべく見えたかも知れない。けれどもそれは私自身の立場に同情して考へれば、止めて呉れるのこそ正當である。

併し私の大阪行が企てられた時、私のために本氣に同情して、留めて呉れたのはＨ一人だつた。Ｈは云つた。

「君が今大阪へ避けるなんて、そんな下手に出る事があるものか。それは彼等の勝利を、益々徹底的にするものぢやないか。僕ならば飽くまで近所にゐて、充分目障りになつてやる。」

けれども私は氣の弱い人道主義から、向うの家に對して可成り謙遜だつたので、暫らくはその決心を飜さなかつた。ところが丁度向うの私の望んだ新聞社が、私を不適當と見て容易に採らなかつた。而して今自分の右に座つてゐるＩが、百方世話をして呉れたら、やうやく三十五圓で見習ひをするならと條件を付けた。が、其時はもう私も、Ｈ家に對して謙遜な態度を取る必要もないのを知つて、飜然と其意志を取消したのだつた。

それを彼等は憤慨した。而して其憤慨の底には、自分たちの利巳主義が含つてるのを知らぬ顔して、私の薄志弱行をのみ攻撃した。

Ｚは仲間の者に對つて、

「Ｋはもう全人格から破産した。遺憾なく其劣弱さを曝露した。」と云ふやうな事を云つた。

彼は明に得意だつた。戀愛の上での勝利者が、大抵さうである如く、彼もその劣敗者たる私に向つて、曩の友情なぞは全く忘れて、根本的な優越感と、積極的な輕蔑とを併せ持つた。彼は又或る友人に向つて、

「もう僕は如何なる點でも、Kにだけは敗けはしない。」と傲語した。

私はその話を傳へ聞いた時、彼の持つてゐる優越感に對して、血の湧き上る憎惡を感じた。

それに次ではZが、自分の立場に都合のいゝ辯解だけを、A新聞に書かせて、謂はゞ社會的にも、私の存在にケチをつけようとした事である。私はその記事を見た時、それは出入の御用記者が、お家への忠義立だと思つて、誇張して書いたものだと思つた。が、後から聞くとあの記事が、殆んどZ自身の口から出たものであり、しかも其原文を校正したのだと聞いて、一時はあきれ返つた。而して其底から、更に强い憎惡が、むら／＼と燃え上るのを覺へた。

「よし、さうまでも俺を苦しめるのか。――併し今度は居直るのは俺の番だぞ。俺も決して引込んだ切り、いつ迄もおまへたちには敗けてゐないぞ！」

私は其時にさう決心した。私の彼に對する憎惡は、殆んど彼を殺さうと思つた程だつた。

其Zが、今自分の三尺と離れない所に、冷然と寫眞に見入つてゐるのだ。

私は今迄も幾度か、Zと何處かで邂逅する場合を想像した。H一家は物見遊山が好きだつた。而して夫人やZなぞが、よくさうした盛り場所へ出入するのを、私は兼ねてから聞き知つてゐた。私もよくさう云ふ場所が好だつた。で、何時どこでカチ會はぬとも限らないと思はれた。現に私の友人で、同じH先生門下の傍流とも云ふべき、O君なぞはよくそんな所で出會つた。O君は私に度々云つた。

「僕は何だかH家の人に祟られてるやうに、よく奥さんやZ君が、新夫人同伴で來てゐるのに會ふよ。此間も帝劇で會つた。二三日前も研精會で會つた。頻々として會ふ事、無慮數回に及んでゐるね。」

私はそれを聞くと、苦笑とも嘲笑とも取れる微笑をして、かう答へて置いたのだつた。

「さうかい。それは好運だね。僕も會には會つて見たい氣がするよ。どんな顏をするか見てやり度い。」

「又君の、いつもの萬事に興味を持つ主義でかね。」

「ふん。」私は私の悲痛を藏した好謔が、さう輕ぐばかり取られて了ふのが、幾らか不服でさう答へた。

事實私にして見れば、彼等に會ふと云ふ事も、可なり注意して避けてゐたのだ。彼等のきつと行くであらう音樂奬勵會、長唄研精會、名人會と云ふ類は、私も嘗ては度々お伴をしただけに、大抵見當がついてゐた。帝劇でも一應は警戒して、彼等がゐたら避けるため、一度はオーケストラストールズを、眺め渡すのを共時分の常とした。

が、そんな避けうる場合でなく、偶然電車の中で會ふとか、街中で出會ひでもした時、私はどう云ふ態度を取らうか。その問題は時々想像したものであつた。そして其時の想像では、私はもう逃げまいと思つた。眞つ直に彼等の前へ突進して、どうせ自分は天下の野人であるし、體面なぞはどうなつてもいゝから、一つ衆人稠座の前で、唾でも吐きかけてやらうと思つた。又可なり惡趣味ではあるが、Zの頭の一つ位、どうせ口の侮辱などには敗けてゐない男だから、洋杖でぐわんと喰はしてやらうと思つてゐた。元來なら氣が弱くて、そんな事の出來さうもない私だけれど、この堪へられない憎惡の量と、一旦埒を越えればどんな事でも出來る私の熱狂性が、その時の想像では立派にその英雄的行動を、遂行しうるやうに考へられた。

が、今眼前に不意に現れたZを見て、私はそんな手出しは到底出來なかつた。餘りの意外に脅かされたか、憎惡の念すら湧き出なかつた。私は强ゐて云へば只漠然とした壓迫を、Iを隔てゝ、三四尺右手にゐる、彼の肉體的存在から感ずるばかりだつた。

私は氣にしまいと努め乍ら、Zの方を氣にせずにはゐられなかつた。その心持は可なりいら〳〵した、不快な抑へつ

けられた氣分だつた。私は畫面の方を見やり乍ら、彼の方の一擧一動を、第六官で覗つてゐるやうな、自分の神經の働を覺えた。

突然私の右手の視野外で、ぱつと燐寸を擦る者があつた。思はず其方を見やると、それはZが啣へた煙草に、火を點じやうとしてゐるのだつた。ごく僅かな間だつたけれど、私は黄色に明るく照し出された、彼の顏を改めて瞭然と見て取つた。眉の間にはまだ皺を寄せてゐたが、彼の頬は割合に平穩だつた。縁無し眼鏡のうしろにある、毎もの通り腫れぼつたい眼も、もう動搖を語つてゐるらしくはなかつた。彼の態度の平靜、さうだ、其點ではいつも私は敗者でなければならなかつた。私は心を動かされゝば直ぐ、擧措に現はれ出る私の態度を、玆でも自ら呪はねばならなかつた。

併しその切迫した狀態の中でも、私は一つ妙な發見をした。それは彼の顏の特徴である、耳朶の前にあるもう一つの肉狀突起だつた。私はそれを前から知つてゐた。それは二三分ほど飛び出た、耳朶の飛沫とも云ふべきもので、左右の兩方にちやんと揃つて在るのだつた。嘗つては高等學校の體格檢査の時に、それを耳鼻科の醫者に見付けられて、「やあ珍らしいものが在るね。大學病院の方へ來て見給へ。軟骨があるかどうか診てあげるから。」なぞと云はれた。彼自身はそれを福耳と稱してゐた、確かに福耳には相違なかつた！　而してそれは私たちも、よく冗談に弄つたりしたものだ。いつか同じ仲間のSなぞは、醉つた揚句にその小耳をしやぶつたりした。

私はその福耳を見つけると、思はず物慕しい微笑をした。永久に別れて了つたZの顏だけれど、まだ昔の儘のあれが殘つてゐる。私は一時妙な情懷に浸らうとした。が、危ふくそれを食ひとめると、その直ぐ後からは、永久に自分に背き去つた耳朶だと思はれて、初めて憎惡の念が其處に集中した。私は慌てゝ目をそらした。

其時更に氣付いて見ると、Zの直ぐ右手には、私の苦手なもう一つの顏が在つた。それはH先生の門弟の中でも、一

番H家に親近しても居、又一番世話も燒いてゐる、Lと云ふ批評家だつた。此の人は私とE子との事件に、極力反對したもの丶一人だつた。

初め私とH家との關係が、だん〳〵密接になつて來るのが外見にも知れて來た時、L氏は同じ批評家のB氏と一緒にわざ〳〵H夫人を訪れて、

「あんな輕薄才子にE子さんをやるのはおよしなさい」と忠告した。

その話をすぐ夫人の口から、及びそれを襖越しに聞いてゐたE子の口から、私にまで傳へられた時、私はたゞ辛うじて、

「併しあの人たちだつて、そんな餘計な他人の運命にまで干渉する所を見ると、別に敦厚才子とも思はれませんがねえ。」と輕く反抗したゞけで、其儘知らぬふりをしてゐた。それは彼女たちの私に對する信任が、まだそんな事で覆へされぬからでもあり、又此上事を荒立てたくないからであつた。併し其時から私の心には、L氏に對する拔け難き宿怨が植えつけられた。けれどもそれはZに對する今の憎惡なぞから比べれば、さう大したものでもなかつたのである。

加ふるに其L氏とは、私とE子との事件があの破局を結んだ後も、一二度顏を合せてゐた。

殊に此の活動見物會の第一回には、主人側と知巳の關係もあり、L氏は私なぞよりも主要な會員だつた。而してその第一回の勸誘を、Iが仲介で私へまで持つて來た時、此事件に關しては一番事情を詳にしてゐる第三者として、彼はかう云つて與れたのだつた。

尤もその會へはLさんも來るんで、君は餘り快くもあるまいが、向うは君に對してもう何の惡意もなく、君と同席しても平氣だと云ふのだから、君もあの問題にはこだわらずに、一つ出席しては與れないか。」

さう云はれると私も、別に堪へ切れぬ不快を持ち續けてゐる譯でもないから、同席する事になつたのだつた。

其席上ではさすが私も、L氏に對しては默つてゐた。すると會が果つる時になつて、L氏は例の前屈みな歩き方で近寄つて來て、にやりとした微笑を唇邊に湛へ乍ら、靜に僕の肩を叩いて、「失敬。――君ももうあんなことは書いては不可ませんよ。たゞこれだけ。もうあの事は云はないつて事にしませう。」と云つた。

私は少々慌てゝ、「えゝ、」とぼんやり答へてゐた。その「あんな事」と云ふのは、私がS雜誌に書いた「凶日錄」と云ふ日記へL氏の事を引合ひに出したのを指すと推せられた。

兎に角L氏の其時の態度は、私に尠からぬ好感情を與へた。私はもうすつかりころりと懷柔された形で、L氏にさう峻嚴な心で對すまいと思つた位だつた。

が、今日は又ふとそのL氏が、Zの御氣嫌を取るために、此處へ連れて來たのぢやないかと直覺されて、私の心は又も濁らされた。

ZとE子の結婚に對しては、L氏はもう仕方がないと云ふやうに、默つて聽從して了つたのだつた。而して心では幾らか反對だつたに係らず、表だつた示威運動なぞは毫末もしなかつた。その態度の微溫的だつたのは、私から云へば一問題あるのだけれど、それももつと大きな憎惡の對象が在つたため、私にはどうでもよかつたのである。たゞ其後L氏の態度に就て、私は面白くない話を聞いた。其後のL氏はH家にもつと信任を得て、幾らかは自分の生活の安定をうるために、Zにも取入らうとしてゐると云ふ噂だつた。さう云へば一緒に玉突に行つたり、一緒に活動を見たと云ふ噂も、誰からとなく私の耳に入つてゐた。だから或ひは此場合も、L氏が連れて來たのではなからうか。而して私の面前へZを伴ふて、私がどんな妙な顏をするかを、二人で樂しまうとするのではなからうか。私が此の會員である事は、L氏

とても既に知つてゐる筈だ。知つてゐる以上私の立場も考へたら、少くとも私に悪意のない限り、こんな仕打をする道理がないのだ。私は今度は又更に、憎悪の念をZを連れて來た、その同伴者の上に注がざるを得なかつた。併し單なる疑ひだけで、L氏を憎む譯にも行かない。私はそこで右隣のIに向つて、小聲でから云ひかけた。

「實に悪い芝居を書く奴がゐるね。こんな意地の悪い事をしたのは誰だい。」

併しIは聞き取れぬやうに装ふて、猶も畫面から目を離さずに、「うん、」とか何とか曖昧に云つたのみだつた。

私も仕方なしに活動寫眞を、たゞ眺めるより外はなかつた。

丁度寫眞の映つてゐる所は、或る連續提供物の一節で、或る曲馬師の一行に入つてゐる美しい女を、それに横戀慕をした男が、金の誘惑か何かも手傳つて、掠奪し去らうとする所へ、その女の戀人なる青年が、來て助けると云ふ筋らしかつた。

私は心に沁まず見散らし乍ら、その何となく皮肉な畫面を、不快に思はずにはゐられなかつた。一人の女に對する戀人と戀仇、私とZとが一緒に見るにしては、是は又何と云ふ妙な對照だらう。私は知らず識らずその色敵が、自分と等視(アイデンチファイ)されて來て、Z自身はその戀人に、自任してゐるやうに見られてならなかつた。殊に其色敵を演じた奴の、觀客の輕蔑を滿身に買い込んでゐるのが、自分も輕蔑して見てゐるに係らず、不快になつて堪(たま)らなかつた。私は幾度か席を蹴つて、歸つて了はうかとも思つた。が、平然としてゐるZの前で、此方には何ら道義的な苛責もない者が、只氣の弱さばかりに壓せられて、退却するのも業腹だつた。私のつまらぬ自誇心(プライド)が、要もない所で私の腰を据えさせた。

が、其中に好い機會が來た。それは先輩のM氏が見物に疲れて、U氏と一所に立上つて、毎(い)も會後の食事所と定めてある、T軒へ先に行くと云ひ出した。映寫はまだ半ばだつた。で、他の人たちは、終りまで見てゐる事になつた。が、私

はそれをいゝ潮に、M君たちの直ぐ後から席を立つた。すると幹事側のW君も一緒に行かねばならなかつた。後にはIとZとL氏とが殘つた。Iは私の同情者でもあるが、又H家の同情者でもあつた。だから後には私から見て、三人の敵黨が殘つたに外ならなかつた。

私はM氏やU氏やW氏について、T軒の階上に通り乍ら、殘つた彼等がどんな事を今話し合つて、どんな態度を取るかと思つた。場合によつたら向うから避けて、Zは遠慮してT軒へは來ないかも知れぬと思つた。が、人格上の强烈さを誇にしてゐるZだから、そんな事はせずに、堂々と私を壓迫する積りで來るかも知れぬと思つた。而したら今日の會合は、私に取つて一種の修羅場だつた。

「若し彼が來るとしたら、私は敗けてゐたくはない。いや、決して敗けてはならないぞ！」私は弱い自身の心を叱つて、から鞭撻策勵を加へた。

かうして私は其人たちと、普通の世間話をしてゐた。が、私の口數は、稍々もすると尠くなり勝ちで、胸でも閊えたやうにギゴチなかつた。

其中にIが一人だけ先づ入つて來た。彼はそこに私がゐるのを見ると、鳥渡憐憫するやうな一瞥を與へて、それから會の主催者とも云ふべき、W君を向うの障立の陰へ呼び寄せた。私はIがそこで大體何を、W君に話してゐるのか見當はついた。而して二人の決議が、どうなるのかを待つて居た。

やがてW君が戻つて來て、私に、「I君が何か貴方に用があるさうです。」と云つた。

私は點頭いて衝立の陰のIの所へ行つた。Iは直ぐ話しかけた。

「K。實は先刻僕も君と一緒に出やうと思つたのだが、さうすると餘りあの二人を取殘すやうで惡いと思つたから、

今まで申譯に留まつてゐて、今、一足先きに出て來たんだ。もう寫眞もすぐ終るから、やがてあの二人も此處へ來るだらう。――いや、Ｚの事だから必ず來るよ。向うから避けたりするものか。――僕は先刻から君の立場も察してゐるし、僕自身もこんな場合に立たせられて、可なり不愉快に思つてゐるのだが、一體Ｚをあの會へ呼ぶなんて、僕も意外に思つたんだ。だから今Ｗ君を呼んで聞きたゞして見たら、あの人が何にも事情を知らずに、此間Ｌさんと一緒にＺが來た事があつたものだから、いづれ仲間だと思つて呼んだのだとさ。だから決して誰にも惡意が在る譯ぢやないのだ。いづれＷ君にはあとから詫まらせるから、君も今日は此上不快になるきりだし、一そ此處で歸つたらどうだ。僕は敢て君に干渉して、歸れと云ふんぢやないけれど、歸つた方が君のためにもいゝと思ふんだ。」

彼は例の調子で一氣に云ひ立てた。

「併し僕は何だか、此儘歸つちや卑怯なやうな氣がする。僕に何らの弱味もないんだからね。」

氣の弱い私は、Ｉの言葉にもう幾らか動かされ乍ら、それでも踏張るのは玆だと思つて、辛うじて抗辯した。

「いや、さうだらうが今日の所は、Ｗ君が何も知らずにやつた事なのだから、君もつまらぬ意地を張らずに、歸つたつて誰も卑怯とは思はないよ。」

猶もＩがかうして調停しやうとした時、向うにゐたＷ君が、心配して此方へやつて來た。而して私の暗い顏を見ると、

「何だか今Ｉ君から伺つたんですが、Ｚ君がゐちやあ工合が惡いとかで、ほんとに貴方に對しては申譯ありません。けれども實は私も、Ｚさんを呼んだ譯ぢやなかつたのです。あの人はＬさんが連れていらしたのです。」

かう云ひ出したので、私は改めてＩの顏を見た。今しがたＩの口から、私はＷ君の知らぬ失策で、Ｚを呼んだのだと聞かされた。然るに此の正直なＷ君は、Ｉがうまく打合せをして置かなかつたものか、遠慮なく私の前で眞相を打開

けた。Iは幾らか狼狽した。私は彼の顔を見てこのIが折角の仲停者の勢も、無殘に打毀たれたのを氣の毒に思つた。が、其次の瞬間には、ふとIまでL氏たちと共謀して、私をうまく追ひ歸し、罪を何の背景もないW君に負はせて、L氏の立場を守護してやらうとしてゐるのではあるまいかと思つた。さう云へば向うの館内に殘つて、三人は各々の立場を、どう辯解すべきかを相談し、結局W君に罪を負はせれば、此場は事なく濟むだらうと云ふ事に、申し合せないとも限らないと思つた。が、Iの平生の性行は、決してそんな事をする男ではなかつた。けれども此の仲停の計劃の破綻は、端なくも私に、Iの誠意を疑はせたのは事實だつた。

私は益々踏み留つてゐたい自身を感じた。が、それと共に、今自分を中心として、色々な心が色濃く取捲いてゐて、その中に長く留まる事は、精神的な窒息とも云ふべき、一種の堪らなさを感じて來た。私は私に惡意を持つてゐると解釋しても然るべきL氏に、此上會ふのは厭な氣がした。私は暫らく去就に迷ふた。去れば永久に敗者となり終るやうに感じて、數時間位の不快でも、忍んで平然と構へてゐたかつた。

併しそこへ奧から、U君がやつて來た。而して話の樣子を一應聞き取ると、「そんならK君。僕たちは君を卑怯だとも何とも思ひはしないのだから、此上此處に留つてゐても、不快な時間を永くするのに止まるだけだらうから、君自身の感情の經濟から云つても、歸つた方がよくはないか。何れLには僕からもよく云つて、後の話はつけるから。」

此の處世上の哲學者として、私たちの妙な尊敬をかち獲てゐるU君まで、さう云ふのを聞いてゐると、矢張り又いつもの心弱さから、私はかうまで皆が云ふのに、强情を張る氣にもなれなかつた。

丁度その時、女中がそこへ入つて來て、「お連れさまがいらつしやいました。」と知らせた。ZとL氏とが歸つて來たものと見える。愚圖々々してゐる中に、所謂「引込み」がつかなくなると思つた私は、もう反抗する勇氣も失せて、

「では歸りませう。」と只一言、席を蹴るやうに立上つた。而して向うの口からZとL氏らしい人が、上つて來るのをちらと見乍ら、急いで別な出入口から出去つた。私が歸る事になつたために、ほつと安心したやうな人々の顏を後にして。――

戸外に立出でた私の心は、嵐のやうな憤懣に滿されてゐた。私は人々が皆、Zを歸さうとしないで、私を歸さうと努力してゐるのに、第一の不平が在つた。飽くまで私を賓にして、どこまでも私を敗者として、弱者として取扱つてゐるのが憤慨された。が、かうしてとぼ／＼と歸るのを見ると、自分まで何時の間にか、自分を敗者として取扱ふやうになつてゐるのではないか。而して眞に敗者に違いないのではないか。

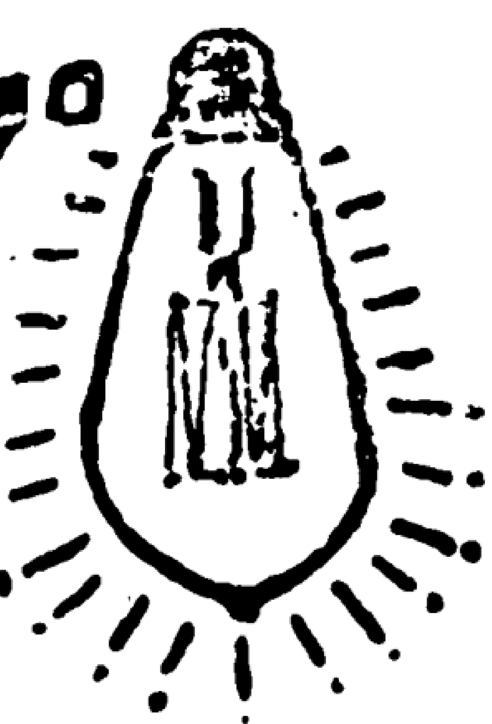
雨を含んだ夜の雲は、低く常設館一帶の灯を滲ませて、私の上に重く擴がつてゐた。私は暗い憤懣を抱いて、ぢつと其空を見上げたまゝ、此の儘荒んだ氣持を抱いて、どうして家まで歸れようかと思つた。

私は最近に出來たKと云ふ、或る一人の女友達でも訪ねて、此の苦しい心を訴へて見やうかと考へたが、そこでも又一つ餘計に、敗者として遇されるかと思ふと、足は獨りでに行き場を失ふた。

私は暗い空を見上げて、暫らくはぢつと彳んでゐた。(七年十一月)



夜長の讀書に、仕事に、團欒に
快い光を与へる・・・・
明るくて、丈夫で、
徳用な、マツダランプ



製造元 TEC 神奈川縣川崎町
東京電氣株式會社

販賣部 東京、銀座尾張町一ノ一 電話新橋(長)一〇五九、一九三一、三一一一、一三七二、

出張所 大阪、西區阿波堀通一ノ五 電話新町(長)一六三〇、(長)八七九、八九八

門司、西川町三ノ二九、電話(長)四六八、(長)六八二、

名古屋、仙台、札幌、大連、上海。

D-137

中央公論大賣捌所

東京市神田區表神保町	東京堂
同　神田區裏神保町	上田屋
同　京橋區銀座三丁目	東海堂
同　京橋區元數寄屋町	北隆館
同　京橋區西紺屋町	良明堂
同　日本橋區本石町	至誠堂
大阪市北區梅田町	盛文館
同　北區東梅田町	立盛堂
京都市七條停車場前	共盛社
同　四條西洞院	前田大盛社
朝鮮京城本町二丁目	日韓書房

○定價 金參拾錢郵稅金貳錢（海外郵稅拾貳錢但支那を除く）

冊數／國別	內國	國外 [illegible] 上
六冊	金壹圓八拾錢	金貳圓四拾[illegible]
十二冊	金參圓六拾錢	金四圓八[illegible]

▲但 年號春秋二期附錄號臨時號は各倍册に付普通[illegible]べし、即ち一ヶ年通計十七册分の割合な[illegible]力は內國は金五圓拾錢外國は金六圓八拾錢 頁數の都合にて臨時變更することあるべし

送金注意

一誌代郵稅は一切前金とす、前金切の場合は發送を止むべし

一郵便爲替にて御送金の場合は指定を**本鄉區西片町十番地中央公論社**とし、拂渡局を**東片町局**と指定あれば途中盜取さるる虞なし

一振替貯金口座は**東京三十四番**なり

一郵劵代用は謝絶す但し郵便局に不便の地に限り一割增にて代用せらるるを拒ます

一集金郵便の便法を利用せらるゝ方は、**坐ながらにして誌代の拂込**をなすことを得べし、御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし、弊社は直ちに其取扱手續をなすべし

一金一圓迄　金六錢（集金委託料
一金五圓迄　金七錢　及送料共）

一受領證請求は必す返信料を要す

大正七年十一月卅日印刷納本
大正七年十二月一日發行
（禁轉載）

發行兼編輯人　菅谷憲治
印刷人　高木酉三

發行所　東京市本鄉區駒込西片町十番地
中央公論社
電話長小石川一四四[illegible]
振替東京三十四番
電信略號コウロン

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
秀英舍第一工場

33:13

CHUO KORON (*The Central Review.*)
By The Chuo Koron Sha Publishing Co., Published Monthly.
Terms of Subscription: annual subscription yen 6,80; Single copy 40 sen including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter

明治三十一年一月廿九日第三種郵便物認可



信用なき店舖及び卑猥なる賣品の廣告揭載は謝絶す